

ISSN 2434-513X

東アジア日本学研究

第4号

Japanese Studies in East Asia

No.4

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

2020年9月20日発行

巻 頭 言

未曾有の新型コロナウイルス禍の中、『東アジア日本学研究』第4号を無事に発刊することができ嬉しく存じます。

今年に入って、最初は東アジアを中心に流行を見せていた新型コロナウイルスが、やがて欧米へ、そして全世界へと拡散し、WHOがパンデミックを宣言するに至りました。8月の下旬になった今も、いまだ終息の兆しが見えません。しかも今年は、東アジアの各地が甚大な水害に見舞われましたし、夏の猛暑は年をおって激しさを増しています。

そのような状況の中、社会経済活動が著しく制限され、近年まれに見ると評されるほどの激しい落ち込みを見せています。まさに、人間社会が大きな試練にさらされていると思いたくなる状況です。

しかし、この未曾有の状況に見舞われても、人類社会はしぶとく再生するに違いありません。アフリカで20万年前に誕生して以来この方、人類は、さまざまな試練を克服して世界中に広がり、あらゆる環境に適応するほどの能力を持っているのですから。

これを契機に、21世紀型の新たなグローバル社会が構築されるのではないのでしょうか。来たるべき社会の姿はまだ見えませんが、社会全体が転換期を迎え動き出そうとするとき、私たち人文社会学の研究者は鈍感であってはなりません。新たな社会の動きに乗るにしろ抗するにしろ、しっかり観察し分析して、来たるべき人類社会の姿を見つめなければならぬと思います。これからの東アジア日本学研究学会の会員諸氏の奮闘努力に期待します。

今年は新型コロナウイルス禍に見舞われたため、秋に予定していた恒例の学術大会はやむなく中止せざるを得ませんでした。しかし、『東アジア日本学研究』第4号は、学術論文15本、研究ノート2本という充実した内容で刊行できました。本学会の特徴は、日本語及び日本文化に焦点を当てながら、とくに東アジアにおける国際的、学際的な比較研究を行うことを一つの特徴としています。本誌でもその趣旨に沿った内容の論文が多数掲載されているように見受けられます。

近年、人文社会分野の研究環境は徐々に厳しくなっており、好転する兆しは見えません。この状況を改善できるのは何か。研究を純粋に研究として楽しむこと、業績を伸ばさなければならないことはあるにしろ（とくに若手研究者にとって）、自分の研究に熱中できることだと思えます。研究に打ち込むことができれば、業績は必然的に伸びます。そこでもう一度、東アジア日本学研究学会の会員諸氏のこれからますますの奮闘努力に期待します。

東アジア日本学研究学会会長 安達義弘

目次

巻頭言	安達義弘(東アジア日本学研究学会会長)	1
-----	---------------------	---

【論文】

陳蒙	「～てもらう」の働きかけ性に関する考察 —使用実態から日本語教育への示唆—	5
孫向宇	「～(さ)せていただく」の社会的容認度についての考察 —アンケート調査結果の分析から—	21
崔小萍	「～でも～でも」構文における日本語母語話者と中国人日本語学習者の 許容傾向と選択傾向	37
王雲姣	感情形容詞の副詞的用法における感情主の日中対照研究	55
張曉蘭	生活者としての外国人の外国語自律学習 —支援者による援助に注目して—	71
杉村泰	日本語の「～て死にそうだ」、「死ぬほど～」と中国語の“～得要死”の 対照研究	85
李成愛	卒業論文における接続詞の使用実態について —日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較—	99
芮真慧	『類聚名義抄』に見られる漢字とその訓読みの対応関係	115
市川章子	中国生まれの朝鮮族男性の進路選択過程:日本留学経験を中心として…	129
宮脇弘幸	日本侵佔期華中における文教政策 —日本語普及施策を巡って—	143
王晴	「文」的な抵抗:満洲国における朝鮮民族の再構築 —今村栄治の「同行者」を例に—	161
ニイ・ウエイ	ノーベル文学賞受賞と莫言文学の真髄 —授賞記念講演「語り部として」を中心に—	175
崔雪梅	漱石の作品における新橋駅の考察 —啄木の作品に表現される新橋・上野駅を視座に—	189
宮崎聖子	植民地台湾における処女会創設と中間指導者としての日本人官吏	205
王慧娟	流通アンバンドリング現象の考察 —中国食品スーパー「盒馬鮮生」の事例—	219

【研究ノート】

施敏潔	日本語専攻者のビリーフと自律的学習能力の関係について
-----	----------------------------

ーブレンディッド学習の実践を通してー	231
黄婕 日中文化交流における洛陽	247
学会役員	259
学会動向 李東哲（東アジア日本学研究学会副会長）	260
会員消息 李東哲（東アジア日本学研究学会副会長）	261
東アジア日本学研究学会会則	262
『東アジア日本学研究』投稿要領	265
『東アジア日本学研究』執筆要領	267
『東アジア日本学研究』査読要領	268
編集後記	270

「～てもらう」の働きかけ性に関する考察 —使用実態から日本語教育への示唆—

陳 蒙（関西大学大学院生）

要旨

授受補助動詞「～てもらう」には働きかけのあると考えられるものと、働きかけのないと考えられるものが存在するということが従来から指摘されている。本稿では「～てもらう」における働きかけ性に注目して、まずコーパスを用いてその母語話者の使用実態における出現状況を明らかにした。その上で、中国の日本語教科書における「～てもらう」の扱いを考察して、働きかけ性に関する文法説明や例文提示などの問題点を指摘した。その結果を踏まえ、中国の日本語教育現場で「～てもらう」を指導する際の留意点について提言した。

キーワード： 「～てもらう」、働きかけ性、使用実態、中国人学習者、日本語教科書

はじめに

本稿は、日本語教育を念頭において、授受補助動詞「～てもらう」の使用実態を明らかにしようとするものである。最初に本稿の考察範囲を示したい。「～てもらう」の用法に関する先行研究は数多くあるが（山橋 2000、李 2001、山田 2004、王 2010、金 2010、朱 2017 など）、それらを整理すると、表 1 のようにまとめられる。本稿の考察範囲は太線で囲まれた部分である。

表 1 本稿における「～てもらう」の用法分類

分類	例文
「行為要求」 依頼などの場面に 使われるもの	1) ちょっと紙、 <u>まわしてもらえますか</u> ? (山田 2004 : 249) 2) ちょっと <u>座ってもらってもいいですか</u> 。 (山田 2004: 251)

「叙述」 「行為要求」以外の 場面に 使われる もの	恩恵型 行為の実行に より話し手ま たは聞き手が 恩恵・利益を 受ける	①話し手のほうが恩恵・利益を受ける	3) 彼は参考書を買うからと言って母からかねを <u>出してもらった</u> 。 (李 2001:103) 4) この清水監督には、私は、たいへん <u>かわいがってもらった</u> 。 (朱 2017: 36、下線は筆者)
		②話し手が恩恵・利益を受けることを表す形により、聞き手への配慮・丁寧さを表す (削除しても文法性に影響を与えず、丁寧語化している)	5) この道をまっすぐ <u>行ってもらったら</u> 、花屋に出ますから、そこを右に曲がって... (山橋 2000: 55、下線は筆者) 6) (道で) そこを右に <u>曲がってもらって</u> まっすぐ <u>行ってもらう</u> と駅に出ますよ。 (山田 2004: 74)
	非恩恵型 行為の実行に より話し手が 恩恵・利益を 受けていない	「～てもらっては困る」など	7) ヘミングウェイは彫刻家ではない。 <u>忘れてもらっては困る</u> 。私は彫刻家なんだ。 8) しかし、 <u>間違ってもらってはいけない</u> 。 (山田 2004: 153、下線は筆者)

表1における恩恵型①（太線で囲まれた部分）の「～てもらう」（以下、「～てもらう」と略記）には 9) のような動作の受け手による動作主に対する働きかけがあると思われるものと、10) のような働きかけがないと思われるものが存在することが従来から指摘されている（奥津・徐 1982、山田 1999、益岡 2001、井上 2011、王 2010、金 2010、朱 2017 など）。この「テモラウ受益文が構造的に持つ受益者から動作者に対する何らかの働きかけのあり方」が山田（1999）で「働きかけ性」と捉えられているものである。本稿でも山田（1999）の捉え方に基づき、「働きかけ性」という用語を用いることとする。

9) 花子に（頼んで）代わりに行ってもらった。

（益岡 2001: 29、下線は筆者）

10) いままでずっと見守ってもらっていた感じがした。

（山田 1999: 37）

また、「～てもらう」に対応する中国語表現はその働きかけの有無によって異なり、働きかけのある文は中国語の“请”と対応する可能性があるが、働きかけのない文は直接対応する中国語表現が存在しないと指摘されている（奥津・徐 1982、井上 2011）。さらに、譙（2015）は、「中日対訳コーパス」を用いて、「～てもらう」文と中国語の“请”構文の日

中翻訳における対応規則を考察している。その結果、「～てもらう」が“请”構文と対応できる場合は話し手の動作主に対する働きかけがあるという制限を受けることが確認されている。これらの先行研究によると、9) は“请”を使う中国語表現に対応することが可能であるのに対し、10) は“请”を使う中国語表現に対応できないということである。

一方、筆者は日本語教師として、「～てもらう」について学生に「教科書には人から動作を受けるという説明が書いてあるのに、なぜ“请”を使った使役の意味を表す中国語の訳文が出てくるのか」という質問を受けたことがある。それは教科書における文法説明と例文提示が働きかけの有無において一致していないことによると考えられる。つまり、中国の日本語教育現場においては、「～てもらう」における働きかけ性が必ずしも適切に扱われていない点があるのではないだろうか。従って、中国で使われる日本語教科書における「～てもらう」に関する記述の妥当性を考察する必要があると考える。

なお、大規模なコーパスの利用が可能になるに伴い、コーパスにおける使用実態と教科書の扱いを対照する研究が数多くなされるようになった。例えば、森 (2012) では、「日本語記述文法において構築されてきた体系が日本語教育文法として妥当であると言えるか」という問題意識から、コーパスを用いて現実の言語使用という観点に基づき日本語教科書に見られる使役の扱いが妥当であるか検証されている。その結果、「現在の日本語教育の「体系」における使役の扱いは、現実の言語使用と大きく乖離している」、また、「体系的にまんべんなく教えるよりも、現実の資料に沿って、強弱を付けた方が、効果的である」という主張が示されている。また、郭 (2017) は、母語話者の使用実態に基づいて教科書の「と」条件文についての扱いを検討し、問題点を指摘するとともに、「と」条件文の導入方法および例文作りについて提案している。筆者は日本語教師として、このような現実の言語使用に基づいて教科書を検討しなおす研究の必要性が非常に高いと考える。一方、「～てもらう」については、教科書における扱いの妥当性をその使用実態に基づき検討するものが管見の限りないように思われる。

以上述べてきた問題意識から、本稿では「～てもらう」における働きかけに注目し、その働きかけの現実の使用における出現状況を考察する。その上で、中国の日本語教科書における「～てもらう」に関する扱いの妥当性を検討することを目的とする。以下、第Ⅰ節では本稿における働きかけの有無による「～てもらう」の分類を示す。続いて、第Ⅱ節ではコーパスを用いて「～てもらう」における働きかけの出現状況を考察する。次に、第Ⅲ節では教科書における扱いを明らかにして、問題点を指摘した上で指導する際の留意点について提言する。最後に、おわりにでは本稿の内容をまとめ、今後の課題を述べる。

Ⅰ. 本稿における働きかけの有無による「～てもらう」の分類

先行研究では、「～てもらう」を、動作の受け手による動作主に対する働きかけの有無によって二種類または三種類に分類している。本稿では使用実態調査を目的とするため、山

田（1999：46）で指摘されたテモラウ受益文の働きかけ性を決定する要因と安藤（2015：128）で述べられた分類及び判断基準を参照し、「～てもらう」を以下①②③に示す三種類に分類して考察を行うことにする。

① 使役型：働きかけがあると考えられるもの

- 11) いいえ、よしませんよ。二階の人を呼んで来てすっかり聞いてもらうから。
(山田 1999：43)
- 12) いずれ国民の皆さんに、やっぱり議論してもらおうと思います。
(安藤 2015：128、下線は筆者)
- 13) 「あの石森さんは」「やめたよ。やめてもらった。」
(山田 1999：45)

② 受動型：働きかけがないと考えられるもの

- 14) こっちも手伝ってもらってうれしいから、何かお返しする。
(竹森健太郎『プロジェクト H』2002、朝日新聞社、下線は筆者)
- 15) そこは、看板もなく、民家の中に混じって在るので、まず旅行者が自力で見つけることは不可能だ。たまたま、現地で知り合った人にそこを紹介してもらい、助かった。
(石森広美『旅、ちょっとセンチメンタル』2002、東洋出版、下線は筆者)
- 16) 中学校では僕たちは伊藤先生に英語を教えてもらった。
(山田 1999：46)

③ ①②のいずれとも解釈できるもの

- 17) 翌日また万医師に来てもらった際、「肺炎ではないでしょうか」と念を押したが、その憂いはないとのことであった。
(山田 1999：47)

分類の判断基準は以下の通りである。

① 使役型

- a) 継起的同主語テ節の後件、または「必要がある」「～ため」「～なければならない」「意向形」等が共起する。(例文 11)、12))
- b) 文脈的に働きかけの意味や意図がある。(例文 13))

② 受動型

- a) 感情の要因となるテ節内、または「思いがけず」「偶然」等と共起する。(例文 14)、15))
- b) 文脈的に働きかけの意味や意図がない。(例文 16))

なお、「～てもらう」の可能形「～てもらえる」に関しては、山田（1999）で「テモラエルは、形式的にはテモラウの可能形であり働きかけがない形である」と指摘されている。本稿はそれを踏襲し、「～てもらえる」文を働きかけのない形として、考察対象から除外す

る。

Ⅱ. コーパスによる使用実態調査

1. 調査するコーパスと検索方法及び結果の概要

書き言葉コーパス：

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ(NT2.4))における「国会会議録」を除外した全データを対象に、『中納言』を用いて短単位検索を行った。

検索条件：「前方共起 1：キーから 2 語、品詞の大分類が動詞、AND 活用形の大分類が連用形、キー：語彙素が貰う」。

検索結果：合計 28,396 例。28,396 件から 2,500 件をランダムにピックアップして、そのうちの 1,791 件¹⁾を調査対象とした。

話し言葉コーパス：

現時点で話し言葉コーパスは数が非常に少ない。できるだけ様々な場面から例文を数多く収集し、話し言葉における使用傾向を観察するために、以下①と②に示すコーパスと検索方法で調査を行う。

①『名大会話コーパス』(以下では『名大』)、『現日研・職場談話コーパス』(以下では『職場』)、中納言を用いて短単位検索を行った。検索条件は BCCWJ と同様である。

検索結果：『名大』530 件(そのうち 2 件を除外した²⁾)、『職場』128 件。

②『談話資料日常生活のことば』

エクセルファイル上で、それぞれ「もら」「貰」で検索した。

検索結果：173 件、そのうち手作業で 48 件³⁾を除外した。

合計：①と②を合わせて 781 件が得られ、そのうちの 624 件⁴⁾を調査対象とした。

このように書き言葉コーパスと話し言葉コーパスで収集した例を目視により第Ⅰ章で規定した①②③の三種類に分類する⁵⁾。次では、調査結果を述べる。

2. 調査結果

書き言葉と話し言葉における三種類の「～てもらう」の出現状況をそれぞれ図 1 と図 2 に示す。

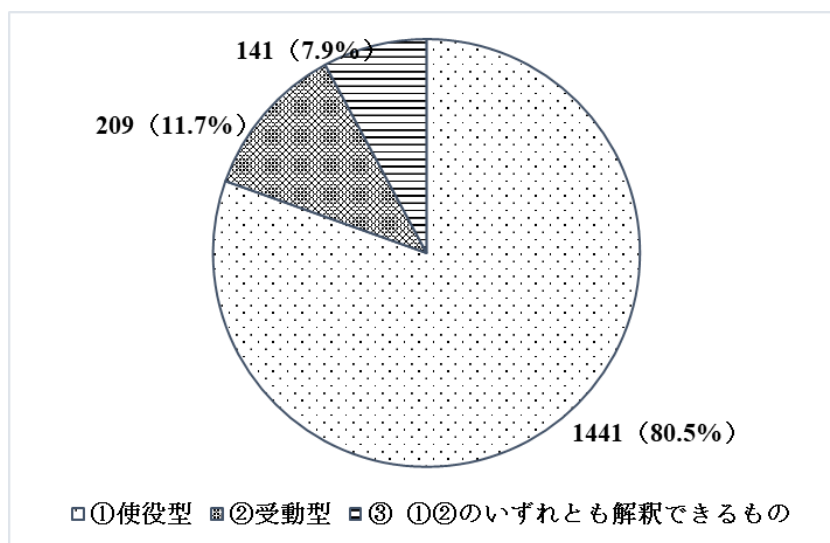


図1 書き言葉における三種類の内訳

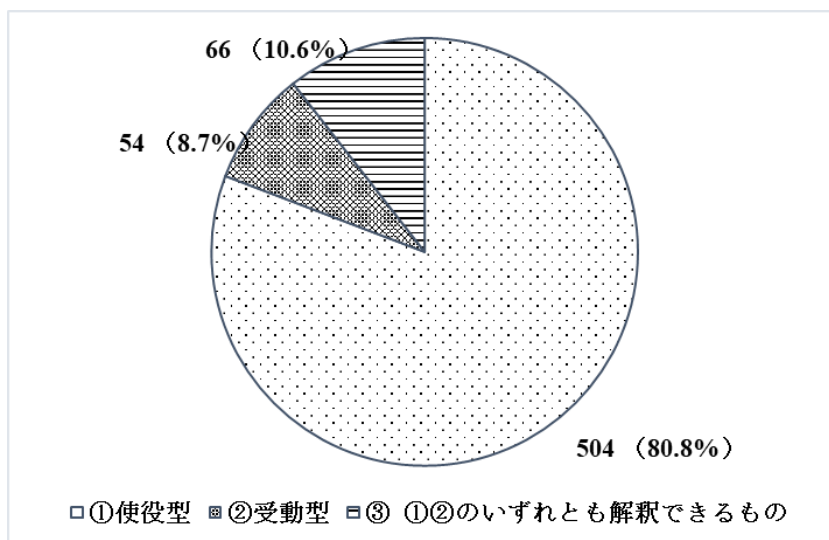


図2 話し言葉における三種類の内訳

これらの図から、以下の3点が明らかになった。

- 「～てもらう」には働きかけがあるものと働きかけがないもの、また、あるともないとも解釈できるものが存在する。
- 母語話者によって産出された「～てもらう」は、書き言葉と話し言葉のいずれにおいても①使役型が圧倒的に多く出現しており、全体の80%を超えている。
- ②と③は書き言葉か話し言葉かによって出現率が異なるが、いずれも全体の10%ぐらいしか現れておらず、①を大きく下回る。

3. 例文考察

ここでは、BCCWJにおける例文を用いて、①使役型、②受動型、③使役と受動のいずれ

とも解釈できる型の順で「～てもらう」における働きかけを見ていくことにする。

(1) ①使役型：働きかけがあると考えられるもの

まずは文法的条件から①型と解釈できるもの、つまり継起的同主語テ節の後件にくる「～てもらう」と「必要がある」「～ため」「～なければならない」「意向形」等と共に起する「～てもらう」を見る。

山田（1999）では、「～てもらう」が働きかけがあるという解釈を受けるのは、「継起的テ節を含む複文が同主語の場合でありかつ前件の動詞が意志動詞の場合のみである（p. 44）」と述べている。ここではまず「依頼」を明示的に表す継起的テ節の後にくる例文 18) に注目したい。

18) 最後にあたしは近所の女の人に頼んで、シシーを病院に連れて行ってもらったの。

（カレン・キエフスキー（著）柿沼瑛子（訳）『キャット・ウォーク』1996、ベネッセコーポレーション、下線は筆者）

18) では「～に頼んで」により、話し手の動作主である「近所の女」に対する働きかけが明示的に表されている。つまり、話し手が動作主に頼んでから、動作主が「連れて行く」という行為を行ったわけである。「頼んで」のほか、「依頼して」（例文 19）、「お願いして」（例文 20）など「依頼の働きかけ」を明示的に表す表現を用いた文も見られた。

19) 楽譜と歌詞が刷られたもので、タイトルは「マーちゃん讃歌」。渡壁氏が友人の作家海野洋司氏に依頼して作詞してもらった、「グローリー・ハレルヤ」の替歌である。

（宮崎隆男『マエストロ、時間です』1996、ヤマハミュージックメディア、下線は筆者）

20) なんとかお願いして、写しコピーを送ってもらうんです。

（Yahoo! ブログ 2008、下線は筆者）

また、以下の例文 21) は 18) — 20) と異なり、動作主への「依頼」を明示的に表す表現を用いていない文である。しかし、「試しに使ってもらう」の前に、同主語の意志動詞「集める」がきているので、「片岡」が「人たち」を集めたのは、その「人たち」にスタータを試しに使わせるためということが考えられる。つまり「集める—（依頼する）—使わせる」という動作の継起が読み取れ、「人たち」が自発的に「試しに使う」という動作を行ったということは考えにくい。そのため、働きかけがあると思われる。

21) (前略) こうした経験のある農家の人たちを集めて、片岡は日本から持ち込んだ頑丈なスタータを試しに使ってもらった。結果は上々で、エンジンの故障が減った。すると、農作業者の間で開発の要望が相次いだ。

（茜谷光司『アメリカ市場に賭けた男たち』2002、すばる舎、下線は筆者）

そして、働きかけのある「～てもらう」と共に起する表現に関しては、山田（1999）では働きかけのある「～てもらう」では、命令や意志等のモダリティ形式と共に起可能であると述べている。また、安藤（2015）は働きかけのある「～てもらう」は「必要がある」「なけ

ればならない」「意向形」などと共起できると指摘している。以下の例文 22) -25) は「～てもらう」がこのような話し手の意志を明示する表現と共起している点で共通する。つまり、これらの話し手の意志を表す形式との共起は話し手の動作主への働きかけを示しているわけである。

22) 「わたしは、その方面の知識に乏しいので、なんとか豊富なかたに手伝ってもらいたい、と以前から思案いたしておりましたので…」

(小松重男『御庭番の明治維新』2001、毎日新聞社、下線は筆者)

23) 換えのフィルターはカー用品店で千五百円～二千円で買えます。(自分の車名と年式を言って、店員さんに探してもらいましょう)

(Yahoo!知恵袋 2005、下線は筆者)

24) ビルの正面玄関は、八時になったら閉じられてしまうので、それ以降は守衛に声をかけて裏口を開けてもらわなければならないのだ。

(仙道はるか『高雅にして感傷的なワルツ』1998、講談社、下線は筆者)

25) また、道路利用者や近隣住民に対して、路上工事についての理解を深めてもらうために、ホームページ等を活用して、路上工事に関する情報提供等の広報活動を充実させる。

(内閣府『交通安全白書平成 16 年版』2004、(独) 国立印刷局、下線は筆者)

ここまでは文法的条件から働きかけがあると解釈される文を見てきた。次では文脈から働きかけの意味や意図が読み取れる文を見ていく。

26) 精神面の異常部検査表は、「集中力欠如」「情緒不安定」「ストレス」「悲しみ」「怒り」「心の不安」などの項目がその周波数とともに書かれています。どのようにして調べるかという、前に座っている患者の人に、検査中ずっと人差し指で表の上部にある黒丸の所を触っておいてもらいます。

(深野一幸『アメリカ市場に賭けた男たち』2001、書苑新社、下線は筆者)

例文 26) は医者が患者の精神状態を検査する場面であることが文脈から分かる。調べ方として、医者が指示を出して、「患者」がその指示に従って動作をするわけである。つまり、医者が働きかけをしてから動作主である患者が動作をすると考えられる。

(2) ②受動型：働きかけがないと考えられるもの

まず文法的条件から②型と解釈できるもの、つまり感情の要因となるテ節内の「～てもらう」と「思いがけず」「偶然」等と共起する「～てもらう」を見る。

山田 (1999) では「テ節の前件が、後件で表す感情を持つ原因となっている場合、テ節で用いられるテモラウは、必ず単純受影的と解釈される」と指摘されている。以下の例文 27)、28) はこのような文である。

27) わたしは以前、落札者のときに先に発送してもらいうれしかったこともあり連休明

けの発送になったときも普通に納得だったわけですが。

(Yahoo!知恵袋 2005、下線は筆者)

- 28) この点、やや不安だから、料理研究家の土井信子さんに電話できいてみると、さあ、
 どうでしょうか、私の父が昭和初年ごろ、九州の知人から生ウニを塩漬けにしたもの
を送ってもらってよろこんでいたという記憶がありますけど、といわれた。

(司馬遼太郎『甲賀と伊賀のみち、砂鉄のみち』2005、朝日新聞社、下線は筆者)

また、例文 15) (以下に再掲) では、知り合った人に「紹介する」ような働きかけが行
 われていなかったことは「たまたま」という副詞との共起によって明らかになっていると
 考えられる。

- 15) そこは、看板もなく、民家の中に混じって在るので、まず旅行者が自力で見つける
 ことは不可能だ。たまたま、現地で知り合った人にそこを紹介してもらい、助かっ
 た。

一方、文法的条件以外、つまり文脈から働きかけが感じられない例文 29) を見る。

- 29) (前略) 午後 6 時二十五分、第 1 陣の島民が避難所の九電記念体育館に着いた。消防
 隊員に体を支えてもらいながら次々にバスを降りた。つえをついたり、車いすに乗
 ったりしたお年寄りも目立つ。

(『読売新聞朝刊』2005、読売新聞社、下線は筆者)

29) は、文脈から、地震にあった島民が自分を避難所まで搬送してくれる消防隊員に体
 を支えように依頼したという解釈は不自然である。つまり働きかけのないほうが優先的に
 読み取れると思われる。また、次の例文 30) では、「お母さん」が子供に「お乳を飲ませ
 る」ことも「オムツを替える」ことも子供に頼まれてからすることではないため、働きか
 けがないという解釈になる。

- 30) 幼いころ、私たちはお母さんにお乳を飲ませてもらい、オムツを替えてもらって育
 ちます。

(中丸薫『闇の世界権力をくつがえす日本人の力』2004、徳間書店、下線は筆者)

(3) ③使役と受動のいずれとも解釈できる型

- 31) (前略) 今日、N氏に食材の買い物に一緒に出てもらったんですが、街では、桜が散
 って緑の青々とした葉っぱが茂っていて、そして、桜に変わって、ハナミズキが綺
 麗に咲いていました (* ^ _ ^ *)

(Yahoo!ブログ 2008、下線は筆者)

31) では、N氏に「買い物に一緒に出てくださいませんか」などと言って依頼した結果、N
 氏が一緒に出てきてくれた可能性もあれば、N氏が頼まれることなく、一緒に出てきてく
 れた可能性もあると考えられる。つまり、③は以下のような二通りの説明で解釈するこ
 とができる。

a) 話し手がある動作をするように動作主に依頼の働きかけを行ってから、動作主が依頼された動作を行う。

b) 話し手が動作主に依頼などをせずに、動作主が自発的にその動作を行う。

以下の例文 32)、33) もこの型の例である。

32) 明治の初めの生まれの私の祖父は、祖母が六十代で亡くなったあと、叔父の連れ合い、すなわち嫁に世話をしてもらっていた。今から四十年ぐらい前のことである。

(南和子『定年後、夫婦で楽しく生きるコツ』1997、大和書房、下線は筆者)

33) こちらを押すと音楽をチェンジする事ができますよ。☆羊さんより、教えて貰った
ものです。

(Yahoo!ブログ 2008、下線は筆者)

以上、母語話者が使っている「～てもらう」を働きかけの有無によって分類した上で考察を行ってきた。この結果から考えると、日本語教育現場で書き言葉においても話し言葉においても、母語話者が最も多く使っている①型、つまり働きかけのある用法の方が指導の優先度が高く、それを学習者に明示的に提示すべきだと思われる。一方、②型と③型に関しては、現実の使用において出現率がそれほど高くないが、いずれも現れているという点から、産出までは求めず理解できればよいという方針で提示するのがよいと主張する。

次では中国における日本語教育現場で「～てもらう」がどう扱われているかを探る手がかりとして、中国で使われる日本語教科書を検討することにしたい。

Ⅲ. 教科書における「～てもらう」の扱いについて

1. 調査する教科書

中国の高等教育機関で日本語を主専攻として勉強している学習者に広く使用されている4種計16冊の日本語教科書⁶⁾を考察対象とする。

①『日語総合教程』第1冊—第4冊

②『新編日語（重排本）』第1冊—第4冊

③『総合日語（修訂版）』第1冊—第4冊

④『新総合日本語基礎日語（第2版）』第1冊—第4冊

4種の教科書における「～てもらう」をはじめて文法項目として導入する課⁷⁾の扱いを以下の2点から考察する。

a) 働きかけについて、文法説明がどのようになされているのか、また、対応する中国語表現と例文がどうなっているのか。

b) 各教科書の扱いが母語話者の使用実態における働きかけの出現状況を反映しているのか。

2. 調査結果

「～てもらう」をはじめて導入する課における文法説明、対応する中国語表現と例文提示を整理して表2にまとめる。

表2 各教科書における「～てもらう」を初めて導入する際の状況

教科書	導入課 (全体の課数)	文法説明	対応 する 中国語	例文提示
総合日語	第2冊 第18課 (全15課)	<u>働きかけがある</u>	请、让	働きかけのある文 ①使役型
日語総合教程	第2冊 第7課 (全16課)	働きかけのあるものと働きかけのないものがある	请、叫	働きかけのある文 ①使役型
新編日語	第2冊 第6課 (全16課)	働きかけがない	请	働きかけのある文 ①使役型
新総合日本語 基礎日語	第2冊 第23課 (全16課)	働きかけがない	请、让	働きかけのある文 ①使役型

表2から「～てもらう」がどの教科書でも初級後半あたりで初めて導入されることが観察された。また、どの教科書でも日本語母語話者が最も多く使っている働きかけのある文（本稿における分類基準での①使役型の文）を例文として取り上げている。以下では教科書別にその扱いを詳しく考察していく。

『総合日語』は、文法説明では「～てもらう」が働きかけがあると明示的に提示されている。また、対応する中国語表現は働きかけのある“请、让”であり、取り上げられる例文は全て働きかけのある文である。つまり、「～てもらう」の扱いは、働きかけがある用法のみを取り上げ、文法説明も対応する中国語表現も例文も全て働きかけのある点をめぐって行われていると言えよう。一方、働きかけのない用法と、働きかけのあるともないとも解釈できる用法に関する文法説明も例文提示も見られない。それは扱いにおける不十分な点であると思われる。

そして、『日語総合教程』では、「～てもらう」は働きかけのある用法もあれば働きかけのない用法もあると明示的に説明がなされている。また、この二つの用法をそれぞれ中国語表現“让对方做事”と“对方为自己做事”に対応させている。そのため、学習者にとって理解しやすく、適切であると思われる。ただし、例文は働きかけのある文しか取り上げられていない。つまり、働きかけのない用法に関しては、説明がなされているにもかかわらず例文が見られなかった。それは扱いにおける不備な点ではないだろうか。

また、『新編日語』と『新総合日本語 基礎日語』は、「人から動作を受ける」という受動型に関する説明しかなされていない。それに対し、例文は使役型のみに対応できる中国語表現“请、让”を用いた訳文で提示されている。つまり、「～てもらう」は働きかけがないという説明がなされているにもかかわらず、働きかけのある例文が取り上げられているわけである。このような扱いは、働きかけの有無に関しては文法説明と例文が一致していないことになる。それは問題であり、学習者が「～てもらう」の用法を理解する際に困難をもたらすと思われる。一方、働きかけのない用法と、働きかけのあるともないとも解釈できる用法に関しては、文法説明も例文提示も見られない。それは扱いにおける不十分な点であると思われる。

以上、今回の調査対象となる4種の日本語教科書における「～てもらう」の扱いを検討してきた。その結果、「～てもらう」の働きかけ性に関しては、母語話者の使用実態を十分に反映していない点、または妥当性に欠けている点が見られた。以下ではその結果を踏まえ、各教科書を用いて「～てもらう」を指導する際の留意点について提言する。

3. 指導する際の留意点

(1) 『総合日語』

働きかけのない用法と、働きかけのあるともないとも解釈できる用法に関する文法説明も例文も提示されていない。そのため、この二つの用法に関しては、文法説明と例文を補充して、学習者に提示する必要がある。その上で、働きかけのある文は中国語の“请、让”などに対応することが可能であるのに対し、働きかけのない文は対応できないということを明示的に学習者に説明すべきだと思われる。

(2) 『日語総合教程』

「～てもらう」は働きかけのある用法とない用法があると明示的に説明されているため、この二つの用法にあてはまる例文を学習者に明示的に提示する必要があると思われる。そのため、働きかけのない用法の例文を補充する必要がある。

一方、働きかけのある文は中国語の“请、让”などに対応することが可能であるが、働きかけのない文は対応できないということを明示的に学習者に提示すべきだと思われる。

(3) 『新編日語』『新総合日本語 基礎日語』

母語話者の使用頻度からいうと、「～てもらう」は働きかけのない用法より働きかけのある用法のほうがはるかに高い。また、この二つの教科書における例文とその訳文の中国語表現から見れば、教科書作成者が働きかけのある用法を導入している意図が見られるのではないかと考えている。それゆえ、この二つの教科書を用いて指導する際に、文法説明に「相手に働きかけをしてから、相手から動作を受ける」という点を加えることが必要だ

と思われる。

一方、働きかけのない用法と、働きかけのあるともないとも解釈できる用法に関しては、文法説明も例文も提示されていない。そのため、この二つの用法に関しては、文法説明と例文を補充して、学習者に提示する必要がある。その上で、働きかけのある文は中国語の“请、让”などに対応することが可能であるのに対し、働きかけのない文は対応できないということを明示的に学習者に提示すべきだと思われる。

おわりに

以上、本稿では、授受補助動詞「～てもらう」を取り上げ、それにおける働きかけに注目して、コーパスを用いて使用実態調査を行った上で、中国で使用されている日本語教科書における扱いを考察した。その結果を踏まえ、教科書の扱いにおける問題点を指摘し、指導する際の留意点について提言した。さらに、今回の調査結果は、今後新しい日本語教科書を作成する際の「～てもらう」の文法説明や例文提示のあり方にも示唆を与えるものと考えられる。

授受補助動詞「～てもらう」に関しては、さらに「～てもらえませんか」「～てもらってもいいですか」など依頼の場面に使われる形式がある。それらに関する使用実態と教科書における扱いを考察して検討する必要があると思われるが、それは今後の課題としたい。

注

- 1) 表 1 における恩恵型①の例から「～てもらえる」の例 411 件を除外した件数である。
- 2) 除外した例は授受本動詞の例 2 件である。
- 3) 除外した例の内訳は授受本動詞の例 47 件、前文脈もしくは後文脈に文字化できなかった部分がある例 1 件である。
- 4) 表 1 における恩恵型①の例から「～てもらえる」の例 84 件を除外した件数である。
- 5) 分類は筆者による。
- 6) 中国で使用されている日本語教科書に関しては、李（2019）は『総合日語』『新編日語』『新総合日本語基礎日語』『新中日交流標準日本語』『日語総合教程』が「発行部数が最も多く、使用範囲が比較的に広いものである」と述べている。本稿ではその 5 種類のうち、高等教育機関で日本語を主専攻として勉強している学習者に使われている 4 種類を調査対象とする。
- 7) 調査する 4 種の教科書は全て文法積み上げ式の教科書であり、文型は初めて導入される課でのみ文法説明が行われる。

参考文献

安藤節子（2015）、「テモラウ構文の分析—母語話者による逸脱の観点から」『日本語／日本語教育研究』6、123-131 頁。

- 井上 優（2011）、「日本語・韓国語・中国語の「動詞+授受動詞」」『日本語学』30（11）、38-48 頁。
- 王燕（2010）、『日本語教育の立場から見た授受表現』中国社会科学出版社。
- 奥津敬一郎・徐昌華（1982）、「～てもらう」とそれに対応する中国語表現—“请”を中心に—『日本語教育』46、92-104 頁。
- 郭聖琳（2017）、「「と」条件文の母語話者使用実態について—教科書の記述を検討するために—」『国文論叢』（51）、神戸大学文学部国語国文学会、88-72 頁。
- 金殷模（2010）、「てもらう」文の基本的意味と周辺の意味との関係『国語学研究』49、58-72 頁。
- 朱冬冬（2017）、「テモラウ文の意味・用法：叙述の視点・動作の指向性・ヴォイス・働きかけ性から」『高知大学留学生教育』11、33-56 頁。
- 譙俊凱（2015）、「テモラウ」文と“請ける”構文との日中翻訳規則について『筑波日本語研究』（20）、33-49 頁。
- 益岡隆志（2001）、「日本語における授受動詞と恩恵性」『言語』30（5）、26-32 頁。
- 森篤嗣（2012）、「使役における体系と現実の言語使用—日本語教育文法の観点から—」『日本語文法』12（1）、3-19 頁。
- 山田敏弘（1999）、「テモラウ受益文の働き性をめぐって」『阪大日本語研究』11、37-57 頁。
- 山田敏弘（2004）、『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法』明治書院。
- 山橋幸子（2000）、「てもらう」の機能と受益との関わり『比較文化論叢』6、55-68 頁。
- 李偉（2019）、「中国で出版されている日本語教科書における受身の扱いをめぐる考察」『2018 年度日本語教育学会支部集会予稿集』、16-21 頁。
- 李 仙花（2001）、「てもらう」文の意味について『言語科学論集』5、97-108 頁。

資料 1—コーパス（『中納言』<http://chunagon.ninjal.ac.jp/>）

- 1) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（2018 年 6 月 28 日アクセス）
『名大会話コーパス』（2019 年 7 月 29 日アクセス）
『現日研・職場談話コーパス』（2019 年 8 月 27 日アクセス）
- 2) 現代日本語研究会（2016）、『談話資料日常生活のことば』ひつじ書房。

資料 2—教科書

- 『日語総合教程』（2008）、上海外語教育出版社
- 『新編日語（重排本）』（2019）、上海外語教育出版社
- 『新総合日本語基礎日語（第 2 版）』（2009）、大連理工大学出版社
- 『総合日語（修訂版）』（2015）、北京大学出版社

A Study on the Causativity of "Temorau" Construction: Suggestions for Japanese Language Education from Actual Usage

CHEN, Meng

Abstract

The previous research already pointed out that causativity exists in the “Temorau” Construction. This paper utilized the corpus to illustrate the causativity of “Temorau” Construction. Based on this, investigations are made considering the treatment of “Temorau” Construction in Japanese textbooks of China, some problems were pointed out. Based on the results, important points to note when teaching the “Temorau” Construction in Japanese language education in China were suggested.

Keywords : "Temorau" Construction, Causativity, Actual Usage, Chinese Learners of Japanese, Japanese Textbooks

「～（さ）せていただく」の社会的容認度についての考察 —アンケート調査結果の分析から—

孫 向宇（拓殖大学大学院生）

要旨

「～（さ）せていただく」の各用法に対する社会的容認度を明らかにするため、本研究は82名を対象にアンケート調査を行った。その結果、「先生の本を使わせていただけないでしょうか」という許可を要求する基本用法よりも、「発表させていただきます」など一方的な行動を宣言する拡大用法の方は容認度が高い傾向が確認され、「～（さ）せていただく」の役割に変化が生じていることがわかった。また、拡大用法に対する若年層の容認度が中高年よりも高いことや、基本用法に対する女性の容認度が男性を上回ることも確認された。「容認度に個人差の影響はある」との指摘に対して、本調査の結果では個人差の存在が認められた一方、それが社会的容認度に重大な影響が出ないほどのものであることもわかった。

キーワード： 「～（さ）せていただく」、社会的容認度、性別、年齢層、個人差

はじめに

現代日本語には、「～（さ）せていただく」という表現が存在する。この表現は本来、「「そうしてもよい」という恩恵／許可を得て何かを「させてもらう」ことを、恩恵／許可の与え手を高めて述べる（菊地 1997）」という場合に使われるのが基本だが、近年、恩恵／許可の与え手が実際に存在しない場面にまで使用が拡大し、またその拡大用法¹⁾の使用頻度の高さが目立つ。ただし、拡大用法に対して肯定的な見方（菊地 1994、菊地 1997、米澤 2001）と否定的な見方（滝浦 2016）が併存するのが現状で、日本語教育の現場においても拡大用法の取り扱いを巡って混乱が生じている。そのため、「～（さ）せていただく」の各用法の社会的容認度を明らかにすることが今の急務となっている。

拡大用法にはいくつかのタイプがあり、社会的容認度もそのタイプによって異なる。孫（2019）は、「～（さ）せていただく」の基本用法より「話し手」「許可の与え手」「許可行為」「恩恵関係」の4つの要素を抽出し、「拡大用法の実質は要素の欠落による使用範囲の拡張」という見方を示したうえ欠落した要素の数によって「～（さ）せていただく」の用法をⅠ～Ⅷの8タイプに分類した。また、「欠落した要素の数が多くなるにつれてその

用法の社会的容認度が低くなる」との仮説も立て²⁾、その真否を検証することも本研究の目的の一つである。

なお、使用法の分類法が異なるが「～（さ）せていただく」の各用法の社会的容認度を調べたものには高橋・東泉（2018）がある。本研究ではその調査結果の検証とともに、経年による「～（さ）せていただく」の各用法の社会的容認度に変化があるか否かを明らかにし、また高橋・東泉（2018）では言及されなかった性別・個人による容認度の差についても考察したい。

I. 先行研究

1. 「～（さ）せていただく」の用法の分類

「～（さ）せていただく」の用法には大きく基本用法と拡大用法の2種類があり、拡大用法にはさらにいくつかのタイプが存在する。

先行研究の中で、「～（さ）せていただく」の基本用法に触れたものは多数あるが³⁾、菊地（1997）はそれを以下のようにまとめている。

「どうしてもよい」という恩恵／許可を得て、何かを「させてもらう」ことを、恩恵／許可の与え手を高めて述べる表現である。⁴⁾

また、文化庁（2007）は「～（さ）せていただく」の基本用法を、

基本的には、自分側が行うことを、ア）相手側又は第三者の許可を受けて行い、イ）そのことで恩恵を受けるという事実や気持ちのある場合に使われる。

としている。

上記のいずれの定義においても「許可」と「恩恵関係」の両方が言及されており、内容的にはほぼ同じであることがわかる。孫（2019）は、これらの定義より「話し手」「許可の与え手」「許可行為」「恩恵関係」の4つの要素を抽出し、「～（さ）せていただく」のすべての用法の内、4つの要素をすべて含むものを「基本用法」と規定した。また孫（2019）は、現存する拡大用法の分類法についても考察を行い⁵⁾、それらの分類法には分類基準が統一していない、すべての拡大用法を分類できていないなどの問題点を指摘したうえ、各用法に含まれる要素の数による分類法を提言した。孫（2019）の分類法は表1に示す⁶⁾。

表1 「～（さ）せていただく」の用法の分類（孫 2019）

用法		含まれる要素			
		話し手	許可の与え手	許可行為	恩恵関係
基本用法		○	○	○	○
拡大用法	タイプⅠ	○	○	○	△
	タイプⅡ	○	△	△	○
	タイプⅢ	○	△	△	△
	タイプⅣ	○	○	○	×
	タイプⅤ	○	△	△	×
	タイプⅥ	○	×	×	○
	タイプⅦ	○	×	×	△
	タイプⅧ	○	×	×	×

表1に使用された記号について、○は「その要素の存在が明確に確認できる」、△は「その要素の存在は不明確であるが存在すると見立てることができる」、×は「その要素は存在せず、存在すると見立てることもできず、完全に欠落した」をそれぞれ意味する。表1の通り孫（2019）は、基本用法の以外に、「～（さ）せていただく」の各用法に含まれる要素の数及びその要素の明確さによって、拡大用法をタイプⅠ～Ⅷの8種類に分類した。その内タイプⅠは「恩恵関係のみが不明確な用法」、タイプⅡは「実際の許可者と許可行為が存在しないが存在すると見立てることができる用法」、タイプⅢは「実際の許可者と許可行為が存在しないが存在すると見立てることができる、かつ恩恵関係も不明確な用法」、タイプⅣは「恩恵関係のみが欠落した用法」、タイプⅤは「実際の許可者と許可行為が存在しないが存在すると見立てることができる、かつ恩恵関係も欠落した用法」、タイプⅥは「許可者と許可行為が欠落した用法」、タイプⅦは「許可者と許可行為が欠落し、恩恵関係も不明確な用法」、タイプⅧは「許可者、許可行為及び恩恵関係がすべて欠落した用法」をそれぞれ意味する。

本論で扱う「させていただく」の基本用法及び拡大用法の分類法は、上記の孫（2019）に従うものとする。

2. 「～（さ）せていただく」の社会的容認度に関する先行研究

「～（さ）せていただく」の各用法の社会的容認度について調査を行ったものには、菊地（1997）、岡垣（2015）、高橋・東泉（2018）などがある。⁷⁾その中、高橋・東泉（2018）の調査は時間的に最も近いうえ、調査対象も452名と大規模である。ただし、高橋・東泉（2018）の調査は、男女・個人による容認度の差に触れていないほか、拡大用法の分類法

に関しては本研究とは異なる分類法を採用したため、一部高橋・東泉（2018）の調査に含まれない拡大用法がある。さらに、高橋・東泉（2018）が調査を行った 2017 年より、現在 3 年間が経過し、「～（さ）せていただく」の使用が増え続ける状況の中、経年による容認度の差が生じることも考えられる。

そこで本研究は、高橋・東泉（2018）の調査結果の検証を兼ねて、2020 年時点での「～（さ）せていただく」の社会的容認度の年齢・性別・個人による差を調査し、またその調査結果をもって孫（2019）の「欠落した要素の数が多くなるにつれてその用法の社会的容認度が低くなる」という仮説の真否を検証した。

Ⅱ．調査の概要

本調査の目的は、以下のア～エにあたる。

ア) 高橋・東泉（2018）の調査結果の検証。

イ) 2020 年時点の「～（さ）せていただく」の社会的容認度を性別・年齢別で調査する。

ウ) 個人による容認度の差の有無を明らかにする。

エ) 「欠落した要素の数が多くなるにつれてその用法の社会的容認度が低くなる」という仮説の真否の検証。

本調査は 2019 年 12 月～2020 年 3 月、3 か月間にかけて、計 82 名の日本語母語話者を対象者として実施した。調査対象者の詳細は表 2 のとおりである。なお、年齢層は高橋・東泉（2018）に従い、若年層（10・20 代）と中高年層（30～80 代以上）に分ける。

表 2 調査協力者の属性

	若年層（10・20 代）	中高年層（30～80 代以上）	計	%
男	26 人	18 人	44 人	54%
女	11 人	27 人	38 人	46%
計	37 人	45 人	82 人	100%
%	45%	55%	100%	

質問文の設置は、孫（2019）の分類法に従い、各分類の下に質問文 2 文、計 14 文⁸⁾を設置した。質問文の内容に関して、本研究には高橋・東泉（2018）の調査結果を検証するという目的もあり、極力同じ質問文を使用した。が、前述のとおり本調査では異なる分類法を採用したため、一部高橋・東泉（2018）の調査にない使用法が存在する。この部分に関しては筆者が現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下、BCCWJ）などで収集した用例を

使用した。⁹⁾また、回答選択肢の設置については、高橋・東泉（2018）は「適切と思う」「違和感がある」の2択式を採用したが、本調査では各用法の容認度の差をさらに詳しく確認するため、回答選択肢には「0＝極めて不自然な言い方」、「1＝不自然な言い方」、「2＝やや不自然な言い方」、「3＝まあまあ自然な言い方」、「4＝自然な言い方」、「5＝極めて自然な言い方」の6段階の評価基準を設置し、調査協力者には0～5の評価値で回答してもらう。また、評価値を6段階にしたもう1つの理由は、中立的な選択肢をなくすためでもある。それは、自然度判定の調査の特徴から、「わからない」という形で回答を放棄する可能性が考えられ、中立的な選択肢の存在はその傾向を強める恐れがあると考えられた（斎藤 2015）」ためである。

本調査のアンケート用紙を以下に示す。

アンケート質問票

（ ）内の場面状況で、①～⑭の例文の「～（さ）せていただく」の使用は、下記の0～5までのどれに該当しますか？回答欄に書いてください。	
0＝極めて不自然な言い方	1＝不自然な言い方
2＝やや不自然な言い方	3＝まあまあ自然な言い方
4＝自然な言い方	5＝極めて自然な言い方

例文	回答欄 (0～5の数字を入れてください)
①（学生が教師に） 先生の本を <u>使わせていただけない</u> でしょうか。	
②（教師の持っている本をコピーしたいとき） コピーを <u>取らせていただ</u> けますか。	
③（遊園地で遊んだ後） 〇〇さんのおかげで楽しい一日を <u>過ごさ</u> せていただきました。	
④（助手が教授に） 教授のお傍で、こんな楽しい <u>仕事を</u> させて <u>いただ</u> けることは、私にとって願ってもないことです。	
⑤（パーティーの出欠の返事として） <u>出席</u> させていただきます。	
⑥（学術発表中に） ここは図を提示するだけで説明は <u>省略</u> させていただきます。	
⑦（店の休業を知らせる張り紙） 本日、 <u>休業</u> とさせていただきます。	

⑧（授業中の発表の冒頭で） それでは <u>発表させていただきます。</u>	
⑨（日記に書く） 大雨に降られ、大きな木の下で <u>雨宿りをさせていただいた。</u> おかげで濡れずに済んだ。	
⑩（オークションサイトについての感想をネット上書き込む） 私は出品、落札共にいつも <u>楽しませていただいています。</u>	
⑪（会社の同僚に） 休暇中は <u>海外旅行をさせていただきました。</u>	
⑫（自分について話している） それで都立の教育研究所に行かせていただいて障がい児の勉強をし、そのあと戻ってから障がい児学級の担任になりました。	
⑬（近所の人に） 正月はハワイで <u>過ごさせていただきます。</u>	
⑭（自己紹介で） 私は〇〇中学校を <u>卒業させていただきました。</u>	

Ⅲ. 調査結果

ここではまず、各質問に対する性別、年齢別の回答状況を表 3～表 4 に示す。

表 3 若年層の回答状況

質問番号	各選択肢の回答者数											
	0		1		2		3		4		5	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
①	2	1	1	0	2	0	6	1	10	8	5	1
②	1	0	3	1	6	1	3	1	8	7	5	1
③	1	1	3	2	8	4	2	2	10	1	2	1
④	0	0	2	0	2	1	4	2	10	6	8	2
⑤	0	0	1	1	1	1	4	1	7	1	13	7
⑥	0	0	0	0	2	0	3	1	10	3	11	7
⑦	0	0	0	0	1	0	1	3	13	3	11	5
⑧	0	0	2	0	1	2	9	4	7	2	7	3
⑨	9	4	11	5	1	1	2	0	2	1	1	0
⑩	2	0	3	3	9	3	6	3	5	1	1	1

⑪	3	1	12	4	3	5	6	1	1	0	1	0
⑫	2	0	6	3	8	2	3	3	5	3	2	0
⑬	3	1	7	6	8	4	5	0	3	0	0	0
⑭	5	2	9	8	9	1	1	0	1	0	1	0

表 4 中高年層の回答状況

質問番号	各選択肢の回答者数											
	0		1		2		3		4		5	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
①	0	0	0	0	1	5	4	4	2	9	1	9
②	0	0	4	0	3	0	8	4	2	11	1	12
③	3	1	3	2	5	9	4	6	2	9	1	0
④	0	0	0	4	0	2	5	3	13	13	0	5
⑤	0	0	3	3	0	4	4	5	6	0	5	15
⑥	0	0	0	2	0	1	0	8	12	4	6	12
⑦	0	0	3	6	0	0	0	6	15	6	0	9
⑧	0	0	0	4	0	2	4	2	9	15	5	4
⑨	8	5	7	16	3	4	0	2	0	0	0	0
⑩	1	4	2	5	1	16	8	2	6	0	0	0
⑪	5	11	10	5	1	11	2	0	0	0	0	0
⑫	7	4	2	11	7	10	0	0	2	2	0	0
⑬	8	13	10	8	0	4	0	2	0	0	0	0
⑭	12	21	6	3	0	3	0	0	0	0	0	0

以下の各節では、上記の表～表のデータに基づき、用法、年齢、性別及び個人の4つの要素が容認度に与える影響を分析する。

1. 用法による容認度の差

本節では、「～（さ）せていただく」の各用法の間において、その容認度の差の有無及び程度を考察する。そのため、質問ごとに、回答の評価値の平均値¹⁰⁾を算出した。その結果は表5のとおりである。なおここでは、各用法の総体的な容認度を観察するため、あえて年齢、性別などの要素を考慮せずに計算を行った。性別及び年齢別の考察は後続の第2、第3節で述べる。

表 5 各質問に対する回答の評価値の平均値

質問番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
平均値	3.39	3.45	2.59	3.67	3.88	4.15	3.83
質問番号	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
平均値	3.61	1.05	2.16	1.30	1.85	1.17	0.78

まず質問①、②について、高橋・東泉（2018）では「①は「（さ）せていただく」の「最も基本的な使い方」、②も「基本的な用法に合致していると判断できる」とされており、いわゆる「～（さ）せていただく」の基本用法にあたるが、この2問の容認度の平均値はそれぞれ3.39と3.45で、14問の内最も高いわけではない。それに対して拡大用法タイプⅢ（高橋・東泉（2018）の調査では拡大用法タイプⅡに相当する）にあたる質問⑤⑥の容認度の平均値は3.88と4.15で最高である。この結果は、高橋・東泉（2018）の調査に一致している。以前から、「～（さ）せていただく」の基本用法が縮小し、それに対して拡大用法、特にタイプⅢのような自己宣言する用法が主流になりつつあるという議論が散見される（菊地 2010、椎名 2018）。高橋・東泉（2018）及び今回の調査結果から、「先生の本を使わせていただけないでしょうか」のような許可を要求する用例よりも、「出席させていただきます」「発表させていただきます」など一方的な行動を宣言する用法の方は容認度が高い傾向が確認され、「～（さ）せていただく」という表現は、依頼・許可求めから話し手自分自身の行為を伝達・宣言する表現に変わりつつあることが明らかになり、「～（さ）せていただく」の役割に変化が生じていることがわかった。

また、孫（2019）の「欠落した要素の数が多くなるほどその用法の社会的容認度が低くなる」という仮説について、高橋・東泉（2018）及び今回の調査から「～（さ）せていただく」の社会的容認度と拡大用法の欠落した要素の数の間の関連性は確認できなかった。そのため、「～（さ）せていただく」の拡大用法が欠落した要素の数、言い換えればその拡大用法がどれほど基本用法と乖離しているのかは、その拡大用法の社会的容認度に影響を与えない、もしくは、影響を与える唯一の要因でないことがわかる。「～（さ）せていただく」の社会的容認度の変化にかかわる要因に関しては今後、さらなる研究が必要である。

2. 年齢による容認度の差

本節では、各用法の容認度の年齢による差を考察する。そのため、各質問の若年層と中高年層の回答結果にt検定を実施した。その結果は表6に示したとおりである。なおここでは、t検定の結果の内、年齢差の有無の判断に必要な「有意確率」のみを掲載する¹¹⁾。

表 6 質問ごとの t 検定の結果（年齢別）

質問番号	評価値の平均値		年齢差の有意確率 (p)
	若年	中高年	
①	3.46	3.33	0.656
②	3.24	3.62	0.193
③	2.70	2.49	0.473
④	3.78	3.58	0.392
⑤	4.14	3.67	0.120
⑥	4.38	4.04	0.128
⑦	4.27	3.47	0.002
⑧	3.68	3.71	0.888
⑨	1.22	0.96	0.272
⑩	2.54	2.11	0.114
⑪	1.70	1.00	0.002
⑫	2.46	1.40	0.000
⑬	1.73	0.71	0.000
⑭	1.32	0.33	0.000

表 6 に示したとおり、質問⑦及び⑪～⑭は、有意確率 $p < 0.05$ のため、年齢による有意差が認められた。それ以外の質問に関しては統計的に有意な差が認められなかった。本調査では拡大用法タイプⅣにあたる質問⑦及び拡大用法タイプⅦ、Ⅷにあたる質問⑪～⑭において有意差が認められた結果については高橋・東泉（2018）の調査と一致している。ただ、高橋・東泉（2018）の調査では基本用法にあたる質問の第 1 問にも有意な差が認められ、「先生の本を使わせていただけないでしょうか」という文に対して若年層の容認度が中高年層を上回る結果になっているが、この調査では有意差が認められなかった。単純に平均値を見ている限り若年層の容認度は依然、中高年層を上回るが、高橋・東泉（2018）が調査を行った 2017 年時点と比較してその差が縮まってくることがわかり、若年層の容認度が下がったか、中高年層の容認度が上がったかは、今後さらなる考察が必要である。

また、高橋・東泉（2018）では拡大用法において、若年層の容認度が中高年層を上回るという結果の理由については触れていないが、中高年層は長年、「～（さ）せていただく」の基本用法に馴染んできたため新用法に抵抗感を持つなどの要因が考えられ、このことに関する考察は別紙に譲りたい。

3. 性別による容認度の差

本節では、各用法の容認度の年齢による差を考察する。そのため、各質問の男性と女性の回答結果にt検定を実施した。その結果は表7に示したとおりである。なおここでは、t検定の結果の内、年齢差の有無の判断に必要な「有意確率」のみを掲載する。¹²⁾

表7 質問ごとのt検定の結果（性別別）

質問番号	評価値の平均値		性別差の有意確率（p）
	男性	女性	
①	3.07	3.76	0.012
②	2.91	4.08	0.000
③	2.57	2.61	0.901
④	3.75	3.58	0.477
⑤	3.91	3.84	0.827
⑥	4.23	4.05	0.434
⑦	3.98	3.66	0.246
⑧	3.80	3.50	0.238
⑨	1.02	1.08	0.815
⑩	2.64	1.84	0.003
⑪	1.43	1.16	0.252
⑫	1.93	1.76	0.571
⑬	1.68	1.39	0.240
⑭	1.02	0.50	0.015

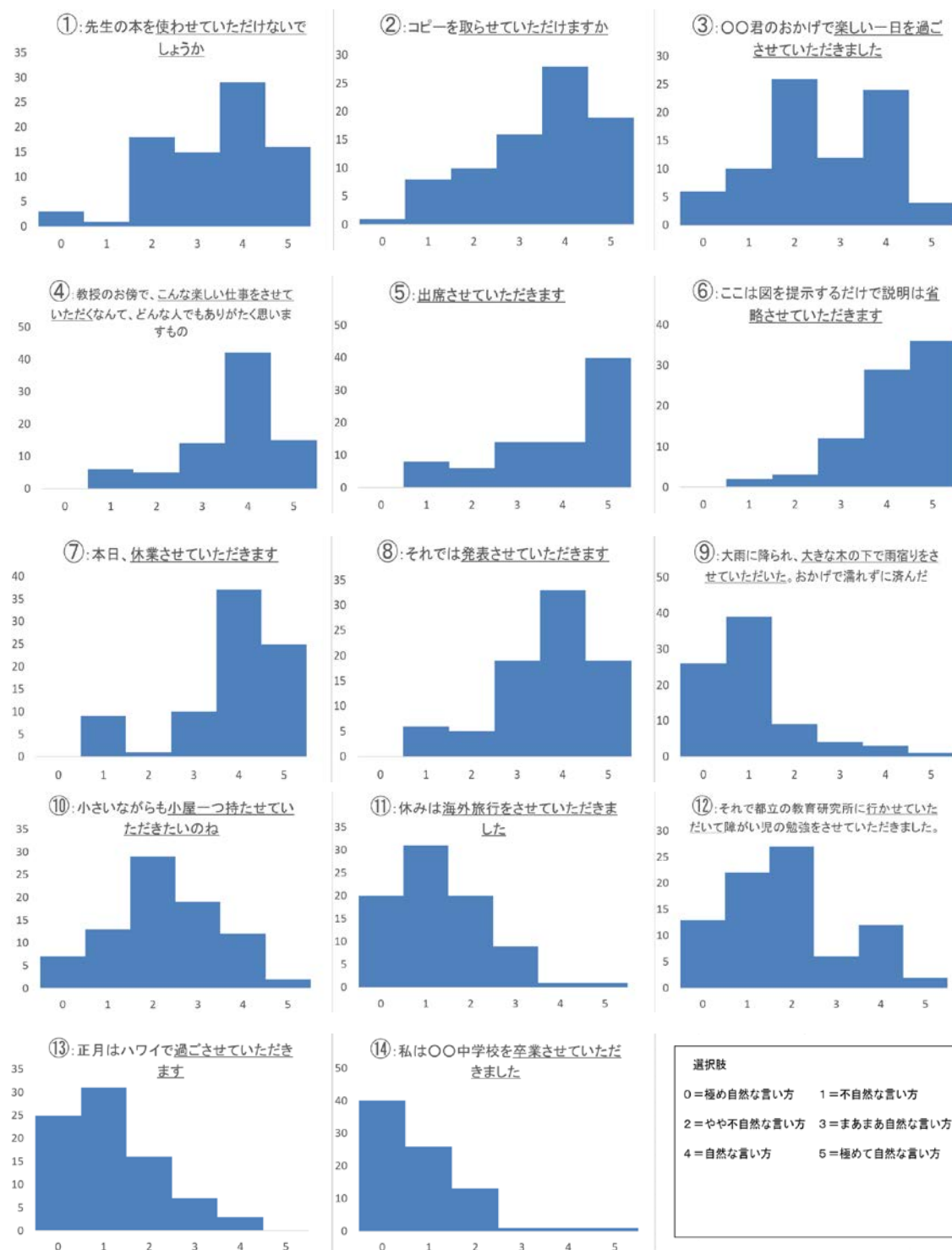
表7に示したとおり、基本用法に当たる質問①②、そして拡大用法タイプⅥに当たる質問⑩では、有意確率 $p < 0.05$ のため、男女の間に有意な差が認められ、それ以外の質問では性別による有意な差が認められなかった。本調査では、「～（さ）せていただく」の基本用法に対して女性の容認度が男性より高い傾向が見られ、また拡大用法タイプⅥでは男性の容認度が女性を上回る傾向が確認された。その理由については、今後の研究で探りたい。

4. 個人による容認度の差

「～（さ）せていただく」の各用法に対する社会的容認度について、「個人差の影響も目立ち、人によっては大きな違いがある」などの指摘が見受けられるが、この調査では個人差が容認度に与える影響についても考察したい。そのため、質問ごとの、回答の分布状況を縦棒グラフにした。グラフの横軸は各選択肢を、縦軸は各選択肢を選択した人数を表し

ている。その結果は、図 1 に示したとおりである。

図 1 各質問に対する回答の分布状況



また、各質問に対して選択肢 0、1、2 を選択した人を「その用法を容認しない」とし、3、4、5 を選択した人を「その用法を容認する」として、各質問において「容認しない」

「容認する」をそれぞれ選択した人の数及び割合を算出した。その結果は表 8 に示す。

表 8 「容認しない」「容認する」をそれぞれ選択した人の数及び割合（質問別）

質問番号	「容認しない」を選択した人数（％）	「容認する」を選択人数（％）
①	22(26.9％)	60(73.1％)
②	19(23.2％)	63(76.8％)
③	42(51.2％)	40(48.8％)
④	11(13.4％)	71(86.6％)
⑤	14(17.1％)	68(82.9％)
⑥	5(6.1％)	77(93.9％)
⑦	10(12.2％)	72(87.8％)
⑧	11(13.4％)	71(86.6％)
⑨	74(90.2％)	8(9.8％)
⑩	49(59.8％)	33(40.2％)
⑪	71(86.6％)	11(13.4％)
⑫	62(75.6％)	20(24.4％)
⑬	72(87.8％)	10(12.2％)
⑭	79(96.3％)	3(3.7％)

図 1 及び表 8 からわかるように、③⑩を除いたすべての質問において、「容認しない」もしくは「容認する」のどちらか一方を選択した人の割合はいずれも 70%を超え、80%台、90%台のものが大半を占めており、回答が選択肢の一つに集中しているものが多い。これは、「～（さ）せていただく」の各用法に対する調査協力者の容認度が比較的一致していることを意味する。そのため当然若干の個人差が存在することは否めないが、「～（さ）せていただく」の社会的容認度に重大な影響を及ぼすことはないと考えてもよいであろう。ただし質問③及び⑩では、容認度に明らかな個人差が認められ、容認度に個人差が生じやすい拡大用法のタイプや、その理由についてはさらなる検討が必要であり、今後の課題としたい。

おわりに

本調査の結果においても、用法別・年齢別の容認度において、高橋・東泉（2018）と同じ傾向が見られた。高橋・東泉（2018）の調査結果を検証・追認できたものといえる。また本調査は性別・個人による容認度の差についても考察した。女性の容認度は、「～（さ）せていただく」の基本用法において男性を上回る結果が確認された。また、容認度の個人

差については、ほとんどの用法では確認できなかったものの、ごく一部の用法では顕著な個人差が確認できた。その理由に関しては今後のさらなる研究で考察していきたいと思う。本調査の結果により孫（2019）の「欠落した要素の数が多くなるにつれてその用法の社会的容認度が低くなる」という仮説が棄却された。筆者が行っているほかの研究では、「～（さ）せていただく」の拡大用法の社会的容認度はその用法の使用頻度に関係している」「明確な許可者が存在するかどうかはその用法の社会的容認度に影響する」など新たな可能性が浮上したが、それらを含む「～（さ）せていただく」の社会的容認度に影響をあたえる要因に関しては別紙で論じたい。

本調査は、2020年時点の、「～（さ）せていただく」の各用法の社会的容認度を数字で示した。この成果は、現在「～（さ）せていただく」の指導に悩まされている日本語教育の現場で活かしていくことができればと思う。ただ、諸条件の制限により、本調査で集めた調査協力者は合計 82 名で大規模とは言えず、調査協力者の出身地も関東地方に集中していることから地域による容認度の差についての考察も行わなかったが、本調査の結果が今後のさらなる研究の啓発になれば幸いである。

注

- 1) 先行研究の中で、「～（さ）せていただく」の基本用法に属しない使用法を最も早く名付けたのは米澤(2001)の「拡大用法」である。その後、宇都宮(2005)の「許容範囲の用法」「検討を要する用法」や高橋・東泉(2018)の「拡張用法」など様々な呼び方が出現したが、本論では時間的に最も早い米澤(2001)の「拡大用法」に従う。
- 2) 以上の内容は、孫が 2019 年 8 月に行われた第 23 回東アジア日本語教育・日本文化研究会国際学術大会で口頭発表したものである。
- 3) 「～（さ）せていただく」の基本用法に触れた研究は、本稿で取り上げたもの以外に、筆者が知っている限り米澤（2001）、宇都宮（2005）などがある。基本用法の記述に多少の違いはあるが、内容的にはほぼ一致しているため、ここでは時間的に最も早い菊地（1997）のものと権威を持つ文化庁のものを例として掲載した。
- 4) 下線は筆者によるものである。ここ以外の場合も特別な説明がない限り同様である。
- 5) 「～（さ）せていただく」の拡大用法の分類を行った研究には、孫（2019）以外に菊地（1997）、米澤（2001）、宇都宮（2005）などがある。
- 6) 表 1 に掲載された分類法は、あくまでも「要素」と「その要素の明確性」を組み合わせた理論上の分類法であり、実際筆者がやっている「～（さ）せていただく」の用例収集では、拡大用法タイプ I 及びタイプ IV の使用例は現在確認されていない。そのため本研究で行われたアンケート調査ではこの 2 種類の拡大用法は含まれていない。
- 7) これ以外にも、文化庁（2008）、椎名（2017）がある。
- 8) 注 6) で述べたとおり、孫（2019）の分類法では基本用法と拡大用法 8 種類で計 9 つの使用

法があり、本来 18 文の質問が必要だが、拡大用法のタイプ I 及びタイプ IV については現在実際の使用例が確認されておらず本調査の対象から除外したため、質問文は全部で 14 文になる。

- 9) 本調査に使用された質問文①、②、⑤、⑦、⑧、⑬、⑭は高橋・東泉（2018）の調査でも使用されたもので、それ以外のものは筆者が BCCWJ など収集した用例である。
- 10) 本調査で設定した各評価値の評価基準に従い、評価値の平均値の表す意味を以下のように規定する。

平均値の区間	平均値の表す意味
区間 1 平均値 = 0	すべての協力者に容認されない使用法
区間 2 $0 < \text{平均値} \leq 1$	ほとんどの協力者に容認されない使用法
区間 3 $1 < \text{平均値} \leq 2$	大部分の協力者に容認されない使用法
区間 4 $2 < \text{平均値} < 3$	適当かどうか意見が分かれる使用法
区間 5 $3 \leq \text{平均値} < 4$	大部分の協力者に容認される使用法
区間 6 $4 \leq \text{平均値} < 5$	ほとんどの協力者に容認される使用法
区間 7 平均値 = 5	すべての協力者に容認される使用法

- 11) 質問⑤、⑦、⑨、⑭の分析結果に関して、等分散性の検定では「2 群の分散は等しくない」との結果が出たため「等分散を仮定しない」方の有意確率を掲載した。それ以外の質問に関しては「等分散を仮定する」方の有意確率を掲載した。
- 12) 質問②、⑤、⑥、⑦、⑬の分析結果に関して、等分散性の検定では「2 群の分散は等しくない」との結果が出たため「等分散を仮定しない」方の有意確率を掲載した。それ以外の質問に関しては「等分散を仮定する」方の有意確率を掲載した。

参考文献

- 宇都宮陽子(2005)、「「待遇表現」としての「～（さ）せていただく」に関する一考察」『早稲田大学日本語教育研究』6(2005)、29-44 頁
- 岡垣亮我(2015)、「「～（さ）せていただく」表現について一話し手と聞き手の意識に着目して」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』11(2015)、93-100 頁
- 菊地康人(1994)、『敬語』角川書店、180-185 頁
- 菊地康人(1997)、「変わりゆく「させていただく」」『言語』26(6)、40-47 頁
- 菊地康人(2010)、『敬語再入門』講談社学術文庫
- 斎藤幹樹(2015)、「言語表現の容認度に対する下位構文スキーマ頻度及び単語頻度の影響の統計的考察」『言語科学論集』21(2015)、37-57 頁
- 椎名美智(2017)、「「させていただく」という問題系—「文法化」と「新丁寧語」の誕生」（加藤重広・滝浦真人『語用論フォーラム 2』ひつじ書房）、75-105 頁
- 椎名美智(2018)、「ベネファクティブ『させていただく』の形式でと機能—2 つのコーパス調査より」『東

- アジア日本語教育日本文化研究』21(2018)、47-72 頁
- 孫向宇(2019)、「待遇表現「～(さ)せていただく」の使用状況に関する研究」第23回東アジア日本語教育・日本文化研究会国際学術大会、熊本、2019年8月
- 高橋圭子・東泉裕子(2018)、「「(さ)せていただく」の許容度と依頼表現の変化—アンケート調査による年齢層の比較から」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』10(2018)、45-53 頁
- 滝浦真人(2016)、「社会語用論」(加藤重広・滝浦真人『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房)、77-103 頁
- 米澤昌子(2001)、「待遇表現としての使役形を伴う受給補助詞—「～(さ)せていただく」の用法の考察を中心に」『同志社大学留学生別科紀要』1(2001)、105-117 頁
- 現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ) <https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/> (2020年4月1日閲覧)
- 文化庁(2007)、『敬語の指針』文化審議会答申<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_6/pdf/keigo_tousin.pdf> (2020年3月1日閲覧)
- 文化庁(2008)「平成19年度「国語に関する世論調査」について」<http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/h19> (2020年3月30日閲覧)

A Research on the Social Acceptance of 'sase-te-itadaku': Based on analysis of questionnaire survey result

SUN, Xiangyu

Abstract

In order to clarify the social acceptance for each usage of 'sase-te-itadaku', this research conducted a questionnaire survey of 82 people. As a result, expanded usage that declares unilateral behavior such as 'happyo-sase-te-itadaku' is more acceptable than basic usage that requires permission such as 'sensei-no-hon-wo-tsuka-wa-se-te-itada-ke-nai-desho-ka', and it was found that there was a change in the role of 'sase-te-itadaku'. It was also confirmed that younger people were more tolerant of expanded usage than middle-aged and older, and that women were more tolerant of basic usage than men. In contrast to the indication that "acceptance is affected by individual differences", the result of this survey confirmed that individual difference exists, but it is not so much as to affect the social acceptance.

Keywords : 'sase-te-itadaku', social acceptance, gender, age, individual difference

「～でも～でも」構文における日本語母語話者と中国人日本語学習者の許容傾向と選択傾向

崔 小萍（名古屋大学大学院生）

要旨

本稿では正誤判断テストによって「～でも～でも」構文の許容傾向を中心に、日本人母語話者と中国人日本語学習者を対象に考察した。また、比較するために、「～も～も」構文の許容傾向と崔（2020）における「～でも～でも」と「～も～も」の選択率も取り入れて一緒に論じた。その結果、日本人は崔（2020）で指摘している四つの特徴を持つ文には相対的に「～でも～でも」の許容度が高く、そうでない文は相対的に許容度が低くなることが分かった。一方、学習者は「～でも～でも」の言える・言えない判断をはっきり下すのが難しく、上述の四つの特徴に当てはまるものは全体的に「～でも～でも」を相対的に言いやすいが、そのうち「で」が「だ」の連用形として使われる「～でも～でも」に相対的に気付きにくい。また、場所名詞が反復して使用される場合、学習者は誤って場所をとりたてる「でも」と見なして、許容してしまうケースもある。

正誤判断テストにおける25例の課題文の中で、日本人は全体的に「～でも～でも」の許容度が高い場合には選択率も高く、低い場合には選択率も低くなる。学習者は「いつでもどこでも」のような定型表現の場合は許容度と選択率が揃って高かったが、そのほか許容度と選択率に差が出るケースが日本人より多く見られる。

キーワード： 「～でも～でも」、選択率、許容度、仮定的なニュアンス、極限

はじめに

中国人日本語学習者（以下「学習者」と呼ぶ）にとって「～でも～でも」構文と「～も～も」構文（以下「構文」は省略する）の区別は容易ではない。例えば、筆者の正誤判断テスト（○×テスト）において、例文1aが正しいと思う日本語母語話者（以下「日本人」と呼ぶ）は8.0%であったのに対し、学習者は80.0%で、例文1bが正しいと思う日本人は100%であったのに対し、学習者は81.0%であった。（調査の詳細は「Ⅱ．調査の概要」で述べる。）

- (1) a. 部屋中、台所でも廊下でも鳥の羽だらけだ。

（許容度：日 8.0%、学 80.0%）

- b. 部屋中、台所も廊下も鳥の羽だらけだ。

（許容度：日 100.0%、学 81.0%）

一方、例文 2a が正しいと思う日本人は 92.0%であったのに対し、学習者は 78.1%で、
例文 2b が正しいと思う日本人は 0.0%であったのに対し、学習者は 55.2%であった。

- (2) a. 同じ事件が東京でも大阪でもあった。

（許容度：日 92.0%、学 78.1%）

- b. 同じ事件が東京も大阪もあった。

（許容度：日 0.0%、学 55.2%）

ここでいう「許容度」とは○×の正誤判断テストで「○」（正）を選んだ人の割合を指す。以上のことから、日本人は例文 1 は「～も～も」の方が自然で、例文 2 は「～でも～でも」の方が自然であるという区別をはっきり示していることが分かる。これに対し、学習者は例文 1 では「～でも～でも」も「～も～も」も同じ 80%ほどの高い許容度を示しており、例文 2 では「～でも～でも」の許容度の方が 78.1%と高めであるが、「～も～も」も 55.2%の許容度を示しているというように、日本人のような区別は身に付いていないことが分かる。

そこで本稿では、アンケートによる正誤判断テストを利用して、全部で 25 例の場面における日本人と学習者の「～でも～でも」と「～も～も」の許容度及びそれぞれの選択率と比較することによって、日本人と学習者の「～でも～でも」の許容傾向を明らかにする。

I. 先行研究

庵他（2001：361-363）では、とりたて助詞「でも」は例文 3 のように「極限なものを取りたててその他の普通のものを暗示したい場合」や例文 4 のように既定の事実でないことの「意外さを表すこと」に用いられ、例文 5 のように「意外だということを強調するだけで、特に具体的に他のものが暗示されないような場合」には使えないと指摘されている。また、例文 4 のように既定の事実でないことの意外さを表すため、「でも」は依頼や勧誘の場合でも用いられるとされている。

- (3) この数学の問題は簡単なので小学生でも解けるだろう。（庵他 2001:361）

- (4) 飲んだことのない種類のお酒 {×さえ/○でも} 飲んでください。

（庵他 2001:363）

- (5) 犯人はけがをした被害者を見て時折うすら笑い {○さえ/×でも} 浮かべていたという。（庵他 2001:362）

また、庵他（2001:61-63）では、例文6のように「～でも～でも」は「どの例をとってみてもその種類に属するものは」という仮定的なニュアンスがあり、部分列挙で用いられると指摘されている。

- (6) 弁論大会には日本人学生でも留学生でも参加できた。（庵他 2001:63）

例文6で用いられる「でも」は「であっても」に由来する「でも」で、とりたて助詞の働きをするが、すべての「～でも～でも」が同じ性質を持っているとは限らない。例文7、8、9のような例文では、とりたて助詞の「でも」のみならず、手段格や原因格などの「で」＋「も」を組み合わせた「でも」の重複構造もみられる。

- (7) 電車でもバスでも行ける。
 （とりたて助詞「でも」、手段格の「で」＋も）
 (8) 木造のお寺は火事でも落雷でも焼かれる可能性がある。
 （とりたて助詞「でも」、原因格の「で」＋も）
 (9) 香川県の人はうどんが好きで、消費金額でも消費量でも全国で一番だ。
 （とりたて助詞「でも」、範囲格の「で」＋も）

そこで、本稿ではとりたて助詞の「でも」の重複構造だけでなく、「で」＋「も」の連語となる「でも」の重複構造も一緒にみることにする。

崔（2020）では、日本人33名と学習者39名を対象に、例文10のような問題を25問設定して、「～でも～でも」と「～も～も」の二者択一テストを行い、日本人と学習者の「～でも～でも」の選択傾向の違いについて分析している。

- (10) これは彼の長所（ ）短所（ ）ある。

その結果、日本人の「～でも～でも」の選択率が高い文には次の四つの特徴があることが指摘されている。（一つの文に複数の特徴が重なる場合もある。）

I 仮定的なニュアンスが含意される場合

- (11) 今回のイベントは先生でも学生でも参加できる。

II-1 「でも」の「で」が「だ」の連用形や格助詞の働きを持つ場合

- (12) この匂いは芳香剤でも香水でもない香りだ。

II-2 「A（ ）WH（ ）」の形で、後項に疑問詞の「何」が使用される場合

(13) 私は彼女のことが好きでも何でもない。

Ⅱ-3 「+（ ）－（ ）」の形で、前項と後項が反義・対義の関係にある場合

(14) 私たちは良い意味でも悪い意味でも大人になった。

このうち、例文 13 も 14 も複数の特徴が重なるタイプであり、例文 13 はⅡ-2 以外にⅡ-1 を、例文 14 はⅡ-3 以外にⅡ-1 の特徴を持つ。しかし、崔（2020）では、このような各特徴間の関係については書かれていない。そこで、本稿では「～でも～でも」を仮定的なニュアンスの有無によって、表 1 のように「Ⅰ 仮定」、「Ⅱ 非仮定」、仮定とも非仮定とも解釈できる「Ⅲ 二種解釈」の三つに分ける。表 1 の「WH」は後件 B が疑問詞であることを表し、「+でも－でも」は前件 A と後件 B が反義・対義関係にあることを表す。

表 1 日本人の「～でも～でも」の選択率が高い文の特徴

		A でも B でも	A でも WH でも	+でも－でも
Ⅰ 仮定	とりたて助詞「でも」	政治家でも教授でも分からない	ピザでも何でも作ってやれ	男でも女でもいい
Ⅱ 非仮定	ダの連用形「で」+「も」	政治家でも教授でもある	好きでも何でもない	男でも女でもない
Ⅲ 二種解釈	とりたて助詞「でも」	彼は家でも学校でも勉強している	彼は家でもどこでも勉強している	彼は家の中でも外でも勉強している
	格助詞の「で」+「も」			

ところで、崔（2020）は「～でも～でも」と「～も～も」の選択率については論じているが、それぞれの許容度については不明である。例えば、両者の選択率が 50% ずつとなった場合、両方とも同じぐらい言えるのか、両方とも同じぐらい不自然なのかということは分らない。そこで本稿では、日本人と学習者の「～でも～でも」と「～も～も」の許容度を調査し、またその選択率と比較しながら日本人と学習者の「～でも～でも」の許容傾向を明らかにする。

Ⅱ. 調査の概要

本稿では崔（2020）の二者択一テストで使われた 25 問を利用して、アンケートによる正誤判断テストを行った。調査の概要は次のとおりである。

【調査実施時間】2019 年 12 月 17-2020 年 2 月 8 日

【調査課題】崔（2020）の二者択一テスト 25 問をもとに、A のような「～でも～でも」の正誤判断テスト 25 問と B のような「～も～も」の正誤判断テスト 25 問を作り、言えると思えば○、言えないと思えば×を記入してもらった。

A：これは彼の長所でも短所でもある。 など 25 問

B：これは彼の長所も短所もある。 など 25 問

【調査協力者】日本人：A、B とも日本人大学生 50 名

(名古屋大学 26 名、愛知淑徳大学 24 名で実施)

学習者：A、B とも日本語能力試験 N1 合格の中国人日本語学習者 210 名

(大連理工大学 55 名、大連大学 2 名、大連外国語大学 24 名、揚州大学 24 名で実施)

【実施方法】日本人には紙媒体によるアンケートを実施し、学習者にはアンケート調査専門サイト“问卷星”(https://www.wjx.cn/)を利用して実施した。

Ⅲ. 日本人の「～でも～でも」の許容度

本稿でいう許容度は正誤判断テストで「○」を選んだ人の割合を指す。本節では日本人の「～でも～でも」の許容度と、「～でも～でも」と「～も～も」の二者択一テストにおける「～でも～でも」の選択率を比較して論じる。

1. 日本人の「～でも～でも」の許容度の特徴

まず、日本人の「～でも～でも」の許容度の特徴について分析する。Ⅱ節で述べたアンケートの結果を、日本人の「～でも～でも」の許容度が高い順に並べると表 2 のようになる。比較のため、日本人の「～も～も」の許容度も並べて示してある。() の中には、実際には「でも」または「も」が入る。このうち、崔 (2020) における日本人の「～でも～でも」の選択率の高い文の四つの特徴 (以下「四つの特徴」と呼ぶ) に当てはまるものを網かけで示す。

表 2 日本人の「～でも～でも」の許容度の降順 (%)

順位	課題文の番号・課題文		日本人	
			でも	も
1	7	私たちは良い意味 () 悪い意味 () 大人になった。	100.0	8.0
2	8	これは彼の長所 () 短所 () ある。	100.0	16.0
3	20	そんなことはニュース () 何 () ない。	100.0	8.0
4	5	この匂いは芳香剤 () 香水 () ない香りだ。	96.0	4.0
5	10	私は彼女のことが好き () 何 () ない。	96.0	4.0
6	14	スマホがあればいつ () どこ () 電話ができる。	96.0	0.0
7	12	同じ事件が東京 () 大阪 () あった。	92.0	0.0
8	13	今回のイベントは先生 () 学生 () 参加できる。	92.0	84.0
9	17	これぐらいの問題なら私 () 彼 () できる。	92.0	56.0
10	4	香川県の人はどうが好きで、消費金額 () 消費量 () 全国で一番だ。	88.0	96.0
11	24	どこの国 () 組織 () 強硬派は厄介である。	88.0	68.0
12	2	今回のイベントのことは先生 () 学生 () 知っている。	80.0	96.0
13	21	私は北海道へ三回 () 四回 () 行きたい。	80.0	16.0

42 「～でも～でも」構文における日本語母語話者と中国人日本語学習者の許容傾向と
選択傾向（論文）

14	23	明日の留学生バザーには、留学生（ ）日本人学生（ ）ぜひ来てください。	68.0	84.0
15	25	政治（ ）金（ ）ないおしゃべりをする。	60.0	36.0
16	18	このコンセントは炊飯器（ ）ラジオ（ ）接続できる。	52.0	92.0
17	9	私は顔（ ）体（ ）シャンプーで洗う。	16.0	100.0
18	6	何日（ ）何ヶ月（ ）かけて、馬を調教した。	12.0	84.0
19	15	この名前は読み方（ ）性別（ ）分かりやすい。	12.0	96.0
20	3	私は北海道へ三回（ ）四回（ ）行った。	8.0	40.0
21	16	広瀬姉妹は、姉（ ）妹（ ）美人だ。	8.0	100.0
22	22	部屋中、台所（ ）廊下（ ）鳥の羽だらけだ。	8.0	100.0
23	11	ここは心（ ）体（ ）リラックスできる場所だ。	4.0	100.0
24	19	彼がいなくなって、私は悲しさ（ ）寂しさ（ ）大きくなった。	4.0	84.0
25	1	引っ越しは時間（ ）手間（ ）かかる。	0.0	96.0

ここで四つの特徴に当てはまるものをみると、表1の上位16位までに集中していることが分かる。また、許容度が80%以上の課題文は13問（1位～13位）あるが、このうち12問が四つの特徴に当てはまる。これを表3に示し、表に示されている数字は課題文番号である。

表3 日本人の許容度が80%以上の課題文の特徴

		AでもBでも	AでもWHでも	+でもーでも
I 仮定	とりたて助詞「でも」	14、13、17、24、21		
II 非仮定	ダの連用形「で」+「も」	5	20、10	8
III 二種解釈	とりたて助詞「でも」	4	12	7
	格助詞の「で」+「も」			

そのほか、課題文2は四つの特徴を持っていないが、表2の通り「～でも～でも」も「～も～も」も高い許容度を持っている。これは「たとえ先生であっても」のように仮定的な意味で捉える場合は「～でも～でも」になり、そうでない場合は「～も～も」となるからである。ほかに「～でも～でも」も「～も～も」も高い許容度を持っている課題文13や4も同様である。

次に、日本人の「～でも～でも」の許容度が50～80%にある課題文23、25、18（14位～16位）をみる。このうち課題文23は四つの特徴に当てはまらず、「留学生バザー」に参加できる人として「留学生」と「日本人学生」以外の同類要素が考えにくい場合は「も」を、考えやすい場合は「でも」を選択していると考えられる。一方、課題文25は「で」が「だ」の連用形であるという特徴に当てはまり、「～も～も」の許容度が36.0%なのに比べれば、「～でも～でも」の許容度は60.0%であり、相対的に高い。しかし、これ以上理解を助ける文脈がないため、許容度は中程度になっていると考えられる。また、課題文18

は仮定的なニュアンスの特徴に当てはまる。しかし、「～でも～でも」と「～も～も」の二者択一で答えさせると、仮定的なニュアンスの影響で「～でも～でも」の選択率が高くなるが、「でも」だけをみると「にも」のほうがより適切だと捉えやすいため、「～でも～でも」の許容度は52.0%にとどまると考えられる。

最後に、日本人の「～でも～でも」の許容度が20%以下の課題文（17位～25位）をみる。これらの課題文は、四つの特徴に当てはまらず、「～でも～でも」の容認度も選択率も低いものである。

以上日本人の「～でも～でも」の許容度の特徴をまとめると、四つの特徴を持つ文は相対的に許容度が高く、そうでない文は相対的に許容度が低いことが明らかになった。しかし、中には許容度と選択率の間に大きな差がある場合もある。次にこの点についてみていく。

2. 日本人の「～でも～でも」の許容度と選択率の比較

次に、日本人の「～でも～でも」の許容度と選択率のデータを点でプロットした散布図を図1に示す。横軸の数字はアンケート調査の課題文の番号で、縦軸は許容度と選択率のパーセンテージを示す。区別できるように、許容度は菱形で、選択率は選択率で示す¹⁾。

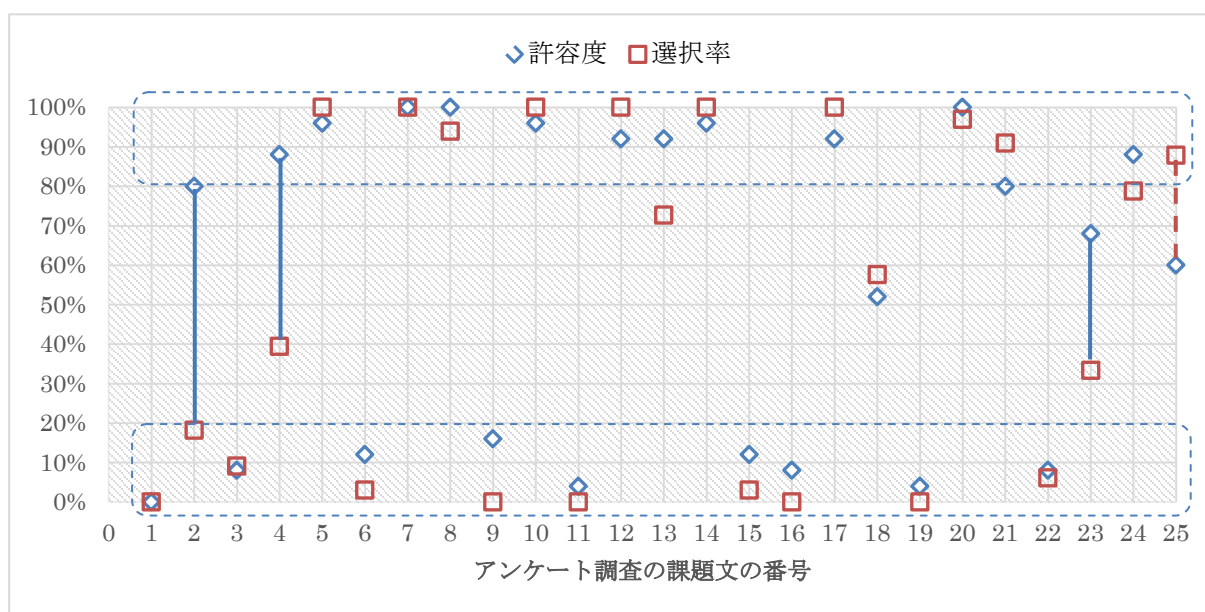


図1 日本人の「～でも～でも」の許容度と選択率の対応関係

ここで許容度－選択率 ≥ 20 ポイントの場合は実線で、選択率－許容度 ≥ 20 ポイントの場合は点線で繋いである。上の点線の四角で囲ったグループは許容度も選択率も80%以上のもので、下の点線の四角で囲ったグループは許容度も選択率も20%以下のものである。

図1をみると、日本人は全体的に許容度が高い場合には選択率も高く、許容度が低い場

合には選択率も低くなることが分かる。また上の四角にある9組は全て四つの特徴を持っており、下の四角の9組は全てその特徴を持っていない。

一方、課題文2、4、23、25のように許容度と選択率の差が20ポイント以上の課題文もみられる。そこで、許容度と選択率の開きについてみていく。

まずは「～でも～でも」の許容度は高いのに、選択率は低い場合をみる。このうち、差が20ポイント以上のものは課題文2、23、4の3問である。

- (15) 今回のイベントのことは先生でも学生でも知っている。

（日本人の許容度：80.0%、選択率：18.2%）（課題文2）

- (16) 明日の留学生バザーには、留学生でも日本人学生でもぜひ来てください。

（日本人の許容度：68.0%、選択率：33.3%）（課題文23）

- (17) 香川県の人はうどんが好きで、消費金額でも消費量でも全国で一番だ。

（日本人の許容度：88.0%、選択率：39.4%）（課題文4）

課題文2と23（例文15、16）は「普段のイベントは先生も学生も知らない」、「普段のバザーには留学生や日本人学生が来ない」などの場面を思い浮かべれば、これらの人は当該事態の成立において非典型的な人物（極端例）となり、「たとえそのような人であっても」という仮定的なニュアンスで読もうと思えば読める。そのため、「～でも～でも」の許容度が比較的高くなっている。しかし、そのような仮定的な場面は通常読み取りにくいいため、「～でも～でも」と「～も～も」のどちらか一つを選択する場合は、仮定的ニュアンスのない「～も～も」の方が選択されやすいのである。一方、課題文4（例文17）では、「消費金額」と「消費量」がどこかの県の人のうどん好きの理由としては、比較的に思い浮かべやすいことである。しかし、「消費金額」と「消費量」が対比的に捉えようと思えば捉えられるが、同類のものとして捉えるイメージの方が強いため、日本人の「～も～も」の選択率が「～でも～でも」より高くなる。

次に「～でも～でも」の許容度が低く、選択率が高い場合をみる。このうち、差が20ポイント以上のものは課題文25（例文18）である。

- (18) 政治でも金でもないおしゃべりをする。（課題文25）

（日本人の許容度：60.0%、選択率：87.9%）

課題文25（例文18）の「～でも～でも」の許容度は60.0%で、課題文全体の中で低くはないが、選択率の87.9%と比べると低くなっている。課題文25は「政治がないおしゃべり、金がないおしゃべり」は不自然であるのに対し、「政治（に關すること）ではないおしゃべり、金（に關すること）ではないおしゃべり」は多少不自然ながらも前者に比べれ

ば自然なので、「も」でとりたてる場合に、敢えてどちらかを選ぶとすれば「～でも～でも」を選択しやすいのだと思われる。

以上日本人の「～でも～でも」の許容度と選択率の比較をまとめると、日本人の「～でも～でも」は全体的に許容度が高い場合には選択率も高く、許容度が低い場合には選択率も低くなっていることが分かる。しかし、許容度と選択率の間に差も存在する。その理由としては、①とりたてられる要素を対比的に捉えるか、同類的に捉えるか、②文を仮定的なニュアンスを読み込めるか否か、③文の意味を理解するのに必要な文脈があるかどうかの三つが考えられる。

Ⅳ. 学習者の「～でも～でも」の許容度と選択率

本節では学習者の「～でも～でも」の許容度と、崔（2020）の「～でも～でも」と「～も～も」の二者択一テストにおける「～でも～でも」の選択率と比較して論じる。

1. 学習者の「～でも～でも」の許容度の特徴

まず、学習者の「～でも～でも」の許容度の特徴について分析する。Ⅱ節で述べたアンケートの結果を、学習者の「～でも～でも」の許容度が高い順に並べると表4のようになる。比較のため、学習者の「～も～も」の許容度も並べて示してある。（ ）の中には、実際には「でも」または「も」が入る。このうち、四つの特徴に当てはまるものを網かけで示す。

表4 学習者の「～でも～でも」の許容度の降順（％）

順位	課題文の番号・課題文		学習者	
			でも	も
1	14	スマホがあればいつ（ ）どこ（ ）電話ができる。	91.4	38.1
2	22	部屋中、台所（ ）廊下（ ）鳥の羽だらけだ。	80.0	81.0
3	12	同じ事件が東京（ ）大阪（ ）あった。	78.1	55.2
4	4	香川県の人のはうどんが好きで、消費金額（ ）消費量（ ）全国で一番だ。	76.2	88.6
5	24	どこの国（ ）組織（ ）強硬派は厄介である。	76.2	42.9
6	18	このコンセントは炊飯器（ ）ラジオ（ ）接続できる	75.2	71.4
7	20	そんなことはニュース（ ）何（ ）ない。	73.3	46.7
8	13	今回のイベントは先生（ ）学生（ ）参加できる。	70.5	81.0
9	7	私たちは良い意味（ ）悪い意味（ ）大人になった。	68.6	40.0
10	2	今回のイベントのことは先生（ ）学生（ ）知っている。	66.7	81.9
11	11	ここは心（ ）体（ ）リラックスできる場所だ。	65.7	92.4
12	5	この匂いは芳香剤（ ）香水（ ）ない香りだ。	64.8	50.5
13	10	私は彼女のことが好き（ ）何（ ）ない。	64.8	43.8
14	17	これぐらいの問題なら私（ ）彼（ ）できる。	61.9	58.1
15	8	これは彼の長所（ ）短所（ ）ある。	61.0	43.8

16	25	政治（ ）金（ ）ないおしゃべりをする。	59.0	49.5
17	6	何日（ ）何ヶ月（ ）かけて、馬を調教した。	56.2	65.7
18	15	この名前は読み方（ ）性別（ ）分かりやすい。	52.4	64.8
19	23	明日の留学生バザーには、留学生（ ）日本人学生（ ）ぜひ来てください。	49.5	63.8
20	9	私は顔（ ）体（ ）シャンプーで洗う。	44.8	75.2
21	16	広瀬姉妹は、姉（ ）妹（ ）美人だ。	43.8	86.7
22	1	引っ越しは時間（ ）手間（ ）かかる。	43.8	86.7
23	21	私は北海道へ三回（ ）四回（ ）行きたい。	35.2	38.1
24	19	彼がいなくなって、私は悲しさ（ ）寂しさ（ ）大きくなった。	31.4	66.7
25	3	私は北海道へ三回（ ）四回（ ）行った。	21.0	30.5

ここで四つの特徴に当てはまるもの（網掛け部分）をみると、課題文 21 は 35.2%と低いが、それ以外は 59.0%以上となっており、相対的に高めの傾向が示されている。ただし、日本人は 80%以上の許容度を示したものが 13 例あったのに対し、学習者は 2 例しかないという違いがある。崔（2020）の選択率の調査では、学習者は日本人のような感覚を身に付けていないことが指摘されているが、今回の許容度の調査では、学習者は日本人ほど許容度判断が強くないものの、四つの特徴に当てはまるものは相対的に言いやすいという判断ができるということが明らかになった。しかし、「～も～も」の許容度も日本人に比べて高いため、「～でも～でも」と「～も～も」の二者択一になると判断に迷うのである。

一方、表 2 と表 4 をみて、「で」が「だ」の連用形で用いられる課題文（課題文番号 8、20、5、10、25）は表 2 で高めの容認度が示されているのに対し、表 4 で全体のパーセンテージが落ちている。よって、学習者は「で」が「だ」の連用形として使われる「～でも～でも」に気付きにくいことが分かる。

また、学習者の許容度が 80%以上の課題文は 14 と 22 の 2 問のみである。課題文 14 は「いつでもどこでも」のような「WH でも WH でも」の形である。課題文 22 は本稿の冒頭の例文 1 で、学習者の「～でも～でも」の許容度は 80.0%であるのに対し、日本人はわずか 8.0%である。この場合、「* {台所/廊下} で鳥の羽だらけだ」は非文であるため日本人は「場所格で+も」も、仮定的なニュアンスもないため「であつても」の縮約の「でも」も選択しにくい。しかし、「台所」も「廊下」も場所を表す名詞であるため、学習者は誤って場所格の「で」のつもりで許容した可能性が考えられる。

一方、学習者の「～でも～でも」の許容度が 50～80%にある課題文（3 位～18 位）をみると、16 問のうち 12 問は四つの特徴に当てはまり、全体的に日本人ほどはっきりしていないが、ある程度高い許容度を示していることが分かる。一方、四つの特徴を持っていない課題文は 11、15、6（例文 19、20、21）であり、いずれも日本人とは異なる許容傾向を示している。

(19) ここは心でも体でもリラックスできる場所だ。（課題文 11）

(許容度：日 4.0%、学 65.7%)

- (20) この名前は読み方でも性別でも分かりやすい。(課題文 15)

(許容度：日 12.0%、学 52.4%)

- (21) 何日でも何ヶ月でもかけて、馬を調教した。(課題文 6)

(許容度：日 12.0%、学 56.2%)

これらは3問とも日本人の「～でも～でも」の許容度は12%以下と低く、学習者の許容度は50%以上ある。学習者は教科書で「この問題は小学生でも解ける」のような単独の「でも」の場合、極限的なものを列挙する用法を学習すると、「でも」の重複構造にも極限的な意味に最初に反応する可能性がある。ここで課題文11(例文19)を二つの文に分けてみると、「ここは{心/体} でもリラックスできる場所だ」で「心」と「体」は極限的な例示として挙げられる意味で捉えられ、学習者の許容度は65.7%と中程度に高くなる。また、課題文15(例文20)も同じく単独の「でも」で考えると、「この名前は{読み方/性別} でも分かりやすい」になり、「読み方」と「性別」は極限的なものの列挙で読み込められるため、許容度が高くなる。課題文6(例文21)の場合は文を分けて「{何日/何ヶ月} でもかけて」になり、これも極限的な意味で捉えられるため、学習者の「～でも～でも」の許容度が50%以上になる。

最後に、学習者の「～でも～でも」の許容度が20%以下の課題文がなく、課題文3(例文22)は最低で、21%である。学習者は課題文3において、「～でも～でも」も「～も～も」も低めの許容度であり、日本人と似た傾向をみせている。ただし、日本人ほどは「～でも～でも」と「～も～も」の差がなく、両者の区別がついていないことが分かる。

- (22) 私は北海道へ三回() 四回() 行った。(課題文 3)

(「でも」の許容度：日 8.0%、学 21.0%)

(「も」の許容度：日 40.0%、学 30.5%)

- (23) 私は北海道へ三回() 四回() 行きたい。(課題文 21)

(「でも」の許容度：日 80.0%、学 35.2%)

(「も」の許容度：日 16.0%、学 38.1%)

また、課題文3と似ているが、述語部分が異なる課題文21(例文23)において、学習者の「～でも～でも」と「～も～も」は許容度が30%台と低めである。この場合、日本人は仮定的なニュアンスを持つ「行きたい」のある場合には「～でも～でも」を選択しやすいのに対し、学習者は「行った」と「行きたい」の違いによって仮定的なニュアンスを読み分けられず、「～でも～でも」を選択しにくい結果となっている。

以上、学習者の「～でも～でも」の許容度の特徴をまとめると、四つの特徴に当てはま

る課題文は相対的に許容しやすいものの、全体的に日本人ほど顕著に許容度が高いわけではない。また、四つの特徴に当てはまらない課題文でも許容しやすいものがある。これは学習者が仮定的なニュアンスより極限的なものの列挙の意味で捉える人がいるため、「～でも～でも」の許容度が高くなると考えられる。

2. 学習者の「～でも～でも」の許容度と選択率の比較

次に、Ⅲ-2 節と同様に、学習者の「～でも～でも」の許容度と選択率のデータを点でプロットした散布図を図2に示す。

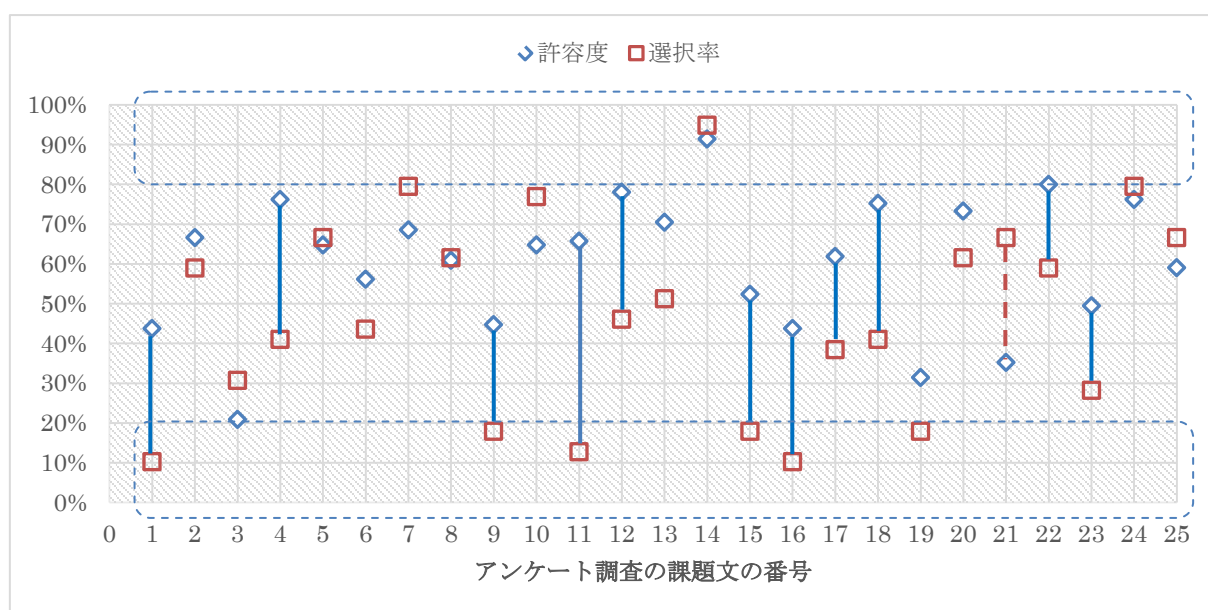


図2 学習者の「～でも～でも」の許容度と選択率の対応関係

図2をみると、学習者は日本人に比べ、全体的に許容度も選択率も80%以上のものや20%以下のものが少なく、真中に点在している。また、許容度も選択率も80%以上あるのは課題文14のみで、それは「いつでもどこでも」のような定型表現であることが分かる。一方、許容度と選択率がそろって20%以下である課題文はなかった。このことから、本稿で調査した25の課題文をみる限り、学習者は日本人に比べて「～でも～でも」が使える・使えないという判断がかなり弱いことが分かる。それに、同じ課題文に対して、学習者の許容度と選択率に開きが多く存在することが分かる。次はその開きについてみていく。

まずは学習者の「～でも～でも」の許容度が高く、選択率が低い場合をみる。許容度と選択率の差が20ポイント以上の課題文は日本人の課題文2、23、4の3問だったのに対し、学習者は11問と多かった。このことは、学習者は「～でも～でも」が使えるそうと思って、「～も～も」と二者択一で選択させると、「～も～も」を選択しやすいことを示しており、学習者は「～でも～でも」より「～も～も」の使用に偏っていることが分かる。11問

の中で、もっとも差が大きい課題文 11（例文 24）では、学習者の許容度は 65.7%で、日本人の 4%と大きな開きがある。

(24) ここは心でも体でもリラックスできる場所だ。（課題文 11）（例文 19 再掲）

（日本人の許容度： 4.0%、選択率： 0.0%）

（学習者の許容度： 65.7%、選択率： 12.8%）

課題文 11 では仮定的意味も「だ」や格助詞「で」も使えなく、四つの特徴に当てはまらないため、日本人にとっては「～でも～でも」のイメージがない。一方、前述のように学習者は「～でも～でも」で極限的なものの列挙で読み込めるため、日本人に比べて「～でも～でも」の許容度が中程度に高くなる。しかし、「～でも～でも」も「～も～も」も学習者の母語である中国語の“都”で訳せるが、「～も～も」のほうがより“都”のイメージが強いため、「～も～も」の許容度の方が高くなっているのではないかと考えられる。

課題文 11 のほか、課題文 4、15、18、16、1、12、9、17、23、22 の 10 問も許容度と選択率が 20 ポイント以上の開きがみられる。このうち、課題文 4（例文 25）では、学習者は日本人と似たような許容傾向と選択傾向を示している。しかし、前述の通り、課題文 4 は「でも」が一つのとりたて助詞としても捉えられるし、「で」+「も」の連語としても捉えられる。日本人は「消費金額」と「消費量」を同類のものとして捉えるイメージが強いため、「～も～も」の選択率が高くなるが、学習者も日本人に近い感覚で、「～も～も」を多く選択したと考えられる。

(25) 香川県の人はうどんが好きで、消費金額でも消費量でも全国で一番だ。

（課題文 4）（例文 17 再掲）

（日本人の許容度： 88.0%、選択率： 39.4%）

（学習者の許容度： 76.2%、選択率： 41.0%）

一方、課題文 15（例文 26）では、学習者の選択率は日本人と同様に低い、許容度は 52.4%で、中程度に高くなっている。これも学習者は単独の「でも」の極限のものを取り立てるという意味を過剰使用してしまったことが原因だと考えられる。課題文 15 には「名前」と「性別」の両方が取り上げられており、学習者は両者を対照的な極限として捉えた可能性がある。しかし、「読み方」と「性別」は対照的な関係より、同類的な関係に捉えやすいため、「～でも～でも」と「～も～も」の二者択一をすると「～も～も」が選択されると考えられる。

(26) この名前は読み方でも性別でも分かりやすい。（課題文 15）（例文 20 再掲）

（日本人の許容度：12.0%、選択率：3.0%）

（学習者の許容度：52.4%、選択率：18.0%）

次に「～でも～でも」の許容度が低く、選択率が高い場合をみる。このうち、差が20ポイント以上のものは課題文21（例文27）である。課題文21では学習者の「でも」の許容度は35.2%、「も」の許容度も38.1%で、どちらの許容度もあまり高くない。しかし、選択率の場合、「でも」と「も」の間で必ず一つ選ばなければならない。この場合、「～でも～でも」の許容度も「～も～も」の許容度もほぼ同じであるため、「～でも～でも」の選択率は50%ほどになってもよさそうである。しかし、実際には「～でも～でも」の選択率は66.7%で「～も～も」の2倍になっている。これは学習者が「助数詞＋も、助数詞＋も」より「助数詞＋でも、助数詞＋でも」のほうが強く部分列挙の意味を感じていることを示している。とはいえ、日本人ほど「～でも～でも」の許容度や選択率は高くない。課題文21は他の「～でも～でも」とは異なるタイプであると思われるが、これについては今後の研究課題とする。

（27） 私は北海道へ三回でも四回でも行きたい。（課題文21）

（日本人の許容度：80.0%、選択率：90.9%）

（学習者の許容度：35.2%、選択率：66.7%）

以上、学習者の「～でも～でも」の許容度と選択率をまとめると、学習者の「～でも～でも」は全体的に言える・言えないの判断をはっきり下すのが難しいことが分かる。また、許容度と選択率の間に日本人より差が大きい課題文が多く、その原因について単独のとりたて助詞「でも」の持つ「極限なものを取りたてる」という意味の過剰適用という観点から考察した。

おわりに

本稿では下記のような崔（2020）の四つの特徴を踏まえて、日本人と学習者の「～でも～でも」の許容度を中心に選択率と比較しながら論じてきた。

I 仮定的なニュアンスが含意される場合

II-1 「でも」の「で」が「だ」の連用形や格助詞の働きを持つ場合

II-2 「A（ ）WH（ ）」の形で、後項に疑問詞の「何」が使用される場合

II-3 「+（ ）－（ ）」の形で、前項と後項が反義・対義の関係にある場合

以下、本稿の議論をまとめておく。

日本人の「～でも～でも」の特徴

① 許容度の特徴

四つの特徴を持つ文は許容度が高く、このうち特に仮定的なニュアンスを読み込みやすい場合は相対的に許容度が高く、そうでない文は相対的に許容度が低くなることが分かった。

② 許容度と選択率の関係

日本人の「～でも～でも」は全体的に許容度が高い場合には選択率も高く、許容度が低い場合には選択率も低くなっている。ただし、仮定的なニュアンスがあり、とりたてられる要素を同類として捉えられる場合、許容度は高いが選択率は低くなる。

学習者の「～でも～でも」の特徴

① 許容度の特徴

全体的に学習者は日本人に比べて「～でも～でも」の言える・言えないの判断をはっきり下すのが難しい。四つの特徴に当てはまるものは相対的に「～でも～でも」の許容度が高いが、「で」が「だ」の連用形として使われる「～でも～でも」に相対的に気付きにくい。一方、場所名詞が反復して使用される場合に、誤って場所格として「でも」を許容したケースが見られる。また、単独のとりたて助詞「でも」の極限的なものを列挙する用法を過剰適用した場合、学習者は四つの特徴に当てはまらない課題文も許容しやすいものがある。

② 許容度と選択率の関係

学習者は25例の課題文の中で、「いつでもどこでも」のような定型表現の場合は、許容度と選択率が揃って高いパーセンテージを示しているが、それ以外の場合は全体的に日本人に比べて許容度と選択率の開きが大きくなっている。学習者は極限的な列挙を意識しながら、とりたてられる要素を対照的なものとしてより同類のものとして捉えやすい場合は、許容度が高く選択率が低くなる。一方、課題文21は「～でも～でも」の許容度は低い、選択率は高くなっている。これは「助数詞＋でも、助数詞＋でも」のような特別な形では、学習者はとりたてられる並列的な要素に部分列挙を感じて、仮定的な意味がなくても「～も～も」よりは「～でも～でも」を選択したのではないかと考えられる。

本稿では日本人と学習者の「～でも～でも」の許容傾向と選択傾向を中心に考察したが、紙幅の関係で次の点については考察できなかった。

①日本人と学習者の許容度の比較

②日本人と学習者の「～も～も」の許容度と選択率

③「助数詞＋でも、助数詞＋でも」や「疑問詞＋でも、疑問詞＋でも」などの特別な「でも」の重複構造の許容度と選択率

また、学習者の母語である中国語では「～でも～でも」と「～も～も」のどちらも“都”で表現することができ、「～でも～でも」は“无论～还～都”のような条件表現でも表現できる。そのため、学習者の許容度や選択率には母語の影響もあると考えられるが、これについても踏み込んで議論することができなかった。今後はこれらの点についても分析することにより、日本語教育の観点から学習者の「～でも～でも」や「～も～も」の使用について明らかにしていきたい。

注

- 1) 図1と図2は、許容度と選択率の数字を入れると図が見にくくなるため数字を入れなかった。具体的な数字は表2および表4に示してある。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（2001）、『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。
- 崔小萍（2020）、「日本語の「～でも～でも」構文と「～も～も」構文の選択—日本人母語話者と中国人学習者の比較」『東アジア日本学研究』第3号、95-103頁。
- 沼田善子（2009）、『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房。

The Tolerance Tendency and Choice Tendency of Japanese Native Speakers and Chinese Learners of Japanese in the Constructions of "...demo...demo"

CUI, Xiaoping

Abstract

This essay mainly focuses on the tolerance tendency of the construction "...demo...demo" via True-or-False Test among Japanese native speakers and Chinese learners of Japanese. It also combines the tolerance tendency of the construction "...mo...mo" and discusses the selection rate between the constructions "...demo...demo" and "...mo...mo" as stated in Cui (2020) for comparison. The results turn out that Japanese native speakers have higher tolerance towards example sentences with the four characteristics as referred in Cui (2020) and lower tolerance to example sentences without those four characteristics. However, Japanese learners have tentative notions about the true or false judgement of the construction "...demo...demo". In terms of example sentences with the

four characteristics as mentioned above, although they have high tolerance as a whole, Japanese learners are insensitive to “de”, which is the continuous form of “da” in the construction “...demo...demo”. In addition, on condition that nouns for places are used repeatedly, Japanese learners might regard it as to emphasize the places and use “demo” by mistake.

In the 25-sentence true or false test, the tolerance to the construction “...demo...demo” is proportional to the selection rate among Japanese native speakers, whereas such case only exists in the fixed construction “itsu demo doko demo” among Japanese learners. In the other examples, there are more gaps between their tendency and selection rate.

Keywords : “...demo...demo”, Selection rate, Tolerance, Subjunctive mood, Limitation

感情形容詞の副詞的用法における感情主の日中対照研究

王 雲姣（名古屋大学大学院生）

要旨

本稿では、日本語と中国語の感情形容詞の副詞的用法を感情主の違いという視点から再分類を行った。その結果、日本語の場合は大きく分けて「登場人物認識」と「話者認識」の2種類があり、「登場人物認識」にはさらに「動作主認識」と「受け手認識」という2つの下位分類があることを明らかにした。

それに対して、中国語の場合も「登場人物認識」と「話者認識」に二分することができるが、「登場人物認識」においては日本語と違い、「動作主認識」のみがあり、「受け手認識」は存在しないことを明らかにした。

また、本研究で提出した「受け手認識」の文における各文成分の特徴について考察した。その結果、ガ格は無情物を表す名詞、ニ格は有情者か有情者の身体部位、述語動詞は移動を表す動詞であるという特徴があることを指摘した。今後さらなる考察によってなぜこうした特徴があるのかについて探っていきたい。

キーワード： 感情形容詞、副詞的用法、感情主、受け手認識、日中対照研究

はじめに

本研究は、感情形容詞の副詞的用法の分類を再検討するものである。感情形容詞の副詞的用法とは、感情形容詞が動詞を修飾する用法のことである¹⁾。従来の研究では、日本語の感情形容詞の副詞的用法を「動作主認識」と「話者認識」の2種類に分けている。このうち「動作主認識」とは、述語動詞が表す動作が行われているときの動作主の感情を表す用法である。例えば、次の(1)は動作主「花子」が「読む」という動作の最中に「うれしい」と感じたことを表している。

(1) 花子は、太郎からの手紙をうれしく読んだ。(村上 2017:209)

それに対して、「話者認識」とは、述語動詞が表す出来事が話者に感じさせる様子を表す場合をさしている。例えば、次の(2)は「寂しい」が「スズムシの音」の感情を表すとは考えられず、話者に感じさせる「スズムシの音の響き方」という様子を表している。

(2) (略) スズムシの音が寂しく響いた。(村上 2017:214)

しかしながら、以下の (3) ～ (6) の波線部のように「動作主認識」と「話者認識」のどちらにも属さず、二格名詞か二格名詞の所有者の感情を表す文も見られる。

(3) その話が彼に羨ましく響いた。

(4) その景色が彼女には恨めしく映った。

(5) その話が彼の心に羨ましく響いた。

(6) その景色が彼女の目には恨めしく映った。

(3) は「その話」がガ格名詞の「その話」ではなく二格名詞の「彼」に「羨ましく」感じさせることを表している。(4) も同じく、「その景色」が二格名詞の「彼女」に「恨めしく」感じさせることを表している。

また、(5) は「羨ましい」と思うのは「彼」であり、(6) は「恨めしい」と思うのは「彼女」である。この場合、二格名詞である「彼の心」の所有者である「彼」、「彼女の目」の所有者である「彼女」の感情を表している。

このように、日本語の感情形容詞の副詞的用法には「動作主認識」と「話者認識」のほかに「受け手認識」も存在する。

さらに、中国語の感情形容詞の副詞的用法については、先行研究では次の (7) のような「動作主認識」の用法を対象に考察を行っているが、(8) のような「話者認識」の用法に言及したものは管見の限り見られない。このように、中国語の場合も「話者認識」も存在する。(日本語訳は筆者による。以下同様)

(7) 女作家就很高興地背着手风琴，和兵们一起去参加团里的歌咏比赛。(卢 2002:34)

(女性作家はとてもうれしそうに (直訳: うれしく) アコーディオンを背負って、兵士たちと一緒に軍団の主催した歌唱コンクールに参加しに行く。)

(8) 五星红旗在赛场上升起，国歌在激昂地奏响。(杜鹏程 《保卫延安》)

(五星紅旗が競技場で揚がり、国歌が感情が高ぶるように響いている。)

一方で、次のように中国語の感情形容詞の副詞的用法においては、日本語のそれとは異なり「受け手認識」が存在しない。

(9) その話が彼に羨ましく響いた。(=3)

(9') *那句话在他羡慕地回响。

(9'') 听到那句话, 他感到很羡慕。(その話を聞いて、彼は羨ましく感じた。)

(10) その景色が彼女の目には恨めしく映った。(=6)

(10') ??那景色哀怨地映入她的眼眸。

(10'') 看到那景色, 她感到无比哀怨。(その景色を見て、彼女は恨めしく感じた。)

本稿では、日中両言語の感情形容詞の副詞的用法における感情主を分析し、共通点と相違点を明らかにする。分析においては、Ⅱ・Ⅲ章で示すようなテストフォームを用いる。

I. 先行研究

1. 日本語の感情形容詞の感情主に関する先行研究

新川 (1979) は次の例を挙げ、感情形容詞の副詞的用法を「心理的な側面」の「感情・気分」というタイプとして取り上げている。

(11) いつまでもないている猫の声をさびしくききながら、(略)。(新川 1979:180)

(12) 私は心ぼそくかまぼこをかんでいた。(新川 1979:180)

その後、加藤 (2000) は感情形容詞の副詞的用法の「主な機能」として、(13) のような「表現主体の心情・感覚を表す」と (14) のような「動作や動き評価」を挙げている²⁾。(13) (14) はそれぞれの例である。

(13) そこで、友人の手からピンクの錠剤を有難くいただき、(略)。(加藤 2000:76)

(14) プールの水が不気味に波打っているのが手に取るように分る。(加藤 2000:78)

ドラガナ (2005) では、次の (15) は「述語動詞の行われ方を話者の評価を伴いながら記述して」いるもので、「主観的評価の主体が『話者』」であるのに対し、(16) は「動作主が動作の実現中に思った・感じたこと」について述べており、「主観的評価の主体が『動作主』」であるとしている。このうち、後者を「動作主認識の副詞的成分」と呼んでいる。

(15) 上田さんは何気ないことを無茶苦茶面白く話す。(ドラガナ 2005:213)

(16) 田中さんは報告書を面白く読んだ。(ドラガナ 2005:213)

費 (2013) はドラガナを倣い、日本語の感情形容詞の副詞的用法を「主体指向」と「話し手の評価指向」に分け、次のテストフォームで置き換えられるものを「主体指向」であるとしている。(17) は「主体指向」、(18) は「話し手の評価指向」の例である。

N ガ + A ク + V

⇒ N ガ + A イ X デ + V

(X=気持ち) ³⁾

(17) 次の年の私は…庭の木の葉が散っていくのを悲しく眺めていた。

⇒私は悲しい気持ちで庭の木の葉が散っていくのを眺めていた。(費 2013:177)

(18) 千曲川は寂しくその間を流れるのであった。(費 2013:189)

⇒*千曲川は寂しい気持ちでその間を流れるのであった。(費 2013 には非文の例は載っていないため、本稿で付け加えたものである。)

また、村上 (2017) もドラガナ (2005) に倣い、(19) のように、動作主である「花子」が「手紙を読む」という動作の最中に「うれしい」と感じたことを表す用法、即ち、述語動詞が表す動作が行われているときの動作主の感情を表すものを「動作主認識の副詞的成分」と呼び、(20) のように、述語動詞が表す出来事が話者に「寂しい」と感じさせる様子であることを表すものを「話者認識の副詞的成分」と呼んでいる。

(19) 花子は、太郎からの手紙をうれしく読んだ。(=1)

(20) (略) スズムシの音が寂しく響いた。(=2)

以上のように、先行研究は基本的に村上 (2017) と同じく、日本語の感情形容詞の副詞的用法を、感情主の視点から「動作主認識」と「話者認識」の2つのタイプに分けている。

しかしながら、先の (3) ~ (6) は「動作主認識」にも「話者認識」にも属せず、二格名詞か二格名詞の所有者の感情を表す場合である。そのため、村上 (2017) の分類はそのような場合について見逃されていると考えられる。本稿では、この場合についても視野に入れて、感情形容詞の副詞的用法の分類を再検討する。

2. 中国語の感情形容詞の感情主に関する先行研究

卢 (2002) では、感情主がどのような意味役割を担うかではなく、どのような文成分に立つかという視点から考察しており、感情主が主語の場合、主語の連体修飾語の場合、兼語の場合の3つに分けている。例えば、(21) で“高兴 (うれしい)”と感じたのは主語の“女作家 (女性作家)”であり、(22) で“惊奇 (驚く)”と感じたのは主語である“眼睛 (目)”の連体修飾語である“她 (彼女)”である。また、(23) で“欢乐 (楽しい)”と感じたのは前の動詞“让 (させる)”の目的語でもあり、後の動詞“会餐 (会食する)”の主語でもある兼語の“我们 (私たち)”である。

(21) 女作家高兴地背着手风琴。(卢 2002:39)

(女性作家はうれしそうに (直訳: うれしく) アコーディオンを背負っている。)

(22) 她的忧郁的眼睛惊奇地盯着他 (略)。(卢 2002:39)

(彼女の憂鬱な目が驚いたように (直訳: 驚いて) 彼を見つめている。)

(23) 我去菜场买菜, 今晚让我们欢乐地会一次餐。(卢 2002:39)

(私は市場に食料を買いに行き、今晚私たちに楽しく会食させてもらおう。)

このように、卢 (2002) は感情主がどのような文成分に立つかという視点から分析を行っているが、感情主の意味役割の視点から分類しなおすと、いずれも「動作主認識」となる。しかし、以下の (24) のように、中国語の感情形容詞の副詞的用法には「話者認識」も存在すると思われる。

(24) 五星红旗在赛场上升起, 国歌在激昂地奏响。(=8)

(五星紅旗が競技場で揚がり、国歌が感情が高ぶるように響いている。)

その一方で、先の (9) (10) のように、日本語と違い、中国語の場合は「受け手認識」が存在しない。これらのことを踏まえ、次に先行研究の問題点を整理する。

3. 先行研究の問題点

ここまでは日中両言語の感情形容詞の副詞的用法に関する先行研究を見てきたが、いくつかの問題点があると思われる。

第一に、日本語の感情形容詞の副詞的用法について、従来の下位分類には不十分な点があると思われる。実際の例文から分析すると、「動作主認識」と「話者認識」だけでなく、受け手の認識を表すものも見られる。

第二に、中国語の感情形容詞の副詞的用法について、先行研究では「話者認識」には言及していない。

第三に、両言語とも、感情形容詞の副詞的用法に関する研究はあるが、対照研究を行ったものは管見の限り見られない。

以上の問題点を解決するために、本稿では、日中感情形容詞の副詞的用法における感情主の分類を再検討し、共通点と相違点を明らかにする。これにより、日本語には中国語にない「受け手認識」の用法があり、中国語にも「話者認識」も存在するという特徴が明確になる。以下、先行研究の問題点をふまえた上で、Ⅱ章では日本語について再検討し、Ⅲ章では中国語について再検討しながら日中対照を行う。

Ⅱ. 日本語の感情形容詞の副詞的用法における感情主の再分類

まず、日本語の場合について考察を行う。先に結論を述べておくが、本稿では、図1のように、日本語の感情形容詞の副詞的用法を感情主が登場人物か話し手（書き手）かを基準に、大きく分けて「登場人物認識」と「話者認識」に二分する。また、前者を「動作主認識」と「受け手認識」の2つに分け、「受け手認識」をさらに「二格名詞の受け手認識」と「二格名詞の所有者の受け手認識」の2つに分けることにする。そのうち、「動作主認識」と「話者認識」は村上（2017）に従い、「受け手認識」は新たに提出する下位分類である。

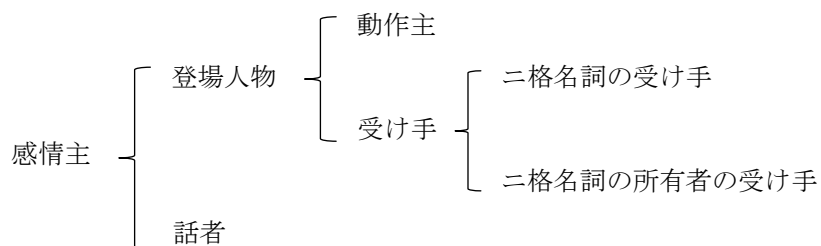


図1 日本語の感情形容詞の副詞的用法における感情主の分類

以下、本稿ではテストフォームを用いて感情形容詞の副詞的用法の下位分類の相違を分析する。費（2013）は「動作主認識」のみについてテストフォームを設けているが、本稿では、「受け手認識」と「話者認識」についても新たなテストフォームを設ける。

1. 登場人物認識

本稿では、登場人物の感情を表す用法「登場人物認識」と呼ぶ。これには「動作主認識」と「受け手認識」の2つがある。以下、順に見ていく。

(1) 動作主認識

まず、「動作主認識」について見る。上述したように、「動作主認識」とは、述語動詞が表す動作が行われているときの動作主の感情を表す用法である。「動作主認識」の場合、テストフォーム①で矢印の後の文に変更できる⁴⁾。

テストフォーム①：

N ガ+A ク+V
 ⇒N ガ+A イ X デ+V
 (X=気持ち)

例えば、(25)の「彼は空を恨めしく見上げた」は、テストフォーム①に従い「彼は恨めしい気持ちで空を見上げた」と言い換えられる。それに対して、(26) (27)のように、「受け手認識」と「話者認識」はテストフォーム①で変換できない。

(25) 彼は空を恨めしく見上げた。⇒彼は恨めしい気持ちで空を見上げた。

(動作主認識)

(26) その話が彼に羨ましく響いた。⇒*その話が羨ましい気持ちで彼に響いた。

(受け手認識)

(27) 花が寂しく咲いている。⇒*花が寂しい気持ちで咲いている。(話者認識)

(2) 受け手認識

次に、「受け手認識」について見る。本稿では、「受け手認識」を、述語動詞が表す出来事が受け手（二格名詞、または二格名詞の所有者）に、ある種の感情を感じさせることを表す用法とする。そのうち、受け手が二格名詞である場合を「二格名詞の受け手認識」（以下、「受け手認識a」とする）、二格名詞の所有者である場合を「二格名詞の所有者の受け手認識」（以下、「受け手認識b」とする）と呼ぶ。「受け手認識」の場合、次のテストフォーム②で矢印の後の文に変換できる⁵⁾。

テストフォーム②：

N1 ガ+N2 (ノ N3) ニ+A ク+V1

⇒N1 ヲ V2 テ、N2 ハ A ク思ウ／感ズル。

(N1=声・響き・言葉・歌・すがた・面影…

N3=心・胸・腹・頭・目…

V1=響く・映る・迫る・しみとおる・よみがえる…

V2=見る・聞く・思い出す…)

(28) (29) を例にとると、「その話が彼に羨ましく響いた」「その話が彼の心に羨ましく響いた」は、テストフォーム②で「その話を聞いて、彼は羨ましく思った」と変換できる。一方で、次のように「動作主認識」の (30) と「話者認識」の (31) はテストフォーム②で矢印の後の文に言い換えられない。特に (31) のような文は元々感情主のN2 がないため、そもそもテストフォーム②は使えない。

(28) その話が彼に羨ましく響いた。⇒その話を聞いて、彼は羨ましく思った。

(受け手認識 a)

- (29) その話が彼の心に羨ましく響いた。⇒その話を聞いて、彼は羨ましく思った。
(受け手認識 b)
- (30) 彼女は彼に苛立たしく言い返した。⇒*彼女を見て、彼は苛立たしく思った。
(動作主認識)
- (31) 花が寂しく咲いている。⇒*花を見て、φは寂しかった。(話者認識)

また、次の (32) (33) も、テストフォーム②で「その景色を見て、彼女は恨めしく思った」と変換できる。ゆえに、「受け手認識」だと考えられる。

- (32) その景色が彼女には恨めしく映った。(受け手認識a)
⇒その景色を見て、彼女は恨めしく感じた。
- (33) その景色が彼女には恨めしく映った。(受け手認識b)
⇒その景色を見て、彼女は恨めしく感じた。

以上、「受け手認識」について見た。上に見られるように、「動作主認識」と異なり、「受け手認識」の場合、感情主は能動的に感情を抱きながら動作を行うわけではなく、受動的に感情が生起される。具体的には、様子や音などが有情者の方向へ移動することにより、有情者は受動的に影響を受けて感情が引き起こされる。これをまとめると、図2のようになる。

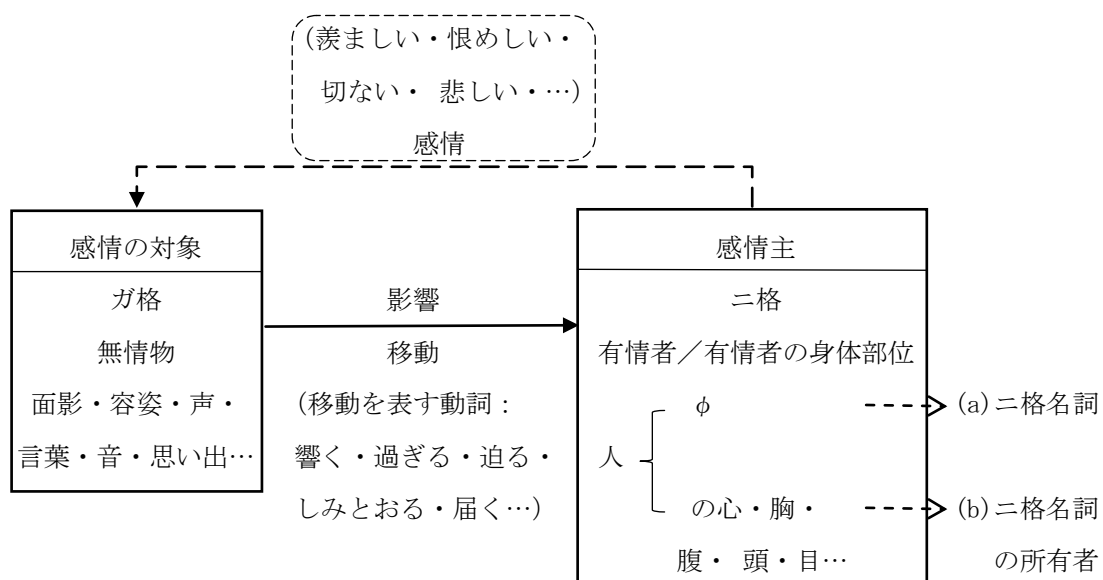


図2 「受け手認識」の意味構造

以下、「受け手認識」になる文の特徴について、図2をもとにガ格、二格、動詞の順に見

ていく。まず、ガ格は「面影」や「声」のような視覚や聴覚で認識できる無情物を表す名詞が多い。(34)に見られるように、無情物である「別れた人の面影」がガ格に立つ場合は成り立つのに対して、有情者である「別れた人」がガ格に立つ場合は成り立たない。このように、「受け手認識」の文におけるガ格は無情物を表す名詞がくることが多い。

(34) {別れた人の面影／*別れた人}が彼の胸に切なく迫った。

次に、二格にくる名詞は、有情者を表す名詞、例えば「私」「彼」や「彼女」や、有情者の身体部位を表す名詞、例えば「彼の胸」や「彼女の頭」などである。図2に示すように、感情を呼び起こすものが有情者そのものへ移動する場合は「二格名詞の受け手認識」であり、有情者の「胸」「腹」「頭」などの身体部位へ移動する場合は「二格名詞の所有者の受け手認識」である。

次に、述語動詞は移動を表すことができる動詞であるという特徴がある。(35)において「響く」も「鳴り響く」も「鳴る」も音が出ることを表すが、「響く」と「鳴り響く」は使えるが「鳴る」は使えない。これは「響く」と「鳴り響く」は音が広がり伝わるという移動の意味合いを含み、音の着点である二格名詞を伴うが、「鳴る」は音の移動の意味は含まず、二格名詞を伴わないためである。このように「受け手認識」の文に使われる動詞は、感情を引き起こす対象（ガ格）の移動を表す動詞であるという特徴がある。また、ここで注意されたいのは、移動を表す動詞には自動詞の場合もあれば、他動詞の場合もあるというところである。例えば、(36) (36') はいずれも「受け手認識」の文であるが、(36) は自動詞である「伝わる」が使われた能動文であり、(36') は他動詞である「伝える」が使われた受動文である。

(35) 鐘が彼女に悲しく {響いた／鳴り響いた／*鳴った}。

(36) 太郎の思いが花子に切なく伝わった。

(36') 太郎の思いが花子に切なく伝えられた。

2. 話者認識

I章1節に述べたように、「話者認識」は述語動詞が表す出来事が話者に感情を起こさせる様子を表す用法である。「話者認識」の場合、次のテストフォーム③で矢印の後の文に変換できる。

テストフォーム③：

N ガ + A ク + V

⇒（話し手ニハ、）N ノ V 様子／シ方ガ、A ク見エル／聞コエル／思エル／感ジラレル。

例えば、(37) は、テストフォーム③に従い「(話し手には) 花の咲き方が寂しく見える」と言い換えられるため、「話者認識」であると考えられる。一方、「動作主認識」の (38) と「受け手認識」の (39) はテストフォーム③で矢印の後の文に変換できない。

(37) 花が寂しく咲いている。

⇒（話し手には）花の咲き方が寂しく見える。（話者認識）

(38) 彼は空を恨めしく見上げた。

⇒*（話し手には）彼の空を見上げた様子が恨めしく見えた。（動作主認識）

(39) その話が彼に羨ましく響いた。

⇒*（話し手には）その話の響き方が羨ましく聞こえた。（受け手認識）

3. まとめ

本章では、日本語の感情形容詞の副詞的用法を感情主の意味役割という視点から再検討してきた。まず、感情主が文における登場人物か話し手（書き手）かを基準に大きく「登場人物認識」と「話者認識」に二分した。また、「登場人物認識」を感情主が動作主か受け手かによって「動作主認識」と「受け手認識」に分類し、「受け手認識」をさらに「二格名詞の受け手認識」と「二格名詞の所有者の受け手認識」に分けた。

Ⅲ. 中国語の感情形容詞の副詞的用法における感情主の再分類

本章では、中国語の感情形容詞の副詞的用法における感情主について再検討しながら日中対照を行う。その結果、中国語の場合は「動作主認識」だけでなく「話者認識」も見られるのに対して、日本語のような「受け手認識」は存在しないことを主張する。以下、日本語と同様にテストフォームを用いて見ていく。

1. 登場人物認識

(1) 動作主認識

中国語の感情形容詞が副詞的成分として使われる場合、まず「動作主認識」という用法に用いることができる。この場合、次のテストフォーム④で矢印の後の文に変換できる。

テストフォーム④：

N+A 地+V

⇒N+怀着 A 的心情+V

(訳：N+A イ気持ち／感情デ+V)

例えば、(40)は「女性作家はうれしい気持ちでアコーディオンを背負っている」と言い換えられるのに対して、(41)は言い換えられない。よって、(41)と違い、(40)は「動作主認識」の用法として用いられていることが分かる。

(40) 女作家高兴地背着手风琴（略）。(動作主認識)

(女性作家はうれしそうに（直訳：うれしく）アコーディオンを背負っている。)

⇒女作家怀着高兴的心情背着手风琴。

(女性作家はうれしい気持ちでアコーディオンを背負っている。)

(41) 五星红旗在赛场上升起，国歌在激昂地奏响。(話者認識)

(五星紅旗が競技場で揚がり、国歌が感情が高ぶるように響いている。)

⇒*国歌怀着激昂的心情奏响。

(*国歌が感情が高ぶる気持ちで響いている。)

次の(42) (43)も、テストフォーム④で変換できるため、「動作主認識」だと考えられる。

(42) 一年小女孩羞涩地走进来（略）。(《报刊精选》)

(一年生の女の子が恥ずかしそうに（直訳：恥ずかしく）入ってきた。)

⇒一年小女孩怀着羞涩的心情走进来。

(一年生の女の子が恥ずかしい気持ちで入ってきた。)

(43) 他忍不住停下了脚，忧伤地看了一眼他熟悉的家乡。(《人生》)

(彼は思わず足を止め、なじみ深いふるさとを悲しく見た。)

⇒他怀着忧伤的心情看了一眼他熟悉的家乡。

(彼は悲しい気持ちでなじみ深いふるさとを見た。)

(2) 受け手認識

次に、中国語の感情形容詞の副詞的用法には日本語の「受け手認識」のようなものが存在しないことについて見る。

(44) その話が彼に羨ましく響いた。(=3)

(44') *那句话在他羡慕地回响。

(44'') 听到那句话，他感到很羡慕。(その話を聞いて、彼は羨ましく感じた。)

(45) その景色が彼女の目には恨めしく映った。(=6)

(45') ??那景色哀怨地映入她的眼眸。

(45'') 看到那景色，她感到无比哀怨。(その景色を見て、彼女は恨めしく感じた。)

上の(44)(45)に見られるように、中国語の場合、「受け手認識」は自然な文としては許容されず、(44'')(45'')のように複文で感情形容詞を述語に用いて訳す必要がある。

2. 話者認識

最後に、「話者認識」の用法について見る。この場合、次のテストフォーム⑤で矢印の後の文に変換できる。

テストフォーム⑤：

N+A 地+V

⇒(在说话者看来,) N (的) V 的样子/方式看起来/听起来/让人感觉很 A。

(訳：(話し手ニハ,) N ノ V 様子/シ方ガ、A ク見エル/聞コエル/思エル/感ジラレル。)

例えば、(46)はテストフォーム⑤に従い“(在说话者看来,)国歌奏响的方式听起来很激昂 (話し手には,)国歌の響き方が感情が高ぶるように聞こえる)”と言い換えられる。一方、(47)は言い換えられない。そのため、(46)の“激昂”は「話者認識」として使われていると考えられる。

(46) 五星红旗在赛场上升起，国歌在激昂地奏响。(話者認識)

(五星紅旗が競技場で揚がり、国歌が感情が高ぶるように響いている。)

⇒(在说话者看来,)国歌奏响的方式听起来让人感觉很激昂。

((話し手には,)国歌の響き方が、感情が高ぶるように聞こえる。)

(47) 女作家高兴地背着手风琴(略)。(動作主認識)

(女性作家はうれしそうに(直訳：うれしく)アコーディオンを背負っている。)

⇒*(在说话者看来,)女作家背着手风琴的方式看起来让人感觉很高兴。

(* (話し手には,)女性作家のアコーディオンの背負い方が、うれしく見える。)

次の(48)(49)も、テストフォーム⑤で変換できるため、「話者認識」だと考えられる。

(48) 雨寂寞地下着。(雨が寂しく降っている。)

⇒ (在说话者看来,) 雨下的样子看起来让人感觉很寂寞。

((話し手には,) 雨が降っている様子が、寂しく見える。)

(49) 我被《美丽人生》这样凄苦地叙述生命故事的意大利电影所征服。(《人民日报》)

(『ライフ・イズ・ビューティフル』のような生命の物語を切なく描いているイタリア映画に感動した。)

⇒ (在说话者看来,) 《美丽人生》的叙述方式让人感到很凄苦。

((話し手には,) 『ライフ・イズ・ビューティフル』の描き方が切なく感じさせる。)

3. まとめ

以上、本章では、中国語の感情形容詞の副詞的用法における感情主の分類を行ってきた。その結果、中国語の感情形容詞が副詞的用法に使われる場合、「動作主認識」、「所有者認識」、「話者認識」は見られるが、「受け手認識」は見られないことが分かった。まとめると、図3のようになる。

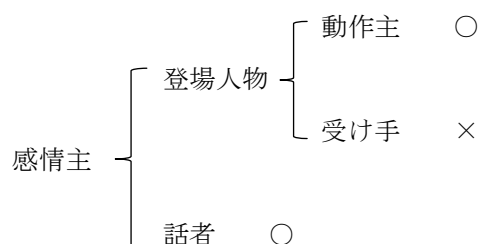


図3 中国語の感情形容詞の副詞的用法における感情主の分類

おわりに

本稿は先行研究を踏まえつつ、日本語と中国語の感情形容詞の副詞的用法を感情主の意味役割という視点から再分類を行った。分類した結果、日本語の場合は大きく分けて「登場人物認識」と「話者認識」の2種類があり、「登場人物認識」にはさらに「動作主認識」と「受け手認識」という2つの下位分類がある。それに対して、中国語の場合も「登場人物認識」と「話者認識」に二分することができるが、「登場人物認識」には日本語と違い、「動作主認識」のみがあり、「受け手認識」は存在しない。まとめると、表1のようになる。

表1 感情形容詞の副詞的用法における感情主の日中対照

感情主の分類		言語	日本語	中国語
登場人物認識	動作主認識		○	○
	受け手認識		○	×
話者認識			○	○

本稿では、「受け手認識」の文におけるガ格、ニ格と述語動詞の特徴について述べているが、形容詞の特徴についてはあまり述べていない。今後は「受け手認識」のみならず、各認識に使われやすい形容詞の特徴を明らかにしていきたい。また、「受け手認識」の文におけるガ格、ニ格、述語動詞と形容詞の特徴がどのようにできているかについても考察していきたい。

注

- 1) 「嬉しく思う」や「楽しくなる」のように「思う」「感じる」「見える」「聞こえる」「する」「なる」などの動詞と結合する場合は、感情形容詞が文の必須成分になるため、本稿では副詞的用法として扱わない。
- 2) 加藤（2000）では、文全体を修飾する「かわいそうに、～」なども感情形容詞の副詞的用法の1つとして扱っている。しかし、本稿ではこれは分析の対象外とする。
- 3) 費（2013）では主語を「N」、動詞を「V」、感情形容詞を「Aイ」、感情形容詞の副詞的用法を「Aク」としている。また、費（2013）は「感情形容詞ソウニ/ゲニ」も対象としているため、「X=気持ち、様子…」としているが、本稿では「感情形容詞ク」のみについて考察するため、「様子」を省く。
- 4) ここでは、「動作主認識」とも「話者認識」とも解釈できる例があることに注意されたい。例えば、次の（i）はテストフォーム①で「彼女は悲しい気持ちで歌う」とも変換できれば、テストフォーム③で「（話し手には）彼女の歌う様子が悲しく思える」、即ち「彼女は話し手に悲しく感じさせるような様子で歌う」とも変換できる。つまり、この例は「動作主認識」と「話者認識」の両方とも捉えられる。

（i）彼女は悲しく歌う。

⇒彼女は悲しい気持ちで歌う。（動作主認識）

⇒（話し手には）彼女の歌う様子が悲しく思える。（話者認識）

このような場合が見られる理由は、感情形容詞の性質に関わっていると考えられる。山岡

(2000) では「名詞句を主題として、超時的〈叙述〉文を作ることが可能か」という基準で感情形容詞を感情のみを表しうるタイプと、感情と属性をいずれも表しうるタイプの2つに分けている。例えば、次の(ii)では、「恨めしい」と「恐ろしい」が並列されており、いずれも〈感情表出〉を表しているが、対象格が主題化された(ii')では、「恐ろしい」のほうは〈属性叙述〉となるのに対して、「恨めしい」は依然として〈感情表出〉である。「その証拠に、この場合の主題「あの男」には対比の意味が生じ、背後には第1人称経験者格が依然として含意されている」と山岡(2000)が述べている。つまり、「恨めしい」タイプの感情形容詞は一時的な感情状態しか表しえないのに対して、「恐ろしい」タイプのもの(「悲しい」も含める)は感情のほか、超時的な状態、即ち属性をも表しうる。

(ii) 俺はこんな自分が恨めしい、そして恐ろしい。(山岡 2000 : 141)

(ii') a あの男は恨めしい。〈感情表出〉

b あの男は恐ろしい。〈属性叙述〉

(山岡 2000 : 142)

感情形容詞のこのような性質は副詞的用法にも反映されており、「恨めしい」タイプは感情のみを表すのに対して、「恐ろしい」タイプは話者に感じさせる様子、即ち「話者認識」をも表すことが可能である。そのため、「彼女は悲しく歌う」は2つの解釈ができると考えられる。

5) ここでは、「受け手認識」とも「話者認識」とも解釈できる例があることに注意されたい。例えば、次の(iii)はテストフォーム②で「鐘を聞いて、彼女は悲しく思った」とも言い換えられれば、テストフォーム③で「(話し手には、) 鐘が彼女に響いた様子が悲しく思えた」、即ち「鐘が彼女に、話者に悲しく感じさせる様子で響いた」とも言い換えられる。つまり、この例は「動作主認識」と「話者認識」の両方とも捉えられる。その理由は4)で述べられた理由と同じように考えられる。

(iii) 鐘が彼女に悲しく響いた。

⇒ 鐘を聞いて、彼女は悲しく思った。(受け手認識)

⇒ (話し手には、) 鐘が彼女に響いた様子が悲しく思えた。(話者認識)

参考文献

- 加藤庸子(2000)、「感情・感覚形容詞の連用用法について」『日本語・日本文化研究』10、71-81頁。
 新川忠(1979)、『副詞と動詞のくみあわせ』試論 言語学研究会『言語の研究』むぎ書房、173-202頁。
 ドラガナ シュピツァ(2005)、「日本語における動作主認識の副詞的成分をめぐって」『日本語文法』5(1)、212-222頁。

費建華(2013)、『現代日本語の形容詞の意味指向に関する研究—連用修飾用法を中心に』世界図書出版公司。

村上佳恵(2017)、『感情形容詞の用法 現代日本語における使用実態』笠間書院。

山岡政紀(2000)、『日本語の述語と文機能』くろしお出版。

卢莹(2002)、『情感形容词研究』天津师范大学硕士论文。

コーパス

現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ-NT)

北京大学中国语言学研究中心 CCL 现代汉语语料库

A Contrastive Study of Emotional Subject in Adverbial Usage of Emotional Adjectives of Japanese and Chinese

WANG, Yunjiao

Abstract

This paper reclassifies the adverbial usages of Japanese and Chinese emotional adjectives from the viewpoint of the difference between emotional subject. As a result, the adverbial usages of Japanese emotional adjectives are broadly divided into "character recognition" and "speaker recognition", and "character recognition" has two sub-categories, "agent recognition" and "recipient recognition".

On the other hand, although the adverbial usages of Chinese emotional adjectives are also broadly divided into "character recognition" and "speaker recognition", "character recognition" only has "agent recognition", but not has "recipient recognition".

In addition, this paper analyzes sentence composition of "recipient recognition". As a result, "Ga" case is inanimate noun, "Ni" case is animate noun or the noun that means body part, and predicate is the verb that means movement. We would like to find out why there are such characteristics in the future.

Keywords : emotional adjectives, adverbial usage, emotional subject, recipient recognition, a contrastive study of Japanese and Chinese

生活者としての外国人の外国語自律学習 —支援者による援助に注目して—

張 曉蘭（上海海洋大学）

要旨

本研究は、「生活者としての外国人」の多くを占める結婚移住女性に対する日本語学習支援に焦点を当て、彼女らの日本語自律学習を分析しようとする。これまでの研究で、結婚移住女性が地域日本語教室で日本語を身に付け、就職や子育てという活動を通して、生活者として地域社会に参加していることがうかがえた。また、その過程において、日本語レベルの上達に伴い、自律学習に移行する、つまり地域日本語教室の必要がなくなり、自主的に日本語学習ができるようになった学習者がいることも確認できている。中国においても、「一带一路」という国家戦略の下、中国で長期滞在する外国人が増えてきた。一方、これまで、外国人の中国語学習は、長期、短期の留学生を対象とするものが中心であり、これは主に大学が担ってきた。それ以外では、孔子学院や民間の語学学校が担ってきたが、そのニーズはますます高まりつつある。留学生以外の生活者としての外国人の中国語学習において、どのように自律学習が可能であるか、などの課題に対して、日本における生活者としての外国人の日本語学習の研究における知見が、有効な示唆を持つものと考えられる。

本研究では、日本における結婚移住女性の自律学習を取り上げ、地域日本語教室での支援者による援助に注目し、結婚移住女性の自律学習を可能にする援助は何かを明らかにしようとする。それらを踏まえ、中国における日本人の中国語自律学習の課題を探る。

キーワード： 生活者としての外国人、外国語自律学習、支援者

1. 研究背景及び目的

グローバル化の進展により、様々な渡航目的で多くの外国人が来日している。人々の交流が増し、国際結婚も増加している。こうして結婚移住女性を含めた外国人が増加しているにも関わらず、日本語教育の分野においてはなお、留学生を対象とする研究がその中心をなしてきたことに反省が加えられるようになってきた。1980年代より、「生活者としての外国人」に対する日本語教育にも関心が寄せられてきており、本研究でも、「生活者としての外国人」を対象とする。具体的には「生活者としての外国人」の多くを占める結婚

移住女性に対する日本語学習支援に焦点を当てることとする。結婚移住女性は、修学や就労のための来日とは異なり、公的な受入組織を持たない。日本語学習の機会や社会的な接点を準備されておらず、私的な解決に委ねられていることから、問題が十分可視化されてこなかったことが考えられる。そんな中で、筆者は、これまでの研究で、結婚移住女性が地域日本語教室で日本語を身に付け、就職や子育てという活動を通して、生活者として地域社会に参加していることを示した（張 2015a；張 2015b）。また、その過程において、日本語レベルの上達に伴い、自律学習に移行する、つまり地域日本語教室の必要がなくなり、自主的に日本語学習ができるようになった学習者がいることも確認できている。

中国においても、「一帯一路」という国家戦略の下、中国で長期滞在する外国人が増えてきた。一方、これまで、外国人の中国語学習は、長期、短期の留学生を対象とするものが中心であり、これは主に大学が担ってきている。それ以外では、孔子学院や民間の語学学校が担ってきたが、そのニーズはますます高まりつつある。留学生以外の生活者としての外国人の中国語学習において、どのように自律学習が可能であるか、などの課題に対して、日本における生活者としての外国人の日本語学習の研究における知見が、有効な示唆を持つものと考えられる。

本研究では、日本における結婚移住女性の自律学習を取り上げ、地域日本語教室での支援者による援助に注目し、結婚移住女性の自律学習を可能にする援助は何かを明らかにしようとする。それらを踏まえ、中国における日本人の中国語自律学習の課題を探る。

II. 調査

1. 調査対象

本調査では、日本福岡県内（福岡市、糸島市、太宰府市、久留米市）における7つの地域日本語教室の協力を得て、そこに通っている中国人結婚移住女性を調査対象者にした。筆者は2013年6月から2015年2月にわたり、地域日本語教室で日本語を学ぶことを含めて地域社会への参加のプロセス、ことに、日本語を身につけた後の社会参加の展開について調べるために、9名の中国人結婚移住女性から調査の協力を得た。調査対象者の属性について表1に示している。

表 1 調査対象者の属性

仮名	年齢	来日理由	滞日期間	日本語教室における学習歴	仕事	子どもの有無
黄	42 歳	再婚	4 年 5 ヶ月	4 年 5 ヶ月 福岡市西区	飲食店のアルバイト	中国に 1 人
翁	32 歳	結婚	11 年 6 ヶ月	5 年 太宰府市	工場のアルバイト	日本に 1 人
趙	29 歳	結婚	2 年 11 ヶ月	2 年 3 ヶ月 太宰府市	工場のアルバイト	無
劉	34 歳	結婚	6 年 5 ヶ月	1 年 8 ヶ月 福岡市東区	大学院生	無
李	45 歳	再婚	4 年 5 ヶ月	8 ヶ月～1 年 福岡市西区	工場のアルバイト	中国に 1 人
沙	36 歳	結婚	10 年	5 年 福岡市中央区	通訳案内士、自営業	日本に 2 人
金	32 歳	結婚	3 年 3 ヶ月	2 年 3 ヶ月 福岡市早良区	翻訳のアルバイト、 英語教師	無
方	30 歳	結婚	6 年 5 ヶ月	3～4 ヶ月 福岡市中央区	主婦、 通訳案内士の資格勉強中	無
韓	30 歳	結婚	2 年 5 ヶ月	2 年 2 ヶ月 久留米市	工場のアルバイト	無

*対象者の仮名は中国人女性であることを踏まえて、中国姓とした。

9 人の対象者に対するインタビューは許可を得て IC レコーダーで録音し、調査終了後文字化した。また、インタビュー中に観察できたことは詳細にフィールドノートに書きとめ、インタビュー終了後にまとめた。インタビューの他に、調査者は日常的に調査対象者と交流したり、調査対象者の家に訪問したりすることで、ラポールを構築するとともに、調査対象者の生活を観察することができた。その観察を通して、調査対象者の抱えている日本語の問題、日本語自律学習の現状、地域社会への参加を知ることができた。

インタビューでは、主に以下の質問①～⑨について聞き取りした。質問①～⑨は導入の質問であって、この質問への対応によって、次の質問を変更するため、質問①～⑨はすべての対象者に向けたものではなく、また、導入の質問に対する回答内容によっては、追加して質問をすることもある。

- ① どうして日本語教室に参加しようと思いましたか。
- ② 日本語教室でどのように日本語を勉強していますか。
- ③ 日本語の勉強は生活にどのように役立っていますか。
- ④ 支援者はあなたにとってどのような存在ですか。
- ⑤ 支援者からどのような日本語勉強の支援が得られましたか。
- ⑥ 現在日本語教室を引き続き参加していますか。
—参加しているなら、地域日本語教室を継続する理由は何ですか。
—参加しなくなったら、参加しなくなった理由は何ですか。
- ⑦ 独学で日本語を勉強していますか。どのように勉強していますか。
- ⑧ 日本語を使うアルバイト/仕事をしていますか。どのようなことをしていますか。
- ⑨ 将来何になりたいと思いますか。

なおインタビューは、調査対象者の母語である中国語で実施し、文字化した。データの結果のみを日本語に翻訳した。

2. 調査結果及び分析

調査結果について、NVivo を用いて解析を行った。NVivo は質的分析を行うためのツールであり、NVivo を利用して、ノードの組み合わせですべてのコーディングを収集することによって、コーディングされたコンテンツ、またはコンテンツが入っている文脈が検索できる。また、データ分析の過程を記録できることから、分析過程の透明性を確保でき、コーディングの方向性と、その分析で何を深察するのかを明らかにすることができる。

(1) 地域日本語教室における日本語学習支援

「地域日本語教室の支援者からどのような日本語学習支援が得られましたか」について聞き取りした内容を NVivo10²⁾で解析した。解析した結果、図 1、及び後に示す図 2 が生成された。図 1 は、「帮助」（日本語では「支援」と翻訳できる）という概念について関連を分析してみた結果である。

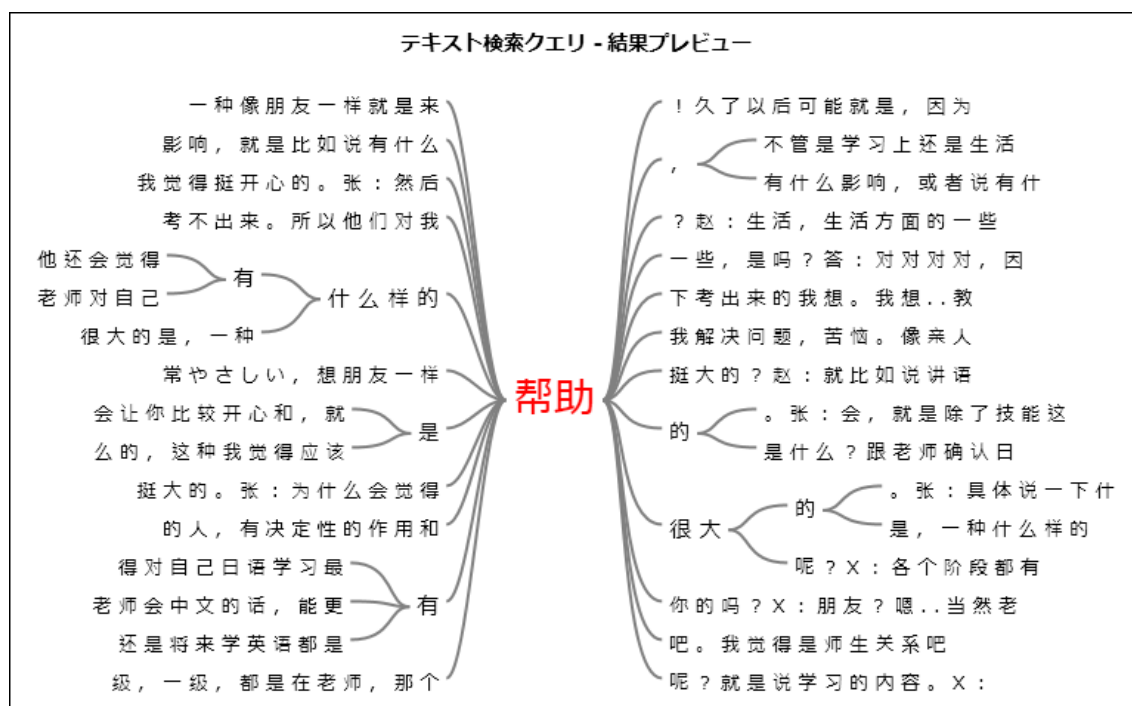


図1 地域日本語教室における日本語学習支援

分類したノードによると、支援者による様々な学習支援が行われており、出てくる頻度及び「帮助」との繋がりが強い単語を抽出すると、「日本語の勉強」、「文化」、「生活」がキーワードとして抽出できる。

まず、キーワードの一つ目である「日本語の勉強」を見ると、学習者によって異なるニーズがあったこと、学習段階によって支援者から異なる支援が提供されていたことが分かる。この点について、文字化データを詳細にみると、翁は以下のように述べている。

最初『みんなの日本語』について勉強しましたが、N1を合格してから、先生が私の外来語について勉強したいというニーズを考えてくれて、新聞や雑誌を読ませてくれます。また、外来語はあまり得意ではないので、外来語も勉強しています。私は N3、N2、N1と合格できたのは先生が助けてくれたおかげだと思います。

金は日本語学校に10週間通ったことがあるが、生活のための日本語を勉強したいというニーズに合わなかったためやめた。地域日本語教室に来た後、以下のように言った。

まずレベルチェックがあって、先生に自分のレベルを知ってもらいます。そして、先生は私自身のことについて聞いてくれます。たとえば、私は英語が話せますので、英語が話せる先生が来てくれて一緒に勉強します。中国語が話せる先生は中国語しか話せない学生と一緒に勉強します。基本的にマンツーマンで勉強しますが、一対二の場合もあ

ります。

沙は「一番大切なのは、先生の前で日本語を間違えたら、訂正してくれることです。一般の日本人だと、間違えても、意味が通じたら直してくれません。私は訂正してくれるほうがうれしいです」と言う。日本語の学習について、地域日本語学校の支援者が、学習者のニーズや希望に合わせて、日本語の学習について支援していることを確認できる。

学習者のニーズという点では、楽しむことを重視している学習者もいる。翁が「雰囲気がとても良いです。お茶を飲みながらおしゃべりしたりします」、沙は「楽しめば良いので、日本語能力を上達したいと思うのではなく、異国他郷で人とおしゃべりしたいと思ったのです」と述べている。

次に、「文化」の面においても、支援者からの援助が行われている。趙が「中国と日本の文化は違いますから、先生は日本人の立場から物事を考えて話してくれます。大変勉強になります」と文化面のことについて勉強していることについて語っている。沙も「日本の文化について知ることができます。先生の家遊びに行ったことがあります。日本の文化や子どもの教育について話しました」と話す。方は「先生は先生の家庭生活について話してくれて、私は私の家庭生活について話します」と言った。

最後に、「生活」の面における支援も得られていることがわかる。金はいかに大きな支援であったかを以下のように述べている。

はじめて先生と会ったとき、何か困ったことがあったら連絡してねと言ってくれました。日本語学校では考えられないことです。私は買い物に困っていると言ったら、連れて行ってもらいました。大変貴重な経験です。その他、食事に連れて行ってもらったこともあります。先生がいなかったら、本当に生活できませんでした。

「日本語の勉強」だけではなく、支援者から「文化」や「生活」の面における支援が得られることも大きな意味を持ち、地域日本語教室の特徴である。

留学生や技能実習生などの外国人と違って、結婚移住女性は結婚で来日したため、日本で家庭生活を営むことが所与となる。従って、日本語ができなくても、日本人の家族に関わり合うことは避けられない。それは、同時に、家族という支援者がいるということの意味している。地域日本語教室における支援者の他、日本人の夫や姑による日本語の支援について語る対象者もいた。趙は「姑は敬語を教えてください。一週間に一回我が家に来てくれますので、一緒に眼鏡を作りに行くときに、私の代わりに日本語で説明してくれました」と言い、翁は姑と同居しているため、「最初日本に来たときに、夫の仕事が忙しかったので、姑と一緒にいる時間がかなり長かったです。発音や日常会話を教えてください。『みんなの日本語』で勉強していました」と姑の支援について語った。方は夫が自宅でデ

ザイナーの仕事をしているため、よく夫が漢字の読み方や意味、文章の作り方などを教えてくれると言った。しかし、これらのケースは少数派であり、他の調査対象者には日本人の家族による日本語学習支援が見られなかった。姑との関わりはほとんどない、夫による学習支援は不可能という回答が一般的である。

図2は、支援者から得られた支援を「作用」（日本語では「機能」と翻訳できる）という概念について関連を分析してみた結果である。図2によると、地域日本語教室の支援者による学習支援は「決定的」で「大きな」役割を果たしていることが分かった。また、支援者による援助は「足場作り」（Scaffolding）となっているものと考えられる。つまり、結婚移住女性たちのできないことについて支援者が援助を与えることでできるようになるのであり、徐々に一人でできることが増えていくものと推測できる。

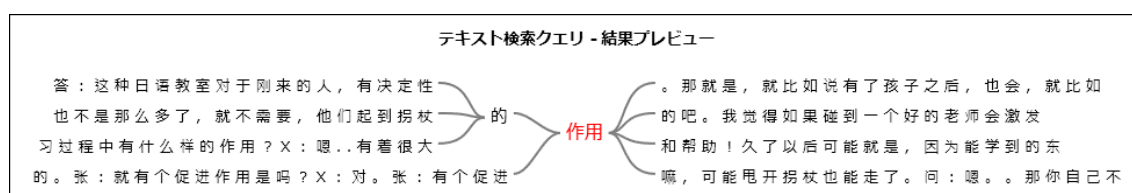


図2 地域日本語教室における支援者の役割

図2における「作用」（日本語では「機能」）とは、具体的に個々の機能が挙げられている訳ではないが、李は「先生は勉強を好きにさせてくれるので、とても役に立ちました」と言い、金は日本語教室の支援者が自分に「綱」をくれると語るなど、その後の自律学習への基礎として大きな役割を果たしていることが分かる。

新しいところに来るときに、「綱」が必要です。先生は「綱」をくれる人です。そうでなければ、目の不自由な人と同じようにどこに行けば良いのかが分からなくなります。「綱」や「綱をくれる人」のおかげで、私はここで生きることができます。多くの人と知り合い、日本社会に踏み込むことができます。

更に、金は日本語教室の支援者を「杖」とも比喻しており、「日本語教室は来日したばかりの外国人には大変役に立ちます。先生たちは『杖』のように助けてくれて、『杖』を突いて歩きますね。いつか『杖』がなくても歩けるようになるけれど」と語った。

いずれも、初心者には必要であるが、後に不要になるというニュアンスを含んでいる。これはまさに「足場作り」（Scaffolding）としての機能を意味している。

インタビュー調査から、地域日本語教室において、「支援者による援助」は結婚移住女性の日本語学習を促進する重要な役割を担っていることが確認できた。次に、結婚移住女性が支援者とどのような関係を築いているのかについて調べた。「支援者はあなたにとっ

てどのような存在ですか」と質問した結果を NVivo10 でテキスト解析した。図 3 と図 4 で表している。

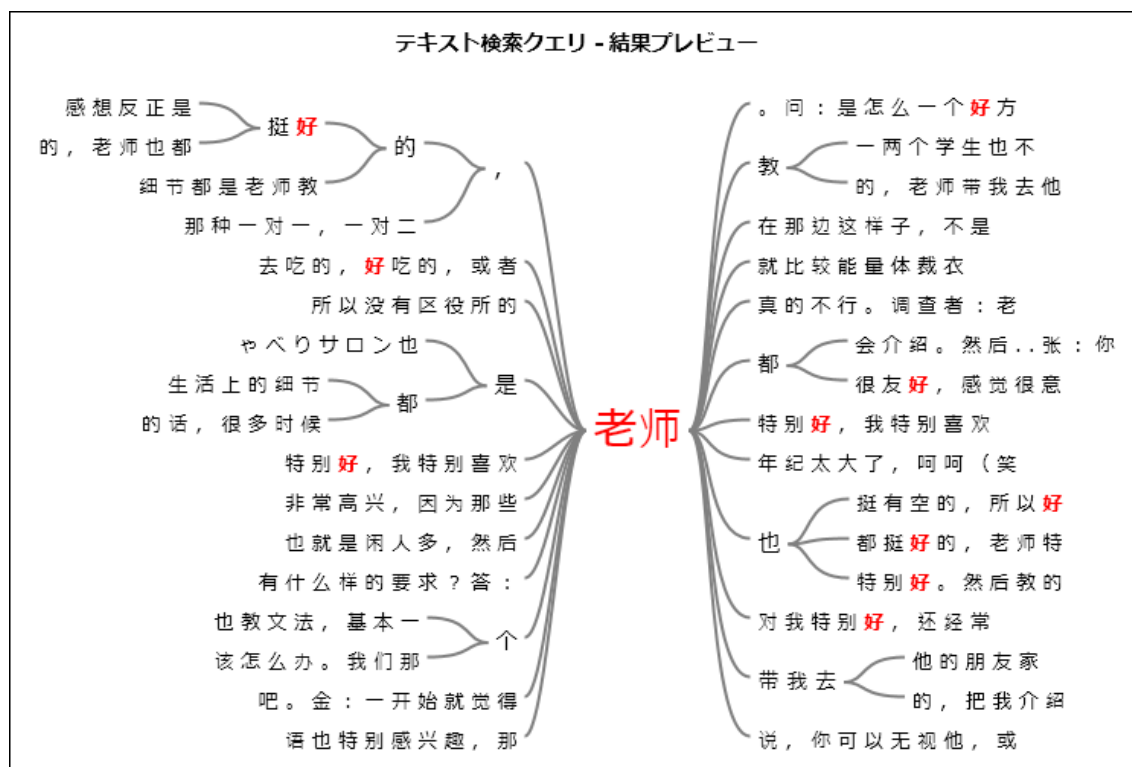


図 3 地域日本語教室における支援者

地域日本語教室において、支援者との関係は単なる上下関係でも、対等な関係³⁾でもなく、上下関係と対等な関係が混在していることが分かった。図 3 では、「老师」（日本語では「先生」）という概念を中心に分析する。この分析から「老师」は「好」と共起している傾向が見られる。「好」は中国語で実に多様な意味を持つが、図 3 の「好」は「親切」、「友好」、「満足」、「やさしい」などと理解することができよう。すべての対象者は支援者のことを「先生」と呼び、教えることによる上下関係が生まれやすいことを示している。「先生」と呼ぶ理由について聞いてみたところ、金は「私が先生に中国語を教える時には、『先生』と呼ばれます」と答えており、沙は「友達だとも思いますし、一般の先生よりとても親切ですが、日本では先生は先生で、敬語を使わなければならなりません。」と答えているところから、相手から何かを教わるという理由で、相手のことを「先生」と呼ぶことが分かった。一方、翁は「先生との交流はとても大切で、何でも相談できます。困難がある時にも、子どものことで解決できない時にも先生に相談します」と述べ、劉は「よく先生の下に遊びに行きます。日本料理を作ってくれます」と話しており、「先生」のことを友達のように思う対象者がいることも分かる。そこで、中国語の「朋友」（日本語の「友達」）でテキスト解析してみると、図 4 のような結果が現れた。

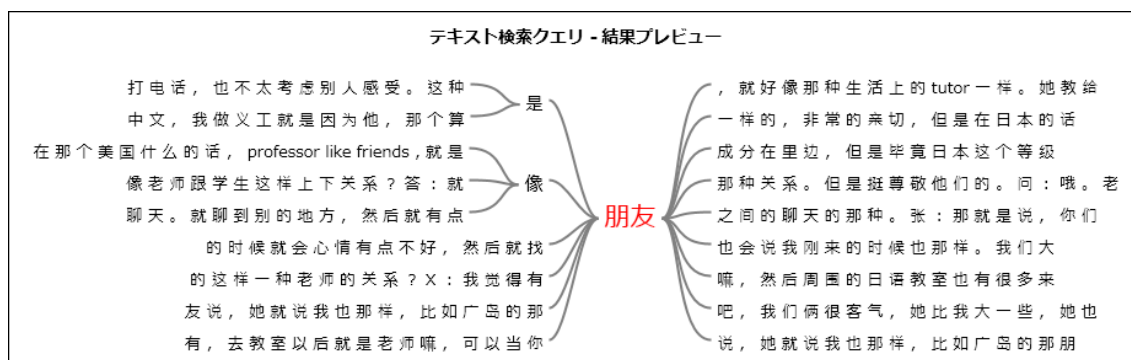


図 4 支援者は「友達」？

ほとんどの調査対象者も支援者のことを「朋友」（「友達」）と認める一方、実際支援者のことが「友達」に近い、「先生」に近いかは調査対象者によって異なっている。また、同じ調査対象者であっても、学習段階によって支援者との関係が変化すると見られる。黄は支援者を家族のように友達のように捉えており、

先生は私にとっては友達であり、家族でもあるという存在です。先生はとても親切で、優しく、友達のように助けてくれます。悩んでいるときも先生と相談します。家族のように、私のことを心配してくれて、よく電話してくれます。

と言う。その黄の発話に対して、劉はアメリカのケースと比較して「アメリカでは、professor like friends、友達のように接してくれるけれど、日本では、先生はあまり open ではなく...（上下関係が感じられる）」と語った。1 回目の調査において、金は下記のよう

年齢が離れているので、先生と呼びます。N1 を担当している先生は日本語学校の先生と変わらなく、一方的に教えてくれるタイプです。問題集をコピーしてくれて、解答した後チェックしてくれます。受験勉強には必要です。

金は、その後、2 回目の調査の際に、「先生はよく外に遊びに連れて行ってくれます。時々電話してくれたりします。本当に友達のようで、tutor みたいです。日本語を教えるだけでなく、他のことも教えてくれます」と答えている。時間的経過とともに、金と支援者の関係が変化していることがわかる。地域日本語教室において学習者と支援者との関係について分析するなら、上下関係と対等な関係が混在しているとみなすことができ、さらに、時間的経過とともに、関係が変化していくことが考えられる。

(2) 自律学習

調査対象者へのインタビュー調査から、地域日本語教室に通い、日本語が一定レベルに達してからは、地域日本語教室に依存しなくなる（地域日本語教室へ行かなくなる）ことが分かった。地域日本語教室へ参加してから、一人でできることが増えていき、日本語教室の支援者による援助がなくても自律学習ができるようになっていくものと見られる。地域日本語教室に参加し始めて数年後に黄と趙以外の7名の調査対象者は地域日本語教室に参加していない。インタビュー結果から、参加しなくなった理由として二つの点があげられる。一つ目は「ニーズの変化」、そして二つ目は「学習スタイルの変化」である。

一つ目の「ニーズの変化」については、「一般的な日本語ではなく、より専門的な日本語を学習したい」という要望があることがインタビューでの発話から明らかになった。例えば、金は「N1に合格してから、あまり日本語教室に行かなくなりました。お金を払っても、もっと専門性のある先生に教えてもらい、高度な日本語について訂正してもらえたらと思います」と言い、劉も「私のすでに知っていることについては勉強する必要がなく、助詞と弱い部分について勉強できたらと思います。自動詞、他動詞、助詞の使い分けは私の一番習いたい日本語です」と言う。方は「最初はとても良かったのですが、新しい学生が入ったらまたゼロから学びます。ですから、なかなかハイレベルに行きません」と言い、ニーズが変わったこと及び地域日本語教室で勉強する限界を指摘した。

二つ目の「学習スタイルの変化」については、「一人でできることが増えていった」という点が明らかになった。つまり、日常生活の多くの場面で、日本語で表現できることが増え、一人で問題解決できる状況が増えていったということである。たとえば、方は「最初日本語会話はあまりよくできませんでしたが、最近本当に進歩しました」と言い、韓も「聞き取りが前よりだいぶよくなりました。基本的な日本語会話ができるようになったので、交流の障壁はあまりありません」と語った。こうして自信をつけた対象者は、次第に他者の援助を必要としなくなり、自力で問題解決を図るようになる。

更に、日本語が一定レベルに達した対象者は地域日本語教室に通わなくても、自分で日本語学習を行うことができるようになり、自律学習に移行することが確認できた。翁は下記の学習状況について述べた。

特に何かを勉強するという目的ではなく、テレビを見たりしています。もしわからない言葉があったら、辞書を引きます。なるべくテレビ番組やニュースをたくさん見て、気楽に勉強しています。

また、劉は

英語から日本語に翻訳する宿題があつて、専門の日本語を勉強しています。日常会話

だけではなく。日本語は道具ですから、将来自分の専門性を活かして就職したいと思います。授業中にわからないことがあったら、自分で調べたり、本を読んだりします。

と、述べている。劉は大学の研究生から大学院生になって、専門用語などを含む高度な日本語能力を身につけるように勉強している姿勢を示した。沙は子育てしながら、自営業をやっている夫の手伝いをしている。「日本語はまだただけけれど、日常生活は問題ないです。分からないことについて勉強します」と語った。金は地域日本語教室に通って、2年未満でN1に合格できた。

N1に合格してから、教えられる先生がいなくて、行かなくなりました。行っても、以前勉強した内容を再度勉強するだけです、あまり意味がありません。日本語教室は来日したばかりの外国人には大変役に立ちます。先生たちは「杖」のように助けてくれて、「杖」を突いて歩きますね。いつか「杖」がなくても歩けるようになるけれど、自分で本を読んだりして、勉強したい内容について勉強しています。

金は以上の話をしながら、調査者に最近使っている2冊の教材を見せてくれた。かなりレベルの高い教材で、ビジネス日本語と文章の作り方に関する教材であった。方も自主的に勉強しているようで、「午前中2時間、午後2時間、夜2時間を勉強しています」と話した。

Ⅲ. 考察

従来の日本語教育において、教授者が学習者に「教える」ことがほとんどで、多くの日本語教育機関における一斉授業では、教授者が一人一人の学習者をケアすることなどは不可能だとも言える。それに対して、本研究のフィールドである地域日本語教室においては、マンツーマンや小人数グループにおける日本語学習活動が行われている。調査結果は、地域日本語教室が、学習者を中心とする学習活動を作り上げていく可能性、及び教授側主導型教育から学習者中心型教育へのパラダイムシフトに伴って、日本語教育の現場において、教授者が「教える」ことから支援者が「援助する」ことへと視点を転換することの有効性が確認できたが、合わせて実践していく上での課題も明らかになった。

先行研究では、地域日本語教室は来日直後の生活者としての外国人のための日本語教室と位置付けられてきた。外国人参加者一人一人に対して、発達段階に応じる支援のあり方はあまり検討されておらず、また、現状としても難しい。しかし、同じように結婚で来日した中国人移住女性でも、日本語学習の動機付けやニーズは異なり、結果として地域日本語教室に求められることにも多様性があることや、それぞれの日本語の発達段階が異なることも分かった。その結婚移住女性は地域日本語教室で支援者による援助を受け、その後

自律学習ができるようになり、高度な自律学習が持続するプロセスにおいて、地域社会における参加の変化が確認できる。最初の段階で彼らがぶつかる日本語問題は、共通の、基礎的なものであることが多く、生活者であって日本語教育の専門家ではない支援者の支援が可能である。また、生活面、文化面の支援も、生活者としての支援者による支援が有効である。地域社会への参加が進むとともに、個々の、個別の課題に対応しなければならない。例えば、自己紹介が必要な段階では、基本的な語彙で、簡単な文法理解で可能であるが、難しい書類を作成したり、意見を述べたりする段階になると、個々の課題に対応する必要性が生じるため、要求される水準も高くなる。学習者が自律的に自己の課題に対応できなければ、マンツーマンで支援する地域日本語教室であっても、個別のニーズに対応するのは難しい。複数を一度に一人の支援者が指導するような形ではなお困難であろう。

生活者としての外国人の日本語自律学習は、中国における日本人の中国語学習に重要な示唆を与えている。近年、中国に長期滞在している日本人も少なくない。それらの日本人の中で中国語を勉強し、地域社会へ参加することを目指す人が増えてきた。留学生を除く長期滞在者には独学か家庭教師による指導を受けて中国語を勉強する人が多い。中国には、地域日本語教室に対応するような地域中国語教室は存在しないが、家庭教師による学習支援のありようについての検討には、地域日本語教室における支援からの知見が役に立つものと思われる。

筆者は上海に住んでいる日本人児童・生徒の中国語学習について調査研究を行なっている。それらの日本人児童・生徒は家庭教師による中国語の授業を受けており、学習の計画は保護者の希望に沿う形で作られるものが多いが、児童・生徒自身が学習時間を増やすなど自主的に学習する姿勢が見られている。また、成人の学習者よりかなり早いスピードで上達し、問題解決につながる中国語学習を行なっていることも確認できた。今後は、家庭教師による授業は具体的にどのようなものかについてさらに研究を行い、地域日本語教室における支援者との役割の相違などを検討し、そこで、外国語学習者をどのように自律学習に導くことができるかについて探っていきたい。

注

- 1) 法務省「令和元年末現在における在留外国人数について（確定値）」

<http://www.moj.go.jp/content/001317545.pdf>（2020年6月26日閲覧）によると、「日本人の配偶者等」は「家族滞在」、「永住者の配偶者」などの「生活者としての外国人」の約4割を占めており、また、一般永住者や帰化したケースを入れると、さらに高い割合を示すと推定できる。

- 2) NVivo10はバージョンである。

- 3) 上下関係とは「教える-教えられる」関係を中心とする関係であるが、それに対して、対等な関係は、上下関係を持たない友達のような関係である。

参考文献

- 張曉蘭 (2015a)、「地域日本語教室における日本語チューターとの相互作用と日本語学習-中国人結婚移住女性を対象とした調査から-」『比較文化研究』116 号、285-296 頁。
- (2015b)、「地域日本語教室における中国人結婚移住女性と支援者との関係」『比較文化研究』117 号、91-102 頁。

付記

本研究は 2018 年度上海市教育科学研究一般项目「在沪外籍学龄儿童的中文学习与异文化适应研究」(立项编号: C18067) の援助を受けて作成したものである。

The Autonomous Learning of Foreign Residents in Japan: Focusing on the Support from Japanese Learning Assistants

ZHANG, Xiaolan

Abstract

This study focuses on Japanese language learning support for married immigrant women, and analyzes their autonomous learning. Research so far has shown that married immigrant women learn Japanese in the Japanese classroom in the community, and participate in the local community as a resident through employment and childcare activities. With the improvement of Japanese language from the activities, some learners transfer to autonomous learning. Under the "the Belt and Road Initiatives" national strategy of China, more and more foreign residents live in China for a long time. For foreign residents other than foreign students, this study could be useful for their Chinese leaning and Chinese autonomous research.

In addition, this study investigates the autonomous learning of married immigrant women in Japan, and the support from Japanese learning assistants. The language learning support can encourage married immigrant women to carry out autonomous learning. This study is benefit for Chinese autonomous learning in China for foreign residents.

Keywords : foreign residents, autonomous learning, language learning support

日本語の「～て死にそうだ」、「死ぬほど～」と 中国語の“～得要死”の対照研究

杉村 泰（名古屋大学）

要旨

日本語の補助形容詞「～て死にそうだ」、副詞「死ぬほど～」、中国語の補語“～得要死”はいずれも当該の事態の程度が極めて高いことを表す。しかし、先行研究ではその違いが明確に記述されていない。そこで本稿では「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」と「北京大学 CCL コーパス (CCL)」を利用して、これら3つの形式と共起する表現の特徴を見た。さらに類義語の「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」、「たまらなく～」、「おそろしく～」、「信じられないほど～」、「～得不得了」、「～得受不了」、「～得要命」とも比較して、これらの形式の共起語の違いを明らかにした。

キーワード： 「～て死にそうだ」、「死ぬほど～」、「～得要死」、共起、対照研究

はじめに

本稿では日本語の「～て死にそうだ」、「死ぬほど～」と中国語の“～得要死”の意味の違いについて論じる。これらの表現はいずれも「死」という意義素を持ち、当該事態の程度が甚だしく高いことを表す。しかし、先行研究ではその違いについて論じられていない。そこで本稿では、日中のコーパスを利用してこれら3語の共起語の違いを見ることにより、これらの表現の意味の違いについて論じる。

I. 先行研究

先行研究では、当該事態の程度が甚だしいことを表す補助形容詞として「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」について論じられてきた（飛田・浅田 1991、グループ・ジャマシイ 1998、庵・高梨・中西・山田 2001、杉村 2002, 2007, 2012, 2018、鄭・小池・船 2009）など。その結果、次のような違いが指摘されている。

「～てならない」

「気がする」、「思える」、「残念だ」など自然にある思いがこみ上げてくることを表す表現と共起して、そうした思いが自然にこみ上げてきて頭から離れないほど甚だしいことを表す。

「～てたまらない」

「寂しい」、「暑い」、「痛い」など精神的・身体的な刺激によって生じる感情・感覚表現と共起して、そうした感情や感覚の程度が耐えられないほど甚だしいことを表す。

「～てしかたがない」

「気になる」、「腹が立つ」、「喉が渇く」など自然に湧き起こる感情や感覚を表す表現と共起して、そうした感情や感覚の程度が制御できないほど甚だしいことを表す。

杉村（2018）

しかし、同じ当該事態の程度が甚だしいことを表す補助形容詞でも「～て死にそうだ」については、議論の対象とされていない。また、同じ「死」という意義素を持ち、当該事態の程度が甚だしいことを表す副詞的表現の「死ぬほど～」についても論じられていない。そのため、本稿で新しく研究の対象として取り上げたい。

一方、同じ「死」という意義素を持ち、当該事態の程度が甚だしいことを表す中国語の補語“～得要死”については、辞書に次のような記述がある。

【要死】**动** 表示程度达到极点：疼得～ | 怕得～ | 高兴得～ | 这菜咸得～。

『现代汉语词典（第六版）』（p. 1516）

【要死】…でたまらない、ひどく…である。極点に達することを表す。補語に用いる。

『忙得～/忙しくてたまらない。』『恨得～/心の底から憎む。』

『中日辞典（第2版）』（p. 1736）

しかし、これ以上詳しい記述はなく、類義語の“～得不得了”、“～得受不了”、“～得要命”との違いも明確ではない。

そこで本稿では同じ当該事態の程度が甚だしいことを表し、「死」という意義素を持つ日本語の「～て死にそうだ」、「死ぬほど～」と中国語の“～得要死”を比較する。また、それとともに、「～て死にそうだ」の類義補助形容詞である「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」、「死ぬほど～」の類義副詞である「たまらなく～」、「おそろしく～」、「信じられないほど～」、「～得要死」の類義補語である“～得不得了”、“～得受不了”、“～得要命”との比較も行う。その際、コーパスで各形式の共起語の違いを見ることにより、各表現がどのような事態を強調するのかを明らかにする。

Ⅱ. コーパス調査

次に本稿で利用したコーパスと検索の設定について述べる。コーパスから出現した表現は目視で確認して、不要なものを手を取り除いた。例えば、例(1)の「～て死にそうだ」は「腹のふくれた程度が高い」という意味ではなく、「腹が膨れた結果、死にそうになった」という実質動詞の意味を持っている。また、例(2)の“～得要死”も「病気がひどい」という補語の意味ではなく、「病気で死にそうになった」という実質動詞の意味を持っている。このような例は目で見て集計の対象から除外した。

- (1) はたして楊は病気になり、腹が脹れて死にそうだった。(陳舜臣『聊斎志異考』)
 (2) 他在发烧，病得要死，人们说他快要断气了。(安徒生童话故事集)
 (本稿訳：彼は熱が出て、病気で死にそうになり、人々は彼はまもなく息を引き取るだろうと言った。)

このようにしてコーパスから該当する表現を抽出し、共起語の数を集計した。

1. 日本語のコーパス

日本語については、日本の国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）」(BCCWJ-NT)を使用した。検索の設定は次のとおりである。

- ・検索対象：全ジャンル（レジスター）
- ・「短単位検索」の「検索フォームで検索」を使用
- ・「て死にそうだ、てならない、てたまらない、てしかたがない」の検索¹⁾
 - ①前方共起 1 （キーから 1 語） 語形が〔テ、デ〕
 キー (---) 語形が〔シヌ、ナル、タマル、シカタ、ショウ、シヨウ〕
 - ②前方共起 1 （キーから 2 語） 品詞の小分類が〔形状詞・一般〕
 キー (---) 語形が〔シヌ、ナル、タマル、シカタ、ショウ、シヨウ〕
- ・「死ぬほど」の検索
 前方共起 1 （キーから 1 語） 語形が〔シヌ〕 キー (---) 語形が〔ホド〕
- ・「たまらなく」の検索
 前方共起 1 （キーから 1 語） 語形が〔タマル〕 キー (---) 語形が〔ナイ〕
- ・「おそろしく」の検索
 キー (---) 語形が〔オソロシイ〕 AND 活用形の大分類が〔連用形〕
- ・「信じられないほど」の検索
 前方共起 1 （キーから 2 語） 語形が〔ラレル、デキル〕
 前方共起 2 （キーから 1 語） 語形が〔ナイ〕 キー (---) 語形が〔ホド〕

2. 中国語のコーパス

一方、中国語については、北京大学中国語学研究中心の「北京大学 CCL 語料庫」(CCL)を使用した。検索の設定は次のとおりである。

- ・ 検索対象：現代汉语
- ・ “～得要死、～得不得了、～得受不了、～得要命” の検索

検索欄に「得要死、得不得了、得受不了、得要命」を入れて検索した。

Ⅲ. 「～て死にそうだ」の共起語

まず「～て死にそうだ」の共起語について見る。表 1 を見ると、「～て死にそうだ」は「暑い」、「恥ずかしい」のような感情・感情形容詞や「疲れる」、「喉が渇く」のような生理的反応を表す動詞に付くことが分かる。

表 1 「～て死にそうだ」の共起語の出現数（件）（異なり語数 10 語）

順	前接語	出現数
1	暑い	4
2	恥ずかしい	3
3	疲れる、喉が渇く、可愛すぎる（計 3 語）	2
6	しんどい、気持ち悪い、眠い、寂しい、痛い（計 5 語）	1
合計		18

次に「～て死にそうだ」の類義補助形容詞である「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」との共起語の違いについて見る。BCCWJ から出現した共起語の出現数上位 10 位までを表 2 に示す。これを見ると、「～て死にそうだ」は他の 3 つの表現に比べて異なり語数も延べ語数も桁違いに少ないことが分かる。また、出現した異なり語 10 語を見ると、いずれも精神的・身体的な刺激によって生じる感情・感覚を表す形容詞や動詞であり、他の 3 つの表現の中では「～てたまらない」に近いことが分かる。「～てたまらない」はこのような感情や感覚の程度が耐えられないほど高いことを述べる表現、「～て死にそうだ」はその程度が死にそうなほど高いことを述べる表現で、「～て死にそうだ」の方が強調の程度が高いニュアンスがある。一方、「～てならない」は「気がする」など自然にある思いがこみ上げてくることを表す表現、「～てしかたがない」は「気になる」など自然に湧き起こる感情や感覚を表す表現と共起しやすい点で、「～て死にそうだ」とは共起語の傾向に違いが見られる。

表2 日本語の4つの補助形容詞の共起語の出現数の比較 (件)

順	～てならない (異なり語数 105 語)		～てたまらない (異なり語数 118 語)		～てしかたがない (異なり語数 171 語)		～て死にそうだ (異なり語数 10 語)	
1	気がする	305	～たい	141	気になる	184	暑い	4
2	思える	208	嫌だ	63	～たい	87	恥ずかしい	3
3	残念だ	67	嬉しい	51	楽しい	49	疲れる	2
4	思われる	62	欲しい	50	思える	44	喉が渇く	
5	感じがする	24	不安だ	44	嬉しい	34	可愛すぎる	1
6	感じられる	20	好きだ		気がする	33	しんどい	
7	可哀相だ	17	心配だ	40	可愛い	30	気持ち悪い	
8	嬉しい		怖い・恐い	32	～に/く見える	27	眠い	
9	悔やまれる	15	痛い	30	心配だ	26	寂しい	
10	気になる		不思議だ 残念だ	20	怖い・恐い	24	痛い	
	(以下略)		(以下略)		(以下略)		(以下略)	
	合計	982	合計	865	合計	975	合計	18

次の表3は「～て死にそうだ」の共起語となる10語が「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」、「～て死にそうだ」の4つのうちどれと共起しやすいかを比較したものである。網掛け部分は4つの形式のうち共起数が最も多いものを示している。これを見ると、「～て死にそうだ」と共起する語は、共起数では「～てたまらない」や「～てしかたがない」の方が多くなっている²⁾。この点で、先行研究で論じられている3つの表現には「気がしてならない」(4つのうちの集中度90.0%)、「嫌でたまらない」(同75.9%)、「気になって仕方がない」(同91.1%)のように特に共起しやすい語があるのとは対照的である。

表3 「～て死にそうだ」の共起語上位10位までと4つの補助形容詞との共起の比較 (件(%))

順	共起語	～てならない	～てたまらない	～てしかたがない	～て死にそうだ	合計
1	暑い	1 (7.7)	5 (38.5)	3 (23.1)	4 (30.8)	13 (100)
2	恥ずかしい	3 (12.0)	12 (48.0)	7 (28.0)	3 (12.0)	25 (100)
3	疲れる	0 (0)	0 (0)	4 (66.7)	2 (33.3)	6 (100)
4	喉が渇く	1 (14.3)	0 (0)	4 (57.1)	2 (28.6)	7 (100)
5	可愛すぎる	0 (0)	1 (33.3)	0 (0)	2 (66.7)	3 (100)
6	しんどい	0 (0)	2 (66.7)	0 (0)	1 (33.3)	3 (100)
7	気持ち悪い	0 (0)	0 (0)	4 (80.0)	1 (20.0)	5 (100)
8	眠い	0 (0)	12 (36.4)	20 (60.6)	1 (3.0)	33 (100)
9	寂しい	1 (3.7)	13 (48.1)	12 (44.4)	1 (3.7)	27 (100)
10	痛い	1 (2.3)	30 (68.2)	12 (27.3)	1 (2.3)	44 (100)

IV. 「死ぬほど～」の共起語

次に「死ぬほど～」の共起語について見る。表4を見ると、「死ぬほど～」は「怖い」、「好きだ」のような感情形容詞や「驚く」、「後悔する」のような感情動詞が上位に来るが、「ある」のような存在動詞、「疲れる」のような生理的反応を表す動詞、「飲む」のような動作動詞、「いい・よい」のような評価を表す形容詞、「寒い」のような感覚形容詞、「遅い」のような属性形容詞など広く共起する。この点で「～て死にそうだ」とは異なる。

表4 「死ぬほど～」の共起語の出現数（件）（異なり語数 102 語）

順	前接語	出現数	順	前接語	出現数	順	前接語	出現数
1	怖い	10	9	ある	4	15	いい・よい	3
2	好きだ	9		愛する			恐れる	
3	辛（つら）い	8		苦しむ			嫌いだ	
4	驚く	7		恥ずかしい			嫌だ	
5	後悔する	6		疲れる			退屈する	
6	怯える	5				痛い		
	苦しい					悩む		
	退屈だ							
22	嬉しい、気持ちいい/よい、寒い、遅い、～たい、暇だ、心配する、恋焦がれる、怖がる、喉が渇く、勉強する、飲む、引っぱたく（計13語）							2
35	寂しい、悔しい、悲しい、心苦しい、欲しい、眠い、暑い、きつい、こそばゆい、つまらない、眩しい、難しい、深い（悩み）、遠い、汚い、ひどい、安い、悪い、厭らしい、くだらない、つかみどころがない、大好きだ、不安だ、空腹だ、苦手だ、厭だ、簡単だ、重要だ、馬鹿だ、ものぐさだ、スムーズだ、思いつめる、焦がれる、憎む、落ち込む、ドキドキする、泣ける、飽き飽きする、脅える、震えあがる、笑う、笑いこける、汗をかく、頑張る、脅す、苦しめる、作業する、仕事をする、こき使う、食う、食べる、味わう、練習する、聴く、嵌める、褒める、殴る、触る、送りつける、繰り返す、待つ、待ち焦がれる、殴られる、怒られる、愛される、（仕事）が溜まる、（ドライブ）が入らない、～たがる（計68語）							1
合計								194

次に「死ぬほど～」の類義副詞である「たまらなく～」、「おそろしく～」、「信じられないほど～」との共起語の違いについて見る。BCCWJ から出現した共起語の出現数上位 10 位までを表5に示す。これを見ると、先の「～て死にそうだ」とは違い、「死ぬほど～」は他の3つの表現に比べて異なり語数や延べ語数が桁違いに違うことはない。また、異なり語の上位 10 語を見ると、感情形容詞が多く、他の3つの表現の中では「たまらなく～」に近いことが分かる。しかし、「たまらなく～」が基本的に形容詞を修飾するのに対し、「死ぬほど～」は動詞も修飾し、「ある」のような存在動詞も修飾する点で違いがある。一方、「おそろしく～」と「信じられないほど～」は「退屈だ」、「素晴らしい」、「寒い」、「冷たい」のような感情・感覚形容詞も修飾するが、「長い」、「低い」のような属性形容詞を修飾することが多い点で、「死ぬほど～」や「たまらなく～」とは違いがある。

以上のことから、「死ぬほど～」は「～て死にそうだ」に比べて多様な動詞や形容詞に付くものの、共起語の上位には感情動詞や感情形容詞が来やすいことが分かる。

表5 日本語の4つの副詞の共起語の出現数の比較（件）

順	たまらなく～ (異なり語数 98 語)		おそろしく～ (異なり語数 247 語)		信じられないほど～ (異なり語数 87 語)		死ぬほど～ (異なり語数 102 語)	
1	好きだ	17	長い	15	低い	4	怖い	10
2	嬉しい	13	高い	9	大きい	3	好きだ	9
3	嫌だ	11	いい・よい	8	違う	2	辛(つら)い	8
4	～たい		強い	7	素晴らしい		驚く	7
5	いい・よい		早い・速い	6	単純だ		後悔する	6
6	可愛い	7	かかる	5	長い		怯える	5
7	寂しい		古い		薄い		苦しい	
8	おいしい	6	重い		強い		退屈だ	4
9	愛おしい	5	退屈だ	4	不思議だ		ある	
10	恥ずかしい		寒い		豊富だ		愛する	
			危険だ		優しい		苦しむ	
			深い		冷たい		恥ずかしい	
			大きな				疲れる	
			短い				びっくりする	
	(以下略)		(以下略)		(以下略)		(以下略)	
	合計	222	合計	359	合計	102	合計	194

次の表6は「死ぬほど～」の共起語のうち上位10位までの語が「たまらなく～」、「おそろしく～」、「信じられないほど～」、「死ぬほど～」の4つのうちどれと共起しやすいかを比較したものである。網掛け部分は4つの形式のうち共起数が最も多いものを示している。これを見ると、先の「～て死にそうだ」と違い、「死ぬほど～」の共起語の上位10位までの語は4つのうち「死ぬほど～」と一番共起しやすいことが分かる。表6のうち「好きだ」と「恥ずかしい」は「たまらなく～」との共起が一番多いが、「死ぬほど～」との共起もそれぞれ34.6%、40.0%で2位となっている。このことから、「死ぬほど～」の上位に来る語は4つの副詞の中で「死ぬほど～」と共起しやすいことが分かる。

表6 「死ぬほど～」の共起語上位10位までと4つの副詞との共起の比較（件(%)）

順	共起語	たまらなく～	おそろしく～	信じられない ほど～	死ぬほど～	合計
1	怖い・恐い	0 (0)	0 (0)	0 (0)	10 (100)	10 (100)
2	好きだ	17 (65.4)	0 (0)	0 (0)	9 (34.6)	26 (100)
3	辛(つら)い	2 (20.0)	0 (0)	0 (0)	8 (80.0)	10 (100)
4	驚く	0 (0)	0 (0)	0 (0)	7 (100)	7 (100)
5	後悔する	0 (0)	0 (0)	0 (0)	6 (100)	6 (100)
6	怯える	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (100)	5 (100)
7	苦しい	1 (12.5)	2 (25.0)	0 (0)	5 (62.5)	8 (100)
8	退屈だ	1 (9.1)	5 (45.5)	0 (0)	5 (45.5)	11 (100)
9	ある	0 (0)	0 (0)	1 (20.0)	4 (80.0)	5 (100)
10	愛する	1 (20.0)	0 (0)	0 (0)	4 (80.0)	5 (100)
	苦しむ	0 (0)	1 (20.0)	0 (0)	4 (80.0)	5 (100)
	恥ずかしい	5 (50.0)	1 (10.0)	0 (0)	4 (40.0)	10 (100)
	疲れる	0 (0)	1 (20.0)	0 (0)	4 (80.0)	5 (100)
	びっくりする	0 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (100)	4 (100)

V. “～得要死”の共起語

最後に中国語の“～得要死”の共起語について見る。“～得要死”は日本語の「～て死にそうだ」と同様に、本動詞の“死”（死ぬ）の意味で使われる場合と、補語として事態の程度が甚だしいことを表す場合とがある。これは文脈を見て判断し、例(3)や例(4)のように明らかに本動詞として使われている場合は集計の対象から除外し、例(5)のようにどちらの解釈にもなる場合は、便宜上補語の“～得要死”として集計した。

- (3) 不管怎么样，我好像没觉得得要死。（荆棘鸟）

（本稿訳：どうあろうと、私は死にそうな気がしなかった。）

- (4) 直到有一天患上了重病，加上食不裹腹，病得要死。（王晓波）

（本稿訳：ある日重病に罹り、物が食べられなくなって、病気で死にそうになった。）

- (5) 在那条狭小的巷子里，她躺在床上，病得要死。（安徒生童话故事集）

（本稿訳：その狭い路地裏で、彼女はベッドに横たわり、病気がひどかった。）

（本稿訳：その狭い路地裏で、彼女はベッドに横たわり、病気で死にそうだった。）

表7を見ると、“～得要死”は“怕”（怖い、恐れる）、“吓”（驚く）、“累”（疲れる）、“恨”（恨む）、“饿”（腹が減る）などマイナスイメージの感情・感覚を表す動詞や形容詞に付きやすいことが分かる。

表7 “～得要死”の共起語の出現数(件) (異なり語数123語)

順	前接語	出現数	順	前接語	出現数	順	前接語	出現数
1	怕 吓	36	12	害怕 急 高兴 穷 闷	8	24	孤独 后悔 想 笨 烦 烦闷	4
3	累	28						
4	恨	23						
5	饿	20						
6	气	17	17	痛 冷 疼 爱 难受	6	30	好 嫉妒 寂寞 精明 厌倦 热	3
7	忙	16						
8	病	14						
9	羡慕	12						
10	渴	10	22	笑 打	5			
11	冻	9						
36	紧张、讨厌、兴奋、骂、昏、乏味、愁、乐、厌烦、小气、伤心、好奇、痒、痛苦、憋、挤（計 16 語）							2
52	担心、喜欢、心碎、失望、沮丧、懊恼、痛恨、可恶、孤单、快乐、快活、空寂、空闲、迷、羞、羞愧、愧、尴尬、压、压抑、热情、气派、烂、烂漫、闲、辛苦、苦、甜、腻、臭、好玩、难看、难吃、难懂、难过、漂亮、丑、肮脏、浪漫、贵、阔、沉、紧、快、慢、肥、瘦、精、颠、非、嫉妨、疲惫、噎、干、抖、蠢、逼、齟齬、大闹、糟蹋、呼、省、折腾、追求、背、弄、找、呆、狂、赞赏、绝望、缠（計 72 語）							1
合計								447

次に“～得要死”の類義補語である“～得不得了”、“～得受不了”、“～得要命”との共起語の違いについて見る。CCL から出現した共起語の出現数上位10位までを表8に示す。これを見ると、先の「～て死にそうだ」とは違い、“～得要死”は他の3つの表現に比べて異なり語数や延べ語数が桁違いに違うことはない。この点で「死ぬほど～」に似ている。また、異なり語の上位10語を見ると、マイナスイメージの感情・感覚を表す動詞や形容詞が多く、他の3つの表現の中では“～得受不了”や“～得要命”に近いことが分かる。しかし、両者に比べると“～得要死”は“熱”(暑い・熱い)や“疼”(痛い)のような身体的感覚を表す表現との共起が少なくなっている。一方、“～得不得了”は“高兴”(嬉しい)、“喜欢”(好きだ)のような感情形容詞だけでなく、“好”(よい)のような評価を表す形容詞、“多”(多い)、“大”(大きい)のような属性形容詞、“气”(怒る)のような感情動詞などと広く共起する。これに対し、“～得要死”の上位にはマイナスイメージの感情・感覚を表す動詞や形容詞以外には来にくいことが分かる。

表8 中国語の4つの補語の共起語の出現数の比較（件）

順	～得不得了 (異なり語数 277 語)		～得受不了 (異なり語数 40 語)		～得要命 (異なり語数 236 語)		～得要死 (異なり語数 123 語)	
1	高兴	107	饿	17	怕	47	怕	36
2	好	50	冻	15	气	42	吓	
3	多	42	热	13	吓	37	累	28
4	大	33	疼	11	冷	27	恨	23
5	气	24	痛	5	急	25	饿	20
6	忙	21	冷		热		病	18
7	紧张		累	4	饿	24	气	17
8	兴奋	20	渴	3	疼	22	忙	16
9	喜欢		胀		累	21	羡慕	12
10	羡慕 急	19	忙 价涨 痒痒	2	穷		渴	10
	(以下略)		(以下略)		(以下略)		(以下略)	
	合計	897	合計	110	合計	816	合計	451

次の表9は“～得要死”の共起語のうち上位10位までの語が“～得不得了”、“～得受不了”、“～得要命”、“～得要死”の4つのうちどれと共起しやすいかを比較したものである。網掛け部分は4つの形式のうち共起数が最も多いものを示している、これを見ると、“～得要死”の上位に来る語であっても必ずしも“～得要死”との共起が一番になるわけではなく、“～得要命”や“～得不得了”が一番になるものもある。なお、これら中国語の4つの補語の違いについては、今後さらに分析していきたい。

表9 “～得要死”の共起語上位10位までと4つの補語との共起の比較（件(%)）

順	共起語	～得不得了	～得受不了	～得要命	～得要死	合計
1	怕	9 (9.8)	0 (0)	47 (51.1)	36 (39.1)	92 (100)
2	吓	10 (12.0)	0 (0)	37 (44.6)	36 (43.4)	83 (100)
3	累	6 (10.2)	4 (6.8)	21 (35.6)	28 (47.5)	59 (100)
4	恨	1 (2.8)	1 (2.8)	11 (30.6)	23 (63.9)	36 (100)
5	饿	1 (1.6)	17 (27.4)	24 (38.7)	20 (32.3)	62 (100)
6	病	0 (0)	0 (0)	0 (0)	14 (100)	14 (100)
7	气	24 (28.6)	1 (1.2)	42 (50.0)	17 (20.2)	84 (100)
8	忙	21 (45.7)	2 (4.3)	7 (15.2)	16 (34.8)	46 (100)
9	羡慕	19 (52.8)	0 (0)	5 (13.9)	12 (33.3)	36 (100)
10	渴	1 (3.3)	3 (10.0)	16 (53.3)	10 (33.3)	30 (100)

おわりに

以上、本稿ではコーパスを利用して「～て死にそうだ」、「死ぬほど～」と中国語の“～得要死”の共起語の違いについて論じた。それぞれの表現の特徴を以下に整理しておく。

「～て死にそうだ」（補助形容詞）

- ・「暑い」、「恥ずかしい」のような感覚・感情形容詞や「疲れる」、「喉が渇く」のような生理的反応を表す動詞と共起し、その程度が死にそうなほど高いことを表す。
- ・「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」と比較すると、「～て死にそうだ」の共起語は「～てたまらない」に近い。
- ・「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」に比べて延べ語数も異なり語数も桁違いに少ない。また、これら3つの表現には「気がしてならない」（4つのうちの集中度90.0%）、「嫌でたまらない」（同75.9%）、「気になって仕方がない」（同91.1%）のように特に共起しやすい語があるのが、「～て死にそうだ」にはそのような語が見られない。この点で「～て死にそうだ」と親密度の高い共起語は見られない。

「～て死にそうだ」の例

- (6) この日は、浜松で三十六度以上を記録したらしく本当に暑くて死にそうでした（汗）
（Yahoo!ブログ）
- (7) 学校へ出す保護者名が『河童』だなんて、恥ずかしくて死にそうだと言いまして、
（風間茂子『まま子実の子河童ン家』）
- (8) さすがに私も疲れて死にそうでしてね。（六塚光『タマラセ：鉄仮面はメロンパンを夢見る』）

「死ぬほど～」（副詞）

- ・「怖い」、「好きだ」のような感情形容詞や「驚く」、「後悔する」のような感情動詞が上位に来るが、「ある」のような存在動詞、「疲れる」のような生理的反応を表す動詞、「飲む」のような動作動詞、「いい・よい」のような評価を表す形容詞、「寒い」のような感覚形容詞、「遅い」のような属性形容詞など広く共起し、その程度が死にそうなほど高いことを表す。
- ・「たまらなく～」、「おそろしく～」、「信じられないほど～」と比較すると、「死ぬほど～」の共起語は「たまらなく～」に近い。しかし、「たまらなく～」が基本的に形容詞を修飾するのに対し、「死ぬほど～」は動詞も修飾し、「ある」のような存在動詞も修飾する点で違いがある。
- ・「死ぬほど～」の共起語の上位10位までに来る語は、「たまらなく～」、「おそろしく～」、「信じられないほど～」、「死ぬほど～」の4つの副詞の中で「死ぬほど～」との共起

が一番目または二番目に多く、「死ぬほど～」との親密度が高い。

「死ぬほど～」の例

- (9) 穴がいたるところに開いていて、その下には川が見えるので死ぬほど怖い。(雨宮処凛『悪の枢軸を訪ねて』)
- (10) 悲鳴が聞こえてきたのだ。ドアの外にいた私たちは、死ぬほど驚いた。(バラ迷宮『二階堂黎人』)
- (11) 本当にわたくしも、イジメ以外でも、忘れたかったりやり直したかったりすることは死ぬほどあります。(Yahoo!知恵袋)

“～得要死”（副詞）

- ・“怕”（怖い、恐れる）、“吓”（驚く）、“累”（疲れる）、“恨”（恨む）、“饿”（腹が減る）などマイナスイメージの感情・感覚を表す動詞や形容詞と共起し、その程度が死にそうなほど高いことを表す。
- ・“～得不得了”、“～得受不了”、“～得要命”と比較すると、“～得要死”の共起語は“～得受不了”や“～得要命”に近い。しかし、“～得受不了”や“～得要命”に比べると、“热”（暑い・熱い）や“疼”（痛い）のような身体的感覚を表す表現との共起は少ない。
- ・“～得要死”の共起語の上位10位までに来る語は、“～得不得了”、“～得受不了”、“～得要命”、“～得要死”の4つの補語の中で必ずしも“～得要死”との共起が一番になるわけではない。

“～得要死”の例

- (12) 某人牙痛，去看牙医，怕得要死。(读者（合订本）总第47期)
(本稿訳：ある人が歯が痛くて、歯医者に行ったけど、死ぬほど怖かった。)
- (13) 胡杏恨他恨得要死，(欧阳山『苦斗』)
(本稿訳：胡杏は彼を死ぬほど恨んでいる。)
- (14) 只可惜它后来导致了大家都饿得要死。(王晓波) … 件事去掉，大发明和赛诗会就非常好。
(本稿訳：ただ残念なことに、それは後にみんなが腹が減って死にそうになる結果を招いた。)

今後はコーパス調査だけでなく、アンケートによる許容度調査や選択率調査を加味することにより、さらにこれらの表現の違いを明らかにし、中日両語の強調表現の体系を明らかにしていきたい。

注

- 1) 「～て死にそうだ」、「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」の検索に①と②の2つのパターンがあるのは、「残念だ」のように①によって出現するものと、「心配だ」のように②によって出現するものがあるためである。
- 2) 「可愛すぎる」は「～て死にそうだ」の数が一番多いが、単純形容詞の「可愛い」で比較すると「～てならない」は4件、「～てたまらない」は15件、「～てしかたがない」は30件、「～て死にそうだ」は0件であり、「～てしかたがない」の数が一番多くなる。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）、『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。
- グループ・ジャマシイ（1998）、『日本語文型辞典』くろしお出版。
- 商務印書館・小学館（編）（2003）、『中日辞典』（第2版）小学館。
- 杉村泰（2002）、「コーパス調査による文法性判断の有効性―「～てならない」を例にして」『日本語教育』114号、60-69頁。
- 杉村泰（2007）、「「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」の使い分け―日本語母語話者と日本語学習者の比較」『世界の日本語教育』第17号、1-15頁。
- 杉村泰（2012）、「中国語話者による日本語の複合助辞「～てならない」の許容意識と中国語の“～得不得了”による言語転移の可能性について」『中国語話者のための日本語教育研究』第3号、18-32頁。
- 杉村泰（2018）、「中国語話者における日本語の複合助辞「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」の前接語の選択」『中国語話者のための日本語教育研究』第9号、1-16頁。
- 鄭惠先・小池真理・船橋瑞貴（2009）、「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に見られる「～てならない」「～てたまらない」「～てしかたない」「～てしょうがない」の使い分け―日本語学習者に対する指導への応用」『北海道大学留学生センター紀要』第13号、4-20頁。
- 飛田良文・浅田秀子（1991）、『現代形容詞用法辞典』東京堂出版。
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室（編）（2012）『现代汉语词典』（第六版）商务印书馆。

使用したコーパス

- 国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）
 北京大学中国語学研究中心「北京大学 CCL 语料库」（CCL）

付記：本稿は平成 28-32 年度科学研究費基金（基盤研究（C））「中国人日本語学習者におけるポートフォリオ型学習データベースの構築と文法習得の研究」（研究代表者：杉村泰、課題番号 16K02809）による研究成果の一部である。

**A comparative study of Japanese “- *te shinisouda*”, “*shinuhodo*”
and Chinese “- *de yaosi*”**

SUGIMURA, Yasushi

Abstract

Japanese subsidiary adjective “- *te shikataganai*”, Japanese adverbial use of adjective “*shinuhodo*” and Chinese complement “- *de yaosi*” all used to express the strength of the event, but the difference among these three expressions is not clarified in preceding studies. To clarify the difference among these three expressions, a survey of Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ) and Center for Chinese Linguistics PKU Corpus (CCL) was conducted, and it was examined what kinds of predicates typically co-occurs with them. Survey results showed a clear difference of the typical uses of these three expressions. Moreover, compared with synonym such as “- *te naranai*”, “- *te tamaranai*”, “- *te shikataganai*”, “*tamaranaku*”, “*osoroshiku*”, “*shinjirarenaihodo*”, “- *de budeliao*”, “- *de shoubuliao*”, “- *de yaoming*” it also showed the typical co-occurrence with predicates.

Keywords : “- *te shikataganai*”; “*shinuhodo*”; “- *de yaosi*”, co-occurrence, contrastive study

卒業論文における接続詞の使用実態について —日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較—

李 成愛（山東科技大学）

要旨

本研究では、日本語母語話者との比較を通じて卒業論文における中国人日本語学習者の接続詞の使用傾向を調べた。その結果、中国人日本語学習者は日本語母語話者に比べ、接続詞の使用数は少ないものの、接続詞の種類は多いことが確認された。また、接続詞の類型別に見たところ、日本語母語話者では「並列」「列挙」「逆接」の順で多く使用されているのに対し、学習者では「並列」「逆接」「順接」の順になっており、論文において接続詞の使用傾向には違いが見られた。さらに、「並列」と「逆接」に焦点を当てて見ると、「並列」では、両方とも共通して「また」「そして」の使用が目立っているが、「また」の出現頻度には大きな差が見られ、日本語母語話者は8割であるのに対し、中国人日本語学習者は4割になっている。それは、中国人日本語学習者は「並列」を表す場合、「また」と「そして」以外に、話し言葉の接続詞「それから」「それに」を多く使用していることに関係していることがわかった。一方、「逆接」では、両者とも「しかし」を多く使用しており、前件と後件の対立を表す用法で使われているものの、日本語母語話者の文章構造及び共起表現には特徴的なところが見られた。より効果的な運用を可能にするため、論文指導の際、日本語母語話者の「しかし」の実例を提示し、特徴的な文章構造及び共起表現を身に付けさせることも必要なのではないかと思われる。

キーワード： 卒業論文、接続詞、並列、逆接

はじめに

中国で日本語専攻の学生には四年次に卒業論文の提出が義務化されている。実際の教育現場で論文指導を行う際、16時間にわたる『日語論文写作』の授業が設けられ、卒業論文の書き方についての指導が行われるが、中国人日本語学習者の卒業論文を読むと、話し言葉の接続詞の使用や不自然な接続詞が目立ち、前後の語句や文がどんな関係なのかかわかりにくいものがしばしばある。しかし、接続詞を適切に使用することによって、文章を正確に、論理的に表したり、読み手に文章の展開を予測しやすくしたりすることができる。そこで、本研究では中国人日本語学習者(以下、学習者と称する)の卒業論文における接続詞

に焦点を当て、日本語母語話者との比較を通じて、その使用実態を明らかにすると同時に、学習者の接続詞の指導に必要なのは何かについて考察する。

1. 先行研究及び本研究の意義

これまで接続詞を巡り、類型別に分類を行う研究や個別の接続詞の意味機能について様々な研究が行われているが、本研究では、主に論文における接続詞の研究及び日本語教育観点からの研究について取り上げることにする。

石黒他(2009)では、「接続表現とは、いわゆる接続詞のことで、おもに文頭に立ち、先行文脈を踏まえて、後続文脈に来る内容を予告し、読み手の理解を助ける表現の総称」であるとし、ジャンル別のコーパスを用いて、接続表現の使用実態を調査している。その結果、総文数に対する接続表現の出現頻度は「講義」が36.9%で一番多く、その次が「論文」で25.5%になっており、続いて「エッセイ」が13.2%、「社説」が12.2%、「小説」が10.4%、「コラム」が7.9%、シナリオが3.0%の順であった。ジャンルによる多寡が明確に出ており、論理性が重視される学術的な内容の文章・談話が接続表現と相性がよい様子がうかがえるとしている。さらに、石黒他(2009)では、接続表現の種類別出現頻度をジャンルごとに示しており、論文においては、『一橋論叢』という社会科学系の月刊雑誌1年分の論文をもとに、表1のようにまとめられている。

表1 石黒他(2009)の論文における接続表現の出現頻度

順位	接続表現	出現数	順位	接続表現	出現数
1	しかし	700	16	しかしながら	85
2	また	488	17	つぎに	81
3	そして	305	18	他方	81
4	さらに	233	19	とくに	68
5	たとえば	204	20	ここで	63
6	つまり	195	21	なぜなら	58
7	すなわち	194	22	ゆえに	58
8	したがって	189	23	では	57
9	ます	155	24	最後に	52
10	そこで	113	25	ところで	48
11	一方	112	26	その結果	47
12	だが	106	27	さて	47
13	このように	96	28	こうして	46
14	ただし	94	29	そのため	43
15	なお	90	29	それにたいして	43

浅井(2003)では、日本語母語話者 30 名と日本語学習者 32 名に「ゴミ問題の現状と解決法」というテーマを与え、800 字程度の作文を書いてもらい、接続詞について日本語母語話者と日本語学習者の使用の相違点を分析している。分析の結果、日本語母語話者、日本語学習者とも添加の「また」と、逆接の「しかし」が多く使われており、大きな違いはなかったと述べられている。また、日本語母語話者の使用傾向が高いのは、添加の「さらに」、逆接の「だが」、転換の「では」であり、日本語学習者の使用頻度が高いのは、添加の「しかも」、順接の「だから」、同列の「たとえば」と指摘している。さらに、日本語母語話者には話し言葉の接続詞は見られなかったが、日本語学習者には使用が見られたと報告している。

金(2017)では、「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」に収録されている作文を対象に日本語母語話者と日本語学習者の接続詞の使用傾向を調べた結果、日本語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者の接続詞の使用傾向に違いがあることを明らかにしている。特に、韓国語母語話者の場合、「順接」の「それで」の多用が目立っており、その主な原因として、韓国語母語話者が「それで」を「そこで」までカバーしている韓国語の接続詞「geu-rae-seo」と同様のものとして捉えている可能性があるとして述べられている。

俵山(2017)では、説明文・意見文・歴史文という 3 ジャンルの文章を対象とし、日本語母語話者(JP)、中国語母語話者(CN)、韓国語母語話者(KR)の接続詞の使用実態を調査・分析している。三者では、「また」「そして」の多用など共通する点が見られたが、ジャンル別に相違点も見られたとしている。具体的に、説明文では KR・CN による「そして」の多用、CN・KR による「でも」の使用、CN・KR による理由一帰結を示す形式の多さ、CN における「このように」の非用などが特徴的である。また、意見文においても同じ傾向が見られたが、そのほかに、JP による「ただ」「ただし」「むしろ」の使用が目立っていると述べられている。一方、歴史文においては、KR・CN による「そして」の多用、CN・KR による「でも」の使用の特徴は少し薄まっているが、CN・KR による「その時」の多用、「なぜか」というと」「なぜなら」の使用が目立つようになったと述べられており、以上から、ジャンル別に共通している点もあれば、それぞれ特徴的な点もあると言えるだろう。

このように、これまでの研究では日本語母語話者と学習者の接続詞の使用傾向に違いが見られ、その一因として金(2017)で指摘されているように母語の影響が考えられるほか、ジャンル別にもそれぞれ特徴的な点が見られている。つまり、母語別、文章のジャンル別によって学習者の接続詞の使用傾向はそれぞれ異なっていると言えよう。しかしながら、今までの研究のほとんどは学習者の作文に集中しており、論理性が重視される論文を取り上げた研究は管見の限りでは見当たらない。論文における学習者の接続詞の使用実態を明らかにすることは、論文を的確に指導する上で、非常に重要であるように思われる。

Ⅱ. 調査データ及び調査方法

1. 調査データ

日本語母語話者のデータは『日本語の研究』に載せられた論文 30 部(文総数は 5085)であり、学習者のデータは中国国内で日本語を専攻とする四年生の卒業論文 30 部(文総数は 5997)である。ここでは初稿、すなわち、指導教員の添削を受ける前の段階の原稿を分析対象とする。本研究で『日本語の研究』を比較対象としたのは人文科学系の論文であり、論文一部あたりの平均文章数が学習者の卒業論文に近いからである。

2. 調査方法

本研究では、接続詞の認定及び類型の分け方はそれぞれ石黒他(2009)と石黒(2008)に従っている。石黒(2008)は今までの研究を参考に、接続詞をジャンルにかかわらず収録し、さらにそれを類型別に分けたものである。また、石黒他(2009)は石黒(2008)をもとに、接続詞の一部を削除・補完し、137 種にまとめたものである。

まず、石黒他(2009)のリストを認定基準として今回のデータの文頭に現れた接続詞を取り出し、その使用数をカウントし、文総数に対する出現頻度を調べる。また、接続詞ごとにその使用数をカウントし、具体的にどのような接続詞がよく使われているのかについて調べる。さらに、類型別の使用傾向を見るために、石黒(2008)の類型をもとに抽出した接続詞を分類し、その使用傾向を分析する。

Ⅲ. 調査結果と考察

1. 全体の使用傾向

接続詞は日本語母語話者の論文に 1280 例、総文数の 25.2%の文に見られており、石黒他(2009)の論文における接続詞の割合(25.5%)と極めて近い結果となっている。一方、学習者の卒業論文には 880 例、総文数の 14.7%の文に見られ、全体的に学習者より日本語母語話者の方が接続詞を多く使用している結果となった。また、今回の研究では、学習者の方が様々な種類の接続詞を用いており、日本語母語話者は 59 種類であるのに対し、学習者は 67 種類の接続詞を用いていた。

さらに、具体的にどのような接続詞がよく使われているのかを調べるため、接続詞ごとにその使用数をカウントし、表 2、表 3 にまとめた。ここでは、今回のデータで出現頻度順に上位 30 位まで挙げている。表 2、表 3 から、日本語母語話者と学習者は「また」「しかし」を多く使用しており、石黒他(2009)、浅井(2003)、俵山(2017)の結果とも一致していることがわかる。また、表 1、表 2 の順位 15 までの接続詞を見ると、14 項目の接続詞が

共通して使われており、順位 30 までを見ると、25 項目の接続詞が共通して使われていることがわかる。従って、その順番は若干違っているものの、使用傾向は極めて近いと言えるだろう。

表 2 日本語母語話者の接続詞の出現頻度

順位	接続詞	出現数	順位	接続詞	出現数
1	また	219	16	これに対し	26
2	しかし	115	17	そのため	23
3	たとえば	75	18	さて	21
4	なお	70	19	具体的には	17
5	一方	67	20	以上	15
6	つまり	65	21	その結果	15
7	まず	61	22	とくに	15
8	ただし	54	23	ところが	14
9	そして	46	24	では	14
10	このように	45	25	ところで	12
11	さらに	40	26	最後に	11
12	そこで	39	27	よって	11
13	したがって	35	28	しかしながら	10
14	つぎに	33	29	それにたいして	7
15	すなわち	31	30	だが	8

一方、表 3 の学習者の接続詞の出現頻度を見ると、順位 5 位まではすべて石黒他(2009)に挙げている接続詞になっており、順位 10 位までを見ると、表 1、表 2 と共通するところが多いが、それ以外の接続詞の使用には違う傾向が見られ、特に日本語母語話者では使用が見られない話し言葉の接続詞「それに」「それで」「だから」「でも」等の使用が非常に目立っている。

表 3 学習者の接続詞の出現頻度

順位	接続詞	出現数	順位	接続詞	出現数
1	しかし	134	16	それから	14
2	また	87	17	そこで	14
3	そして	84	18	だから	14
4	たとえば	74	19	その結果	12
5	したがって	49	20	具体的には	10
6	最後に	30	21	しかも	9
7	まず	29	22	すなわち	9
8	一方	28	23	第二に	9

9	さらに	26	24	では	9
10	そのため	25	25	でも	9
11	それに	22	26	第一に	9
12	つまり	21	27	第三に	8
13	とくに	19	28	ゆえに	7
14	その後	16	29	それにたいして	7
15	それで	15	30	なぜなら	6

さらに、類型別の使用傾向を見るため、石黒(2008)の類型に従って分類し、類型別出現数の上位3位をみると、下記の図1と図2のように日本語母語話者では「並列」「列挙」「逆接」の順で多く使用されているのに対し、学習者では「並列」「逆接」「順接」の順になっており、論文において接続詞の使用傾向に違いがあることがうかがえる。

この使用傾向の違いの背景には学習者が使用している教材とも関連がある。学習者が使用している『新編日語』の第一冊から第四冊の中で、新出語彙として取り上げられている接続詞をまとめて示すと次の表4のようである。その類型別の割合をみると、全体の58.6%が「並列」「逆接」「順接」に属されており、その中で「並列」が24.1%、「逆接」が20.7%、「順接」が13.8%を占めている。このように、接続詞のほとんどは初期段階で導入されており、「並列」「逆接」「順接」の順に多く導入されていることがわかる。

教材	接続詞
第一冊	あるいは、しかし、じゃ、そこで、そして、それから、それで、それとも、たとえば、ですから、では、でも、ところで
第二冊	さて、しかも、すなわち、すると、そのかわり、それでも、それなら、それに
第三冊	及び、そうして、そのうえ、それが、ただし、だって
第四冊	それなのに、ところが

表4 『新編日語』の全四冊における接続詞

このような結果を踏まえ、本研究ではひとまず上位3位の中で、日本語母語話者と学習者とも多く使用されている「並列」「逆接」の接続詞に焦点を当て、具体的にどのような接続詞が使用され、日本語母語話者と学習者の使用上の相違点を分析・考察し、学習者の論文指導に必要なのは何かについて考える。

図 1 日本語母語話者の接続詞の類型別出現頻度

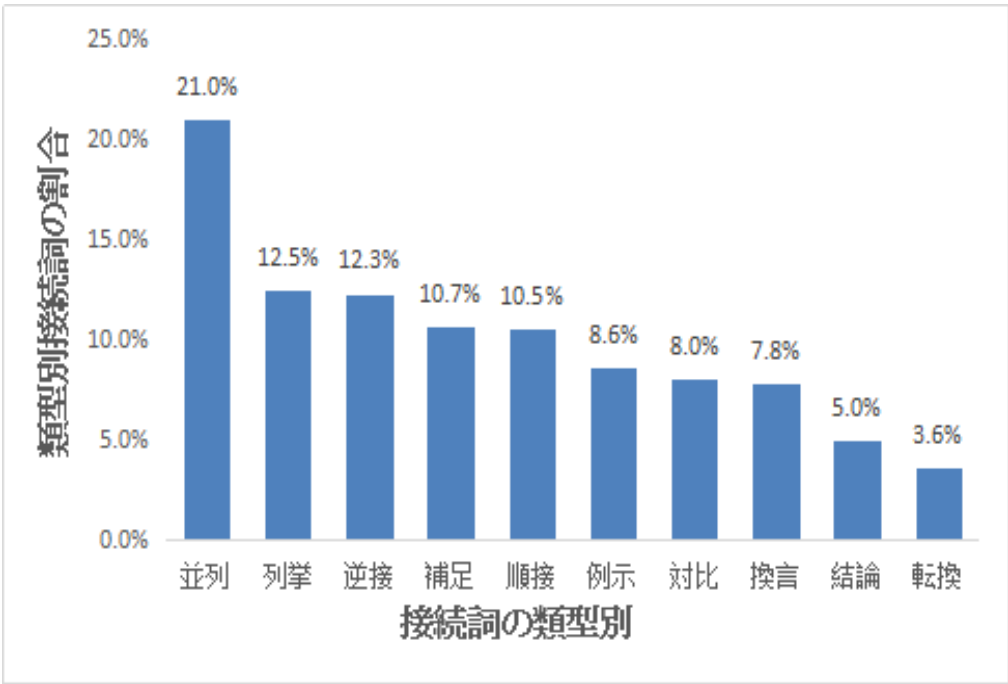
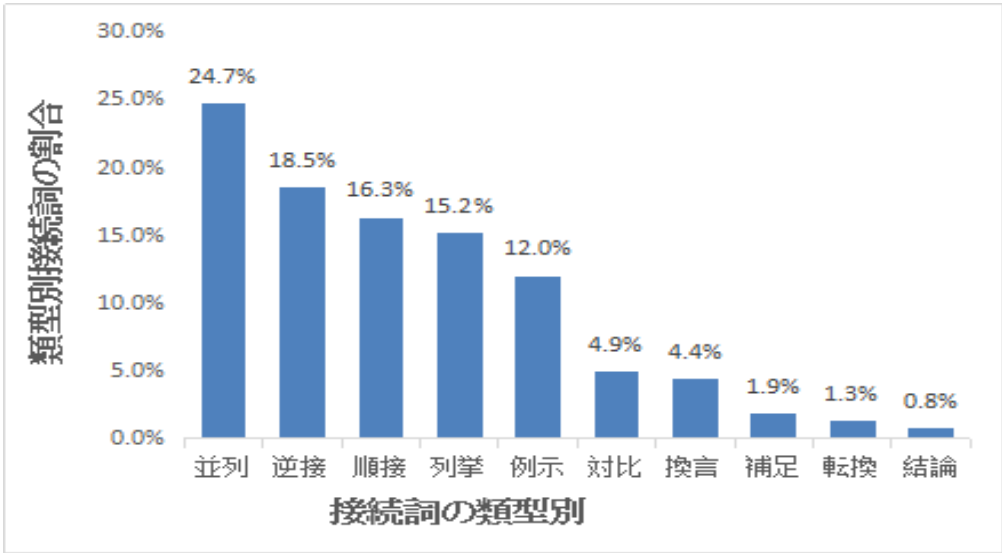


図 2 学習者の接続詞の類型別出現頻度



2. 「並列」の接続詞の使用傾向

表 5 は、論文における日本語母語話者と学習者の「並列」の接続詞の出現頻度を表したものである。石黒(2012 : 176)では、「また」「そして」は、「複数の項目を列挙するときに使われ、長くて複雑な内容を整理するときには便利」とあり、その中で「また」は「二番目以降に出てくるものなら何でも対等につなげられ、文脈を問わず使いやすいもの」で

あると述べられているが、今回のデータでも「また」と「そして」の使用例は多く見られた。表5からわかるように、日本語母語話者に使われている「並列」の接続詞は「また」と「そして」がほとんどであり、その中でも「また」の使用が非常に目立ち、8割以上を占めている。

表5 「並列」の接続詞の出現頻度

接続詞	日本語母語話者	学習者
また	219(81.7%)	87(40.1%)
そして	46(17.1%)	84(38.7%)
かつ	1(0.4%)	0(0.0%)
そのうえ	1(0.4%)	1(0.5%)
それにくわえて	1(0.4%)	0(0.0%)
しかも	0(0.0%)	9(4.1%)
それから	0(0.0%)	14(6.5%)
それに	0(0.0%)	22(10.1%)
合計	268(100.0%)	217(100.0%)

一方、学習者の場合、日本語母語話者と同じく、一番よく使われているのは「また」で、その次が「そして」になっている。しかし、「また」の出現頻度は日本語母語話者と比べ、大きな差が見られた。具体的に、日本語母語話者は「また」が8割を占めているのに対し、学習者は4割になっている。それは、日本語母語話者は「並列」を表す場合、主に「また」と「そして」を用いる傾向があるが、学習者はその他に、話し言葉の接続詞「それから」「それに」を多く用いられていることに関係しているのではないと思われる。学習者のデータをみると、接続詞「それから」は30部中11部の論文から14例が確認されており、「それに」は30部中8部の論文から22例が確認された。以下の(1)から(6)学習者の使用例(CNで表示)である。

- (1) 本稿では先行研究を踏まえながら、まず日本妖怪の定義、妖怪の種類や妖怪の特質など妖怪の起源を説明する。それから、日本妖怪の歴史を通して、日本人の心理的变化を述べる。(CN-19)
- (2) ここでは、日本のゆとり教育と中国の素質教育の実施方法について研究したいと思う。それから、比較を通して中日の実施方法の相違点を究明する。(CN-22)
- (3) 本論文は、まず、災害事件の概念と特徴について説明した。それから、東日本大震災と四川大地震を例に、中日の地震報道を比較し、報道の時効と内容の比較を含む。

(CN-23)

- (4) そのとき、猫の数はまだ少なく、皇室だけ猫を飼う権力を持っている。それに、その時期の日本民族は輸入品に対して崇拝の心理を持っているから、猫に対しても非常に尊重な気持ちを持っている。(CN-2)
- (5) その後いろいろがあつてまた実家に戻ったが、十五歳の時母親は病気でなくなった。それに父親との関係が悪かったので、十九歳でひとり暮らしが始まった。(CN-13)
- (6) まず第一に、結婚文化には時代のマークがある。それに、価値観、宗教的な信念、美的な意識、性的な意識を反映するだけではなく、歴史の発展の研究にとって材料と視点を提供する。(CN-24)

上記の学習者の「それから」の使用例を見ると、(1)は、前件の「妖怪の起源」に続いて後件の「日本人の心理的变化」について述べるのに用いられており、(2)(3)も似たような用法で、いずれもある物事に続いて、別の物事が起こることを表している。また、学習者の「それに」の使用例を見ると、(4)は前件の「猫の数はまだ少なく、皇室だけ猫を飼う権力を持っている」に後件「日本民族は輸入品に対して崇拝の心理を持っている」を追加して説明するために用いられており、(5)(6)もある物事に別の物事を付け加えて述べるために用いられていることがわかる。では、なぜ学習者は論文において「それから」「それに」を用いるのだろうか、その原因について探ってみることにする。まず、学習者の使用している日本語の教材『新編日語』をみると、「それから」「それに」は次のように説明されている。

表 6 教材における「それから」「それに」の扱われ方

接続詞	新出課	中国語訳	例文
それから	第 1 冊 第 6 課	然后、其次	運動場でバスケットボールやラジオ体操などをします。 <u>それから</u> 日本語の朗読をします。
それに	第 2 冊 第 9 課	而且	ちょうどその時、サンダルを履いていたので血がたくさん出て、しばらくは歩けませんでした。 <u>それに</u> 、その日、帰る途中、大雨に降られてほんとうに困りました。

表 6 の「それから」の中国語訳「然后」「其次」は「ある事柄に引き続いて、別の事柄が発生すること(呂 2004 : 326)」を表しており、「それに」の中国語訳の「而且」は、「意味をさらに 1 つ付け加えること(呂 2004 : 116)」を表している。以上から、学習者は教材で学習した用法通りに「それから」「それに」を使っており、中国語の「然后」「其次」と「而且」の意味用法の影響であると考えられる。また、論文において「それから」「それに」は、

いずれも学習の早い段階で導入され、かなり定着しているため、使いやすいことと日本語教育現場で話し言葉と書き言葉の区別についてあまり浸透していないことが影響しているように思われる。

一方、日本語母語話者の場合、論文において「それから」「それに」の使用例は0例になっている。(7)から(10)は日本語母語話者の使用例(JPで表示)であり、使用例からある物事に続いて、別の物事が起こることを表す場合や前に述べた内容に関係のある別の情報を追加したり複数の項目を列挙したりする場合は「また」や「そして」を用いる傾向があることがわかる。

- (7)そこで、本節では、ヤルが大阪方言の中でどのように記述されてきたかを簡単にまとめたうえで(2.1節)、先行研究の問題のありかを指摘する(2.2節)。そして、それを踏まえて本稿の立場を明らかにする(2.3節)。(JP-1)
- (8)過去において既定的な命題はタ形で表され、現在において既定的な命題は状態述語の基本形および状態形で表される。そして、有田(2007)によれば、不完全時制節(=B類)の条件節は非既定的な命題を持たなければならない。(JP-29)
- (9)3.2において、大卒層は意見のばらつきが小さく特定の回答に集中する傾向が強いこと、つまり大卒層では言語意識の均質性が相対的に高いことを見た。また3.3において、大卒層は「漢字表記を好み、外来語の原音的表記を好み、“ことばの乱れ”に関しては保守的な反応を見せる」などの傾向が強いということを示した。(JP-5)
- (10)国内外で日本語を学習する人々の数は、その間にも堅調に増加しており、より良質の文法記述を求めるニーズは、むしろ増大している。また、日本語を学習する際に生じる文法的な問題がすべて解決されて、記述されなければならないことがなくなったわけでもないだろう。(JP-6)

3. 「逆接」の接続詞の使用傾向

日本語記述文法研究会(2009:78)によると、「逆接」の接続表現には、「ある原因から予測される結果が実現しないことを示す反予測の用法」と「先行部の内容と後続部の内容を対比する用法」があるとしており、石黒(2008:70)では、「ある内容が与えられたとき、そこから無理なく想定できる含意に反する展開は、すべて『しかし』で表せる」としており、「逆接」の表現である「しかし」は幅広い用法を持っていることがうかがえる。次の表7のように、論文において「逆接」を表す際、日本語母語話者は7割以上、学習者は8割以上が「しかし」を選んでおり、「逆接」の接続詞の中で、「しかし」が一番よく使われていることがわかる。

日本語母語話者と学習者では、共通して「しかし」が多く使われているものの、実際の使用例をみるとその使用傾向には大きな違いが見られた。学習者では、論文30部中28部

に 134 例があり、すべての使用例は前に述べたことと対立する内容を述べる際、「しかし」を用いる傾向が見られた。以下の(11)(12)(13)は学習者の使用例である。(11)は、前件「世界の地域間の結びつきが強くなってきており」と後件「さまざまな貿易摩擦が生じてきている」の対立を表しており、(12)(13)も同じく前件と後件の対立を表している。

表 7 「逆接」の接続詞の出現頻度

接続詞	日本語母語話者	学習者
しかし	115 (72.8%)	134 (82.2%)
ところが	14 (8.9%)	3 (1.8%)
しかしながら	10 (6.3%)	5 (3.1%)
だが	8 (5.1%)	1 (0.6%)
ただ	5 (3.2%)	4 (2.5%)
とはいえ	2 (1.3%)	0 (0.0%)
けれども	1 (0.6%)	0 (0.0%)
それでも	1 (0.6%)	5 (3.1%)
それなのに	0 (0.0%)	1 (0.6%)
でも	0 (0.0%)	9 (5.5%)
とはいっても	1 (0.6%)	0 (0.0%)
にもかかわらず	1 (0.6%)	1 (0.6%)
合計	158 (100.0%)	163 (100.0%)

- (11) 近年、世界経済の発展につれ、世界の地域間の結びつきが強くなってきており、国際交流とグローバル化が著しく進んでいる。しかし、グローバル化に伴い、国際競争が厳しくなり、さまざまな貿易摩擦問題が生じてきている。(CN-5)
- (12) 以前は、訪問着には柔らかい生地が使用されることが一般的であった。しかし、最近では日本各地の様々な素材を使った訪問着が増え、柄もまさに多種多様となった。(CN-8)
- (13) 男女雇用均等法が公布したあと、女性を取り巻く環境は確かに徐々に改善され、さまざまな分野で活躍する女性が著しくなっている。しかし、日本社会に根強い伝統的な性別分業意識や介護の負担などの問題は女性の就業の邪魔をしている。(CN-20)

一方、日本語母語話者の使用例には前件の後件の対立を表す用法で使われているものの、文章の構造には特徴的なところが見られた。下記の(14)(15)日本語母語話者の使用例である。(14)は、まず先行研究の内容を紹介した上、それを「しかし」で否定し、続いて『ヤル』がどのような機能を果たしているのかという点については、これまで明らかになっていなかった」と述べ、先行研究の不足点を指摘している。また、「そこで」を挟んで、「ヤル」が持つ機能を明らかにする」を述べ、筆者の研究目的を明確に提示している。(15)も同

様な用法で使われている。今回の日本語母語話者のデータで、論文 30 部中 25 部に「しかし」の使用例が見られ、その中でも、11 部の論文から上記の構造で使われていることが確認された。

- (14) この「ヤル」は、主語が話し手と同等、あるいは目下の人物である場合に用いられ、主語が目上の人物である場合に使用される「ハル」などの敬語形式との対比において、「親愛」の待遇形式とされてきた。

しかし、「親愛」と言っても、多くの先行研究では敬語使用との対比が前提にあり、この「ヤル」がどのような機能を果たしているのかという点については、これまで明らかになっていなかった。そこで本稿では、待遇表現が「距離」を表すための表現手段であるという立場に立ち、大阪府八尾市方言(以下「八尾市方言」)話者のデータをもとに、ヤルが持つ機能を明らかにする。(JP-1)

- (15) ある漢字の筆画を簡略化した異体字は一般に略字体(略字)と呼ばれるが、こうした略字の使用状況についての通史的な研究は、より実用に即した場面における文字使用の実態を明らかにする上で有用と思われる。しかし従来の漢字字体史研究では、比較的規範に即した場面における字体使用の研究が主であった。特に字書・字様書や写経・石経等の規範的場面における標準字体の変遷については、石塚晴通(1999)を始め体系的な研究が進められ、中国及び日本における標準字体の変遷過程が明らかにされている一方で、実用的場面(或いは、規範に則る必要性のない場面)における字体使用の歴史については不明な面も多いと言える。そこで本稿では、実用的場面での使用が想定される字体である略字を取り上げ、その中でも特に、異なる字種の字体が共通する構成要素によって簡略化される現象に着目する。(JP-7)

また、(16) (17) も日本語母語話者の使用例であり、日本語母語話者の「しかし」の使用例には次のような特徴的な共起表現も見られた。(16) では、「蘭文典では格がオランダ語のみならず言語全般に見られる普遍的概念」であると根拠を示した上で、「日本語の格についても当然、考慮に入れている」との筆者の主張をまとめたものであり、(17) も同様の使用例で、「と思われる」「と考える」などの筆者の主張をまとめる表現と共起させながら、自説を効果的に導入するために用いられていることがわかる。今回のデータで、論文 30 部中 25 部に「しかし」が使われ、その中で上記のような使用例は 25 部中 10 部の論文から確認された。

- (16) とはいうものの、蘭文典はオランダ語を翻訳し理解するためのものであって、日本語の文法について直接的に解説するものではないため、そこから日本語の格についての考えを抽出することは不可能と思われるかもしれない。しかし、後に挙げる(1) (2)

にあるように、蘭文典では格がオランダ語のみならず言語全般に見られる普遍的概念であることを主張しており、日本語の格についても当然、考慮に入れているものと思われる。(JP-22)

(17) もっとも、ゴンザ資料に収載されている語彙は当時の方言資料としては豊富であるが、18世紀前期という共時態のものに過ぎないため、通時的な展開を考察するのは困難である。しかし、そこに記されている語彙が、当時において存在していた可能性は高く、その例からだけでも何らかの傾向はつかめるのではないかと考える。(JP-26)

以上のように、接続詞「しかし」の使用において、学習者と日本語母語話者は前件と後件の対立を表すために用いられているものの、日本語母語話者の文章構造及び共起表現には特徴的なところが見られた。具体的に先行研究の一部の内容を「しかし」で否定し、先行研究の不足点を指摘した上、「そこで」を挟んで筆者の研究目的を明確に提示したり、「と思われる」「と考える」などの筆者の主張をまとめる表現と共起させながら、自説を効果的に導入したりするために用いられていることが明らかになった。

また、表7から、逆接の接続詞「しかし」の使用は、日本語母語話者が7割以上、学習者が8割以上になっており、学習者の方がもっと多く使用されている結果になっている。それは、日本語母語話者は「しかし」の以外に「ところが」「しかしながら」「だが」等が使われているが、学習者の場合は「しかし」以外の接続詞の使用が少ないことに関連しているのではないと思われる。

さらに、表7からわかるように、学習者では話し言葉の接続詞「でも」の使用が目立っており、日本語母語話者は0例に対し、9例もある。以下の(18)(19)は学習者の「でも」の使用例である。(18)は「中国人」と「日本人」の数字に対するそれぞれ違う考えを比較して述べられており、(19)は「紫宸殿の前」と「太和殿の前庭」を比較したものであり、いずれも前件と後件を対比して述べられていることがわかる。

(18) 中国人は偶数がラッキーだと思っている。でも、日本人はペアになっているものは分離しやすく、単数はより安定していると考ええる。(CN-25)

(19) 紫宸殿の前には東側に桜があり、西側に橘がある。でも、太和殿の前庭の空間には何の植物もない。(CN-27)

学習者の「でも」の使用について、浅井(2003)、俵山(2017)でも言及しており、俵山(2017: 146)では、「文体的な差の理解が十分でなかった可能性を示している」と述べられている。確かに、表8からわかるように、「しかし」と「でも」は比較的早い段階で導入されており、中国語との対応関係もはっきりしているため定着がよく、使いやすい接続詞でもある。また、中国語の訳はほぼ同じであり、教材では話し言葉なのか書き言葉なのかの提示がはっ

きりしておらず、論文において「しかし」と「でも」の混用が起こる可能性は十分あると言えよう。今後、このような混用を避けるためには、論文の指導の際に書き言葉の接続詞に統一するよう指導していく必要があるだろう。

表 8 教材における「しかし」「でも」の扱われ方

接続詞	新出課	中国語訳	例文
しかし	第 1 冊 第 6 課	可是、但是	大学の生活はとても忙しいです。 <u>しかし</u> 、たいへん楽しいです。
でも	第 1 冊 第 11 課	可是、不过	毎日難しい中国史の勉強をしています。 <u>でも</u> 、将来好きな研究ができます。

おわりに

本研究では、日本語母語話者との比較を通じて卒業論文における学習者の接続詞の使用傾向を調べた。その結果を以下にまとめる。

全体的に学習者は日本語母語話者に比べ、接続詞の使用数は少ないものの、接続詞の種類は多いことが確認された。類型別に見ると、日本語母語話者では「並列」「列挙」「逆接」の順で多く使用されているのに対し、学習者では「並列」「逆接」「順接」の順になっており、論文において接続詞の使用傾向には違いが見られた。

また、日本語母語話者と学習者とも多く使用されている「並列」「逆接」の接続詞に焦点を当てて分析した結果、「並列」の接続詞の中で、両者とも「また」の使用が一番多く、その次が「そして」になっている。しかし、「また」の使用頻度には大きな差が見られ、日本語母語話者は 8 割を占めているのに対し、学習者は 4 割になっている。これは学習者は「また」「そして」以外に、話し言葉の接続詞「それから」「それに」を多く用いられていることに関連していることが明らかになった。

一方、「逆接」の接続詞では、日本語母語話者と学習者は共通して「しかし」を多く使用しており、両者とも前件と後件の対立を表す用法で使われているものの、その使用傾向には大きな違いが見られた。学習者は単に前件と後件の対立を表すために用いられているが、日本語母語話の使用例には特徴的な文章構造及び特徴的な共起表現を用い、先行研究の不足点を指摘した上、研究目的を明確に提示したり、自説を効果的に導入したりするために用いられている傾向が見られた。

以上の結果を踏まえ、今後の学習者の論文指導において、書き言葉の接続詞に統一するよう指導する必要がある。前に述べた内容に関係のある別の情報を追加したり、似たような内容を列挙したりする場合は「それから」「それに」ではなく、「また」或いは「そして」を用いるよう指導する必要がある。また、より効果的な運用を可能にするため、論文にお

ける日本語母語話者の「しかし」の実例を通して、特徴的な文章構造及び特徴的な共起表現を学習者に提示することも必要なのではないかと思われる。

今回は主に「並列」と「逆接」に焦点を当てて分析してきたが、今後は日本語母語話者と学習者とも多く使用されている「列挙」と「順接」の接続詞の使用傾向についても検討していきたい。

参考文献

- 浅川美穂子(2003)、「論説的文章における接続詞について—日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較」『言葉と文化』4、87-97 頁。
- 石黒圭(2008)、『文章は接続詞で決まる』光文社出版。
- 石黒圭(2009)、「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学センター紀要』12、73-85 頁。
- 石黒圭(2012)、『この一冊できちんと書ける！論文・レポートの基本』日本実業出版社。
- 石黒圭(2016)、「社会科学専門文献の接続詞の分野別文体特性—分野ごとの論法と接続詞の選択傾向との関係」(庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版)、161-182 頁。
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村沙弥子・劉羊(2009)、「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学センター紀要』12、73-85 頁。
- 金蘭美(2017)、「YNU 書き言葉コーパスに見られる日本語学習者の接続詞の使用について—韓国語母語話者の『逆接』関係の接続詞に注目して」『国語研究』35、87-93 頁。
- 金蘭美(2017)、「YNU 書き言葉コーパスに見られる日本語学習者の接続詞の選択—韓国語母語話者の『それで』の多用に注目して」『ときわの杜論叢』4、52-68 頁。
- 俵山雄司(2017)、「流れがスムーズになる接続詞の使い方」(石黒圭『わかりやすく書ける作文シラバス』くろしお出版)、141-157 頁。
- 日本語記述文法研究会編(2009)、『現代日本語文法 7 第 12 部談話・第 13 部待遇表現』くろしお出版。
- 呂叔湘(2004)、『中国語文法用例辞典』東方書店。
- 周平・陈小芬(2012)、『新编日语』上海：上海外语教育出版社。

Current Situation of the Use of Conjunctions in Graduation Thesis: A Comparison Between Japanese Native Speakers and Japanese Learners in China

LI, Chengai

Abstract

The research investigates the graduation theses and compares the difference in Japanese native speakers and Japanese learners in China with regard to the frequency of using conjunctions. The

result shows that Japanese learners in China use less conjunctions than Japanese native speakers, but in wider variety. In addition, as for the category of conjunctions, the result reveals that native speakers prefer the order of “coordinating conjunctions”, “enumeration”, and “reverse connectives”, however, Japanese learners in China are very likely to accept the order of “coordinating conjunctions”, “reverse connectives”, and “sequential connectives”. Moreover, when concentrating on “coordinating conjunctions” and “reverse connectives”, the research finds 「*mata*」 and 「*soshite*」 which fall into the category of “coordinating conjunctions” are highly used. However, the difference of using 「*mata*」 between native speakers and Japanese learners in China is significant. Precisely, 80% of the native speakers are willing to use 「*mata*」, while only 40% of Japanese learners in China show such tendency. Regardless of 「*mata*」 and 「*soshite*」, Japanese learners in China also use 「*sorekara*」 and 「*soreni*」 to represent “coordinating conjunctions”. What’s more, native speakers and Japanese learners in China are very likely to use 「*sikashi*」 for connecting transitional paragraphs concerning “reverse connection”, which stresses the feature of article’s construction and co-expression. To have a better use of conjunctions, it is necessary for Japanese learners in China to understand the feature of thesis construction and co-expression by listing Japanese native speakers’ examples during the thesis supervision.

Keywords : graduation thesis, conjunctions, coordinating conjunctions, reverse connectives

『類聚名義抄』に見られる漢字とその訓読みの対応関係

芮 真慧（遼寧大学）

要旨

本論文は、古辞書『類聚名義抄』を介して現在一般に行われている漢字とその訓読みの対応関係が平安時代においてどのようなになっているかを考察し、平安時代の日常常用の漢字とその訓読みを定め、平安時代における常用の漢字とそれに対する訓読みはどのようなものであるかを明らかにすることを目的としている。

「常用漢字表」（1981）を基準として一般の社会生活で最もよく使われる漢字とその訓読みを取り上げて調査の範囲を設定しており、常用字393字を分析した。まずは調べる常用字が『類聚名義抄』に収録されているかどうかを確認したうえ、その漢字の持つ和訓に常用訓が収録されているかどうかを調べた。次に、『類聚名義抄』の和訓に対する声点とその配列に焦点を当て、確認できた漢字とその訓読みが『類聚名義抄』において一般的な読み方であったかどうかを中心に考察した。

その結果、『類聚名義抄』において常用字と常用訓の対応が確認できたものが393字のうち298字で、声点付きのものが180字、常用訓の配列順が最上位のものが224字であり、その対応関係がかなり安定していることが分かった。常用訓の『類聚名義抄』での掲出順位は『類聚名義抄』における「常用訓」を判断する基準ともいえ、掲出最上位和訓に注目することによって平安時代における常用字と常用訓がどれほど定着していたかを明らかにした。

キーワード： 常用字、常用訓、定訓、声点、定着

はじめに

日本語において訓読が始まった当初、その訓は一つの漢字に対して複数存在し、固定的ではなかったが、漢文訓読法の発達にともない、次第に1義1訓の形に訓が限定されていく。そこで、本論文では、訓読が盛んに行われていた平安時代の古辞書『類聚名義抄』を取り上げて、現在一般に行われている漢字とその訓読み¹⁾の対応関係がどのようなになっているかを考察し、『類聚名義抄』における日常常用の漢字とその訓読みを定める。

調査の範囲は、「常用漢字表」（1981）を基準として一般の社会生活で最もよく使われる漢字とその訓読みとし、①『類聚名義抄』における「常用漢字表」所載の漢字とその訓読

みとの対応関係を分析し、②確認できた漢字とその訓読みが一般的なものであったかどうかを中心に考察する。ここで言う一般的な読み方とは「定訓」と呼ばれてきたものであり、一つの漢字と訓において、漢字から直ちに訓が思い浮び、その字の固有の呼称となっているものである。

I. 先行研究と研究対象

漢字はもともと 中国語 を表記するための文字であり、日本語の語意と一対一の対応をしないため、平安末期に成立した漢和辞書『類聚名義抄』では1字に30以上の訓があるものも見られる。なお、漢文訓読方法が発達するとともに、一つの漢字に対して固定的な読み方が定着し、一般化されていき、「定訓」というものが現れた。本章では定訓に関する先行研究と本研究で取り上げる「常用漢字表」について簡単に述べる。

1. 漢字の定訓

漢字の「定訓」について、これまで種々の研究が行われており、小林(1970)、山田(1971)、峰岸(1984a)、峰岸(1984b)、峰岸(1984c)及びこれらを収録した峰岸(1986)などが挙げられる。小林(1970)は訓点資料における「訓字」の使用に定訓の存在を認める研究であり、山田(1971)はキリスト版『落葉集』を用いて漢字の和訓の位置からそれがその字の定訓であるかどうかを判断し、定訓の存在を証明している。峰岸(1984a)、峰岸(1984b)などは上代文献の中の借用表記と『色葉字類抄』を利用して定訓の存在を証明している。

小林(1970)は、主に平安初期訓点資料²⁾を用いて「平安初期訓点資料における読添え用の訓字一覧」を作成し、これを通して読添え用の訓字は、一定の漢字が、一定のテニヲハを表すものとして用いられているということを解明した。小林(1970)によると、訓字は読まれる漢字として使われ、漢字の諸訓の中から取り出した特定訓の一つで、漢字と訓の対応関係を示したものである。

山田(1971)は、「訓が複数もしくは多数認められる時、その諸訓の中でどんな関係が見られるのか」という主題をめぐって研究を行い、「定訓」について「某一字について、その呼称を考へる時に、直ちに喚起される字訓を、先づ第一にその字の定訓（またはその一つ）に擬することが許されるであらうと考へる。それは又、一般に、漢字の三要素といはれる形音義の、音とならんですでに、その字固有の呼称となったものと考えてもよいであらう。しかしながら、その定訓は訓である以上、字義と全く無関係には成立しない。（後略）」と述べている。

一方、峰岸(1984a)、峰岸(1984b)、峰岸(1984c)及びこれらを収録した峰岸(1986)によると、上代文献の漢字にはすでに「定訓」というものが存在しており、平安時代の文献においてもこの「定訓」が確認できる。特に、峰岸(1984c)では平安時代における漢字の定訓について詳細に記述している。真仮名文・漢字文・漢字仮名交じり文など漢字表記

を有する文章における借字表記に注目し、『新撰万葉集』『日本紀寛宴和歌』（平安初期）、『将門記』と古記録（平安中期）から和訓に基づく借字表記を取り出して分析し、当時期における漢字の定訓の存在を検証している。そしてその理由を次のように述べている。

（前略）借字表記に使用された漢字というのは、語形表示の機能のみを有するものである。しかし、その語形表示が借訓に依って行われる場合、その和訓というものは、多くの人々にとって容易に想起し得る自明のものでなければならぬであろう。そのような和訓を有する漢字でなければ、語形表示の機能を果たすことはできないからである。しかし、そのような和訓というものは、その漢字にとって定着度の極めて高いものということになろう。（後略）

上述の定訓に関する研究は大きく三つにまとめられる。一つ目は上代文献を利用した借用表記による定訓の確認であり、二つ目は訓字を用いて漢字とその和訓の関係を証明したものである。三つ目は『類聚名義抄』『色葉字類抄』『落葉集』など辞書を利用して定訓の存在を証明している研究である。そのうち、借用表記を利用した研究方法は上代文献に限られ、訓字による研究は訓点資料の膨大さなどを考えるとそれを用いて漢字とその訓読みの対応関係を調べるには限界がある。また、従来の研究においては「定訓」の存在を証明することに留まっているものが多く、その出現数については言及していない。そのために本研究では、峰岸（1984）や山田（1971）などの研究成果を踏まえ、『類聚名義抄』を取り上げて調査し、平安時代にあったことが確認できる漢字とその訓読みの数を調べる。

2. 「常用漢字表」（1981）

1981 年、日本内閣訓令告示によって公布された「常用漢字表」は一般社会生活においての漢字使用の目安を示している。「本表」及び「付表」から成り、「本表」には 1,945 字が取り上げられ、これらの漢字に対して、音 2,187 種類、訓 1,900 種類が認められている。そのうち、音読みのみ定義されている漢字が 737 字、訓読みのみ定義されている漢字が 40 字、音訓ともに定義されている漢字が 1,168 字である。便宜上、本論文では「常用漢字表」（1981）所載の漢字を常用字、それに対応する訓読みを常用訓と呼ぶことにする。

なお、2005 年 2 月から「常用漢字表」（1981）の見直しに関する議論が始まり、2010 年の 11 月には「常用漢字表」（2010）が告示され、196 字が追加された。確かに 1981 年の「常用漢字表」には様々な問題があり、不十分であるが、「現代国語を書き表す場合の漢字使用の目安」としての機能を果しているという点については評価すべきである。また、漢字数は別にして常用度の高い常用字である点についても、日常生活でよく使われる漢字を取り上げようとする本論文の趣旨に反しない。このことを踏まえた上で、本研究では「常用漢字表」（1981）に収められている常用字と常用訓を通して調査を行い、1,945 字のう

ち、常用訓が一つで、またその常用訓が名詞である漢字（393 字）を研究対象とする。例えば「秋（あき）」「脚（あし）」のようなものである。

先行研究においては、主に字訓、定訓という用語が出てくるが、漢字と訓の関係を示す点においては常用字、常用訓と同様である。従って、本論文では統一して常用字、常用訓という用語を用いる。

Ⅱ．研究方法と調査資料

既に述べたように、本論文の目的は『類聚名義抄』における現代日本語の漢字とその訓読みとの対応関係を明らかにすることである。そのために、まず『類聚名義抄』において確認できる常用字と常用訓の各出現数を調査し、本論文で常用訓と呼んでいるものと『類聚名義抄』の定訓を比較する。もし、『類聚名義抄』において確認できる常用字と常用訓の数が多く、常用訓と『類聚名義抄』の定訓との一致度も高ければ、常用字と常用訓との対応関係が『類聚名義抄』において安定していたということが証明できる。ここで言う多い数と高い一致度は少なくとも半分以上が確認できた場合である。

1. 『類聚名義抄』

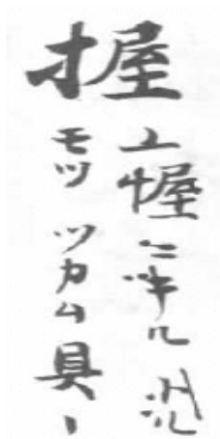
平安時代の古辞書である『類聚名義抄』は、略して『名義抄』とも呼ばれる。漢文を読むために作られた『名義抄』は、漢字・漢語を 120 部首に分類・掲出し、それに字形・音注・訓義を付した古代最大の漢和辞書である。原撰本と改編本との 2 種があり、原撰本は 11 世紀から 12 世紀ごろに、法相宗の僧侶の手によって、改編本は真言宗の僧侶の手によって、12 世紀から 13 世紀にかけて成立したと言われている。原撰本は出典名を明示する点で資料的価値が高く、図書寮本の法部一帖が伝存している。改編本は、原撰本にあった仏教語などの特殊語彙や出典注記などを省略し、多数の異体字と和訓を追加して作成したものである。その伝本としては、観智院本、高山寺本、蓮成院本、西念寺本、宝菩提院本が知られているが、完本としては、観智院本（現天理図書館蔵）が残されている。本論文で取り扱うのは菅原是善著・正宗敦夫校訂の観智院本『類聚名義抄』（風間書房、1962 年）であるが、その構成を見てみると、篇目とする漢字の扁旁冠脚の順序を表示したもの 1 冊と、他の佛法僧の 3 部に分かれている 10 冊の計 11 冊である。佛は佛上、佛中、佛下本、佛下末、法は法上、法中、法下、僧は僧上、僧中、僧下となっている。

まず、常用字が『類聚名義抄』に収録されているかどうかを確認した上で、その漢字の持つ和訓に常用訓が収録されているかを調べる。その際、同時に和訓索引で常用訓も確認する。次に、『類聚名義抄』における漢字に対応する和訓の数とその出現順位及び声点について調べることで、それが常用字と常用訓であるかを検討する。なお、「常用漢字表」の常用字・常用訓と区別するために、『類聚名義抄』についてはカギ括弧（「」）を用いて「常用字」「常用訓」と示す。

調査においての歴史的仮名遣いの問題、異体字の問題については次の方針に従う。歴史的仮名遣いの処理：常用訓と『類聚名義抄』に収録されている訓が「アタイ」と「アタヒ」、「クライ」と「クラキ」のような歴史的仮名遣いにより異なる場合には、二つの語が同じであると見なす。

異体字の処理：常用字と『類聚名義抄』に収録されている漢字が「価」と「價」のように字形・字体に相違があっても、これらは同字として扱う。

2. 『類聚名義抄』における声点と和訓



【図1】「握」佛下本 67 いる。声点を加えて出典のある和訓とそうではないものを区別（観智院本『類聚名義抄』）し、その信憑性を示している。

観智院本は掲出漢字に対して二行割注形式で字音、字義、異体字、注記、和訓などを示している。例（【図1】）で示すように、本文には掲出漢字があつて割注に字音、和訓などを示するのが一般的である。和訓に対しては声符加点が行われており、序文・凡例とも見られる篇目帖では、和訓の声点を「片仮名有朱点者皆有証拠。亦有師説。」と説明している。これについては、小松（1964）が以下のことを指摘している。出典の説明がない観智院本において和訓に施されている声点は、アクセントの表記のほか、証拠があるか師説によるものかということを示して

一方、『類聚名義抄』における和訓の配列には、一般的なものが先に書かれるという傾向が見られる。その配列を問題として、今西（1976）は図書寮本、観智院本、蓮成院本の各名義抄から重なる部分の掲出文字だけ取り出し、それぞれの和訓の配列を比較し、大勢においては原義に近いものや一般的なものを前に出そうとする傾向がみられると述べている。その比較と傾向の分析は、原撰本である図書寮本の和訓は観智院本などの後世に改編された名義抄にも受け継がれており、後世に意図的な配列変更がない限り改編本系和訓群の最初の部分に置かれているはずだという仮説に基づいて行われたものである。その結果について今西（1976）は次のように述べている。

（前略）以上、その意図がはっきりしないものもあった³⁾が、大勢においては原義に近いものや一般的なものを前に出そうとする傾向がみられる。この態度は、ただ単に図書寮本の如き原型本の和訓を写し、その後に訓を追加するといったような消極的なものではない。これは今日の辞書編纂の態度としてはごくあたりまえのことであろうが、漢字に加えられた訓を類聚することのみでその目的を果たしていた当時の辞書としては、画期的な試みと思われる。

また、草川（1990）でも、名義抄の和訓の性質上の特色は、日常生活に関係の深い語が多いことであると指摘している。つまり、『類聚名義抄』において声点が施されているというのは、その和訓がしかるべき典拠文献において確実に使われていたということを示しており、且つ和訓の配列には一般的なものが先に書かれているのである。

Ⅲ. 『類聚名義抄』における常用字と常用訓の定着

本節では、『類聚名義抄』における常用字と常用訓の出現数の調査結果を報告する。調査対象の 393 字のうち 298 字 (75.8%) が確認され、大多数の常用字と常用訓が『類聚名義抄』において対応関係を成していることがわかった。

1. 『類聚名義抄』における声点付きのもの

『類聚名義抄』における調査内容を分析してまとめると、常用訓に声点が付けられている常用字は 180 字あり、全体の 60.4%を占めている。以下に「秋／あき」「麻／あさ」の例を挙げる。

例：秋 アキ（平上） 法下 13

麻 アサ（平平） 法下 103

該当の漢字と訓読み及びその所在を【表 1】に示す。

【表 1】『類聚名義抄』における声点付きのもの（180 字）

漢字	常用訓	所在	漢字	常用訓	所在	漢字	常用訓	所在
秋	あき	法下 13	車	くるま	僧中 83	根	ね	佛下本 93
麻	あさ	法下 103	毛	け	僧上 100	軒	のき	僧中 86
脚	あし	佛中 132	獣	けもの	佛下本 131	齒	は	法上 102
穴	あな	法下 58	心	こころ	法中 68	灰	はい	佛下末 46
脂	あぶら	佛中 133	腰	こし	佛中 135	箱	はこ	僧上 78
網	あみ	法中 121	琴	こと	法中 25	柱	はしら	佛下本 109
泡	あわ	法上 14	事	こと	佛上 80	旗	はた	僧中 28
井	い	僧下 81	暦	こよみ	法下 109	機	はた	佛下本 95
勢	いきおい	僧上 83	衣	ころも	法中 136	裸	はだか	法中 137
池	いけ	法上 2	坂	さか	法中 66	花	はな	僧上 5
石	いし	法中 1	杯	さかずき	佛下本 120	林	はやし	佛下本 126
市	いち	法下 40	先	さき	佛下末 18	原	はら	法下 109
糸	いと	法中 111	桜	さくら	佛下本 84	腹	はら	佛中 118
命	いのち	僧中 3	里	さと	佛中 110	針	はり	僧上 122

今	いま	僧中 1	猿	さる	佛下本 127	額	ひたい	仏下本 22
芋	いも	僧上 36	沢	さわ	法上 41	左	ひだり	佛上 84
色	いろ	僧下 125	塩	しお	法中 68	羊	ひつじ	僧中 94
牛	うし	佛下末 1	汁	しる	法上 2	人	ひと	佛上 1
内	うち	僧下 109	筋	すじ	僧上 62	姫	ひめ	佛中 13
裏	うら	法中 137	鈴	すず	僧上 114	昼	ひる	佛上 78
漆	うるし	法上 26	銭	ぜに	僧上 130	房	ふさ	法下 93
枝	えだ	佛下本 124	底	そこ	法下 100	節	ふし	僧上 77
尾	お	法下 87	園	その	法下 86	文	ふみ	僧中 61
扇	おうぎ	法下 93	田	た	佛中 106	穂	ほ	法下 11
公	おおやけ	佛下末 27	竜	たつ	僧下 74	帆	ほ	法中 103
奥	おく	佛下末 35	棚	たな	佛下本 96	矛	ほこ	僧中 36
弟	おとうと	佛下末 28	谷	たに	佛下末 30	骨	ほね	佛下本 5
鬼	おに	僧下 47	種	たね	法下 19	誉	ほまれ	法上 70
己	おのれ	佛下末 13	玉	たま	法下 105	前	まえ	佛下末 29
貝	かい	佛下本 13	便	たより	佛上 30	誠	まこと	法上 58
蚕	かいこ	僧下 38	血	ち	僧中 16	松	まつ	佛下本 86
顔	かお	佛下本 22	力	ちから	僧上 81	的	まと	佛中 103
鏡	かがみ	僧上 137	父	ちち	僧中 50	窓	まど	法下 60
垣	かき	法中 55	塚	つか	法中 59	幻	まぼろし	法中 136
影	かげ	佛下本 32	土	つち	法中 48	身	み	佛上 86
潟	かた	法上 37	筒	つつ	僧上 65	右	みぎ	佛上 84
肩	かた	佛中 125	堤	つつみ	法中 58	水	みず	法上 1
方	かた	僧中 30	鼓	つづみ	僧中 68	湖	みずうみ	法上 24
傍	かたわら	佛上 3	綱	つな	法中 121	道	みち	佛上 44
門	かど	法下 74	翼	つばさ	僧上 95	緑	みどり	法中 135
鐘	かね	僧上 126	罪	つみ	僧中 11	皆	みな	佛中 100
壁	かべ	法中 49	露	つゆ	法下 71	南	みなみ	佛上 85
紙	かみ	法中 135	弦	つる	僧中 25	峰	みね	法上 109
髪	かみ	佛下本 35	戸	と	法下 92	麦	むぎ	佛上 70
河	かわ	法上 1	所	ところ	法下 93	虫	むし	僧下 15
川	かわ	佛上 80	扉	とびら	法下 93	旨	むね	佛中 98
皮	かわ	僧中 68	共	とも	僧上 48	村	むら	佛下本 93
岸	きし	法上 111	友	とも	僧中 52	紫	むらさき	法中 135

北	きた	法上 99	鳥	とり	僧中 110	室	むろ	法下 52
絹	きぬ	法中 117	菜	な	僧上 25	藻	も	僧上 27
君	きみ	佛中 60	名	な	佛中 58	本	もと	佛下本 113
肝	きも	佛中 122	半	なかば	佛上 80	物	もの	佛下末 6
霧	きり	法下 68	情	なさけ	法中 96	桃	もも	佛下本 86
際	きわ	法中 44	鉛	なまり	僧上 114	矢	や	僧中 32
茎	くき	僧上 19	波	なみ	法上 20	山	やま	法上 106
草	くさ	僧上 1	涙	なみだ	法上 7	故	ゆえ	僧中 54
菓	くすり	僧上 6	縄	なわ	法中 132	夢	ゆめ	法下 135
首	くび	佛下末 28	荷	に	僧上 6	由	よし	佛中 107
雲	くも	法下 72	鶏	にわとり	僧中 136	綿	わた	法中 121
倉	くら	僧中 2	布	ぬの	法中 110	私	わたくし	法下 12

2. 『類聚名義抄』における和訓の配列

和訓の配列において一番前に出てくる和訓（『類聚名義抄』における「常用訓」）が常用訓である常用字は 224 字あり、全体の 75.2%を占めている。【表 2】は該当の漢字とその訓読み及び所在の一覧である。例えば「あかつき」を例にあげると、表に示されている「無」は、「あかつき」という訓に声点がないことを示し、ある場合は「有」で表す。「1/8」の「1」は「あかつき」の掲出順位が最上であることを示し、「8」は「暁」が持つ和訓数を示す。224 字のうち、和訓が 1 例のものは 71 字であり、これらのものは和訓の配列位置とは関係なく漢字とその訓読みの対応が安定していると言える。

【表 2】『類聚名義抄』における「常用訓」（224 字）

漢字	常用訓	声点と順位	所在	漢字	常用訓	声点と順位	所在
暁	あかつき	無 1/8	佛中 101	種	たね	有 1/4	法下 19
秋	あき	有 1/2	法下 13	旅	たび	無 1/5	僧中 30
麻	あさ	有 1/2	法下 103	玉	たま	有 1/1	法中 13
脚	あし	有 1/7	佛中 132	民	たみ	無 1/1	僧下 77
価	あたい	無 1/3	佛上 20	血	ち	有 1/1	僧中 16
穴	あな	有 1/13	法下 58	千	ち	無 1/1	佛上 82
兄	あに	無 1/4	佛中 41	力	ちから	有 1/6	僧上 81
姉	あね	無 1/2	佛中 22	父	ちち	有 1/1	僧中 50
油	あぶら	無 1/5	法上 27	津	つ	無 1/3	法上 34
尼	あま	無 1/1	法下 87	塚	つか	有 1/1	法中 59

網	あみ	有 1/1	法中 121	月	つき	無 1/3	佛中 137
泡	あわ	有 1/4	法上 14	土	つち	有 1/8	法中 48
井	い	有 1/1	僧下 81	筒	つつ	有 1/1	僧上 65
勢	いきおい	有 1/6	僧上 83	堤	つつみ	有 1/3	法中 58
池	いけ	有 1/2	法上 2	鼓	つづみ	有 1/5	僧中 68
石	いし	有 1/3	法中 1	綱	つな	有 1/1	法中 121
泉	いずみ	無 1/1	佛中 105	妻	つま	無 1/2	佛中 7
板	いた	無 1/1	佛下本 92	罪	つみ	有 1/3	僧中 11
糸	いと	有 1/6	法中 111	露	つゆ	有 1/6	法下 71
犬	いぬ	無 1/2	佛下本 127	寺	てら	無 1/2	法下 143
今	いま	有 1/6	僧中 1	戸	と	有 1/5	法下 92
芋	いも	有 1/4	僧上 36	時	とき	無 1/16	佛中 86
色	いろ	有 1/1	僧下 125	所	ところ	有 1/1	法下 93
牛	うし	有 1/1	佛下末 1	年	とし	無 1/1	佛上 80
内	うち	有 1/2	僧下 109	共	とも	有 1/12	僧上 48
海	うみ	無 1/1	法上 1	鳥	とり	有 1/2	僧中 110
梅	うめ	無 1/2	佛下本 83	菜	な	有 1/3	僧上 25
裏	うら	有 1/5	法中 137	名	な	有 1/7	佛中 58
漆	うるし	有 1/3	法上 26	半	なかば	有 1/3	佛上 80
江	え	無 1/1	法上 1	鉛	なまり	有 1/2	僧上 114
枝	えだ	有 1/1	佛下本 124	波	なみ	有 1/7	法上 20
尾	お	有 1/4	法下 87	涙	なみだ	有 1/1	法上 7
扇	おうぎ	有 1/8	法下 93	縄	なわ	有 1/11	法中 132
丘	おか	無 1/5	佛上 76	西	にし	無 1/1	佛上 79
奥	おく	有 1/3	佛下末 35	鶏	にわとり	有 1/3	僧中 136
弟	おとうと	有 1/5	佛下末 28	布	ぬの	有 1/2	法中 110
男	おとこ	無 1/3	佛中 111	根	ね	有 1/3	佛下本 93
鬼	おに	有 1/1	僧下 47	猫	ねこ	無 1/2	佛下本 133
各	おのおの	無 1/2	佛中 58	野	の	無 1/4	佛中 110
己	おのれ	有 1/2	佛下末 13	齒	は	有 1/6	法上 102
蚊	か	無 1/3	僧下 21	灰	はい	有 1/1	佛下末 46
貝	かい	有 1/3	佛下本 13	箱	はこ	有 1/3	僧上 78
蚕	かいこ	有 1/2	僧下 38	橋	はし	無 1/5	佛下本 103
顔	かお	有 1/3	佛下本 22	柱	はしら	有 1/6	佛下本 109

鏡	かがみ	有 1/8	僧上 137	旗	はた	有 1/3	僧中 28
垣	かき	有 1/3	法中 55	裸	はだか	有 1/2	法中 137
影	かげ	有 1/3	佛下本 32	花	はな	有 1/4	僧上 5
潟	かた	有 1/1	法上 37	鼻	はな	無 1/3	佛中 79
肩	かた	有 1/1	佛中 125	林	はやし	有 1/2	佛下本 126
刀	かたな	無 1/1	僧上 85	原	はら	有 1/8	法下 109
傍	かたわら	有 1/10	佛上 3	腹	はら	有 1/3	佛中 118
糧	かて	無 1/1	法下 32	針	はり	有 1/1	僧上 122
門	かど	有 1/2	法下 74	春	はる	無 1/1	佛中 86
紙	かみ	有 1/1	法中 135	左	ひだり	有 1/3	佛上 84
髪	かみ	有 1/1	佛下本 35	羊	ひつじ	有 1/1	僧中 94
河	かわ	有 1/1	法上 1	人	ひと	有 1/5	佛上 1
川	かわ	有 1/1	佛上 80	独	ひとり	無 1/4	佛下本 130
皮	かわ	有 1/2	僧中 68	姫	ひめ	有 1/1	佛中 13
岸	きし	有 1/7	法上 111	昼	ひる	有 1/1	佛上 78
北	きた	有 1/6	法上 99	袋	ふくろ	無 1/1	佛上 13
君	きみ	有 1/2	佛中 60	節	ふし	有 1/2	僧上 77
肝	きも	有 1/2	佛中 122	冬	ふゆ	無 1/1	法上 45
霧	きり	有 1/2	法下 68	帆	ほ	有 1/2	法中 103
際	きわ	有 1/7	法中 44	星	ほし	無 1/2	佛中 86
茎	くき	有 1/1	僧上 19	蛭	ほたる	無 1/1	僧下 22
草	くさ	有 1/4	僧上 1	骨	ほね	有 1/1	佛下本 5
菓	くすり	有 1/1	僧上 6	誉	ほまれ	有 1/4	法上 70
口	くち	無 1/1	佛中 26	洞	ほら	無 1/10	法上 2
国	くに	無 1/1	法下 84	前	まえ	有 1/9	佛下末 29
首	くび	有 1/9	佛下末 28	誠	まこと	有 1/1	法上 58
雲	くも	有 1/2	法下 72	松	まつ	有 1/1	佛下本 86
倉	くら	有 1/6	僧中 2	的	まと	有 1/11	佛中 103
蔵	くら	無 1/7	僧上 33	窓	まど	有 1/1	法下 60
位	くらい	無 1/5	佛上 3	眼	まなこ	無 1/1	佛中 63
車	くるま	有 1/3	僧中 83	幻	まぼろし	有 1/1	法中 136
毛	け	有 1/3	僧上 100	身	み	有 1/7	佛上 86
獣	けもの	有 1/2	佛下本 131	右	みぎ	有 1/5	佛上 84
心	こころ	有 1/5	法中 68	水	みず	有 1/2	法上 1

腰	こし	有 1/1	佛中 135	湖	みずうみ	有 1/2	法上 24
琴	こと	有 1/3	法中 25	道	みち	有 1/13	佛上 44
事	こと	有 1/6	佛上 80	緑	みどり	有 1/1	法中 135
暦	こよみ	有 1/4	法下 109	皆	みな	有 1/2	佛中 100
衣	ころも	有 1/8	法中 136	南	みなみ	有 1/1	佛上 85
坂	さか	有 1/4	法中 66	源	みなもと	無 1/4	法上 1
境	さかい	無 1/2	法中 67	峰	みね	有 1/3	法上 109
杯	さかずき	有 1/1	佛下本 120	耳	みみ	無 1/6	佛中 1
先	さき	有 1/2	佛下末 18	宮	みや	無 1/1	法下 56
桜	さくら	有 1/1	佛下本 84	昔	むかし	無 1/4	佛中 89
里	さと	有 1/5	佛中 110	麦	むぎ	有 1/1	佛上 70
猿	さる	有 1/1	佛下本 127	虫	むし	有 1/1	僧下 15
塩	しお	有 1/1	法中 68	娘	むすめ	無 1/2	佛中 11
舌	した	無 1/1	佛中 24	旨	むね	有 1/6	佛中 98
品	しな	無 1/7	佛中 26	村	むら	有 1/2	佛下本 93
島	しま	無 1/1	法上 107	室	むろ	有 1/6	法下 52
霜	しも	無 1/1	法下 67	藻	も	有 1/5	僧上 27
汁	しる	有 1/4	法上 2	元	もと	無 1/3	佛下末 20
巢	す	無 1/3	佛下本 120	本	もと	有 1/3	佛下本 113
姿	すがた	無 1/5	佛中 23	者	もの	無 1/4	佛中 100
筋	すじ	有 1/1	僧上 62	物	もの	有 1/5	佛下末 6
隅	すみ	無 1/6	法中 42	桃	もも	有 1/5	佛下本 86
炭	すみ	無 1/2	佛下末 52	屋	や	無 1/1	法下 92
墨	すみ	無 1/1	佛下末 54	矢	や	有 1/10	僧中 32
瀬	せ	無 1/1	法上 4	社	やしろ	無 1/4	法下 4
銭	ぜに	有 1/1	僧上 130	山	やま	有 1/3	法上 106
底	そこ	有 1/11	法下 100	湯	ゆ	無 1/4	法上 33
園	その	有 1/2	法下 86	故	ゆえ	有 1/16	僧中 54
田	た	有 1/5	佛中 106	雪	ゆき	無 1/7	法下 69
宝	たから	無 1/5	法下 44	弓	ゆみ	無 1/1	僧中 23
薪	たきぎ	無 1/1	僧上 35	夢	ゆめ	有 1/3	法下 135
竜	たつ	有 1/1	僧下 74	災	わざわい	無 1/2	佛下末 40
棚	たな	有 1/2	佛下本 96	綿	わた	有 1/5	法中 121
谷	たに	有 1/5	佛下末 30	私	わたくし	有 1/8	法下 12

【表1】と【表2】では、それぞれ『類聚名義抄』における声点付きの常用訓と最上位和訓が常用訓であるものを取り上げた。『類聚名義抄』で声点が施されているというのは、その和訓がしかるべき典拠文献において確実に使われていたということを示しており、和訓の配列には一般的なものが先に書かれている。つまり、【表1】と【表2】に示される常用字と常用訓は、その対応関係はかなり安定していると判断できる。特に【表1】で取上げた180字のうち154字(85.6%)は常用訓に声点が施されているだけではなく、その配列順位も最上位である。

常用訓の配列順位が最上位ではないものはわずか26字であり、これらは和訓の数が二つや三つのものが多く(9例)、四つ以上の場合には常用訓の順位が上位にあるもの(「命／いのち・2/4」、「便／たより・2/8」)がほとんどである。また、これら26字に対応する常用訓には全て声点が付いている。

【表2】の場合も同じことが言える。224字のうち、声点付きのもの(「秋／あき(有・1/2)」、「種／たね(有・1/4)」)は154字(68.7%)であり、声点のないもの(「兄／あに(無・1/4)」、「旅／たび(無・1/5)」)は70字(31.3%)である。このうち、27字は「泉／いずみ(無・1/1)」のような和訓が一つのものである。そして、「姉／あね(無・1/2)」のようなものが12字、「価／あたい(無・1/3)」のようなものが9字である。声点は施されていないが、和訓の数が少ないということは漢字とその訓読みとの対応関係が比較的安定しているということを表している。

おわりに

本論文では、平安時代の古辞書『類聚名義抄』を取り上げながら、『類聚名義抄』における現代日本語の漢字とその訓読みとの対応関係を分析してみた。

調査の対象は「常用漢字表」(1981)所載の漢字で、定義されている常用訓が一つで、またその常用訓が名詞である393字である。調査の結果、『類聚名義抄』においては常用字と常用訓の対応が見られるものが多く(298字)、声点付きのものが180字(60.4%)であり、常用訓の配列順が最上位のものが224字(75.2%)であった。常用訓の『類聚名義抄』での掲出順位は『類聚名義抄』における「常用訓」を判断する際の標準であり、掲出最上位和訓に注目することによって平安時代における常用字と常用訓の定着度合いが明らかになった。

また、現在と異なって平安時代には「常用漢字表」のようなものがなかったため、両者を直接に比較することはできないが、本論文の研究手法によって、平安時代の「常用字」と「常用訓」を定めることは可能である。

今回は『類聚名義抄』のみを取り上げて、平安時代の常用字と常用訓の対応関係及びその定着度に関して考査した。今後の課題としては、『類聚名義抄』における「常用字」に関する判断について詳しく検討し、平安時代の国語辞書である『色葉字類抄』を用いて調

査を行い、さらに『色葉字類抄』における常用字の掲出順位と見出しの漢字の右斜め上に引いて斜線「\」（合点）を考察することで、平安時代の「常用字」と「常用訓」を判定していきたい。

注

- 1) 1981 年と 2010 年、日本内閣訓令告示によって公布された「常用漢字表」所載の漢字とそれに対応する訓読みを指す。
- 2) 『持人菩薩経』『願経四分律古点』『中観論古点』『東大寺諷誦文』『妙法蓮華経化城喻品古点』など計 26 点の訓点資料を扱っている。
- 3) 例えば「識」の場合、観智院本、蓮成院本では図書寮本の和訓「サトル、ミル、モノミル」のうち、モノミルの前に「アツム、ココロ、タマシヒ」の三つの訓が置かれている。今西 (1976) はこれを意図不明のものとしている。それに対して、「凍」の場合、観智院本、蓮成院本では図書寮本の和訓「シミテ」の前に「コル、サムシ、サユ、ココヒタリ」の四つの訓が置かれている。これは一般的な訓を先に出したものである。

研究助成金：

本研究は 2017 年遼寧省教育庁人文社会類基本科研項目青年項目 (WQN201714) と 2017 年度遼寧大学科学研究基金項目 (社科類) 青年基金 (LDQN2017015) による研究成果の一部である。

参考文献

- 今西浩子 (1976)、「類聚名義抄・和訓の配列」『訓点語と訓点資料』57 訓点語学会、61-86 頁。
- 草川 昇 (1990)、「『類聚名義抄』小考その一」『名古屋女子大学紀要人文・社会篇』36、253-265 頁。
- 小松英雄 (1964)、「語調資料としての類聚名義抄—図書寮本および観智院本にみえる和訓の声点の均質性の検討」『東京教育大学文学部紀要』47、1-37 頁。
- 小林芳規 (1970)、「上代における書記用漢字の訓の体系」『国語と国文学』47 (10)、50-80 頁。
- 峰岸 明 (1984a)、「上代における漢字の定訓について」『横浜国大國語研究』2、1-13 頁。
- 峰岸 明 (1984b)、「上代漢字の定訓考証：『万葉集』を資料として」『横浜国立大学人文紀要 第二類 語学・文学』31、85-106 頁。
- 峰岸 明 (1984c)、「平安時代における漢字の定訓について」『国語と国文学』61 (10)、44-60 頁。
- 峰岸 明 (1986)、『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版社。
- 山田俊雄 (1971)、「漢字の定訓についての試論：キリシタン版落葉集小玉篇を資料として」『成城国文学論集』4、1-256 頁。

The Corresponding Relationship between Chinese Characters and their Kun-yomi in ‘Ruijummyogisho’

Rui, Zhenhui

Abstract

This paper utilizes the ancient dictionary ‘Ruijummyogisho’ as the research material to investigate the corresponding relationship between Japanese current Chinese Characters and their Kun-yomi in Heian era, so as to determine the common Chinese Characters in Heian era and their corresponding Kun-yomi. The purpose of this paper is to clarify the commonly used Chinese characters and the corresponding Chinese characters in Heian era.

This paper takes common Chinese Characters and Kun-yomi in the Joyo Kanji-hyo in 1981 as the research objects, including 393 Joyo-jis. The Joyo Kanji-hyo in 1981 contains the Chinese Characters and Kun-yomi used commonly in Japanese daily life. The investigation procedures include two steps: firstly, check whether investigated common Chinese Characters are contained in ‘Ruijummyogisho’, and check whether Kun-yomi of these Chinese Characters contain Joyo-kun. Secondly, focuses on the Kun-yomi with ton mark (Sho-ten) in ‘Ruijummyogisho’ and the order of theses Kun-yomi, and investigates whether the identified Chinese Characters and their Kun-yomi are commonly used in daily life.

The research results showed that, in all 393 Joyo-ji, 298 joyo-ji with Joyo-kun can be found in ‘Ruijummyogisho’, and among them 224 Joyo-ji have Joyo-kun as the first order, and 180 Joyo-ji have Joyo-kun with ton mark (Sho-ten). All above means that the corresponding relationship between 393 Joyo-ji and their Kun-yomi is relative steady.

In ‘Ruijummyogisho’, the order of Kun-yomi can be said to be the standard to judge the ‘Joyo-kun’ in the Heian era. Therefore, this paper focuses on the first-order Joyo-kun in ‘Ruijummyogisho’ and clarifies the fixation problem of Joyo-ji and Joyo-kun in the Heian era.

Keywords: Joyo-ji, Joyo-kun, Tei-kun, Ton mark (sho-ten), Fixation

中国生まれの朝鮮族男性の進路選択過程 —日本留学経験を中心として—

市川章子（一橋大学研究員）

要旨

筆者は、これまで中国生まれの朝鮮族に対し、質的研究の分析手法である複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach:TEA）を用いて日本への定住を選択するまでに働く力を可視化することを試みてきた。

日本在住の中国生まれの朝鮮族女性を対象とした先行研究では、日本の学校が合わないことで中国に戻った朝鮮族女性が、帰国後日本語を通じていくつかの承認体験を得ることで自信を回復する過程が示された。

本研究の目的は、中国生まれの朝鮮族男性の進路選択の過程を明らかにすることである。日本在住の中国生まれの朝鮮族女性の紹介を経て、私費留学生として来日した中国生まれの朝鮮族男性に対し、4年間にわたってインタビューを行った。分析は、ヤーン・ヴァルシナーの提唱する文化心理学に由来にするTEAを用いた。中国国内を越境し、中国から日本へ越境するなかで、故郷や韓国への思いが変化していることが明らかになった。

キーワード： 中国生まれの朝鮮族男性、複線径路等至性アプローチ、私費留学生

はじめに

本稿は、中国生まれの朝鮮族男性の進路選択過程について、半構造化インタビュー、複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach:以下TEA）（安田・サトウ 2012;安田・サトウ 2017）を用いて論じる。私費留学生¹⁾として来日した中国生まれの朝鮮族男性が、中国国内を越境し、中国から日本へと越境するなかで、経験する日常のプロセスを描きだすものである。

I. 問題の所在と研究目的

朝鮮族の中国への移住は、1860年代²⁾に始まったといわれている。高木（1990）が訳した「朝鮮族簡史」延辺人民出版社に詳しくまとめられている。1840年の「第一次アヘン戦争」のあと、中国は次第に半植民地封建社会になった。その後、1858年・60年には「天津条約」「北京条約」が英国ほかと締結され牛荘（営口）が対外開放される。同時期に朝鮮も

露・米・英などの列強に圧迫され、政治も腐敗し財政は枯渇して社会秩序は乱れた。特に、1860 から 70 年の間は、北部朝鮮に大水害・干害・虫害が続き、民衆は言葉を失う状況に陥った。1860 年の北関大水害は、谷も埋まり産業施設は消滅するほどのひどいもので、農民が越境し北上した。南部満州では、19 世紀半ば以降、清朝の官吏が越境者を黙認していたため、越境者の数は急増していた（高木 1990）。

1952 年に中国が吉林省の延辺朝鮮族自治州を創設し、少数民族政策をとり少数民族を優遇している。民族文化運動も盛んで、朝鮮博物館や朝鮮族美術館、図書館、朝鮮語書籍の出版社、朝鮮語の新聞、延辺では朝鮮語番組の放送もあり、民族文化に親しみやすい環境にある。集住地域では、食文化や慣習も民族性を維持しているため、子どもの時から国籍は中国だが、民族は朝鮮だというアイデンティティを有している。この地域は、朝鮮族のアイデンティティを確立しやすい環境に恵まれているが、他方、在外コリアンがいる他の地域は、朝鮮語習得が難しいケースやアイデンティティの確立について問題が出ている（李 2012）。

中国の東北地域における朝鮮族社会の「日本語ブーム」について、崔（2013）の指摘がある。近代化改革における「日本語ブーム」期では、国家のあり方を政治運動中心から経済発展中心へと転換された改革路線が実施され始め、外国語教育に課せられた重要な任務として、経済改革に資する人材の育成があった。この時期の朝鮮族社会における「日本語ブーム」は、経済発展と強く結びついており、「日本語」は、高度な経済成長を遂げた日本という「先進国」の言葉という認識を生み出した。

しかし、今日では中国の外国語教育事情は大きく変化しており、韓（2012）は 1990 年代に入ると中等教育機関における日本語学習者は急激な減少傾向にあること、延辺の外国語教育は英語を中心に進められていることに着目し調査を進めた。それによると、今では、中央の英語教育重視政策に基づき、朝鮮族たちは小学校 1 年生から英語を学ぶ機会があり、同時に漢語のピンインの勉強と英語のアルファベットの習得が進んでいる。しかし、朝鮮族の優勢を生かし高校で第 2 外国語として日本語の地位を確立することは、グローバルな人材育成に結び付き、朝鮮族の発展につながると指摘している。

中国の朝鮮族の現状について、小島（2016）は、次の傾向があることを指摘している。朝鮮族の流動化が農村の流動化に関係し、若い労働力のほとんどが出稼ぎに行く現実や、マンションの購入資金を貯めるために韓国に出稼ぎに行く予定の若い母親がいる。

最近では、中国に留まる朝鮮族のなかでも東北三省から山東省の沿岸地域への移住が増加しているとも言われている。金（2013）は、韓国に出稼ぎに行った人々が目標貯金額を達成して帰国し中国の都市部でマンションを購入する事例を報告している。

朝鮮族の日本への移動について権（2011）は、次の背景があることを指摘している。来日する朝鮮族の出生地で最も多いのは吉林省で、次に黒龍江省、遼寧省の順に多く、来日前の居住地域は東北三省と沿海都市が中心である。そして、中国における最終学歴は大学

本科が半分以上を占めており、次いで高級中学、大学院以上と高等専科・大学専科と続いている。また、高校までの民族教育歴は、8割を超える人々が朝鮮族学校のみであり、朝鮮族学校と漢族学校を経験しているのは2割を切る。加えて、漢族学校のみで教育を受けているのは2%弱であった。さらに、朝鮮族の日本への移動は、1986年以降の現象として把握される。朝鮮族の来日メカニズムは多様であり、親族や友人がいることが第一の動機となっている。その際に、合法的な移動ルートと非合法的な移動ルートが存在し、知らず知らずのうちに非合法的なルートを選択していることもある。

朝鮮族について金（2015）の次の指摘がある。日本に在住する朝鮮族は、留学生として来日した人が最も多い。移動する朝鮮族の人々の人生設計は多岐に渡る。国籍については、中国籍のままで過ごすこともあれば、日本や移動先の国籍に切り替えるなど様々なケースがある。

これらの先行研究をうけて、市川（2020）は日本在住の中国生まれの朝鮮族女性に対し、半構造化インタビュー、TEAを用いて論じた。言語形成期後期に来日し日本の学校が合わないことが理由で中国に戻った中国生まれの朝鮮族女性が帰国後、日本語を通じていくつかの承認体験を得ることで自信を回復するプロセスを示した。この研究では、来日後中国語が不得手な自分に気づくことで他の朝鮮族と自己を比較し、一定の距離感を感じている様子が示された。

これに対し、本稿では、高校卒業まで中国で過ごした日本在住の中国生まれの朝鮮族男性に対し、半構造化インタビュー、TEAを用いて論じることにより、中国生まれの朝鮮族男性が中国国内を越境し、中国から日本へと越境するなかで、経験する日常のプロセスを詳細に分析する。これまでの先行研究では、両親が日本で働き、初等教育を日本で受けた朝鮮族女性を対象とした研究はあるが、両親が韓国に出稼ぎし、初等教育および中等教育までを中国で一貫して受けた朝鮮族を対象に文化心理学に由来するTEAに基づき分析を行った研究はなされてこなかった。本稿では、これまでの朝鮮族に対する先行研究に対して、「人間の発達や人生径路の多様性と複線性を描く」（安田 2012）というTEAの特徴を活かし、朝鮮族男性の詳細な質的分析を行うことで、中国生まれの朝鮮族男性がグローバル人材として人生を切り拓いていく日常のプロセスを提示できると思われる。

Ⅱ. 方法

研究対象は、日本に居住する朝鮮族男性Gさんである。日本在住の中国生まれの朝鮮族女性の紹介を介しGさんに研究協力を依頼した。Gさんと筆者はインタビュー開始にあたり初対面である。Gさんは私費留学生として来日後、アルバイトと奨学金で生計を立てており、学生時代にアルバイト経験が多いと言う点で筆者と共通点が多く、信頼関係を築くのに時間がかからなかった。本研究は倫理的配慮に基づき研究を実施し、結果に影響の出ない範囲でプライバシー保護に配慮した。

Gさんの概略

中国生まれの朝鮮族男性Gさん。現在日本で働いている。これまで何度か来日を試みたが親族の助言で断念した。来日前は中国や韓国に対して整理できない感情を抱いていたが、日本に移動後、学業や就労面で経験を重ねることで中国や韓国への感情が変化した。両親は、自営業を営んでいた。親戚の多くは農民である。両親、親戚は共に韓国へ出稼ぎ経験がある。Gさんは、日本で帰化³⁾を望み、中国籍の離脱⁴⁾を検討している。

インタビュー

インタビュー及び分析結果の図の確認は、2016年から2019年にかけて行った。表1は、インタビューの概要である。

表1 研究手続きとインタビュー概要

	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	第六回
日時	2016年3月	2017年1月	2017年6月	2018年10月	2018年10月	2019年1月
内容	対面で半構造化インタビュー	対面で半構造化インタビュー	Gさんがメールで内容とTEM図を確認し、筆者が修正を行う	Gさんがメールで内容とTEM図を確認し、筆者が修正を行う	Gさんがメールで内容とTEM図を確認し、筆者が修正を行う	Gさんがメールで内容の最終確認を行う
	①来日の経緯や教育、職歴等	①前回の内容の確認と分岐点について	①これまでの内容の確認と等至点について	①これまでの内容確認と社会的助勢や社会的方向づけの位置について ②二つ目の等至点について	①父親の帰国時期について	①両親の職業や親戚の出稼ぎ経験と戸籍について

分析方法には、人間の経験を重視するTEAを採用した。本研究におけるTEAの概念を表2に示す。TEAの概念の説明は、安田・サトウ（2012）と安田・サトウ（2017）を参考に、本稿に合わせて記述した。

表 2 本研究における TEA の概念

TEA の概念	本研究における意味
等至点 (EFP) 歴史的・文化的・社会的に埋め込まれた時空の制約によって辿り着くポイント ⁵⁾	EFP1 : 来日 EFP2 : 来日せず北京で働き続ける
両極化した等至点 (P-EFP) EFP の対極にある点	P-EFP1 : 帰化後しばらく日本で勉強した後、ドイツで専門分野を学ぶ P-EFP2 : アメリカ留学を経て東アジアで活躍
分岐点 (BFP) 経路が発生・分岐するポイント	BFP1 : 瀋陽の叔父のところに行く BFP2 : 優柔不断な日本人上司に会社の将来を見い出せない
社会的助勢 (SG) 人が歩みを進めるなかで援助になる力	SG1 : 父親が韓国に行く SG2 : 中国に戻ってきた父親との電話相談 SG3 : 米国に移住した知人の経験 SG4 : アルバイト先で平等を実感 SG5 : 奨学金の支援 SG6 : 帰化に理解を示す両親の存在 SG7 : 日本の真実が見えてくる SG8 : 西洋の国への憧れ SG9 : 大学で奨学金を受ける SG10 : 応援してくれる彼女の存在
社会的方向づけ (SD) 人が歩みを進めるなかで阻害・抑制する力	SD1 : 所属感がなく苦しい SD2 : 父親が病気になり出費が嵩む SD3 : 低賃金・働き方への疑問 SD4 : 韓国で生きる朝鮮族の姿 SD5 : 文化・考えが賛同できない中国 SD6 : アンダー韓国・サブ韓国という意識 SD7 : 法律の上にお金がある「中国」 SD8 : 中国社会の急激な発展

研究を進めるために社会人経験を経た看護学生の学びほぐしについて TEA を用いて研究を行った伊東 (2017) の TEM 図を参考にした。考察及び結論については、ネイティブ日本語教師の海外教育経験と教師成長について TEA を用いて研究を行った北出 (2017) を参考に記述した。

本研究では、G さんの心性の変容に寄り添いながら、計 6 回のやり取りを経て TEM 図を完成させた (図 1、図 2 参照)。今日の中国生まれの朝鮮族の特性を表すために、「中国の

吉林省で生まれる」から始まるプロセスと捉え、「瀋陽の叔父のところに行く」「優柔不断な日本人上司に会社の将来を見い出せない」を分岐点（Bifurcation Point:BFP）にした。始点の「中国の吉林省で生まれる」に合わせ、一つ目の等至点（Equifinality Point:EFP）は、「来日」を設定し、両極化した等至点（Polarized Equifinality Point:P-EFP）は、「来日せず北京で働き続ける」とした。さらに、Gさんとのやり取りを通してトランス・ビュー⁶⁾を形成するなかでGさんの生き様が深く浮かび上がり、「帰化後しばらく日本で勉強した後、ドイツで専門分野を学ぶ」をセカンド等至点（Second Equifinality Point:2nd EFP）とした。両極化したセカンド等至点（Polarized Second Equifinality Point:P-2nd EFP）は「アメリカ留学を経て東アジアで活躍」である。

以下では、進路選択の変容と移動のプロセスについて4つの時期区分に沿って記述する。時期区分は、Gさんの日本に対する心性の変化した時期を表している。なお、＜ ＞は分析によって見出されたカテゴリーであり、「 」は実際のデータを示す。

Ⅲ. 結果（１）日本への憧れと来日

第1期 憧れ

本研究の協力者であるGさんは＜中国の吉林省で生まれる＞。物心ついた時から、中国で生まれた朝鮮族の自己について＜所属感がなく苦しい＞と考えるようになり、その思いは成長した現在でも消えることはない。その後、＜民族学校（小・中）で学ぶ＞。＜朝鮮族の高校へ進学＞すると＜父親が韓国に行く＞ことになり、続いて＜母親が韓国に出稼ぎに行く＞ことになった。高校卒業を前に、＜中国で一回目の大学受験＞を経験し、＜合格したが理想の大学ではないので進学しない＞ことを選択した。翌年、＜中国で二回目の大学受験＞をし＜合格したが理想の大学ではないので進学しない＞を選択する。この時期、＜父親が病気になり出費が嵩む＞ことが多かった。中国での大学進学をやめて＜瀋陽の叔父のところに行く＞ことにした。この時、瀋陽に行かずに両親の住む＜韓国に行く＞こともできたが、瀋陽に行くことを選んだ。瀋陽は遼寧省の省都であり中国では、朝鮮族が多く住む地域の一つとして位置付けられている。＜瀋陽の工場で叔父の仕事を手伝う＞ことになったGさんはしばらく働いたのち、＜叔父に騙されていることに気づき喧嘩になる＞。それは、叔父の経営する工場で＜低賃金・働き方への疑問＞が原因だった。叔父の工場をやめることを決心し、＜1人で北京に行き地下に住みながらいろいろな仕事を転々とする＞。地下生活⁷⁾を続けていたある日、＜将来が見えなくなる＞こともあり韓国から＜中国に戻ってきた父親との電話相談＞をした。考えた結果、米国に行くことを考えるようになった。＜米国留学を準備＞することにし、まずはその準備段階として米国留学に関係のある仕事についた。この選択には、＜米国に移住した知人の経験＞が影響を与えた。

第2期 来日を考える

米国留学に関する仕事をやめた後、＜北京の日本留学の仕事につく＞。この頃から＜来

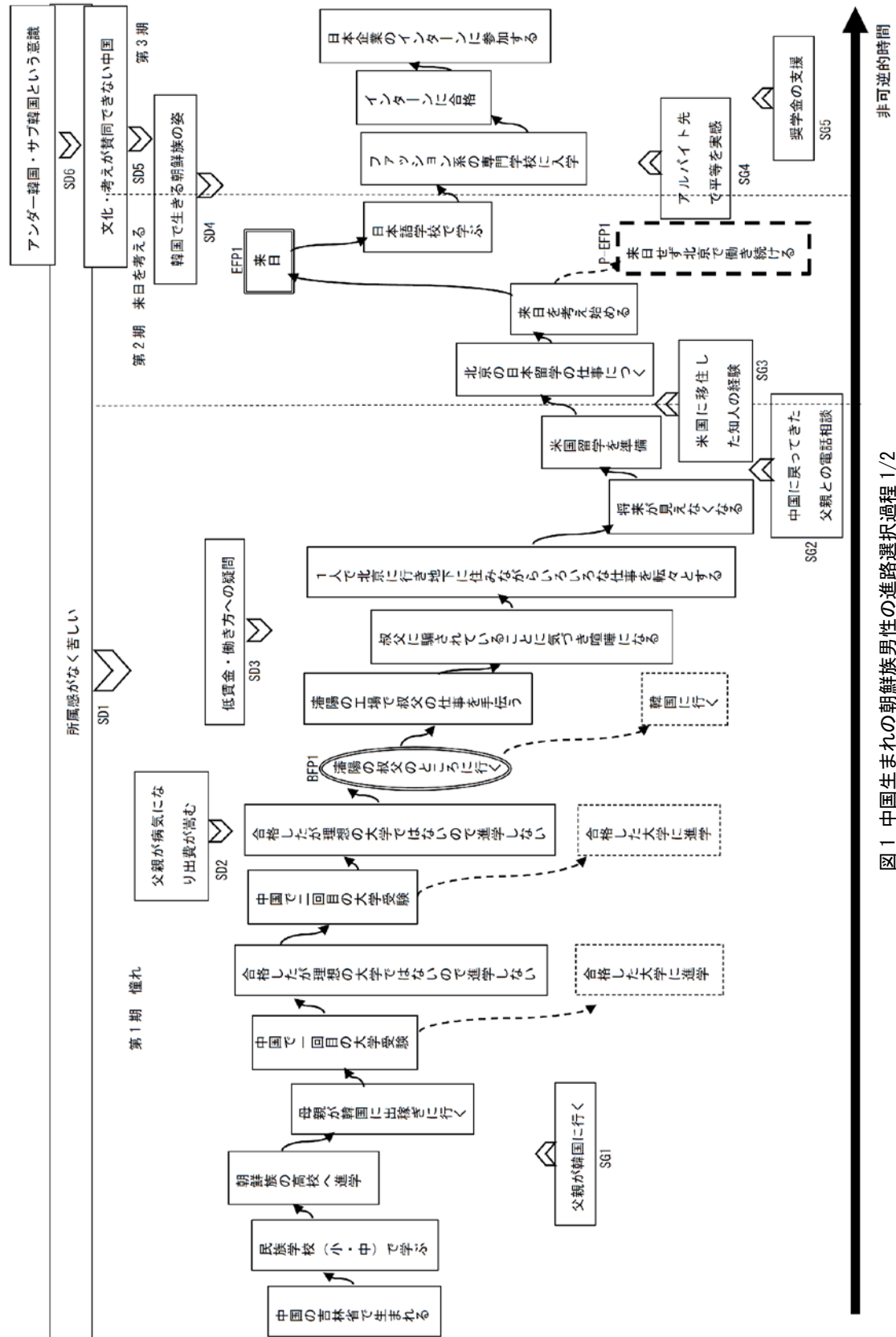


図1 中国生まれの朝鮮族男性の進路選択過程 1/2

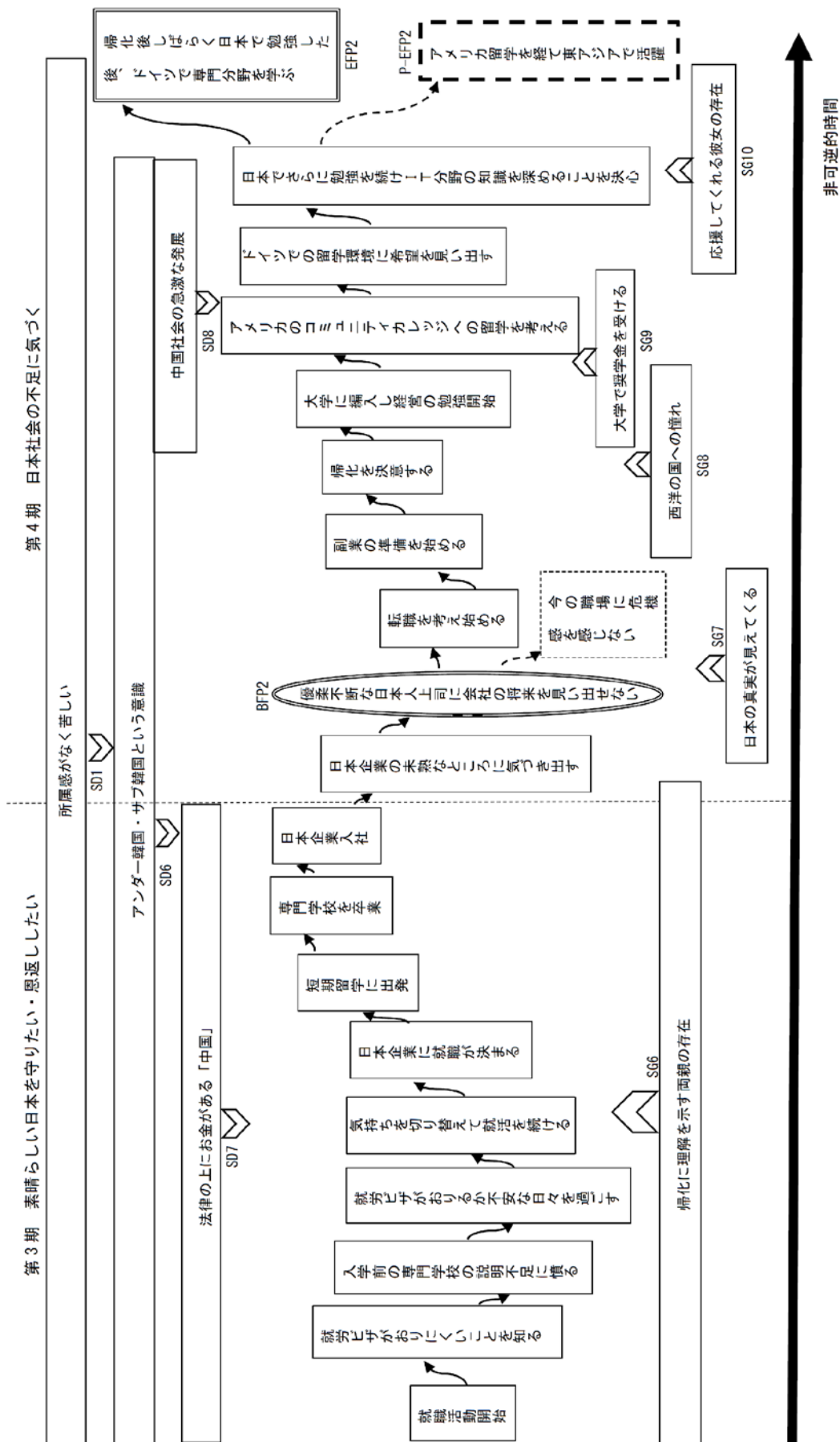


図2 中国生まれの朝鮮族男性の進路選択過程 2/2

日を考え始める＞ようになり私費留学生ビザで＜来日＞した。来日後は、＜日本語学校で学ぶ＞。日本に来てから、＜韓国で生きる朝鮮族の姿＞が気になるようになった。「韓国では空港の免税店などで働いているけれど、よい待遇ではない。中国から韓国に行った朝鮮族は冷遇されている」と思うこともあったという。そして、＜文化・考えが賛同できない中国＞という思いや＜アンダー韓国・サブ韓国という意識＞が芽生えていった。

Ⅲ. 結果（２）日本の社会状況に影響を受け新しい空間を見つける

第３期 素晴らしい日本を守りたい・恩返ししたい

日本語学校で学んだのち、＜ファッション系の専門学校に入学＞した。来日後、様々なアルバイトをかけもちしていたＧさんは、日本人と同じ待遇で働くことができる職場環境に驚き＜アルバイト先で平等を実感＞する。専門学校では、優秀な成績をおさめ競争を勝ち抜いて条件のいい＜インターンに合格＞した。専門学校からの＜奨学金の支援＞を受けながら、＜日本企業のインターンに参加する＞。

その後、＜就職活動開始＞するとＧさんのような専門学校卒業程度の学歴をもつ私費留学生は＜就労ビザがおりにくいことを知る＞。これまで学校側からホームページや説明会で説明がなかったため＜入学前の専門学校の説明不足に憤る＞。たとえ内定をもらえても就労ビザがおりるか確定しない。＜就労ビザがおりるか不安な日々を過ごす＞。そして、＜気持ちを切り替えて就活を続ける＞と、条件のいい＜日本企業に就職が決まる＞。内定先の日本企業は、日本人学生であっても狭き門で有名な会社だった。就職活動が終わり、アルバイトで貯めたお金を資金に英語を学ぶための＜短期留学に出発＞した。帰国後、＜専門学校を卒業＞し＜日本企業入社＞に至る。

Ｇさんは、就職活動を開始した頃から、＜帰化に理解を示す両親の存在＞に支えられる一方で、＜法律の上にお金がある「中国」＞という考えがめぐるようになった。

第４期 日本社会の不足に気づく

しばらく経つと徐々に現実が見えていき就職先の＜日本企業の未熟なところに気づき出す＞。会社内の意思決定が遅いことや同僚や上司の働き方に疑問を持つようになっていく。Ｇさんの勤める会社では、仕事で必要とされる言葉は日本語である。来日前から朝鮮族の学校で日本語を学んできたＧさんは、会議やミーティングでの日本人社員の振る舞いにも違和感を覚えるようになり＜優柔不断な日本人上司に会社の将来を見い出せない＞と、＜転職を考え始める＞。この時期になると、学生時代に比べて＜日本の真実が見えてくる＞ようになった。

先輩社員にモデルとなるような人物がいないこと、給料水準が低い現実を冷静に見つめ「会社を今すぐにでも辞めたい」と考えるようになる。将来に備えて＜副業の準備を始め＞ことにした。Ｇさんは自分の将来を考えた際に＜帰化を決意する＞。来日前は、情報収集の面で制約があったが、日本に住むことによってこれまで接触できなかった情報にア

クセスできるようになった。結果、＜西洋の国への憧れ＞も強くなり、働きながら＜大学に編入し経営の勉強開始＞する。＜中国社会の急激な発展＞に戸惑いながら、編入先の＜大学で奨学金を受ける＞サポートがあり、＜アメリカのコミュニティカレッジへの留学を考える＞ようになった。現地の先生やオフィスに連絡をとるうちに、アメリカ留学は費用が嵩むことを知る。Gさんが学びたいIT分野はドイツで留学生を好条件で募集していることを知り＜ドイツでの留学環境に希望を見出す＞。

＜応援してくれる彼女の存在＞もあり、すぐに留学せずに＜日本でさらに勉強を続けIT分野の知識を深めることを決心＞した。そして、＜帰化後しばらく日本で勉強した後、ドイツで専門分野を学ぶ＞に至る。

以上が研究を通じて明らかになった。来日直後は、中国や韓国へ複雑な感情を抱いていたGさんだったが、日本社会で経済的に自立をして学業に励み、学歴を獲得していくうちに、かつては「中国に戻りたくない」と語っていた心理が変化する。就職し、社会人学生として大学に編入後は「中国に仕事で行ってもいい」と語りが変化した。韓国に対しては以前のように否定的な感情を口にすることは少なくなっていた。

IV. 考察 朝鮮族男性の進路選択と日本留学から見てくるもの

考察では、Gさんがセカンド等至点（2nd EFP）に至るまでに働いた諸力である社会的助勢（SG）と社会的方向づけ（SD）に着目する。その後、崔（2013）に学びながら、Gさんの事例が日本語をどのように位置づけているのかを考察する。

TEAにおけるSGは、人が非可逆的時間を生きる中で援助的に働く力である。SDは、人が非可逆的時間を生きる中で抑制的に働く力である。表2を参照すると、来日前は家族に関するSGとSDがそれぞれ捉えられていた。両親が韓国に出稼ぎにでかけ、Gさんが1人瀋陽で暮らしていた時期には、労働に関するSDが捉えられている。身内である叔父に搾取されていることに気づき、帰国した父親に将来の相談をした時期には、父親の助言に加え、米国に移住し新しい生活を始めた知人が援助的に働く力となっている。来日を境に、韓国で生きる朝鮮族の姿や中国や韓国に対する感情が抑制的に働く力として湧き上がっている背景には、来日後様々な情報に触れるなかでGさんが自己と中国や韓国で生きる人々との比較をしていることが考えられる。

そして、日本企業に就職後、学生の立場では見えなかった日本の真実に触れるようになり、先進国である西洋の国への憧れや奨学金の支援、恋人の存在などが支えとなり、時折中国社会の急激な発展に心を動かされながらも、世界で最先端の専門分野を学べるドイツ行きを志すに迫り着いている。

Gさんは約4年に渡って研究に参加してもらった。最後のインタビューが終わってもなお、「所属感がなく苦しい」という思いはなくなることはなく、社会的方向づけとしてTEM図に描かれている。しかし、朝鮮語も中国語も日本語も英語も習得し力強く生きるGさん

の姿には、東アジアを行き来してビジネスを展開したいという思いが満ち溢れていた。

近代化以降の朝鮮族の日本語認識について考察した崔（2013）は、朝鮮族の「日本語ブーム」は、経済発展と深い結びつきがあると指摘する。Gさんの事例からは、越境を重ね、経済的に自立し、高い学歴を獲得するための手段としての日本語という認識が示唆された。

おわりに

本稿では、中国生まれの朝鮮族男性の進路選択過程について、日本留学経験を中心に半構造化インタビュー、TEAを用いて論じた。来日前は、血縁や少数民族という条件下で行動や選択について様々な影響を受けていたGさんが、日本への移動を契機に主体的な人生の選択にシフトしている様子が示唆された。

注

- 1) 私費留学生とは、(出入国管理及び難民認定法の別表第1に定める「留学」の在留資格を有する者)を対象とし、国費外国人留学生、外国政府が派遣する政府派遣留学生及び在籍期間が1年未満の交換留学生・短期留学生は対象に含まない(日本学生支援機構 2019)。
- 2) 1860年代初頭の頃には、朝鮮半島と隣接している沿海州の旧ソ連に朝鮮人が住み着いたと言われている。当時は、国境線も大雑把で緩やかなものだったので、貧しい農民たちは、土地を求めて凍りついた豆満江をひそかに渡り、人のいない不毛の地を耕して住み着くようになった。彼らのほとんどは、朝鮮の辺境地域である「六鎮」の出身者で、このことは旧ソ連の独特な高麗人言語共同体の形成に影響を与えた(イ 1998)。
- 3) 法務省の「帰化申請」によると、日本に帰化しようとする外国人であれば随意申請できる。記載例では、韓国籍を有する、大韓民国と日本に生まれた二つの申請事例を紹介している(法務省「帰化許可申請」参照)。
- 4) 国籍離脱について中華人民共和国国籍法の定めを説明する。中華人民共和国国籍法は、1980年9月の全国人民代表常務委員会委員長によって、第八号令として公式に知らされた。二重国籍の禁止について第三条で禁止している。自己の意思によって外国籍を取得した場合には、自動的に中国国籍を喪失する。国籍の回復については、第十六条で触れており、中国公安部の審査によって国籍回復の審査を受けることができる(中国公安部 1980)。
- 5) TEAでは、非可逆的な時間の流れのなかで生きる人の行動や選択の径路は、複数存在すると考えられる。どこまでも自由に選択・行動ができ、末広がり的に径路が存在するというのではなく、歴史的・文化的・社会的に埋め込まれた時空の制約によって、ある定常状態に等しく(Equi)辿りつく(final)ポイントがあり、それが等至点(EFP)である(安田 2012)。
- 6) トランス・ビューとは、TEAの手続きの一つである。インタビューは「意味のある会話」と定義されることがある。トランス・ビューは、見方(view)の融合(trans)という意味を表し、視点・観点の融合を意味する(サトウ 2012)。

7) 地下生活については、蟻族、かたつむり族、ネズミ族の三つの名称が存在する。賀照田らの論考によると、蟻族とは、2000 年以降に出現した良い職業や高収入が得られず両親の金銭的サポートもあまり得られない大学卒業生のグループを指す。かたつむり族は、住宅価格の高騰した社会状況のなかで、ホワイカラー（≒中産階級）という過去の理解が打ち砕かれた現実を表す（賀照田 2014）。ネズミ族とは、2008 年前後地下生活者が増加し、不動産の高騰により地上に家を借りることができない地方出身の低所得者層が本来居住用ではない地下の狭い部屋に住み、その様子が地下に巣を作って暮らすネズミに例えられて「鼠民」と呼ばれる（日経ビジネス 2016）。

参考文献

- 市川章子（2020）、「中国生まれの朝鮮族女性が日本定住を選択するまで—言語形成期後期に來日し帰国した事例から」『対人援助学研究』vol. 9、「印刷中」。
- 伊東美智子（2017）、「第 1 節 社会人経験を経た看護学生の学びほぐし」（安田裕子・サトウタツヤ『TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する』誠信書房）69-88 頁。
- イ・ヨンスク（1998）、「第 8 章 中央アジアの朝鮮民族」（広瀬崇子『イスラーム諸国の民主化と民族問題』未来社）、301-323 頁。
- 延辺人民出版社（刊）高木桂蔵（訳）（1990）、『抗日朝鮮義勇軍の真相—忘れられたもうひとつの満州』（原著『朝鮮族簡史』1986 年発行）新人物往来社。
- 韓秀蘭（2012）、「中国延辺朝鮮族の中等教育における日本語教育の展望」『人文論叢』29、175-183 頁。
- 賀照田（著）河村昌子（訳）（2014）、「第八章 中産階級の夢の浮沈と中国の未来—近年のネット流行語から見る中国知識青年の経済的・社会心理的境遇」（鈴木将久『中国が世界に深く入りはじめたとき 思想からみた現代中国』青土社）、241-256 頁。
- 北出慶子（2017）、「第 2 節 ネイティブ日本語教師の海外教育経験は教師成長をうながすのか」（安田裕子・サトウタツヤ『TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する』誠信書房）、48-68 頁。
- 金銀実（2013）、「急激な社会変動に翻弄される中国朝鮮族—韓国出稼ぎ経験のある農民夫婦からの聞き取り」『日本アジア研究』10 巻、157-172 頁。
- 金花芬（2015）、「在日本朝鮮族の教育戦略—家庭内使用言語と学校選択を中心に」『人間社会学研究集録』10、49-70 頁。
- 権香淑（2011）、『移動する朝鮮族—エスニック・マイノリティの自己統治』彩流社。
- 小島泰雄（2016）、「延吉農村における朝鮮族の移動性と農地の流動化」『地域と環境』No. 14、25-35 頁。
- サトウタツヤ（2012）、「第 2 節 質的研究をする私になる」（安田裕子・サトウタツヤ『TEM でわかる人生の径路—質的研究の新展開』誠信書房）4-11 頁。
- 崔学松（2013）、『中国における国民統合と外来言語文化—建国以降の朝鮮族社会を中心に』創土社。
- 安田裕子（2012）、「第 1 節 これだけは理解しよう、超基礎概念」（安田裕子・サトウタツヤ『TEM でわかる人生の径路—質的研究の新展開』誠信書房）2-3 頁。

安田裕子・サトウタツヤ (2012)、『TEM でわかる人生の径路—質的研究の新展開』誠信書房。

安田裕子・サトウタツヤ (2017)、『TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する』誠信書房。

李裕淑 (2012)、「第 10 章 世界に暮らすコリアン」(小倉紀蔵『現代韓国を学ぶ』有斐閣選書)、291-325 頁。

中华人民共和国公安部 中华人民共和国国籍法 (全国人民代表大会常务委员会委员长令第 8 号) (1980 年 9 月 10 日) <<http://www.mps.gov.cn/n2254314/n2254409/n2254410/n2254413/c3930378/content.html>> (2019 年 1 月 8 日)

独立行政法人日本学生支援機構 (2019) 平成 31 年 1 月公表「平成 29 年度私費外国人留学生生活実態調査概要」<https://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj_chosa/h29.html> (2020 年 4 月 1 日)

日経ビジネス (2016 年 6 月 9 日)

<<https://business.nikkeibp.co.jp/atcl/report/15/258513/060800030/>> (2019 年 1 月 6 日)

法務省 (作成日不明) 帰化許可申請

<<http://www.moj.go.jp/ONLINE/NATIONALITY/6-2.html>> (2019 年 1 月 8 日)

This work was supported by the Core University Program for Korean Studies through the Ministry of Education of the Republic of Korea and Korean Studies Promotion Service of the Academy of Korean Studies (AKS-2016-OLU-2250001).

A Process of Shaping Career: The Case of a Chinese-Born Korean Man Having Study-abroad Experience in Japan

ICHIKAWA, Akiko

Abstract

The author have been attempting to visualize the factors which seem to have impacts on Chinese-born Korean people's decision to move to Japan through studying them employing Trajectory Equifinality Approach/TEA, which is a qualitative method.

Previous studies which investigate Chinese-born Korean Women living in Japan show the process that Chinese-born Korean Women, who went back to China because they could not adapt themselves to Japanese educational circumstances, recovers their self-esteem by having experience of being accepted through using Japanese.

The purpose of this study is to clarify a Chinese-born Korean man's process of forming future career plan. The author has interviewed, a Chinese-born Korean man, who came to Japan as a privately financed international student, for four years. Collected data was analyzed with Trajectory Equifinality Approach/TEA, which derives from Cultural psychology posited by Dr. Jaan Valsiner.

The result in this research shows that the subject's emotional attitude toward his hometown and Korea has been changing through moving in China and from China to Japan.

Keywords : Chinese-born Korean Man, TEA, Privately financed international student

日本侵佔期華中における文教政策 —日本語普及施策を巡って—

宮脇 弘幸（大連外国語大学）

要旨

1938年3月、日本軍特務機関・興亜院華中連絡部の工作により南京に中華民国維新政府が成立した。維新政府の方針は共産主義・三民主義に反対し、排日抗日思想・欧米依存精神を排除すること、それに代わって中国固有の道德文化の尊重、日支親善の醸成であった。日本語の地位は「日本語ヲシテ大東亜ノ共通語タラシメ中国人ヲシテ東亜新秩序建設ニ協力セシムル如ク指導スル」とされた。維新政府教育部から編集基準に適合する『日本語教科書』巻一～巻四が発行された。日本語教育は、小学校では5-6年級で週3時間、中学では各学年週4-5時間（女子中学3-4時間）、職業学校（農・工・商）でも週3-5時間教えられた。日本語教員は日本人派遣教員及び研修・再教育を受けた中国人現職教員が任用された。維新政府は成立2年後に汪兆銘を首班とする中華民国国民政府に糾合され、教育方針・教育施策に多少の修正が行われた。排除されていた「三民主義」は蒋介石前政権が「曲解」していたとして「真の三民主義」に則る教育を取り入れることとした。また、日本語は最優先の外国語として位置づけられていたが、汪政権では各学校の授業時数を減らした。

結論として、日本侵華期の文教施策は日本軍特務班が主導し、維新政府が制度・体制を整え、汪兆銘政権が多少の修正を加え展開しようとしたが、政府改編と戦局激化により安定的な行政が保たれず、実施地域が占領区中心になり文教施策も地域的に限定的であった。

キーワード： 日本語普及、教科書審査、傀儡政府、維新政府、汪兆銘政権

はじめに

1937年7月7日、北京の西南郊外の盧溝橋付近で勃発した日本軍の華北駐屯部隊と中国国民政府軍との軍事衝突（「七七事変」）をきっかけに、日本軍の大陸への軍事進攻は華北・華中の主要都市から地方の都市部へと拡大していった。その軍事行動の拡大と並行して、「日満支」¹⁾を中心とした「東亜新秩序建設」という構想の下に「日本語を東亜の共通語に」という政治的文教的活動も活発に展開された。

1937年12月、華北・北京に王克敏を首班とする中華民国臨時政府（以下、臨時政府）が成立した。また1938年3月華中・南京に梁鴻志を首班とする中華民国維新政府（以下、維

新政府)が成立し、江蘇省、浙江省、安徽省(皖)、上海特別市・南京特別市を管轄した。華北・華中いずれも、支那派遣軍特務機関(宣撫班)²⁾・興亜院華北・華中連絡部等が現地の親日的要人・組織に政治工作を図り成立した傀儡政府であった。

両政府に共通している施政理念は、「共産主義・三民主義」に反対し、中国固有の道德文化を基本とし、排日思想を一掃し、日支親善・親日感情を醸成することであった。この理念は両政府の文教政策の根幹となり、さらに東亜(日満支共同体)の共通語を日本語にするという構想に発展した。その構想は興亜院華中連絡部によっても「日本語ヲシテ大東亜ノ共通語タラシメ中国人ヲシテ東亜新秩序建設ニ協力セシムル如ク指導スルニ在ル」と明示されたのである³⁾。つまり、中国人の「排日・抗日」思想を「日支親善・善隣友邦」思想に改造し、「東亜新秩序建設」の協力体制に参画を促す最初的手段として占領地への日本語普及施策は位置づけられていたのである。

華北の臨時政府の日本語普及については、拙稿(2019)⁴⁾の中で論じられている。本稿は、華北とはほぼ同時期に華中で展開した文教政策に焦点をあて、それを策定した維新政府の教育方針、日本語普及施策、教科書教材、及び1940年3月に維新政府を糾合し、維新政府の政策を一部改編し実施した汪兆銘国民政府(以下、汪兆銘政府)⁵⁾の文教政策とその特質も検討する。

日中戦争(抗日戦争)期の華中における日本語普及政策に関連する先行研究として、石剛(1993)があり、台湾・満洲国・大陸占領地に対する日本の言語政策が論考されている。その文献の中で、華中に関しては「大陸占領地」の中で汪兆銘政府(1940年3月成立)の日本語教育の制度的なことが論じられているが、汪兆銘政府の前の維新政府(1938年3月成立)の日本語普及施策については言及されていない。また使用されている史資料が限定的である。日中戦争期の史資料の多くは日本側中国側共に戦火で焼失しており、確かにそれらの発掘は極めて困難である。その後、徐々に第一次史資料の収集・整理・復刻も進み、一部の档案馆・資料館などで利用できるようになった。それらを利用し、先行研究の空白部分を解明するため本稿で取り組んでみたい。

I. 華中の文教政策

戦時期に華北に成立した政府が、周辺の政府と糾合を繰り返したように、華中でも1937年12月に成立した上海大道政府が3か月後の1938年3月維新政府に改編され、さらに1940年3月に汪兆銘政府に糾合された。本章では維新政府と汪兆銘政府を取り上げそれぞれの文教政策を検討する。

1. 維新政府の教育宗旨・教育方針

1937年11月、南京の蒋介石国民政府は、日本軍の南京侵攻の前に重慶に遷都した。同月、日本軍宣撫班は「作戰地域内ノ支那民衆ヲシテ今次事変ニ於ケル帝国ノ真意ヲ明ラカ

ニシテ、排日抗日思想及ビ欧米依存ノ精神ヲ排除シ、日本ニ依存スルコト即チ安居樂業ノ基ナルコトヲ自覺セシメルニアル」⁶⁾という占領地域に対する「宣撫工作要領」を発した。

「排日抗日思想」の排除を掲げたのは、1915年の「二十一カ条の要求」、1931年の「満洲事変」と翌年の「満洲国成立」など日本の帝国主義・軍国主義に反発する民衆の「排日抗日」活動が激しく、また蒋介石国民政府下及び共産勢力支配地区の学校教育でも「排日抗日」教育⁷⁾が行われており、それを排除し、民心の安定と把握を図ることが必須であったためと思われる。「欧米依存の精神排除」を掲げたのは、上海のような大都市には外国人が多く居留している租界区があり、欧米の文化的思想の影響を強く受けており、それが「東亜新秩序建設」の理念に合致しないと判断したためと思われる。

1938年5月、維新政府は「中華民國維新政府政綱」を發布し、その第七条に「中国固有ノ道德文化ヲ本トシ世界ノ科学知識ヲ吸収シ以テ理智精粹、体力強健ナル国民ヲ養成シ、従来ノ矯激ナル教育、怪奇ナル学説ヲ根本的ニ廓清ス」と教育宗旨を規定した。条文中の「矯激ナル教育、怪奇ナル学説」の指すところは、蒋介石国民政府の根幹である「三民主義」を掲げる教育及び共産主義勢力が抗日根拠地を中心に行っている「共産主義」教育のことであり、それらとは明確な一線を画し、中国の伝統的道德文化の教育が基本であることを表明するものである。この過去の儒教的精神文化への回帰を基本とする維新政府の教育方針は、「満洲国」及び華北臨時政府が掲げた教育方針とも通底するものである。

維新政府は上記教育宗旨と同時に「教育実施方針」も公布した。それによると、「普通教育ハ歴代聖賢ノ言行ヲ根拠トシテ国民道德ノ基礎ヲ固メ、同時ニ国民生活ノ基礎特殊技能ヲ培養シ以テ生産力ヲ増進スルヲ主要目的トス」、「中国固有ノ教学ヲ復興シ、国民政府ノ十年来ノ党化排日教育ヲ一掃シ新教育ノ再建ヲ目的トス」と定めた。「中国固有道德ノ顕彰」としては、「孔子教排斥ノ結果ハ思想ノ過激ヲ齎シ、遂ニ赤化思想浸染ノ間隙ヲ作り、社会秩序ノ紊乱ヲ来スニ至ッタ。教育部ハ斯ル過誤ヲ匡正スベク已ニ小学教員ノ夏期講習ヲ行ヒ、サラニ今後ハ中学、師範教員ノ講習ヲモ実施スル筈」⁸⁾と述べた。

上記方針には、孔子など「歴代聖賢」の教え（儒教）を新政府の国民道德教育の基礎にすること、生活に必須の基礎技能知識を身につけ生産力増進の支えとすること（実業重視）、蒋介石国民政府が行っている三民主義教育（党化教育）・排日教育を排除すること、共産主義思想の排除に留意することとしているが、これらは既に示した「宣撫工作要領」、「中華民國維新政府政綱・教育宗旨」で明示した内容である。

さらに、教育方針は「男女教育ハ機会平等トス」を掲げ、「女子教育ハ特ニ健全ナル徳性陶冶ニカヲ注ギ良妻賢母ノ特質ヲ保護シ良好ナル家庭生活及ビ社会生活ノ建設ヲ図ル」とも述べている。この点に関連して教育部長陳羣は「根本精神トシテハ日本主義ヲモットートシ、女子ニハ明治三十七、八年前後ノ良妻賢母教育ヲ施シタイト思ッテイル」⁹⁾と興味深い見解を述べている。日本留学の経歴のある陳羣自身が留日生活で見聞した当時の日本教育に共鳴する所があったのではなかろうか。親日官僚の片鱗がうかがえる。

2. 汪兆銘政府の文教施政方針

汪兆銘政府の文教政策及び文教方針は、維新政府の政策・方針を一部継承、一部修正したものであった。汪政権は、成立と同時に10カ条の「国民政府政綱」を発表した。その第1条に掲げた「本善隣友好之方針、以和平外交、求中国主權行政之独立完整、以分担東亜永久和平及新秩序建設之責任」の中の語句「求中国主權行政之独立完整」（筆者訳：「中国の主權の回復及び行政の独立が完整することを求め」）と記されていることに注目したい。ここでは、「満洲国」のように国家主權が奪われ、行政も日本人官僚に操られる傀儡国家になるのではなく、中華民国としての国家主權の確立と独立を追求するというスタンスを示していると思われる。そのような汪政権の自律性が文教政策にも反映しているようである。

また、第10条には「反共和平建国を以って教育の一大方針となし、科学教育の重大性を提唱し、あらゆる輕跳浮薄な従来の学風を一掃すべし」¹⁰⁾と記し、維新政府が掲げていた「反共」を堅持する一方で、新たに「和平建国」を挿入している。つまり、日本との関係において「和平」に基づき、新たな「中華民国建国」を主張したものであった。この背景には、重慶に移転した蒋介石国民政府が抗日を掲げて日本軍と戦闘しているのに対し、あくまでも日本とは善隣友邦和平関係を築こうとする汪政権の意思である。

「三民主義」に関しては、汪兆銘政府教育部社会教育司司長趙如珩は、「曾つての曲解された偽三民主義ではなく、抗日的な非文化的教育指針でもなくて、ここには、新国家建設としての真の意味に還った三民主義教育がとりあげられた」¹¹⁾と述べている。つまり、汪政権は蒋介石政府の三民主義を「偽」（曲解）と断じ、三民主義の真の継承者として汪兆銘がそれを教育実践するとの表明である。

このように、汪政権での文教方針で特徴的なことは、反共主義を堅持し、対日和平関係を築き、中華民国を再建し、維新政府では排除された三民主義を回復しようとしたことである。

3. 教育課程

1938年、維新政府教育部は教育課程の改正を行った。当面は暫定的な暫行小学法、同中学法、暫行小学規定、同中学規定、暫行私立学校規程を定め、学制及び学科課程を規定した。修業年限は初級小学4年・高級小学2年、男子普通中学・女子普通中学5年、実業系中学（農・工・商）5年、師範学校5年（＋特別師範科2年）、大学3年（医学院：4年）と定められた。なお、上記師範学校と大学については、法令は共に1938年に発表されたが、実際に運用されるようになったのは汪政権になってからである。

維新政府教育部が定めた小学校、中学校の教育課程は次のようであった。初級小学の学科目は修身、劳作、国語、音楽、美術、体育、常識（社会（歴史・地理）・自然・衛生）、算術の8科目とされた。高級小学は、初級小学の常識科目が歴史・地理・自然・衛生に分

科し、また日語が新たに加わるだけで、他は初級小学と同一科目で 12 科目であった¹²⁾。

男子普通中学の必修教科目は修身、公民、体育、国文、日語、第二外国語、歴史、地理、数学、理科、労作、図画、音楽の 13 科目、選修科目は教育、実業の 2 科目であった¹³⁾。一方、女子普通中学は、男子科目の労作が家政、手工に変更され、また第二外国語が選修科目に移り必修は 13 科目となり、選修科目は第二外国語・教育・実業の 3 科目になった。また、実業系中学のうち、農業中学の教科課程が普通中学と異なる点は、第二外国語が選修科目に移り、労作が実業（理論及実習）に入れかわった。工業系及び商業系中学が普通中学と異なる点は、共に労作が実業（理論及実習）になったことである¹⁴⁾。

第二外国語は英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語の中から 1 言語選択とされた。

II. 日本語普及施策

1. 教育課程の日本語

従来小学校課程には外国語教育の規定がなかった。維新政府になって規定のないまま一部の小学校で日本語教育は開始されたが、汪兆銘政権になって「外国語ハ之ヲ授ケザルヲ以テ原則トス、但大都市ノ区域ニ於テハ實際上ノ必要ニヨリ高年級（即五、六年級）ニ於テハ外国語（日本語又ハ其他ノ外国語）ヲ加フルコトヲ得」と規定化された。

維新政府から実施された日本語教育は高級小学（5 年・6 年）から開始し¹⁵⁾、45 分授業を 1 時間授業とみなし、平均週 3 時間であった。全科目の中では、国語（中国語）が週 7 時間で最も多く、次いで体育・日本語・算術が週 3 時間であった¹⁶⁾。男子普通中学では学年別に週 5・5・5・4・4 時間、女子普通中学では男子普通中学より 1 時間少ない 4・4・4・3・3 時間であった。

師範学校では第 1 学年のみ日本語教育を行い週 3 時間、実業系中学（農・商・工）では、農業・工業系中学は学年により週 4・4・4・3・3 時間、商業系中学は男子普通中学と同じく週 5・5・5・4・4 時間であった。

大学における日本語教育が開始されたのは、汪兆銘政権下の 1940 年 10 月に南京の国立中央大学（1927 年設立）の各学院で開講された週 4 時間のようである¹⁷⁾。

興亜院華中連絡部文化局は、汪兆銘施政期の 1940 年 9 月から翌年 3 月にかけて、華中日本軍占領地域内の日本語普及状況を調査した。調査は日本軍特務機関が設置されていた上海、南京、蘇州、無錫、南通、杭州、蚌埠（安徽省）、安慶（安徽省）の 8 特務機関下の 3 市 3 省 47 県で行われた。その調査結果表 1 と前述した維新政府下における初等・中等教育課程の日本語授業時数の変動から、どの程度日本語普及施策が進展したのか、それとも停滞・後退したのかを比較検討してみたい。

調査結果は、小学校 5-6 学年の週 3 時間は変動なし、中学は 5 学年制から初級中 3 年と高級中 3 年で 6 年制となった。日本語授業は学年単位でみると男子中学も女子中学も 1-2

時間減っている（表 2 参照）。また、全在学期間における日本語授業の合計から比較してみると、男子中学が 5 学年で週 23 時間から 6 学年で 17 時間に大幅減少、同様に女子中学では 5 学年で週 18 時間から 6 学年で 17 時間となり 1 時間の減少である¹⁸⁾。このように、1940 年汪兆銘政権になってから中等教育課程における日本語授業時数の縮小が顕著になるが、外国語教育の中での変動はどうであろうか。これについては表 2 を用いて後述する。

表 1. 華中における各級学校日本語教育実施状況（1940 年 12 月）

	大学	師範学校	中 学 初 3+高 3	女子中学 初 3+高 3	職 業 学 校 農/ 商/ 工	小 学 校 初 4+高 2	計
学 校 数	1	3	56	9	9	231	309
実施学年	1	1	1-6	1-6	初 1-3/高 1	5-6	-
日本語週授 業時数*	4	3	初 3・4・4 高 2・2・2	初 3・4・4 高 2・2・2	農初 2・高 1:2 商 1・2・3:4 工初 1・高 1:3	1-6 平均 3	-
生 徒 数	694	378	14, 428	2, 103	1, 056	26, 320	44, 984**
日語教員数	7	4	92	13	11	153	280
日:日本人	日 3	日 3	日 40	日 4	日 6	日 34	日 90
中:中国人	中 4	中 1	中 52	中 9	中 5	中 119	中 190

興亜院華中連絡部(1941)第 5 表より作成 *週授業時数は学年によって異なる場合がある。

**出所資料には「生徒総数 44, 984」と記しているが、44, 979 の間違いと思われる。

まず、表 1 が示す学校総数 309 校及び日本語学習者総数約 45, 000 人は、あくまでも華中日本軍特務機関管轄地域にあって日本語教育を行っている学校の状況である¹⁹⁾。従って、華中の非占領地及び被占領地であっても日本語教育体制が整わない学校の状況は含まれない。また、華中地域でも日本語教育を実施していない学校も多い（むしろそちらの方が多いであろう）と思われるので、華中全域として捉えることはできない。逆の見方をすれば、維新政府が成立するまでは、日本語は教育課程で必修化されていなかったのが、「東亜の共通語日本語の普及」にかける関係機関の意気込みによって、僅か数年で外形的にはこの規模にまで拡大したとも言えるのではないか。

次に、調査結果表 1 の各級学校における日本語教員の配置状況を見ると、大学、師範学校、中学、女子中学、職業学校には各校に少なくとも 1 人の日本語教員が配置されている。しかし、小学校 231 校(生徒数 26, 320 人)に対し日語教員は 153 人(日本人 34 人・中国人 119 人)しか配置されておらず、約 3 分の 1 の学校には日語教員が配置されていないことになる。このような小学校の場合、日語教育の訓練を受けていない教員が簡単なあいさつ程度の日本語を教え、それで日語教育をやっていると回答したのか、あるいは日語の時間(週

平均3時間)を他の教科に振り替えたのか不明である。いずれにしても普及体制が不備であったことは否めない。

2. 汪兆銘政権の外国語教育

汪兆銘政権下の小学校に対する日本語教育の概要は前掲表1に示した。維新政府の時と比較して大きな変化が生じるのが男子・女子の中学校の外国語教育・日本語教育である。その両政府の中学校における外国語科目の週授業時数の比較を下の表2に示す。

表2. 維新政府と汪兆銘政府における中学校の外国語教授時数比較

政 府	外国語	1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	5 学年	6 学年
維 新 政 府 1938.9~1940.2	日 語	5	5	5	4	4	-
	英 語	4	4	4	3	3	-
	英 語	2	2	2	2	2	-
汪 兆 銘 政 府 1940.3~1945.8	日 語	3	4	4	2	2	2
	英 語	3	4	4	4	4	4

出所：興亜院華中連絡部（1941）「中支ニ於ケル日本語教育ニ関スル調査報告書」3-4頁。

維新政府成立以前の中学における外国語教科は英語が必修であったが、維新政府下では日本語と英語が必修とされた。日本語の時間数が英語の約2倍も多いのは、「日本語を東亜の共通語に」という政策に対応したものであろう。ところが、2年後の汪兆銘施政下になると、表2が示すように、初級中学では日本語と英語の比重は同等であるが、高級中学では英語の方が重視された。これでは「日本語を東亜の共通語にする」及び「欧米依存の精神排除」を掲げた方針とは齟齬を来すようである。興亜院華中連絡部は、維新時代に比較して「時代逆行の感あり」²⁰⁾と評し、汪政権の対処に違和感を表している。

この日本語をダウングレードした背景には、次のような要因が想定される。まず、「日本語を大東亜の共通語に」という日本語普及の目標はそのまま残すとして、中国各地における激しい排日運動、抗日戦の状況下において、教育課程の中で日本語を突出させるには無理があり「民心を把握できない」との判断か、また戦時下における中国の産業経済の疲弊により、日本語教育の時間をより緊要で戦時下生活に即応する知識技能習得に振り向けたのではないと思われる。現に、汪兆銘政権下2年後の動向であるが、その傾向として、1943年1月29日付け蘇州特務機関長中山貫一の通牒「江蘇省戦時教育体制会議開催ニ関スル件報告」（国立南京図書館蔵印）には、教育庁提案として、中学生に「生産教育・労働服務」「団体合作体操」「防空演習」「簡易剣術及固有角力ノ教授」などの戦時対応教育を導入することを助言し、上海、南京、杭州、徐州等の各特務機関に通知している。つまり、戦時下日本でそうであったように、華中占領地でも戦時体制教育の強化によって、外国語・

日本語の授業を縮小せざるを得なかったのではないかとも思われる。

3. 日本語教員養成

日本語教員は、日本語教授の技術的訓練及び時局認識などの講習を受けた日本人及び日本語担当として再教育を受けた現職中国人教員が任用された。

1939年1月、前述した維新政府の「教育実施方針」が定めたように、上海・南京など主要都市に設置された臨時教員養成所において、現職小学校教員の再教育を開始した。教育内容は日本語・日本語教授法の訓練に加えて、講演などを通じて時局認識が講じられた。教育研修期間は当初6カ月であったが、同年9月より本科1カ年に延長した。

一方、日本では1939年10月、文部省が最初の華中派遣日本語教員の募集・選抜と派遣を行い、上海に設置された興亜院華中連絡部日本人教員訓練所（後に華中教員派遣訓練所と改称）で2カ月の訓練をおこなった。また、維新政府顧問部職員として採用され日本語教育に従事していた日本人、中国人教員も一定の研修を終え、その後小学校、中学・女子中学、職業学校、師範学校、大学に派遣された。当初は日本人教員が多かったが、徐々に中国人教員が増えた。中国人教員は臨時教員養成所あるいは各種日本語学校の出身者で日本語教員としての再教育を受けた者、あるいは日本留学経験者であった。

既出の興亜院華中連絡部による調査報告書²¹⁾の第二表「中国人日本語教員学校別男女別出身学校一覧」によると、華中占領区全域における各級学校に派遣された日本語教員の任用状況は、中国人教員が286人であり（第一表には日本人教員は138人と記載）、そのうち日本留学経験者は47人（16%）、その他は南京の教員養成所或いは各種日語学校出身者或いは師範学校卒業者などであったという。

さらに、維新政府の諸機関でも日本語教育を実行した。例えば、維新学院²²⁾、司法行政人員養成所、教育部教員養成所、内政部警官学校、綏靖部軍官学校、水巡学校、県政訓練処、宣伝局新聞人員訓練処、防共青年団幹部訓練処などで日本語能力を有する中堅幹部養成を行っていた²³⁾。

一般大衆を対象にした日本語教育も上海を中心として盛んに行われた。英租界・仏租界及び被占拠地区を除いた、華中全域の中で「治安が確立した」都市に設立された日本語学校数は54校に達し、教育期間は3カ月から2年間であった²⁴⁾。上海租界区では日本語学校・職業補習学校・夜学校等が急速に増え37校、生徒数約4,000人に達したという²⁵⁾。

興亜院華中連絡部は、上海の日本語普及の活況ぶりについて、「事変前ニ比シ隔世ノ感アリ、其最モ著シク觀取サレ得ルハ租界内各商店ニ於テ以前ハ一流商店ノ一部ノミ邦語ノ通用ヲ見シ程度ナリシニ、現在ハ租界内ノ邦人ノ全然居住セザル地域ノ二流商店ニ於テモ日本語ニヨル買物ニ不自由セザルニ至レリ」²⁶⁾と記している。

上記の記述から二つのことが読み取れよう。一つは、日本語学校が増え、日本語学習者が増えることは、それだけ民心が安定し、治安が確保されていることを統治側及び非統治

側に印象づけられることである。つまり、統治側が目指す「日本語を東亜の共通語に」という目標に向かって一步一步前進していることを実証できることである。もう一つは、親日・反日イデオロギーとは別に、現地一般市民にとってはまずは補習学校あるいは夜学で日本語を学び、その日本語力を生かして多くの日本人の経済・文化活動に入り込み、それによって自らの生活基盤の確立・拡大の機会を得ようとしたことであろう。

他方、筆者が行った聞き取り調査（1995年9月済南市他）では、「済南中学時代、日本語に対して反抗的な気持ちがあったので授業が嫌いであった」とか、「おじいさんは私が日本語を習うのをとても嫌がった」とか語るインフォーマントがいた。日本語に対して否定的であった市民が大陸及び満洲に少なからずいたことも知る必要があろう。甚大な人的被害物的損害を被っている市民側からすると、実態はむしろそちらの方が多かったといえるのではない。しかし、そういうネガティブなことは公式報告書には書かれるものではない。

Ⅲ. 新教科書の編纂

1. 編纂方針

維新政府は、前政府の教育、とりわけ教材内容の適否を検討しなければならなかった²⁷⁾。前政府の教科書については、「蔣政権ハ遠交近攻政策ヲ取ッタノデ、中、小教科書中ニ添加サレタ排日思想ノ素材ハ少ナクナカッタ。(中略)…其処ニ重点ヲ置キ一刷新ノ実ヲ挙ゲナケレバナラナイ」と批判的に述べ、内容の刷新を図ることを表明した²⁸⁾。

維新政府は北京の臨時政府と共同して教科書編審委員会を立ち上げ、審査方針として「排日精神を一掃し、欧米依存観念を除去し、日支依存を高唱す」、「共産主義及歪曲せられたる三民主義を排除し、皇道を基調とし、儒、佛、道教による東方道義を強調す」と決定した。教科書審査は菅野謙吾工兵中佐（主任将校）を含め、日本人7人中国人3人によって行われ、その構成から、教材審査は日本人審査員が主導的に進めていったと思われる。

1938年7月30日、以下の教科書審査方針が畑部隊特務部長より、陸軍省へ送付（打電？）されているので、政策案文は現地日本軍側で立案され、本国陸軍省で承認されていたと考えられる。

教科書審査方針

- 一、排日精神ヲ一掃シ、欧米依存観念ヲ除去シ、日支共存共栄ノ理想ニ基キ、日本依存ヲ高唱ス 然レドモ親日傾向ヲ露骨ニ明示シテ反動ヲ助長スルコトヲ避ケ、自然ノ間ニ之ヲ哺育スルニ努ム
- 二、共産主義及歪曲セラレタル三民主義ヲ排除シ、皇道ヲ基調トシ、儒、佛、道教ニヨル東方道義ヲ強調ス
- 三、理論ニ趨ラズ、実務ヲ重ンジ、勤勉ノ美風ヲ涵養ス
- 四、公益ヲ重ンジ、生活ノ改善ヲ図ル

備考

- 一、初、中等学校ノ学生ハ当分従来ノモノヲ採用ス
- 二、初等学校高級以上ニ於テハ日本語ヲ正科トシテ採用ス²⁹⁾

上記の教科書審査方針の中で、排日精神一掃、共産主義及び三民主義の排除、東方道義が強調されていることは前述の「教育方針」に一致するものである。加えて皇道、つまり、日本の萬世一系天皇制=皇国主義を基調として維新政府の教科書への導入は、日本を中心とする「東亜新秩序」建設への道標であろう。これが占領地に成立した傀儡政府の文教政策の要であり、日本語教材作成にも適用されるべきものであった。なお、上記の審査方針は日本軍の特務部教科書審査主任将校によっても公布されているので、日本軍側は明らかに教育内容に直接関与し、占領地における文教行政を支配していることになる。

さて、新たに設けた教科書基準により1938年8月に完成したのが維新政府教育部編纂『日本語教科書』巻一、巻二、巻三、巻四の4冊である³⁰⁾。巻一・巻二は初級レベルで、日本語教育が開始される高級小学5年生用、巻三・巻四は中級レベルの高級小学6年生用であろうか。この四冊シリーズの『日本語教科書』は華中で日本語教育を行っている小学校の内約85%の学校が使用していた³¹⁾。

2. 『日本語教科書』教材

教育部で編纂された『日本語教科書』の教材内容はどのようなものか、6年生用の巻三と巻四の課名を提示順に掲げ、その課名から教材の傾向を検討してみたい。

巻三：金魚、しゃぼん玉、月、兄弟、慾の深い犬、考へ物、恩を忘れない、年齢、家庭、四季、オ爺サン、ギッコンバツタン、蛙、小野道風、手まね、朝ノ會話、晩ノ會話、蠅、草取り、時計、野口英世、早起き、新シイ靴、運動會、綱引き、蟻ときりぎりす、お正月、日本語、私ノ家、鹽ト砂糖、日本地圖、日本の風景、賢い母親、地中ノ寶、花咲カ爺（一）、花咲カ爺（二）（以上36課、配置課の順に列記）

巻四：人ノ體、新聞、時計屋デ、書物借用、塙保己一、不老不死の薬、小林さんの家、日本語ノ授業、種痘、日本人ノ服装、浦島太郎、蜘蛛の巣、果樹園、口語ノ種種、散歩、上野公園、人の口、日本見物、學藝會、病氣見舞、日本ノ運動競技、公德、春聯、日本の文章、日記、嵐、日本の武士、上杉謙信、乃木大將、櫻（以上30課）

上記課名一覧を見ると、教科書審査委員会が示した前述の4項目からは逸脱していないにせよ、日本関係の題材に偏りすぎていることは否めない。教材の出所の傾向として、多くは日本の国定国語教科書、満洲（満鉄付属地・関東州）教科書及び台湾・朝鮮教科書の

課名と同一であり³²⁾、それらから転用されたと思われる。『巻三』の金魚、しゃぼん玉、ギッコンバッタン、運動會、綱引きなどは子供に最も身近な遊び及び学校生活を題材にしている。外国語（日本語）学習及び学校生活に関心を持たせる意図と思われる。

『巻四』の塙保己一、日本人の服装、浦島太郎、上野公園、日本見物、日本ノ運動競技、日本の武士、上杉謙信、乃木大將、櫻など、日本の昔話、武将、名所など日本関係の題材が多く取り上げられている。これらの教材を通して、日本の文化・風物・歴史に親しみをもち、日本を理解させる意図と思われる。

他方、台湾・朝鮮・南洋群島・南方占領地の日本語教科書には必ず登場する建国神話・天皇・皇国主義的な題材（審査方針第二項）を載せていないのは、厳しい抗日戦のまったただ中で中国人用の題材としてそれらを敢えて載せることに戸惑いがあったのか、あるいは編集が計画されていた歴史、修身の教科書に回す考えがあったのかも知れない。

中学用の日本語教科書は編纂されなかったようであるが、初級中学・女子初級中学でも約半数が上記『日本語教科書』の巻三・巻四を使用していた。その他の教科書として大出正篤著『効果的速成式 標準日本語読本』（松山房、1937）が中学・職業中学・師範学校・大学で最もよく使用されていたようである³³⁾。

教科書以外の言語活動として、小学校では教室用語の会話練習、来客買い物等生活用語の会話練習、各自の姓名の日本語読みの練習、家庭作業としての作文、日本唱歌・童謡指導、日本人小学生を招いて範読練習などが行われた³⁴⁾。

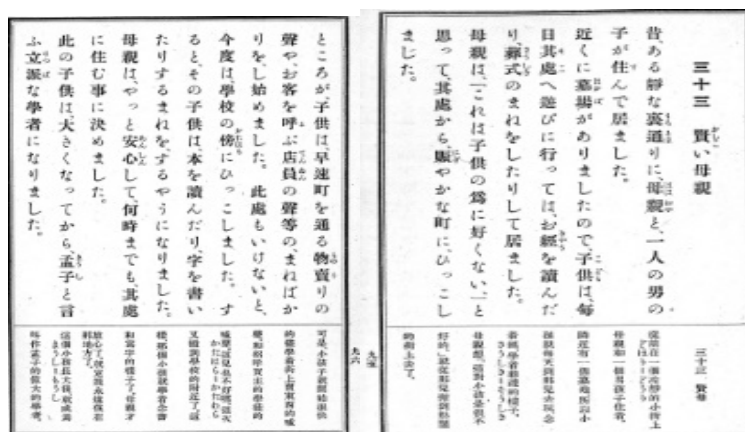
中学・女子中学では日本唱歌・童謡指導、歌詞の中国語訳、新聞・雑誌の利用と翻訳、書写練習などが行われ、また職業学校・師範学校では日本唱歌指導、一語発表会などが行われたようである。大学では会話・購読・作文・文法の授業が中心であったようである³⁵⁾。

次に、発行された教科書からいくつかの題材を取り上げてみる。最初に『日本語教科書 巻一』の日本語学習の場面の教材を見てみよう。

図1 巻一（71頁）



図2 巻三 33課「賢い母親」(95-96頁)



『巻一』の71頁には男の子とその妹が家で机に向かって勉強している挿絵があり、「アサ ウチ デ ベンキャウ シマシタ。ガツカウ デ ニッポンゴ ヲ ナラヒマシタ。ヨル ハ イモウト ト フクシフ シマス。」の本文（図1）が載っている。

文体は「国定国語教科書」に準じて歴史的仮名遣い、カタカナ分かち書きになっている。学校でも家庭でも日本語を勉強している場面を描写して、日本語学習の意義をクラスのみならずに共有させようとしていると思われる。「日本語普及」場面の可視的教材である。

図2は『日本語教科書 巻三』33課「賢い母親」である。この教材は南満洲教育会教科書編纂部が関東州及び満鉄付属地内の公学校用に編纂した『初等日本語読本 巻五』（1926）の第14課「賢い母親」を転用したものと思われる。話しの粗筋は次のようである。孟子の母親が一人の男の子（孟子）と一緒に墓のそばのうちに住んでいたところ、子どもがお墓のところに遊びに行ってお経を読んだり葬式の真似をしたりしていた。母親はこの環境は子どものために良くないと考え、賑やかな町に引っ越した。ところが今度は、子どもが町を通る物売りの駆け引きの真似をするので、これも良くないと考え、学校のそばに引っ越した。すると、子どもは本を読んだり字を書くまねをするようになり、母親はようやく安心してそこに住むことを決心したという。「孟母三遷の教え」という諺になったように、教育熱心な孟子の母親の適切な判断と行動を「歴代聖賢」の故事として取り上げたのであろう。

おわりに

維新政府の文教政策の方針は、前政府（蒋介石国民政府）下で実行されていた「抗日・三民主義教育」及び共産党勢力の支配区で行われていた「抗日・共産主義教育」を一掃し、中国の伝統的な儒教精神教育を基本とし、日満支三国の連携共助体制・東亜新秩序建設に資する教育体制を築くことであった。その教育体制の中心に日本語普及教育が位置づけられた。

維新政府は、日本軍特務機関及び興亜院華中連絡部との協働で教育課程・日本語教員任用・教員再教育・教科書編纂など教育体制を整えた。日本語普及教育は小学校高学年（5-6学年）、中学・女子中学、職業学校、大学に導入し、教材内容も前政府のものを刷新した。新たな日本語教科書は政府教育部で編纂され、日本の生活文化を描き、親日的な教材が取り入れられた。他方、民間の日本語学校の多くは上海に、他に南京、蘇州、杭州のような都市に開校し、一部の市民生活で簡単な日本語が通じるほどまでに日本語が普及した。

維新政府は成立2年後に汪兆銘を首班とする中華民国国民政府に糾合された。汪政権は「反共」は堅持しつつも教育方針、学制、教育施策に多少の修正を行った。維新政府では排除の対象であった「三民主義」は、孫文以後の三民主義の真の継承を考えていた汪兆銘による政権成立によって回復されることとなった。また、維新政府では最優先の外国語として位置づけられていた日本語が、汪政権では各学校の授業時数が減らされ、戦時体制に

即応する生産・労働教育、団体体操、防空演習などの実地的な活動に振り分けられた。

結論として、日本侵華期の文教施策は、日本軍特務機関及び興亜院華中連絡部が主導し、外形的な制度・体制を整えたが、実施地域が日本軍占領地域に限定され、日本語教員不足、中等学校用教科書の未編纂など教育体制が不十分で、また政府の改編と戦局の激化などにより、実態として日本語普及施策は地域・対象が限定的であり、実施期間も実質 5-6 年程度と短く、十分な成果を上げられなかったと思われる。

今後の課題としては、日本側・中国側の史資料、特に未解明な部分が多い日中戦争後半期、アジア・太平洋戦争期の史資料を発掘することが必須である。日本が直接関わった日本侵華期の教育史、日本語教育史の全体像を解明するため一層の調査研究が必要である。

注

- 1) 当時の日本、「満洲国」、「支那」（中華民国）の略称である。本稿は歴史的な文脈で検討するため、資料からの引用においては原則として当時の日本側の一般的呼称を用いる。
- 2) 特務機関の宣撫工作には「民心の安定」、「治安維持」、「軍に協力」、「鉄道愛護工作」、「経済産業の復興」、「教育文化の促進」の工作が掲げられている。「教育文化の促進」の具体的工作として「抗日教育の一掃」、「日満支親和精神の徹底」、「学校の開設」、「日本語の普及奨励」、「青少年隊の結成指導」、「新聞紙の発行」が掲げられており、文教工作に大きく関わっている。（寺内部隊宣撫班本部（1940）、「宣撫工作指針」『陸軍省 昭和 15 年乙第二類 第十冊 永存書類』、防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵）。
- 3) 興亜院華中連絡部（1941）、『中支ニ於ケル日本語教育ニ関スル調査報告書』、2 頁（佐藤尚子・蔭山雅博・一見真理子・橋本学編（2005）、『中国近現代教育文献資料集 第 7 巻 興亜の大陸教育/中国教育十年ほか』所収、日本図書センター）。
- 4) 拙稿（2019）、「日本侵佔期華北・蒙疆傀儡政権の文教政策—日本語普及政策を中心に」『東アジア日本学研究 創刊号』東アジア日本学研究学会、201-210 頁。
- 5) 汪兆銘首班の中華民国国民政府は、汪兆銘南京国民政府、汪兆銘政権などとも呼ばれるが、蒋介石首班の国民政府と紛らわしいので、便宜上汪兆銘政府として表す。
- 6) 井上久士編・解説（1989）、『華中宣撫工作資料 十五年戦争極秘資料集 13』不二出版、51 頁。
- 7) 例えば、宣撫班は国民党・国民政府教育部編『初級小学国語読本（第二）』の第一課には「学校カ開校サレタトキ先生ハ「今年ハ一九三八年デ、我カ中国抗戦勝利ノ一年デアル。小朋友達ヨ皆一緒ニ努力セヨ」ト、仰シャッタ」という教材、また第二十四課には「民国二十年九月ニ日本ハ私共ノ東北ヲ占領シタ。東北同胞ノ家、日本人ニ焼カレ、食モ日本人ニ略奪サレ、澤山ノ青年男女達ハ日本人ニ殺サレタ。東北同胞ノ生命皆一ツニ団結シ義勇軍ヲ組織シテ日本ニ抵抗セヨ」などの「排日抗日」教材があると調査報告している。原文は中国語であるが、宣撫班が日本語訳している（杉山部隊宣撫班（1938）、『山西省和順県地

- 方共産地区状況調査報告書 第三編 抗日民衆教育ト文化工作』、56 頁）。
- 8) 中華民国維新政府教育部顧問室（1940）、『維新教育概要』、6-8 頁。
- 9) 同書、5 頁。
- 10) 趙如珩（1943）、『中国教育十年』大紘書院、128 頁（佐藤尚子・蔭山雅博・一見真理子・橋本学編（2005）、『中国近現代教育文献資料集第 7 卷 興亜の大陸教育/中国教育十年ほか』所収、日本図書センター）。
- 11) 同書、129 頁。
- 12) 曹必宏主編（2016）、「小学暫行規程（1938 年 12 月 26 日）」『日本侵華殖民教育史料』第三卷、71 頁。
- 13) 同書、「中学暫行規程（1938 年 8 月 24 日）」、145 頁。
- 14) 同上。
- 15) 初級小学（1-4 年）では日本語は随意科目とされたが、上海の一部の小学校では 3 年、あるいは 4 年から日本語教育を実施している学校もあった（前掲注 3）、第 6 表）。
- 16) 宋恩榮・余子俠主編（2005）、「表 3-7 偽維新政府小学教学科目及每周教学時間数」『日本侵華教育全史 第三卷』人民教育出版社、174 頁。
- 17) 前掲注 3）、第 5 表（文学院、商学院、教育学院師範專修科、法学院、工学院、理学院、農學院農專科、医藥学院、先修班実科、先修班文科の一年生 694 人（うち女子 134 人）に日本語教育が行われた）。
- 18) 「蘇特文第 33 号 江蘇省中等学校授業科目及時間数ニ関スル件報告（通牒）」（1943（昭和 18）年 3 月 1 日、蘇州特務機関長、中川貫一）によれば、江蘇省教育庁は 1943 年 3 月より、初級中学・高級中学、師範（或女子師範）学校の日本語授業は一律に週 4 時間行うことを各地区関連機関に通牒している。
- 19) 趙如珩『中国教育十年』（115 頁）によれば、1939 年 7 月時点の江蘇・浙江・安徽各省における調査結果は、教育が回復した公私立小学校 658 校、生徒数 121,987 人、中学校 59 校、生徒数 10,318 人となっている。上海・南京両特別市の実態が不明なので単純比較できないが、日本軍特務機関管轄の学校は限定的であると思われる。
- 20) 前掲注 3）、3 頁。
- 21) 同上。
- 22) 維新学院は、「建設ノ為日支ノ文化戦士養成ノ機関トシテ」設置された（外務省（1938）、「維新学院ノ成立ニ関スル件」『外国学校関係雑件 中国ノ部』）。同学院は 1942 年 1 月に自強学院に改組された（前掲注 12）、218 頁）。
- 23) 前掲注 8）、349 頁。
- 24) 日本語学校が設立された都市は上海（租界区・占拠区を除く）及びその近郊 9 校、南京 6 校、南通 5 校、蘇州及び杭州各 4 校、漢口及び揚州各 3 校などであった（前掲注 3）、16-17 頁）。

- 25) 同上、19 頁。主な学校は、上海近代科学図書館附属日語学院、同進日文専修学校、葉氏日語専校、民生業餘補習農夜校、上海模範業餘補習学校、中国職業補習学校などであった（第 15 表）。
- 26) 前掲注 3)、19 頁。
- 27) 前政権下の教科書『新時代 三民主義教科書』（商務印書館、1928）の「三民主義」「民生」「民権」「民族」（以上第一冊）及び「不平等条約」（第二冊）などが「不適當」と判断されていた（外務省文化事業部（1932）、『支那ニ於ケル排外教育』）。
- 28) 前掲注 8)、6-8 頁。
- 29) 軍特務部（1938）、「教科書審査方針」『昭和十四年 陸支受大日記 第五十三号 陸軍省 昭和 13 年 7 月 24 日』、防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵。
- 30) 卷一は 15 万部、卷二、卷三、卷四はそれぞれ 5 万部印刷され、各地日本語学校、小学校に配布されたという（前掲注 8）、348 頁。なお、卷二の現物は未確認）。
- 31) 前掲注 3)、第三表「各種学校ニ於テ使用シツツアル日本語教科用図書」より算出。
- 32) 宮脇弘幸・研究代表者（2009）、「日本植民地・占領地の教科書に関する総合的比較研究— 国定教科書との異同の観点を中心に」、『別冊 日本植民地・占領地・国定教科書 目次目録』平成 18 年度～平成 20 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）一般）研究成果報告書 課題番号 18330171、23-61 頁。
- 33) 前掲注 3)、第三表「各種学校ニ於テ使用シツツアル日本語教科用図書」。
- 34) 同上、第四表「当部派遣教員ヲ配置シアル各級学校ニ於ケル日本語教育状況 昭和 15 年 12 月現在」。
- 35) 同上。

参考文献

- 井上久士編・解説（1989）、『華中宣撫工作資料 十五年戦争極秘資料集 13』不二出版。
- 佐藤尚子・蔭山雅博・一見真理子・橋本学編（2005）、『中国近現代教育文献資料集第 7 卷 興亜の大陸教育/中国教育十年ほか』日本図書センター。
- 石剛（1993）、『植民地支配と日本語』三元社。
- 曹必宏主編（2016）、『日本侵华殖民教育史料 第三卷』人民教育出版社。
- 宋恩榮・余子侠主編（2005）、『日本侵华教育全史 第三卷』人民教育出版社。
- 東アジア日本学研究学会（2019）、『東アジア日本学研究 創刊号』。
- 中華民国維新政府教育部顧問室（1940）、『維新教育概要』。
- 外務省文化事業部（1932）、『支那ニ於ケル排外教育』。
- （1938）、『機密 支那ニ於ケル日本語教育状況』。
- 軍特務部（1938）、『昭和十四年 陸支受大日記 第五十三号 陸軍省 昭和 13 年 7 月 24 日』、防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵。

興亜院華中連絡部（1941）、『中支ニ於ケル日本語教育ニ関スル調査報告書』。

杉山部隊宣撫班（1938）、『山西省和順県地方共産地区状況調査報告書 第三編 抗日民衆教育ト文化工作』
防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵。

寺内部隊宣撫班本部（1940）、『宣撫工作指針』『陸軍省 昭和15年乙第二類第十冊 永存書類』防衛省防
衛研究所戦史研究センター所蔵。

東亜同文書院支那研究部（1941）、『南京及蘇州に於ける小中学校教育の実情』。

宮脇弘幸・研究代表者（2009）、『日本植民地・占領地の教科書に関する総合的比較研究—国定教科書との
異同の観点を中心に』、同『別冊 日本植民地・占領地・国定教科書 目次目録』（平成18年度～平成
20年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（一般））研究成果報告書 課題番号 18330171）。

Educational Policy for the Puppet Regimes in Central China during the Sino-Japan War: with Specific Reference to Japanese Language Promotion

MIYAWAKI, Hiroyuki

Abstract

This paper explores the Japanese cultural strategy in which the military secret service [特務機関] of Japanese army and the Central China Contact Division of the East Asia Development Board [興亜院華中連絡部] endeavored to promote the Japanese language widely in central China during the second Sino-Japanese War.

The strategy of promoting Japanese was enforced by the Reformed Government [維新政府] of the Republic of China, a pro-Japanese regime established in Nanjing in March 1938, in collaboration with the aforementioned Japanese organs. The Reformed Government laid down guide lines to innovate education by means of removing contents from the existing textbooks such as implications of anti-Japanese, pro-Communist ideology, supporting the three-principles of the people [三民主義] and praising European-American culture. Instead, they created lay-outs to promote Japan-China prosperous coexistence, pro-Japanese education, Japanese teaching at schools, revaluation of traditional ethical teachings [Confucianism] and instilled them in the revised textbooks. The role of the Japanese language was expected to be a common language in east Asia including China, by which Chinese people would be consequently directed to work together for the founding of a 'New Order of East Asia'.

A report by the Central China Contact Division of the East Asia Development Board on the school operation shows that roughly 45,000 pupils and students from primary school to university levels were learning Japanese as of December 1940. In addition, about 4,000 general citizens were reportedly learning Japanese in 37 language schools in Shanghai. These figures show that, in two

years and a half from the start of the new regime in power, the total number of Japanese learners in central China reached roughly 50,000. It should be noted, however, that such language operation was limited only to the zones under the rule of the Japanese forces.

Four volumes of Japanese textbooks which followed the directed guide lines were published, and many of the materials were transferred from Japanese national textbooks for elementary schools. Japanese language teachers were recruited in Japan and China and underwent a three-month or one-year long training session. The number of engaged teachers, however, was far less than needed: primary schools, in particular.

The regime of Wang Zhaoming [汪兆銘] incorporated the Reformed Government in March 1940 and modified some measures of the preceding regime. Modifications made by the regime included a reduction of Japanese class hours by 1-2 hours a week and an increase of English class hours by 1-2 hours a week for middle schools.

The downsizing changes related to Japanese language classes were a way to cope with wartime needs: in the curriculum, more time could be allotted to practical and industrial classes such as business, labor, farming, and anti-air raid drills. In addition, fewer class hours for Japanese language lessons reflected Wang's wish that the Republic of China stay more independent rather than become a puppet state like Manchuria.

In conclusion, the promotion of the Japanese language in central China did not achieve the intended goal for the three reasons: 1) the administrative regimes were short-lived, 2) the educational changes were limited to zones under the rule of the Japanese forces, and 3) it lacked the support of the majority of the local population.

Thus, the scheme to promote the Japanese language into a common language in central China and east Asia collapsed with the defeat of Japan.

Keywords : promotion of the Japanese language, examination of school textbooks, puppet governments, Reformed Government, regime of Wang Zhaoming

「文」的な抵抗：満洲国における朝鮮民族の再構築 —今村栄治の「同行者」を例に—

王 晴（一橋大学大学院生、日本学術振興会特別研究員）

要旨

本稿は、満洲国時期という場における、今村栄治の小説「同行者」を通じて、満洲国における民族問題の様態の多面性をさぐろうとする試みである。以前の研究では、この小説は満洲国時期に日本帝国が揚げた民族協和の虚偽性を批判するという抗日的な意図を持っているものとされたが、本稿では、「同行者」は、申重欽という在満朝鮮人が「ゆきづまり」の状態下、「同行者」から刺激を受けて内在する個人意識が喚起され、即ちアイデンティティ問題を解決しようと最後に決断を下したことを描いたが、その後ろに「宙ぶらりんな立場」に立っていた朝鮮民族は決断を下さなければならないという歴史的時刻を迎えたという小説の主題もがあったことを指摘した上で、作者の創作動機を明らかにすることである。つまり、この小説の主題となるのは、朝鮮という民族は「五族協和」の中の一つの民族になるため、個人意識の覚醒から隠喩された民族的覚醒によって、如何に「内鮮一体」や皇民化運動から脱出し再民族化が可能であるかということなのであることと結論づける。このような過程によって、当時満洲国の民族問題は「五族協和」という単一的言説からより多面的に考察することができると考えられる。

キーワード： 満洲国文学、今村栄治、民族意識、五族協和、内鮮一体

はじめに

今村栄治（本名張喚基、1911－？）の「同行者」¹⁾という短編小説は最初に1938年6月の『満州行政』（5巻6号）に発表され、その後1938年10月の『満州浪漫』雑誌創刊号に転載された。今まで多くの研究は「同行者」に示された在満朝鮮人のアイデンティティの危機について検討しているが、その中でも、作者が小説で表した民族間の不信感を明らかにし、そして「五族協和」を批判することになったという意見もある。例えば、張彤は「从今村栄治的《同行者》看偽満洲時期中国東北形象（今村栄治の「同行者」における偽満時期中国東北のイメージ）」²⁾という文章で、この小説によって、日本人は五族協和の実績を見せているのであると指摘した。また、謝瓊は「満洲コンテクストにおける異族同行物語：安部公房『けものたちは故郷をめざす』と今村栄治『同行者』を例に」³⁾という論

文において「このような同行物語は、日本によって植民地統治され、多民族が共生する満洲国のコンテクストにとって特別な意味をもっている。満洲国は一般の植民地とは異なり、いわゆる「五族協和」の独立国家というカモフラージュのもと植民地統治であるため、その植民地統治の階級関係はより複雑であり、より表面には見えにくいものであった。」と指摘した。それに、金長善は「今村栄治の文学初志とその変移」⁴⁾で、今村栄治のこの小説は「偽満洲国時代に日帝が揚げた民族協和の虚偽性」を批判したと述べた。また、劉雨薇の「偽満洲国時期日本語文学研究—以今村栄治的《同行者》為例」（「偽満洲国日本語文学研究—今村栄治の「同行者」を例に」）⁵⁾では、主人公は被植民者と植民者の二つの身分があるため、「五族協和」の不平等的側面が窺えると指摘された。四人の研究者とも、この小説を「五族協和」や「民族協和」と結びつけて論じたが、小説の主題を「五族協和」に限定したことには、多少違和感を覚えるのである。この点について突き詰めると、二つの疑問が浮かび上がってきた。

一つは、この作品に書かれた時期は萬宝山事件から満洲事変が発生する直前の間、つまり、1931年の7月から9月までの間ということである。「五族協和」という言葉について、伊東六十次郎は「『民族協和』という言葉は、満洲事変の前年ごろから初めて使用された言葉で、満洲在住の日本人、殊に中小企業従事者が民族主義による支那人の排日運動に対応するために唱道したスローガンです」⁶⁾と述べたが、山室信一によると、最初の頃、このような表面の友好的な言辞とは裏腹に「国際信義を無視せる排日教育の根絶を期す」という項目—その原文は「排日政権の撲滅」—と一体のものとして設定されたきわめて攻撃的意図を秘めたスローガンだったのである⁷⁾。しかも、このスローガンは極めて狭い範囲で使われていたのである。しかし、「五族協和」を唱える民族平等の方針に基づいた満蒙青年連盟より提案された「民族協和」案は1932年3月1日、満洲国の「建国宣言」の中に、「凡そ新国家領土内に在りて居住するものは皆種族の岐視尊卑の分別なし…平等の待遇を享くることを得」⁸⁾のように盛り込まれたことによって、全ての民族を平等に扱うことを呼びかけてきた。その後、協和会の設置をはじめ、この「五族協和」というスローガンが広げられ、広い範囲で多くの反響を呼んでいたのである。その流れから見れば、1938年という時期に、いくら作者が「五族協和」に不満があったとしても、朝鮮民族が含まれるその民族協和政策が出される以前の物語で「五族協和」を批判するのは筋が通らないことになっただろう。

もう一つの疑問は、萬宝山事件を題材にする作品からみれば、最も早いのは伊藤永之介の「萬宝山」（『改造』、1931年10月）である。その後の1932年に、中国無産階級作家の李輝英は同じタイトルの「萬宝山」（上海湖風書店発行）という作品を書き上げて、1933年3月に刊行した。この二つのほぼ同時代の作品（それに、事件が発生した直後に書かれた）は事件が発生した時の社会的階級構造に注目し、「階級問題」、つまり地主と農民、資本家と無産者の間の矛盾を小説の根本的な社会問題としたのである。すなわち、萬宝山事

件に対する解説には、少なくとも当時「民族問題」の側面はあまり注目されていなかったことが明らかなのである。

I. 満洲国における民族的言説空間

それでは、なぜこの小説は五族協和に対する批判という点が注目されるのか？それは1937年から1938年にかけて熱く議論されていた民族問題と作者自身の経験が結びついていからとも言えるのである。つまり、当時のコンテキストと作家自身の経験から見れば、何れにせよ民族問題は避けられない一つの重要な視座である。

小説が発表した1938年前後という時期に、民族問題は強い関心が寄せられていたのである。1937年は盧溝橋事件によって、日中戦争が本格化した時期であったため、日本側の民族主義思想（その時に国家主義に吸収されていた）は高まっていく傾向がある。それに関して、アジア全体的な民族意識を構築することや、戦争と民族の問題はさらに表面化されてきたと言える。そして、文学領域においては、1937年から1938までの一年間のうちに、大森義太郎の「文学と民族性の交渉」（『新潮』、1937年5月）、花田清輝の「日本民族政策の指導原理」（『東大陸』、1938年4月）や水野広徳の「戦争と民族」（『改造』、1938年5月）をはじめ、数多くの重要な理論的文章を刊行されたのであり、朝鮮を含め、いろいろな民族問題が盛んに討論されていた。

それに、作家の今村栄治自身にとっても、アイデンティティー問題はけっして軽視してはいられないものだった。なぜなら、当時満洲国の朝鮮人文学者は満洲・朝鮮の国境地帯に移住し、朝鮮語により創作するか、または、満洲国の朝鮮語新聞や雑誌に文学作品を発表するか、あるいは、満洲に住み、日本語で創作するか、という三つの選択肢があるが、日本語で創作する朝鮮人文学者はごくわずかであった。そして、今村栄治はその中の一人であり、つまり、朝鮮人作家の彼は日本人のペンネームで日本語作品のみ創作していったのである。今村栄治に関する情報は今までも少ない。『満洲文藝年鑑』第2輯⁹⁾と第3輯¹⁰⁾についている「満洲文藝人名録」によると、彼は「新京 文藝集團」同人と「文学地帯」同人であり、新京満日文化協会嘱託と満洲文話会事務として勤めていたそうである。また、北村謙次郎の回憶録『北辺慕情記』に昔の文話会の成員であり、長い間満洲文壇に活躍していた彼は、「当時日本人作家たちと仲良くなってきた一人の朝鮮人作家である」¹¹⁾と書かれている。そして、朝鮮人という身分を持ちながら、当時多民族的な地域としての満洲国に暮らしていた今村にとって、彼自身の経験から民族に対する色々な考えが独特な創作視角として作品に扱われることはありうることだった。特に作品中主人公の身分と経験から作者自身の影が連想できるという見解がよく見られるのである。例えば、岡田英樹は「旧「満洲国」の朝鮮人作家について」という文章で、今村は「同行者」を通じて、「自らは、道化役者、悲劇役者としてしか生きるすべがないことを十分に自覚していた」¹²⁾と指摘したが、まず作者の今村栄治と主人公の申重欽が如何なる関係があるのかを明確にしなければ

ばならない。

「同行者」の冒頭の部分は次のようなプロローグの部分があり、そこから主人公と作者の関連性を味わうことができる。

（——この短編に出てくる主人公……申重欽の生活は、すでにひどくゆきづまってゐる。すくなくとも彼自身、さう思ひこんでゐる。それはいづれこの小説を読んでいくうちに、理解できれば幸ひであり、またよしんば、どうもわからない、と苦情がでたところで、とにかく主人公がさう堅く思ひこんでゐるからには、彼自身にとっては、たしかにゆきづまってゐるのであつて、作者自身も、こゝに身勝手な説明はできない立場にあるのだ——）

このプロローグによると、「ゆきづまり」という主人公の心理的な状態を理解できるかどうかという立場から、主人公、作者、語り手、読み手の位置関係がわかった。そして、「彼自身がさう思ひこんでゐる」主人公とこの状態に対して「身勝手な説明できない」立場に立っている作者との間には、壁があることがわかった。つまり、主人公の感覚は作者さえも理解できない可能性があるということである。しかし、物語の語り手は全知の視点に立っているが、主人公はそうではなく、もちろん主人公の心理状態さえ理解できない作者も透視不可能である。そして、語り手、主人公、作者はそれぞれの立場に立ちつつ、互いの位置関係を示しているのである。こうして、作者の中立性的な立場（つまり主人公の行き詰まりに対して説明できない立場）に誘われるか、あるいは語り手の超越的な立場（つまり主人公の行き詰まりに対する理解は主人公以上にある立場）に誘われるか、いずれにせよこうした選択ができる立場は聞き手を対照的な立場に置かせたのである。言い換えると、読み手が主人公の心理状態を理解するかどうかによっていずれかの立場に誘われる結果になったのである。このような位置関係はどういう意味があるのかについて後で論じる。ここで明らかにしなければならないのは、作者と主人公は同等に扱うことができないということである。

それでは、作者が萬宝山事件を題材にすることに対し、小説の中に現れた民族問題を如何に理解すればいいのであろうか。本稿は、テキスト分析を用いて、今村栄治の「同行者」の中に民族的アイデンティティーの役割を明らかにする試みである。こうして、作者の真の創作動機を探し求めていきたい。

Ⅱ. 「行き詰まり」という痛感：民族認識を再構築する原動力

1. 個人的な覚醒と民族意識の展開

まず、小説のあらすじを簡単に紹介する。

「同行者」は、満州事変の直前、主人公の申重欽がゆきづまりを感じて、いらいらしている状態になっているところから始まる。彼は10年前、朝鮮から大連に渡ってきて以来、ずっと日本人と働き、日本人と遊び、日本人と暮らしてきたので、日本語だけを話せるようになっていた。彼自身も、完全な日本人になることに力を尽くしていたのである。しかし、何らかの原因で、彼は生活のゆきづまりを覚えて、満州の田舎の長兄のところに行かなければならなくなかったが、都会の文化生活に「慣れすぎた」申重欽は、辺鄙な地域にいく決心がつかない。その時宿屋の老人から、申の長兄のところへ行く日本人が同行者を探しているという話を聞いて、申は一緒に田舎へ行くことにする。その時期はちょうど萬宝山事件が抑まってから間も無く、中国人と朝鮮人の間は衝突事故がよくあった。申重欽は、普段からの日本着物を「支那服装」に着替えて、「支那人」に変装したが、同行者の日本人は朝鮮人に変装すれば安全だと思って、朝鮮服を着てしまった。そして、「支那人」に変装した日本人になりたい朝鮮人の申重欽と「朝鮮人」に変装した日本人は同行者になった。二人は互いに不信感を抱き、そして途中では「不逞鮮人」に遭遇して、同行者の日本人はさらに申を疑うようになる。その時申は自分の宙ぶらりんな立場をはっきりさせるため、同行者の銃を奪い取って、「不逞鮮人」の方に向けて構える¹³⁾という結末である。

このようなあらすじからみれば、民族的なアイデンティティー問題はもちろん重要な議題として浮かび上がってくる。例えば、主人公の申重欽は朝鮮人としてうまれても、植民地時代に成長しており、皇民化教育を受けたため、身をもって日本人になろうと実行しているのである。彼自身は朝鮮人の身分を捨てて、血縁や地縁から成り立っている社会を離れて、大連から満州の長春で「日本人」として暮らすようになったが、さまざまな民族的な問題にぶつかってきた。それだけではなく、小説の背景の一つは、萬宝山事件が発生してから間も無い時期である。その事件によって確かに朝鮮人と中国人と日本人の間に罅りができたのである。それぞれの民族的な表象のもとで、この小説を読み解く時、小説の主題は民族問題に結びつけられる傾向があるだろう。しかし、こうした民族問題は小説の文脈の中で如何に捉えられるのかを明らかにする必要がある。

小説の冒頭の部分から、主人公の申重欽が「ゆきづまり」の状態に陥っていることを繰り返し述べていた。このような「ゆきづまり」は時勢のような歴史的コンテキストにおけるものではなく、ただ「彼自身の個人生活の逼迫状態」であることにすぎない。甚だしきに至っては、彼は大きな歴史事件は自分と関係がないと述べて、政治への無関心さえ見せていたのである。そして、彼自身はこのような「ゆきづまり」は個人的な生活にとって無力感しかもたらさないと思い込んでいるのである。そこから物語が始まった。ここで注目すべきなのは、この「ゆきづまり」は申が慣れすぎた文化生活の都会から離れて、原始的な、野蛮な長春のへんぴなところへ行く原因となりながら、これまでの原子化されて孤立している彼個人の立場を明らかにしたのである。それは、

朝鮮人として生れてみながら、朝鮮の風俗や習慣を毛ぎらひし、言葉さへ忘れかけて、日本人にならうとしてきた。そして今になつて結局どちらにも容れられずに、両方から絶縁されて、原始的な、文化度のひくい満州のへんぴなところへ追ひやられていく自分。

このような都会にいられなくなって、辺鄙なところで生活することに自信がない現実的な状態と対照的に、精神的に朝鮮人と日本人にどちらにも属していない状態も明らかになったのである。すなわち、「ゆきづまり」というのは、生活上の圧迫だけではなく、精神上でもゆきづまりになっているのである。特に、

申重欽がハタと思ひつくのは、ここでもまたその種の不穩の朝鮮人と、日本人とのあひだに立つ自分の、甚だ宙ぶらりんな立場を痛感しなければならなかった。

と述べた点は重要だ。自我をその孤立性と局限性において経験することは自我意識を獲得させる瞬間だという¹⁴⁾。ここでは「痛感」という言葉が極めて重要である。なぜなら、痛感とは自我存在を意識することの媒介であるからである。そして、痛感を感じた瞬間は主体的な認識が覚醒されるとも見られるのである。つまり、「ゆきづまり」という外在的な状態が内在化された過程において、申重欽の精神状態の不安が現れたのであろう。このような不安は特に同じく朝鮮人の宿屋の老人や朝鮮人のポーターに嫌われた時、「針尖のやうな感じできいた」、「ひどく寂しいのと名状しがたい腹立たしさ」のような気持ちに転換し、激しい怒りに変わったのである。そこには、情感の他者化（他者に投げ込むこと）によって、自我意識をより具体化させている傾向が見られる。その時こそ、申はアイデンティティー問題の変えられない構成部分を意識した。それは次の部分でも明らかである。

朝鮮人だといふ、民族的には死んでも拭ひ得べくもない血の烙印をつけてみながら、國民としては思想的にも性格的にも全き日本人に變形した申重欽は、しかしこの両者のあひだに立つては、どちらを向いても赤面せずにゐられないのだ！

ここではまず一つの事実が指摘された。それは、申重欽にとって、如何にしても血縁に決められた朝鮮人というアイデンティティーが抹殺できない事実が存在しているということである。言うまでもなく、アイデンティティーの構築は何よりもまず地縁、血縁によるものである。それに基づいて、言語という自我の内部と外部を掛け渡すものを通して、精神的に一貫している民族意識が構築できるのである。しかし、前述のように、申重欽の成長している時期はちょうど朝鮮で皇民化運動が盛んでいた時期である。申は子供の時から、学校だけでなく、家庭でも皇民化教育を受けていたことが小説からわかる。しかし、このような血縁と切り離し、人工的な「人種改造」を経験しても、申は計画通りに日本人にな

ることではなく、かえって「民族的な溝」に置かれ、「宙ぶらりん」という矛盾だらけのアイデンティティー問題にぶつかってしまったのである。それは彼の「悲劇的な役者」になった一つの原因であると言える。

前述のように、申は生活上のゆきづまりを感じてから、精神的にどこにも属していない状態に置かれることに気がついて、そこから「痛感」を感じ、初めて自我意識あるいは主体性に対する認識が喚起されたのである。そして、血縁を変えることができないことに皇民化の虚偽的側面を意識することによって「いつたい俺は、どこへゆくのだ！」と絶望的な心情を吐露することになる。こうして、アイデンティティーに関する身分確認を捉え直す契機となったのである。このような過程は、申にとって、自我意識の無から有になる過程である。そして、最後に申は次のように考える。

それは三千年の韓国の傳統と、亡國的な、しらじらい溝であった。申重欽はこの溝をも越えてもどることはできないまで性格が變つてしまつてゐたし、また越えようとも思はなかった。

しかし同行者の日本人から感じた辱めによって、彼は以下のように決断を下す。

自分の宙ぶらりんな立場を、はつきりと地につけねばならないのだ！

と決断しなければならない時機を迎えた。これは決断を迫られる瞬間でありながら、自我意識の能動性が最大化される瞬間でもある。申の行為としては、同行者の銃を奪い取って、「不逞鮮人」の方に向けて構えることであるが、このような結末はかなり深い意味が含まれている。

2. 一つの文、二つの結末：創作動機の解明

まず、小説の結末は実は二つある。『満洲行政』に発表されたこの小説の結尾には「申重欽はにじみでる涙を拳で横なでに拭って、短銃をしかと把って構へ、近寄りつつある八人の男たちをにらんだ。」¹⁵⁾と締めくくったが、『満洲浪漫』では、後にもう一つの文が加わった。それは「楊柳の梢で鵲が啼いてゐる。」である¹⁶⁾。この違いについて今までの研究や評論では触れることがほとんどなかった。当時もこの区別を見逃していることがわかった。例えば、『満洲浪漫』は創刊したばかりの頃、青木実が「満洲浪漫第一輯を觀る」（『満洲日日新聞』昭和13年11月1日）という文章でこう述べた。

満洲において刊行された文學的出版物としては、（『満洲浪漫』第1輯は）正に划期的な詩文集であることにおいて特筆されなければならない。ただ待望されてゐた本誌の

作品の大半が、既発表作品の再録に終わったのは、一體どうしたことであらう。作者たちの怠惰か、若しくは優秀な作品だけを再録したといふのだらうか。僕一個の感想を言はしてもらふなら、満洲文学の前進のためには、未完成でもいい、破綻が見えてもいい、新作品をこそ、この見事な新しい器に盛ってもらひたかった。さういふ希望のこゑが、見えないところから聞こえてくるやうな気が僕にはする。そのやうに、この満洲の土地に在るものは、まだ何も書かれてゐないのだ。

ここで、『満洲浪漫』第1輯において収録された作品はほぼ全部再録ものということに対して、青木実は強い批判を投げたが、今村栄治の小説、特にその結末に違いがあることが気づいていなかったことも明らかである。『満洲浪漫』の小説の部分は全部再録したものという同じ意見は『「満洲浪漫」的主張』（作者不明、『満洲日日新聞』昭和13年11月9日）にも見られる。もう一つの例は『満洲文藝年鑑』（第3輯）が「同行者」を掲載した際、その一年間の小説を概観する評論も載っている。そこで、秋原勝二の評論が引用された。「これは立派な満洲で生まれた一つの完成品である。ここに現れた日本人もさること乍ら、申重欽といふ朝鮮人の、今まで心から日本人たらんとしてきたため、生活は失ひ、両者の何れでもない深い二つの溝にはさまれ苦悶してゐる心情は充分注目に価する。東洋に起った國家的變動、民族的移動は、益々この種の人間達を生む可能性が多い時、この作品は磨きのかかった一つの提示を行つてゐる」¹⁷⁾。このようなオープンエンドの解説には、秋原勝二が『満洲浪漫』版の異なる部分を見逃してしまったことがわかる。つまり、当時の評論にせよ、今までの研究にせよ、この小説の結末の変化は注目されていなかったことが明らかなのである。

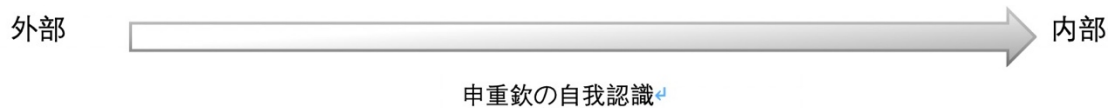
しかし、この目立たない最後の一つの文は極めて重要であるといつてもいい。この文があることで小説の主題、ひいては作者の意図も変わってくるのである。言い換えれば、もし最後の描写が「申重欽はにじみでる涙を拳で横なでに拭つて、短銃をしかと把つて構へ、近寄りつつある八人の男たちをにらんだ」という一言で締めくくることがなった場合は、この小説はオープンエンドでありし、作者自身の選択は明確に出されていないと言ってもいい。しかし、「申重欽はにじみでる涙を拳で横なでに拭つて、短銃をしかと把つて構へ、近寄りつつある八人の男たちをにらんだ。楊柳の梢で鵲が啼いてゐる」となると、実際に明確な結論を出すことが可能である。なぜなら、「鵲が啼いてゐる」という点から、最後に銃声がなかったことが推測できると考えられるからである。次は、鵲という鳥は戦国時代から安土桃山時代にかけて、朝鮮の特有の鳥とされ、江戸時代にも「朝鮮がらす」、「高麗がらす」と呼ばれた。今でも韓国の国鳥になっている。そして、「鵲」のイメージを用いて申のアイデンティティーの選択を暗示していると考えすることは極めて可能であると言える。

それに、『満洲浪漫』の結末を取り入れて分析すれば、この小説は申重欽の内面的な心

理変化を主線にしていることが明確である。以下に物語の流れとそれぞれの刺激がもたらした心理変化の過程は次のように整理できるだろう。

物語の流れ	日本人という自己認識	朝鮮人のくせに日本人の振りをしているという他者の目線を感じた	支那人の服を着て、辺鄙なところへ行く	日本人の同行者と付き合っている間	不逞鮮人とされた時の憤怒
心理	優越感	行き詰まり	無力感	不安、怒り	痛感、決断

(図 1 : 申重欽の心理的变化)



(図 2 : 申重欽の自己認識)

このような過程から見れば、時間順にしたがって、申が外部から受けた刺激は順々に内面に浸透し、自我意識を呼び起こし、最後には決断を迎えなければならないという状態になっていた。しかし、このような過程は個人的な意識に止まらず、その深層にアイデンティティー問題が潜んでいることも見逃してはならない。すなわち、申の私的な物語は自我意識の喚起によって、民族意識と結びついていた。そこで、申という個人と在満朝鮮民族は隠喩的な関係を成して、個人の物語は民族寓言に転化していくと捉えられるのである。

ところが、プロローグの部分に戻って、なぜ作者が中立的な立場をとるのかといえば、主人公の自我意識に介入せず、啓蒙者はずの作者を殺す（あるいは隠れる）ことで、近代的な個人が内在性を掘り出したのだと考える。¹⁸⁾ それでは、朝鮮人自身が民族意識を喚起することには作者にとって、どのような考えがあるのだろうか。

Ⅲ. 「独立性のある文学」への憧憬

これまで作者はこの小説を通して、如何なる民族問題を取り扱っているかが明らかになった。1910 年代日韓合併以来、特に 1930 年代の皇民化運動以後、民族意識という主体意識が薄くなってきた朝鮮民族は、満洲という「内鮮一体」より「五族協和」を求めている特別な地域において民族的意識を取り戻し、独立した民族として立ち直ることが如何に可能であるかという考えである。なぜこのような時期に朝鮮民族の独立が望まれているのだろうか。実は、1935 年から 1937 年までの間、在満朝鮮人にとって一つ重要な政策を巡っ

て激論が行われたのである。それは、治外法権撤廃案¹⁹⁾である。治外法権の議論は満州事変以来絶え間なく続いていたが、1935年2月、日本政府は外務省を中心とする「満洲國治外法権撤廃に関する委員会」を設置し、治外法権撤廃および付属地行政権移譲に向けた審議が開始された。そこから、満洲国の治外法権撤廃をめぐって、在満朝鮮人の政治権利問題についての議論が盛んになった、その時民族協和理念を実践していた趙烈は、在満朝鮮人は満洲国の一つの民族として存在し、政治権利を所有すべきだと呼びかけていた。趙は「在満朝鮮人の要求」という文章で、こう述べていた。「朝鮮人は満洲国の国民であり、朝鮮民族として立つ場所を与えられるべきである。そして、ほかの要求と同様に、朝鮮人に「自治権」を与えられるべきである」²⁰⁾と。この要求に応じて、第一回治外法権撤廃案が立案された後、前満洲朝鮮人民会聯合会理事の朴秉俊は1936年6月21日に、新京で放送したラジオで「治外法権と在満朝鮮人」というタイトルの朝鮮語講演を発表した。彼はこの講演を契機に「五つの民族の間に文化差異や民族差異があるので、「民族協和」とは、この五つの民族を一つにすることではなく、むしろ各民族を単一民族として認めた上で、各民族の特性を尊敬し、各自に政治自由という権利を与えることが必要である。それに、治外法権が撤廃した後、朝鮮人の進行方向は朝鮮民族の自治を実現することである」²¹⁾という意見を述べた。つまり、前述した秋原勝二のいう「東洋に起った國家的變動、民族的移動は、益々この種の人間達を生む可能性が多い時」²²⁾を確かに迎えたのである。

1937年の治外法権撤廃に際して、日本人全ての特権を取り消す政策に応じて、満洲文学界はいわゆる「満洲文学独立性」を呼びかけた。しかし、在満朝鮮文学者たちはこの一体的な方針を反して、体系化したあらゆる満洲文学的領域において朝鮮人文学に基礎を置くべきだと呼びかけていた。すなわち、朝鮮文学は日系文学、満系文学および他系の文学と同様に、満洲国文学を構成する一部分を成すことと、民族文学の一つの分支として、他の民族文学と平等に交流し、一斉に満洲国文学に組み入れることを要求されていたのである。こうして、朝鮮文学を独立的な存在としながら、満洲国文学の中の一つの民族文学ともなっている。このような主張から見れば、在満朝鮮の文学者たちは何よりも「独立性」を望んでおり、特に、治外法権撤廃を契機にしてこの時期さえ「一つ民族としての朝鮮民族の独立」という願望を提起することができるようになったのである。

おわりに

こうして、今村栄治の小説「同行者」は、申重欽という在満朝鮮人が「ゆきづまり」の状態下、「同行者」から刺激を受けて内在する個人意識が喚起され、即ちアイデンティティ問題を解決しようと最後に決断を下したことを描いたが、その後ろに「宙ぶらりんな立場」に立っていた朝鮮民族は決断を下さなければならないという歴史的時刻を迎えたという背景があったのである。そして、小説の物語を1937年という時期の朝鮮民族主義的背景に置けば、作者の今村栄治はこの小説を通じて、偽満洲国時代に日本帝国が揚げた民族協和の

虚偽性を批判するという抗日的な意図を持っていたわけではなかった、彼が最も関心があるのは、理念上の五族協和にせよ、現実社会の民族問題にせよ、何よりも朝鮮人にとって民族の独立に向かう時避けて通ることのできない道は皇民化されている状況から再民族化することである。つまり、この小説の主題となるのは、個人意識の覚醒から隠喩された民族的覚醒によって、如何に「内鮮一体」や皇民化運動から脱出し、独立という再民族化が可能であるかということなのである。

注

- 1) 本研究は主に『満洲浪漫』版を使用するが、『満洲行政』を対照。
- 2) 張彤(2014)、「从今村栄治的《同行者》看偽満洲時期中国東北形象」『日本研究』第1期、92頁。中国語原文は「可以窺見日本人打着所謂的“五族協和”旗号的殖民統治……从而完成其所謂的“五族協和”的“偉業”」である。
- 3) 謝瓊、「満洲コンテクストにおける異族同行物語：安部公房『けものたちは故郷をめざす』と今村栄治『同行者』を例に」、刊行情報は不詳である。引用は
<http://hatano.world.coocan.jp/kaken3/18sympo/sha/sha-j.pdf> (2019年1月10日午後3時に)からである。
- 4) 金長善(2004)、「今村栄治の文学初志とその変移」『偽満州国時期朝鮮人文学と中国文学の比較研究』亦楽発行。柳水晶(2006)、「「臣民」と「不逞鮮人」—今村栄治「同行者」に見る民族・移民・帝国」『日本語と日本文学』第2期、58頁から再引用した。
- 5) 劉雨薇(2015)、「偽満州国日本語文学研究—今村栄治の「同行者」を例に」厦門大学外文学院第八届研究生學術研討会。
- 6) 伊東六十次郎(1983)、『満洲問題の歴史』原書房、1008頁。
- 7) 山室信一(1991)、「「満州国」の法と政治—序説」『人文學報』3月号、137頁。
- 8) 小林竜夫他(1965)、『現代史資料 11 続満洲事変』みすず書房、524頁。
- 9) 吉野治夫(1938)、『満洲文藝年鑑』葦書房、459頁
- 10) 今村栄治(1939)、『満洲文藝年鑑』葦書房、467頁。
- 11) 北村謙次郎(1960)、『北辺慕情記』大学書房発行、61頁。
- 12) 岡田英樹(1992)、「旧「満洲国」の朝鮮人作家について」『昭和文学研究』、54頁。
- 13) その結末は二通りある。後に論じるので、ここでは一般的な結末を紹介する形になっている。
- 14) 清水亜紀子(2009)、「「自己の二重性の意識化」としての自我体験—体験者の語りを手がかりに」『パーソナリティ研究』第17巻第3号、231-249頁。
- 15) 『満洲行政』という雑誌の1938年6月号はまだ見つかっていないため、ここで使用したのは、『満洲行政』から転載した『満洲文藝年鑑』(第2輯)版の小説である。
- 16) なぜこのよう違いがあるのか、ここで筆者の推測は、『満洲行政』や『満洲文藝年鑑』は公

的な刊行物なので、当時厳しい審査を受けて、ふさわしくない部分を削除したのである。

しかし『満洲浪漫』は同人誌であり、発行した範囲は限定的である。そして、ある程度の自由度を与えられたのではないかということである。

17) 青木実（1939）、「小説概観」『満洲文藝年鑑』葦書房、10 頁。

18) 『満洲浪漫』版の結末からみれば、作者がわざわざこの小説の虚構性を強調することにはもう一つの理由があるかもしれない。それは、作者が自分の意図を隠すためである。このような行為はどういう意味があるのだろうか、当時の書報審査制度と関係があるかどうかについては、今後の課題としたい。

19) 治外法権撤廃案が提出された背景とは、満洲国はその建国宣言および対外通告の中で、中華民國の国際条約上の義務（例えば、日本人も含める外国人に対する治外法権的地位を許すとか）を承継すると声明しているが、新国家が分離した場合において旧国家の負っている対外義務の中で治外法権のようなものは承継する限りでないという国際法上の通説があるので、満洲国はこれに基づいて、治外法権撤廃を提出したものである。『治外法権撤廃読本』（国務院総務庁情報処 満洲行政学会、昭和 12 年）を参照。

20) 申奎燮（2000）、「在満朝鮮人の「満洲国」観および「日本帝国」像」『朝鮮史研究論文集 38』緑蔭書房、108 頁。

21) 同上。

22) 青木実（1939）、「小説概観」『満洲文藝年鑑』葦書房、10 頁。

**The Resistance by Literature : The Renationalization of The Korean in
Manchukuo-Take the Novel of “The Accompanier” by Imamura Eiji as an
Example**

WANG, Qing

Abstract

This paper is an attempt to examine the complexity of the ethnic problem in Manchukuo through Imamura Eiji's novel "The Accompanier ". The main theme of this novel is how the Korean nation could escape from the "Japan and Korea as One (naisen ittai)" and the movement for imperialization and re-ethnicization of the nation by a national awakening, which is a metaphor for the awakening of individual consciousness. In this process, the ethnic problem in Manchukuo at that time can be examined from a single discourse of "Five Races Under One Union" in a more multifaceted angle.

Keywords : Manchu literature, Imamura Eiji, ethnic problem, Five Races Under One Union, Japan and Korea as One (naisen ittai)

ノーベル文学賞受賞と莫言文学の真髄 —授賞記念講演「語り部として」を中心に—

ニイ ウエイ（常葉大学）

要旨

2012年10月、莫言は「幻覚的なリアリズムによって民話、歴史、現代を融合させた」としてノーベル文学賞を受賞した。莫言はノーベル文学賞を受賞した初めての中国籍作家となった。同年の12月7日夕方、莫言はスウェーデン・アカデミーの第四講堂で『講故事的人（物語を語る人）』と題した授賞記念講演を行った。

本稿は彼の「ノーベル文学賞受賞演説」—「語り部として（講故事的人）」を中心に据え、莫言の持つ人間観、世界観を考察しながら、莫言文学の本質を探る。

キーワード： 莫言、中国古典小説、ノーベル文学賞、幻覚的リアリズム

はじめに

2012年10月、莫言は「幻覚的なリアリズムによって民話、歴史、現代を融合させた」としてノーベル文学賞を受賞した。莫言はノーベル文学賞を受賞した初めての中国籍作家となった。同年の12月7日夕方、莫言はスウェーデン・アカデミーの第四講堂で『講故事的人（物語を語る人）』と題した授賞記念講演を行った。講演は中国語で行われ、聴衆にはスウェーデン語や英語など七ヶ国の言語に翻訳されたペーパーが配布された。中国語のみで行われた講演では、生まれ育った山東省高密県東北郷での幼少期の思い出に多くの時間が割かれ、貧困や飢餓、孤独が暗い影を落としたことについて語られた。過去の多くの受賞者の中で、中国籍の作家として初めて受賞したことで、なかでも注目を集めることになった。上海復旦大学の梁永安教授は「ノーベル賞の受賞スピーチはほとんどが『文学の基本的価値の論述』か『民族文化に関する論述』の2種類に偏っているとし、前者がフォークナーで後者は川端康成代表される。…おそらく、莫言は川端康成のスピーチ寄りで、もちろん自己の創作も多少は加えるだろう」と予測した¹⁾。

講演後、スウェーデンの外交官バクストランド氏は「莫言氏の表現はとても的確だ、その的確な表現こそが莫言氏がノーベル賞を受賞した理由だと思う。1つ1つの小さな物語が人生を作り出すからだ」と述べた²⁾。一方、中国のネットでは「まるで中学生の作文だ」や「あまりに中国的、農村的すぎて欧米の人間には伝わらないのではないか」という否定

的な意見も書き込まれた³⁾。

そのような国内外での賛否両論があった後の2015年9月、中国全土の小中高校の国語教科書の改訂を迎える際に、受賞記念講演の内容が中学校の国語の教材に選ばれると、驚きと共に広く注目されることとなった。これまでの莫言作品を中学・高校の教材に取り入れるか否かの議論がされてきたが、「透明な赤蕪」、「赤い高粱」、「耳からの読書」などの作品が資料集に採用されることがあっても、教材に選ばれることは稀であった。中国の小中高校の国語教科書では、かつては魯迅の「風」、「孔乙己」、「故郷」、「魯迅自伝」など高度な思想や精神をもつ内容しか採用されなかったのである。本稿は彼の「ノーベル文学賞受賞演説」(Speech Accepting the Nobel Prize for Literature, 2012) — 「語り部として（講故事的な人）」を中心に据え、莫言の持つ人間観、世界観を考察しながら莫言文学の本質を探りたい。

I. 「物語る人」

スウェーデン主要紙アフトンブラデットなどによると、「莫氏はスピーチ原稿をホテルに忘れてきたにもかかわらず、時間は十分あったのにホテルより原稿を取り寄せることもなかった」と報じられ、元産経新聞ロンドン支局長木村正人は「故意に原稿を忘れたとしたら、その真意は何か。中国共産党と国際社会のはざまで、できるだけ当たり障りのないあいさつで済ませようとしたのだろうか。」と厳しめの指摘をしている⁴⁾。莫言の受賞が様々な議論を呼んだのは当然であるが、政治的な目線で莫言の言動に注目するのではなく、莫言文学の世界そのものに焦点を当てる必要性がある。

莫言のノーベル文学賞受賞記念講演のタイトルは「語り部として」、「私は一人の物語る人です」と語った⁵⁾。スウェーデン・アカデミーは「ファンタジーとリアリティー、歴史と社会に対する認識を結合してウィリアム・フォークナーやガブリエル・ガルシア＝マルケス作品の複合性を連想させる作品世界を創造したと同時に中国伝統文学と口承文学の伝統から出発点を見つけ出した」と評価した⁶⁾。口承文学とは、文字によらず、口頭のみで後世に伝えられる形態（口承）の文学である。文字を持たない民族に伝わった物語、あるいは、宗教的呪術的な理由などにより、文字（書物等）として伝えられなかった物語などである⁷⁾。莫言の故郷である山東省は齊魯文化の発祥の地であり、この地区の人々は東夷文化を基盤に、中原地区の文化を吸収し、齊魯文化を創造した。春秋戦国時代を通して、孔子（本名：孔丘）、孟子（本名：孟軻）、墨子（本名：墨翟）、孫子（本名：孫武）等の有力な思想家が活躍し、後代には蒲松齡など著名な文学者も現れて、漢族の伝統的な文化、文学、思想をよく保持した地域として知られている。地域文化の多大な影響を受けた莫言は講演で以下のように語った。

学校をやめてから、私は大人たちの中に紛れ込んで、「耳学問」の長い生涯を開始し

ました。二百年余り前、私の故郷は嘗て一人の物語を語る偉大な天才、蒲松齡（1640～1715年）を輩出しました。私たちの村の多くの人は、私も含め、彼の後裔です。私は集団農場の畑の中で、生産隊の牛小屋や馬小屋で、祖父や祖母の熱いオンドルの上で、時にはゆらゆら揺れながら進む牛の曳く荷車の上で、たくさんの妖怪変化の物語、歴史上の奇談、言い伝えなどを聞きました。これらの物語は、故郷の自然環境、家族や歴史と密接に結びつき、私にとって強烈な現実感を生じさせました。私はいつの日かこうしたものが私の創作の素材になるなどとは夢にも思っていませんでした。私は当時、物語好きの子供に過ぎず、人々の話すのを夢見心地で聞いていました。当時、私は絶対的な有神論者で、私は万物には魂が宿ると信じていて、大木を見ると厳かに手を合わせました⁸⁾。

ここで語った「耳学問」とは「講談師」の語りを本替わりに聞くことを指している。講談師の語る物語は固定されることがなく、途中で新しいエピソードが挿入されたり、話の筋が変わったりすることもあるし、活字を伴わないために、物語の伝承者が絶えるなどして、物語そのものが辿れなくなってしまうこともあるのが特徴である。現代では民俗学の分野などで、研究のために文字に起こされた記録も出版されており、口承文学の全てが口承の形態でのみ伝わるとは言えない。莫言は演題「物語る人」で、村の市場にきた講談師から聞いた話を母親に復誦し、また自らも脚色を加え、母親の好みに合せて、異なった筋を幾つか編みだし、物語の結末まで作り変えてしまうことさえあったと、ユーモアを交えながら紹介している。莫言は単に語るだけでなく、演じることさえ意識しているようだ。

例えば、講演の冒頭に「まず、原稿に書かれている内容以外の話をさせていただきます。実は2時間ほど前、このスウェーデン学院常務秘書の夫人が可愛い女の子を出産されたそうです。これは今日の物語のとても美しいスタートになるでしょう。この会場にいらっしゃる中国語も外国語も分かる方々がきっと私のこの話を皆さんにお伝えいただけるでしょう。この場を借りて、心から熱烈なお祝いをさせていただきます。」という新しい命の誕生の祝福の言葉から話を始めている⁹⁾。莫言はアドリブの講演を好み、その時その場の状況にうまく合わせながら感想や話題を自由に表現することが得意だが、たまに会場の拍手と笑いについて有頂天になってしまい、正しくない用例、不適切な言葉づかい、過度の風刺に走ってしまうことがあり、その結果講演後に面倒なことが生じる場合がある。それにもかかわらず、アドリブでの講演を望んでいることを自ら語っていることがある¹⁰⁾。

そして、講演の終盤では祖父から聞いたという話を披露する。それは以下のような話であった。八人の左官職人らが嵐と雷を避けるために荒れ寺に逃げ込んだ。このような危ない目に遭うのはきっと誰かが悪事を行ったせいではないかという話になり、他の七人に迷惑をかけないために自ら外へ出て、罰を受けたほうがいいとその中の一人が提案する。当

然、誰も出るとは言わない。そこで、みんな自分の麦わら帽子を寺の門から外へなげ、風に飛ばされればそれが悪事を働いた証拠だろうと話がまとまり、全員が帽子を寺の外へ投げた。そうすると、七人の帽子は風で寺の中に舞いもどったが、一人だけが帽子を外へ飛ばされた。みんなはその人に罰を受けろと迫るが、その人は拒んだ。仕方がなく、みんなはこの男を担ぎ上げて、外へ放り出した。ところが、担いで放り出された途端、荒れ寺は音を立てて倒壊した。この「小さな物語」を通して、善悪、正義などの倫理観を物語の視点から読み直し、中国思想の枠組に還元しようと試みているのである。このような個々の「小さい物語」を織り直し、最後には「私は語り部です。お話を語って、私はノーベル文学賞を受賞しました。受賞後、いろんな面白いお話が生まれましたが、そうしたお話は、私に真理と正義の存在を確信させてくれました。これからの歲月、私は私のお話を語り続けるであります。」と締めくくったのである¹¹⁾。

Ⅱ. ペンネーム

莫言のペンネームに関しては、さまざまな読み取り方がある。長堀祐造は「本名・管謨業。莫言は名前の一文字を分解したもの、「言う莫(なか)れ」。政治や性のタブーに挑戦し続ける作風を主張するかのような命名。」と述べている¹²⁾。そして、莫言のノーベル文学賞受賞式に莫言から招待された吉田富夫（2013）も「莫言の世界」で「幼い頃はおしゃべりでよく叱られていたのに、この時期のストレスで、一時期は人前でどもるようになったと言いますから、莫言、言う莫れというペンネームの由来の一つかもしれません。」と述べている。莫言のペンネームに関して、さまざまな憶測を呼び込んだが、莫言自身は以下のように語っている。

間もなく、私はただ講談師が話した物語をそのまま話して聞かせるだけでは満足できなくなり、話の過程で、絶えず味付けを加えるようになりました。私は母の好みに合わせて、話を作たり、時には話の結末を変えることさえ行った。…中略…母は私の話を聞き終わると、時には心配で気が気でない様子で、私に対して言っているかのように、また自問自答しているかのように、こう言いました。「息子や、おまえは大きくなって、どんな人間になるだろうね。まさか①口先を弄んで飯を食うじゃないだろうね。」私は母の心配が理解できました。なぜなら、田舎の村では、②おしゃべりな子供というのは、人に嫌がられ、時には自分自身、更には家族に面倒をもたらすからです。…中略…俗く本性は変わらない>と言いますが、両親の諄々たる教えにも関わらず、③私のしゃべる意欲をおさえられず、ついにペンネームを<莫言>、と言う莫れとするに至ったのは、皮肉なことです¹³⁾。

確かに、莫言の幼少期は数千万の餓死者が出たとされる毛沢東の号令による大躍進期

(1958年～61年)と重なり、小学5年の時には文化大革命(1967年～77年)にも遭遇した。その時代は、階級性の選別や言論の統制などの強圧的な政策をとっている時期でもあった。莫言のペンネームはまさにその暗黒な時代の象徴ともいえるだろう。

このような時代背景とともに、中国社会、文化および中国人の思惟などの側面からも見直す必要もあるであろう。中国社会の構造では官(上層)と民(下層)の二層があるが、インドのカーストやヨーロッパの貴族とは異なり、民でも上昇進の機会があった。6世紀の隋の文帝によって初めて導入された官僚登用試験「科挙」はその証左になる。この試験に合格すれば貴族や名門の出身でなくても官僚になれた。講演で莫言は「母は文盲でしたが、読み書きできる人を敬っていました。暮らしは貧しく、三度の食事も食べられないのが日常的でしたが、本や文房具を買ってほしいというわたしの頼みはいつもかなえられました。働き者の母は怠ける子が嫌いでしたが、勉強のせいで仕事がおろそかになっても、叱られた覚えはありません。」と母は何よりも勉強に関しては積極的に応援してくれたことを紹介している¹⁴⁾。莫言は山東省高密県東北郷に生まれ、一族は中農階級の平民である。今の中国になる前は特にそうであるが、農村地域の人々がもっと上の階級に上がるには、勉強して知識をたくさん積むしかないと考えていた。中国社会の重要な倫理観や価値観を守りながら、人々はいくら貧困でも希望を持ち続けていた。例えば、よく言われる面子・人情・義理・関係・権力・知性などは中国人の思惟や倫理観を考えるのに常に用いられる概念である。これらの概念を支えているのは「言説」であろう。その言説は個人にだけではなく、家族の単位にも及ぶ。例えば①の中国語の原文は<“儿子，你长大后成为一个什么人呢？难道要靠耍贫嘴吃饭吗？”>のキーワードとなっている「耍贫嘴」は、無駄話が多い、憎まれ口をたたく意味である。「贫嘴薄(贱)舌」という成語としても用いられる(中国語の意味 喜欢卖弄口舌，多话而令人生厌)。②「おしゃべり」に関する成語を挙げると<多嘴多舌>(よけいなところへ出てきて差し出がましい言動をする)、<长篇大论>(長談義する 長々と話す)、<滔滔不绝>(滔滔たる、よどみなくしゃべるさま)などいずれも貶義の用法で用いるものである。つまり、中国人の道徳倫理観に反するもので、周りの人々に認められず、下層社会から上の階級に上がれないということである。莫言の母の心配はごく普通の中国人の思惟であると解釈ができるだろう。そして、③に関しては、莫言の幼い頃から今日まで置かれた自分の環境に対する自嘲である。講演の中で、莫言は以下のように語っている。

私かノーベル文学賞を獲得すると、論争が起きました。……私はまるで芝居の見物人よろしく、みんなの演技を見物させてもらいました。見てみると、賞を獲得した人物は花で埋まりましたが、石ころを投げられ、汚水もぶっかけられました。その人物が潰されてしまいはいらないかと心配をしましたが、彼は微笑みながら花と石ころのなかからもがき出るや、身体の汚水を拭いて平然とそこに立ち、みんなにこう言ったの

でした‘作家にとって、何よりふさわしい物言う手立ては書くことです。言うべきことは、すべて作品に書き込んであります。口から出た言葉は風で散りますが、ペンで書いたことばは長く不滅です。どうか辛抱して私の本を読んでいただきたい¹⁵⁾。

莫言の受賞についてドイツのヘルタ・ミュラーはスウェーデンの新聞とのインタビューで「莫言は〔中国政府による〕検閲を称賛しており、彼への授与決定は破滅的だ」と強い口調で非難した。2012年11月4日、中国の小説家劉震は『新京報』のインタビューで、“莫言能获奖，表明中国至少有十个人，也可以获奖”，（莫言が授賞できるなら、中国は少なくとも10名の作家が授賞できるだろう）と懐疑的な目で語っている。中国作家協会の副主席で、中国共産党員である莫言が、本来自由なべき文学創作を「検閲」する側に回っているのではないだろうかという冷めた反応は不思議ではない。しかし莫言に関しては初の中国籍受賞作家ということから「政治」という焦点を当て過ぎて、莫言文学の本質や思想の部分を見失いがちではなかろうか。実際、「社会主義体制」（中国特色ある社会主義）が確立してからは、建国当初の社会構造、法制度、文化、芸術、宗教信仰の各面に大きな変化が起きている。特に文革後、78年12月の11期三中全会で党の主導権を握った鄧小平は、経済最優先の改革を進め、「八十年代」の思想解放運動を「新啓蒙」運動と呼び、88年10月から89年4月まで刊行された『新啓蒙』叢書まで刊行された。90年代以後から今日まで、経済の著しい発展だけではなく、文学においては、出版、映画との関係も密になり、かつての文学とメディアへの思想統制も緩和している。そのため、多種多様な魅力的な作品が現れ、これまで閉じられていた西側の思潮も受け入れて、新たな転機を迎えることになった。莫言もすぐ下の世代の「先鋒派」と呼ばれる蘇童や余華らとともに前衛的で意欲的な創作手法を切り開いていった。例えば、講演中の挙げた作品——中国伝統文学を活用し、ロバ、豚などと生まれ変わる話者の視線で作品を展開した長編『生死疲労』（日本語訳では、『生死疲労』）では毛沢東時代から改革解放の時代への、人と世の驚愕すべき変遷を物語る。また『蛙』（日本語訳では『蛙鳴』）、「一人っ子政策」の光と影を当てて、中国の深刻な人口問題に挑んだ。このような難しい題材の設定で創作をやり遂げるとともに、中国の社会主義革命から改革開放期までの骨太な歴史叙述を闊達な筆致で実感をもって描写できたことはまさに中国古典小説の伝統から創作への活力を得てきたことにより、リアリズムの精神が保証されたる証左となるであろう。

受賞後、山東省高密のホテルで開いた記者会見で、莫言は中国共産党のために作品を送り出してきたわけではないと強調し、一部で出ている「体制側」との見方に強く反論した。東亜（トンア）日報とのインタビューでノーベル文学賞を受賞することに驚き、自分より優秀な作家が大勢いる、韓国の高銀（コ・ウン）や黄紹暎（ファン・ソクヨン）先生などは、大変優れた作家で、彼らも同様に、ノーベル賞を受賞する資格が十分あると謙虚な姿勢で返答した。そして、「あなたのペンネームの莫言とは、「無口」か、それとも「口に

しない」という意味か。」という質問に関しては「ペンネームとは、自ら自分を覚醒させるものだ。口数は少なく、仕事は多めにせよという意味だ。口先で語る人は、政治家や演説家だ。作家の役目は、口先ではなく文章で語ることだ」と率直に語っている¹⁶⁾。

Ⅲ. 創作の原点——現実と空想の世界

莫言は「讲故事的人」（ストーリーテラー）と題する受賞のスピーチで、中国古代の賢人老子や清代の文学者蒲松齡（莫言の同郷人）などから影響を受けていると語っている。また、若い頃より古今東西の文学作品を乱読し、海外の作家からの影響も受けていると言う。「童年読書（幼き日の読書）」『福克納大叔、您好嗎（フォークナー様、ごきげんよう）』などの彼の自伝的エッセイにも、幼少期に読書に魅了され、解放軍芸術学院に進んだ頃には大量の読書をしたことが記されている。莫言文学の源は、多種多彩であり、そこには古今東西の文学も含まれ、特に影響を受けた作家としてアメリカのウィリアム・フォークナー（1897～1962）とコロンビアのガブリエル・ガルシア＝マルケス（1927～）を挙げている。莫言はかつて、フォークナーを読んで「一人の作家が人物や物語、果ては地理さえも作りだして構わない」ということを知り、「フォークナーこそが『高密県東北郷』を私の小説に書き入れたのだ」と語った¹⁷⁾。莫言は作家デビューを果たした作品は1981年、解放軍河北保定部隊に服役していた時、同地の雑誌『蓮池』に発表した短編小説『春夜雨霏霏』（『春夜に降りしきる雨』）である。1984年解放軍芸術学院（北京）に入学し、1985年『透明な赤蕪』（原題：『透明的红萝卜』）で文才が認められ、一躍有名作家となる。『透明な赤蕪』の主人公は村人から「黒孩子」（黒ガキ）と呼ばれる色が黒い十代の男の子で、父親は都市へ出稼ぎのために村にいない、継母からは放任扱いされている。厳しい冬でも半ズボン一つで、上半身は裸になり、ガリガリに痩せて、頭だけ異様に大きい。工員の数合わせのために村の洪水防止ダムの工事現場に働かされた。彼は口数が少ないが、普通の人たちには見えないものが見えて、聞こえない音を聞きとる特殊能力を持っている。小説では、工事現場の鍛冶屋の金床に置かれた蕪が、炉の明かりに溶けるうちに、彼には赤蕪が銀色の液体を湛えて金色に光る透明物体に見えてくる五感の反応が描かれている。そして、手を引っ張って石割場へ連れもどそうとする村の娘の手にいきなり噛みつき「黒孩子」の野性の本性がむき出しになるなど、共感覚の不可思議な光景を交えた世界が次々に描き出されている。莫言は講演の中で『透明な赤蕪』が自身の作品の中で最も象徴性のあるシーンだと考えている。全身真っ黒で、苦難に耐える超人的能力と超人的感受性を備えたあの子こそは、私のすべての小説の魂である」と語っている。「無口」、「野性的」、「忍耐強い」はまさにあの過酷な時代の束縛から逃れ、驚くべき生命力を宿すことが生き残る唯一の道であつたろう。京都大学での講演で、莫言は「この「黒孩子」は一つの精霊であり、彼は私と共に成長し、しかも私に従って天下を普く歩いた、私の守り神である。今日も彼は私の背後に立っており、紳士方には見えなくても、淑女には見えるだろ——なぜなら彼はい

くら不思議な子であっても、母親がいるはず。」と語った¹⁸⁾。自身の「自画像」に重なり、子供の目線から、「高密県東北郷」の歴史や事件と密接に結びつき、さまざまな物語にアプローチすることになる。

このような幻覚的でありながらリアリティーさも感じさせる創作手法は子供頃から大人たちの中に混じり、農場の畑、牛小屋、祖父や祖母のオンドルの上で、たくさんの妖怪変化の物語、歴史上の奇談、言い伝えなどを聞いて育った莫言にとって、現実の世界を忘れから、不思議な物語を紡ごうとしたときは、『透明な赤燕』のような空想力に富んだ世界を描くほかに、自身のルーツとともに「東北郷」の歴史と風土に根差すことが創作への道でもあったのである。

講演で言及したのは『天堂狂想歌』（原題：《天堂狂想歌》）、『白壇の刑』（原題：《檀香刑》）、『転生夢転』（原題：《生死疲劳》）の三作である。莫言は「夢から生まれようが、最終的には個人の経験と結びついてはじめて鮮明な個性を備えた文学作品——無数の生き生きとしたプロットから生み出される人物像、豊饒多彩な言語、細心に仕組まれた構成などを備えたそれになるのです」と語り、『天堂狂想歌』が「東北郷」の歴史と社会に密着していることを示した。確かに長編小説『天堂狂想歌』の背景には、実際にニンニク農家が起こした暴動があった。1987年5月、山東省倉山県で農民が県庁舎を襲撃とするという、文革期を除いて、1949年建国以来、初めての農民暴動が起きている。ことの起こりは、ニンニクの芽の過剰生産で、季節性のあるニンニクの芽を収穫後すぐに冷蔵しないと腐ってしまうが、その年は、過剰生産におちいったためニンニクの芽の購入を県当局が差し止め、関係者にのみに便宜を図ったことに怒った農民が、県庁舎を焼き打ちにした暴動事件である。莫言はこの事件に触発され、フィクションを駆使して、数名の農民が体験している貧困、関係する役人らの社会構造的な抑圧、そして監獄の様子から裁判までを、事件の重大さを浮き上がらせていくように作品を描いている。この小説は事件そのものを枠組として使うにとどめたことで、中国の文学界からはさまざまな声を聞こえてきた。

私の意見だが、莫言の文体と精神的本質に関しては多くの①「伝統的な中国文学」の要素がなく、②「現実と幻想、歴史と社会」の問題を扱うときも、③リアリズムの作家としての情熱と勇気も感じません。もし、中国の伝統文学、特に④中国の小説の顕著な特徴を言及するなら、「其言直而切，其事覈而實」¹⁹⁾（其の言直にして切なる，其の事覈（かく）にして實なる、その用語が素直でびたりとしていて、事実が確実である）——すなわち、清代の学者蔣形の言葉を借りるなら「文潔而事信」（短く簡潔な表現、真実を語る）と「無虚仮无疏漏」（偽りのない）の「堅実で、技巧に走らない「白描（飾り気のない）描写）」により、作中人物にふさわしい心理と性格を表現し、綿密な細部の描写と透徹したリアリズムを追求し、文学の倫理的な効果と道徳的な詩の味わいを強調すべきである。莫言の小説はそのような特徴を持っていないだけでなく、それ

らに反するといえるだろう²⁰⁾。

と、文学研究者の李建軍が批評した。①、③と④に関しては、中国の古典文学を俯瞰する必要があるだろう。ジャンルとして意識された(メモ『莊子』が初例)「小説」の用語が使われたのは、二番目の正史、班固の『漢書』『芸文志』である。小説は、初め芸術的な用語として生まれたのではなかった。「芸文志」には「街談・巷語、道聽・塗説する者が造る所なり(小説家者流、蓋出於稗官。街談巷語、道德塗説者之所造也)」「諸子十家、その観るべきもの、ただ九家のみ(諸子十家、其可觀者九家而已)」という記述がある。街巷で語られた話や道端で聞いたり言ったりしている者が拵え上げたのが小説であるとされ、九流の諸子とは異なり、一ランク下のものと考えられていたことが分かる。低く見下された小説であるが、魏晉南北朝の時代に散文の有力なジャンルとして発展していくようになる。「志怪」小説を中心にして、神仙、妖怪、夢の予兆、また幽明を往来する幽鬼などを主題にした文人の手になる文言の小説が増えていく。そして、唐代になると、創作技法が向上し、伝奇小説が出現して、後世の文学にも多き影響を与えるようになる(例えば、元曲の代表作『西廂記』は、唐の元稹による伝奇小説「鶯鶯伝」が元になっている)。宋代になると、『京本通俗小説』に収められた「錯斬崔寧」(吉川幸次郎訳「崔寧の不運」)や「碾玉観音」(吉川幸次郎訳「玉の観音」)『中国古典文学全集 07 京本通俗小説 雨窓欹枕集 清平山堂話本 大宋宣和遺事』平凡社、1958年)などの庶民の社会生活を描写した「話本(講談の台本)」が出現し、唐代の伝奇よりもさらに通俗的となった。元明代以降、小説の発展は成熟期を迎え、伝奇や話本の伝統を継承しながら、歴史、神怪、英雄、世情など様々な題材を創作に取り入れていった。清代の『聊齋志異』に代表される伝統的な文言の筆記小説に加えて、白話(口語)で書かれた『水滸伝』や『紅樓夢』などの物語性に富んだ多彩な長編小説が次々に生れた。莫言との関わりで注目されるのは、怪異小説の最高傑作『聊齋志異』である。無名であった蒲松齡の書き溜めた500編あまりの大小の物語は、原作者の生前からその評判が少しずつ広まり書写する人も出てきた。作者の死後半世紀になると梓に付されて広く読者に知られるようになり「聊齋癖」と呼ばれる熱狂的な愛好者を生むにいたった。莫言も例外ではなかった。莫言は蒲松齡を敬愛していて、エッセイ「学習蒲松齡」には、福をもたらす鼠の嫁の話である『聊齋志異』の「阿纖」は、先祖の博労が話の提供者だとし(原作にはそのことは書かれていないが)、夢でその先祖が莫言を自分の敬愛する蒲松齡の前に連れて行き叩頭させたという情景がユーモラスに描かれている(『学習蒲松齡』中国青年出版社、2011年、1～3頁)。莫言の作品は中国の古典小説の伝統を見事に継承している。それとともに、ウィリアム・フォークナーやガルシア=マルケスの濃密で喚起力のある文体の影響を受け、幻想と現実の混交したマジックリアリズムの手法も注目されている。受賞講演で莫言は小学5年の時(1967年)の文革大革命により学校を中退し、毎日放牧して過ごしていた時のエピソードを次のように語っている。

草地に寝転んで、ゆっくり流れる天上の雲を眺め、頭の中には次々と不思議な幻影が浮びながら、私は一匹の狐が美女となり仏の放牧の連れ合いになってくれればよいと願いましたが、彼女が現れることはついぞありませんでした。それでもあるとき、火の玉のように赤い狐が目の前の草むらから飛び出してきたので、驚いた私は腰を抜かしてしまいました。狐が走り去って姿を消してしまっても、私は腰を抜かしたまま震えていたものです。ときに私は牛のかたわらにしゃがみ込み、真っ青な牛の目と牛の目の中の自分の逆さ影を見ていました。ときには私は鳥の鳴き声の真似をして天上の鳥と話そうとしましたし、ときには一本の木に向かい胸のうちを訴えました。しかし鳥は私には応えず、木も私には応えません²¹⁾。

このような幻覚的でありながら現実感もあるリアリズム表現を小説の中で縦横に駆使している。例えば、受賞講演で何回も触れた『転生夢現』（原題は『生死疲労』）では、主人公西門鬧がそれぞれの動物に転生した後、動物仲間の世界を想定して語られるのではなく、人間と動物の距離の遠近を測り、動物の目で人間社会の葛藤・競争・分配など様々な狂態を笑い飛ばすような軽快な手法で描いている。中国の古典小に説は、単に人々を笑わせる娯楽的な要素だけでなく、語り人（説書人）が信じて伝承してきたことを、それを信じる人々に伝えることへのよこびが伝統としてある。村の人々はたとえ「迷信」扱いにされたとしても、真摯な気持で話を聞くところがある。蒲松齡が刻画した人間の間近に在住する幽鬼や妖怪の世界とか、人間世界の複雑な人生模様を目の前に繰り広げて、聴く大人や子供を喜ばせる物語の伝統がある。『生死疲労』の主人公西門鬧も死後転生してから、動物の目を通して特定の捻じ曲げられた人間を描くことで、特殊な歴史的状況のもとに置かれた人間性の複雑な現れ方に注視をしている。

また、②の「現実と幻想、歴史と社会」に関しては、各方面からもっとも関心を持たれたことである。特に莫言は「検閲に配慮しているのではないだろうか。」「現実社会の腐敗などはリアリティーではないのだろうか」などと指摘されている。2010年3月、莫言は米誌タイムズのインタビューに応じた際に、言論の自由を制限する共産党の文学の検閲制度について、文学としての価値がマイナスへ影響をもたらすことを否定した。莫言は「制度の下で、作家は社会問題について婉曲的した表現を用いるのを心得ており、それこそ美学の原則に合っている」と主張し「現代社会の諸問題を正面から描く作品の多くは読む価値がない」とも述べている。司会は「あなたが受賞したのは文学賞ですが、ご存知のように多くの人が政治方面の質問をしています。どんな見解をお持ちですか」と尋ねると、「政治は政治家が考えること。私の回答はおそらく不正確で、読者をミスリードしてしまうだろう。だから私はあまり答えたくない」と、直接の回答は避けつつ、「賢明な読者なら、文学は政治よりはるかに素晴らしいということに気付くだろう。政治は争い、出し抜くことを教え

てくれるが、文学は恋愛を教えてくれる。だから皆さんには、恋愛を教えてくれる文学にもっと関心を持ち、ケンカを教える政治にはあまり関心を持たないようお勧めする」とユーモアたっぷりに答え、会場の笑いを誘った。また作品の思想について、「テーマがストレートでシンプルな作品なら誤解されることもないだろう。優れた作品ほど曲解されやすい。私は、賢明な作家は自らの思想を作品の奥深くに隠しておくものと考えている。そして登場人物に自分の思想を語らせるはずだ。だから優れた作品は矛盾とパラドックスに満ちている。そんな作品を書けるよう引き続き努力したい。」と語った²²⁾。

周知のように、清朝康熙帝の時代の『康熙字典』や『佩文韻府』などの大型辞書や乾隆帝の時代の史上最大の叢書「四庫全書」など大掛かりな編纂が行われている²³⁾。このような古典の編纂は、同時に清朝側からの書籍の検閲という側面もあって、文字の獄と称された極端な言論弾圧、言論封鎖が起きた時代でもある。自由を奪われた学者たちの中にははげ口を求めて、怪異小説の執筆をする者もいた（「四庫全書」の総纂官であった紀昀は、『閱微草堂筆記』を残している）。怪異小説の中では現実生活では憚れることも自由に想像することができた。人間と幽鬼との幽明を分かち恋愛も可能であった。『生死疲劳』は1950年から1月1日から始まり、西門閹一族の毛澤東時代から改革・開放時代にかけてたどる波乱万丈の半世紀の物語である。ある意味、莫言はこの50年の間に起きた「土地改革」、「文革大革命」、「改革・開放」>の特殊環境（窒息するような自由の束縛、その反対の野放図な自由の氾濫）の中で、怪異小説の手法も借りて限りなき自由を求めたように読み取れる。時代や社会の制約の中でも真実を語るのが天性である莫言は、階級性の制約を取り払った『『個性』』を刻印した作品を書いてきたのだ。」それにしても、真実を語る勇気とそれをやり遂げる能力や覚悟を自覚しなければならなかったであろう。

おわりに

莫言のノーベル文学賞受賞には、称賛の声がある一方で、「授賞資格がない」、「文学水準が低い」、「文体が平坦で、単純」や中国作家協会副会長として体制側に近い作家という批判的な意見が続出している。莫言は中国共産党員で、解放軍にも入隊したことがある。このような経歴を見ると、文学より政治的なインパクトが強いこともが理解できないわけではない。また、中国現代文学には歴史や社会のイデオロギーが背景として色濃く存在していることも否定できない。しかしながら、作家の境地を考えたとき、その時々人間観や世界観がどのように形成され、それが物語世界にどのように投影されているのかという視点に一度たってみることは欠かすことのできない手続きではないだろうか。本稿では莫言のノーベル文学賞受賞講演を通じて、莫言文学の原点が中国古典文学や民間の説唱文学の影響、そして「町の講談師（説書人）」や「祖母や祖父や村の年寄たち」が語った物語に刺激を受けていることを明らかにしようと考えた。作家であるとともに大地に生きる農民の目線と言葉で、幻覚的なリアリズム表現で異次元の奇想天外な世界を描きながら、中国社

会の底辺に生きる人々の喜怒哀楽、五味雑陳（異なる味が混ざり合う）の生活を描くことこそが作家の使命だとする人間観が現れていると思う。ニューヨーク大学教授張旭東（2014）は「中国現代文学、批評理論莫言の作品を読むと、審美的には「醜さ」の感じを抱くし、けばけばしく、人を驚かせ、粗野で奇怪で、孔子なら語らないはずの不合理的なことや暴力的なこと（怪力乱神）ばかりがある。だが読み終えると、この筋道も道理もない世界、それがどうも私たちの日常の生活経験の結晶体ではないかと感じられる。私の考えでは、文学と現実との間には、このように非常に巧妙な対応関係が存在するのである。」と率直な感想を述べている。これからも階級性の制約から自由になり、「美しい」ことも「卑猥」なことも中国の様々な階層の人々がいただく全ての感情を集約しながら、物語を紡いでいくだろう。

注

- 1) 張中江「莫言今日将启程赴瑞典领奖 好友揭秘领奖演讲内容」、2012年12月5日 新华网 <https://edu.qq.com/a/20121205/000012.htm>（2020年3月15日閲覧）
- 2) 「莫言氏、スウェーデンで受賞講演」、2012年12月8日 中国国際放送局 日本語版 <http://japanese.china.org.cn/life/txt/2012-12/08/>（2020年3月15日閲覧）
- 3) 「まるで中学生の作文だ！ノーベル文学賞・莫言氏の講演を中国ネットユーザーが批判—中国」2012年12月8日 中国新聞網 <https://www.excite.co.jp/news/china/tag/中国新聞網/>（2020年3月19日閲覧）
- 4) 木村正人「日本のメディアが伝えなかったノーベル文学賞授賞式の真実」2012/12/11 <https://news.yahoo.co.jp/byline/kimuramasato/20121211>（2020年3月15日閲覧）
- 5) 吉田富夫（2013）、『莫言神髓』中央公論新社、97頁。
- 6) 「中国初のノーベル文学賞に莫言氏、腐敗した現代中国を叱責」中央日報2012年10月12日 <https://s.japanese.joins.com/>（2020年3月19日参照）
- 7) 今泉博、小杉陽介など（2013）、『国語辞典』第十一版 旺文社、490頁。
- 8) ノーベル文学賞授賞講演原稿（辍学之后，我混迹于成人之中，开始了“用耳朵阅读”的漫长生涯。…中略…那时我是一个绝对的有神论者，我相信万物都有灵性，我见到一棵大树会肃然起敬。）筆者訳。
- 9) 吉田富夫（2013）、『莫言神髓』中央公論新社、161頁。
- 10) 林敏潔、藤井省三（2015）『莫言の思想と文学 世界と語る講演集』東方書店
- 11) ノーベル文学賞授賞講演原稿（我是一个讲故事的人。因为讲故事我获得了诺贝尔文学奖。我获奖后发生了很多精彩的故事，这些故事，让我坚信真理和正义是存在的。今后的岁月里，我将继续讲我的故事。）筆者訳。
- 12) 長堀祐造（2013）、『変』明石書店、133頁。
- 13) ノーベル文学賞授賞講演原稿（很快的，我就不满足复述说书人讲的故事了，我在复述的过程中不断的添油加醋，我会投我母亲所好，编造一些情节，有时候甚至改变故事的结局。…

- 中略…俗话说“江山易改、本性难移”，尽管我有父母亲的谆谆教导，但我并没有改掉我喜欢说话的天性，这使得我的名字“莫言”，很像对自己的讽刺。）筆者訳。
- 14) ノーベル文学賞授賞講演原稿（我母亲不识字，但对识字的人十分敬重。我们家生活困难，经常吃了上顿没下顿。但只要我对她提出买书买文具的要求，她总是会满足我。她是个勤劳的人，讨厌懒惰的孩子，但只要是我因为看书耽误了干活，她从来没批评过我。）筆者訳。
- 15) ノーベル文学賞授賞講演原稿（我获得诺贝尔文学奖后，引发了一些争议。…中略…用嘴说出的话随风而散，用笔写出的话永不磨灭。我希望你们能耐心地读一下我的书，当然，我没有资格强迫你们读我的书。）筆者訳。
- 16) 東亜日報「ノーベル文学賞の莫言氏「文章を書く時、私は共産党員ではない」 2012 年 10 月 16 日
- 17) 林敏潔、藤井省三（2015）、『莫言の思想と文学 世界と語る講演集』東方書店、35 頁。
- 18) 吉田富夫（2013）、『莫言神髓』中央公論新社、28 頁。
- 19) 其の言直にして切なるは、之を聞く者の深く誠めんことを欲するなり、其の事核にして實なるは、之を采る者をして信を傳へしめんとなり、其の体順にして肆なるは、以て樂章歌曲に播すべし。「新樂府 序」。
- 20) 李斌 程桂婷『莫言批判』北京理工大学出版社 375 頁。
原文：在我看来，莫言的写作，就其文体风格和精神本质来看，并没有多少“中国传统文学”的因子，而且在处理“现实和幻想、历史和社会”结合问题的时候，也没有表现出多少真正的现实主义作家的激情和勇气。如果说，中国传统文学尤其是中国小说的突出特点，是“其言直，其事核”的写实性—即清代学者蒋彤所说的“文洁而事信”和“无虚假无疏漏”的“坚实”，是对“白描”技巧的倚重，是紧紧贴着人物的心理和性格来刻画人物，是追踪蹊迹地追求细节描写的准确性和真实感，是强调文学的伦理效果和道德诗意，那么，莫言的小说不仅并不具备这样的特点，而且几乎可以说是背道而驰的。筆者訳
- 21) ノーベル文学賞授賞講演原稿（我躺在草地上，望着天上懒洋洋地飘动着的白云，脑海里便浮现出许多莫名其妙的幻象。…中略…有时候我会模仿着鸟儿的叫声试图与天上的鸟儿对话，有时候我会对一棵树诉说心声。）筆者訳
- 22) 「ノーベル文学賞の莫言氏「文学は政治よりはるかに素晴らしい」 新京報 2012 年 12 月 11 日 https://www.excite.co.jp/news/article/Searchina_20121211003/ (2020 年 3 月 15 日参照)
- 23) 奥野信太郎（1994）、『中国文学十二話』日本放送出版協会、176 頁

参考文献

- 吉田富夫（2013）、『莫言神髓』中央公論新社、18 頁。
- 吉川幸次郎訳（1958）、「崔寧の不運」『中国古典文学全集 7』平凡社、49-60 頁。
- 吉川幸次郎訳（1958）、『玉の観音』、『中国古典文学全集 7』、3-12 頁。

張旭東、杉谷幸太訳(2014)、「莫言『酒国』を読む——中国の「いま」を描くデモニック・リアリズム」、
『中国 21』(39)、108 頁

吉田富夫(2013)、『莫言神髄』中央公論新社。

吉田富夫(2008)、『転生夢現』[上] 中央公論新社。

吉田富夫(2008)、『転生夢現』[下] 中央公論新社。

**Nobel Prize for Literature and essence of Mo Yan literature:
Focusing on “The Storyteller” : Mo Yan Nobel Acceptance Speech**

NI, Wei

Abstract

In October 2012, Mo Yan was awarded the Nobel Prize in Literature for his work that "with hallucinatory realism merges folk tales, history and the contemporary." Mo Yan became the first Chinese author to win the Nobel Prize in Literature. On the evening of December 7th of the same year, Mo Yan gave a prize-winning lecture entitled "Storytellers" at the Swedish Academy's Stockholm Academy Concert Hall.

This paper focuses on his "Speech Accepting the Nobel Prize for Literature, 2012" - "Storytellers" and examines the essence of Mo Yan literature through his human and world views.

Keywords : Mo Yan, Chinese classical novel, Nobel Prize for Literature , Hallucinational realism,

漱石の作品における新橋駅の考察 —啄木の作品に表現される新橋・上野駅を視座に—

崔 雪梅（江西農業大学）

要旨

漱石の文学に汽車、路面電車、蒸気船等の交通機関をめぐる表現は、登場人物の人物像・物語の時代相・語り手の世界観を物語る装置として文脈に仕込まれている。漱石は、『草枕』で画工を通して「汽車」をめぐる文明論を述べ、また、多くの作品の登場人物の入京・離京を「東京の玄関口」と呼ばれる新橋駅に設定し、物語の展開にかかわる主人公らの移動空間を1889年全通になった「新橋・神戸間」の東海道線沿線の地域に設定している。一方、啄木の文学における物語の展開は東北本線の発着駅である上野駅と緊密に結びついている。彼の「ふるさとの訛なつかし…」という短歌は、すなわち、上野駅に集まる東北人の心や姿を描いた作品である。また、未完で終わった小説『故郷に入る』において、啄木は新橋駅に対して上野駅を「東京の裏門」と称した。

汽車・駅に対する注目は同時期の他の作品にも見られるが、漱石の新橋駅に対して屈折したイメージとして捉え、さらに、両駅を対比的に表現したのは啄木のみである。本稿は、汽車にかかわる移動空間と新橋・上野駅をめぐる同時代的な位相を、両作家のテキストを用いて明らかにする。

キーワード： 夏目漱石、石川啄木、汽車、新橋駅、上野駅

はじめに

漱石の小説『三四郎』『彼岸過迄』などにおいて、新橋駅とそれに繋がる鉄道空間が反復的に表現されている一方、啄木の小説『故郷に入る』の物語としての展開は、上野駅とそれと結ぶ鉄道空間と緊密に絡み合っている。本稿では、登場人物の運命とかかわり合いながら描かれた汽車の移動空間とその発着駅となる新橋駅・上野駅をめぐる位相を両作家のテキストを通して明らかにし、駅というトポスが物語の中でどのような機能を果たすのかについて考察する。

I. 新橋駅

1912年1月から4月にかけて、東西の朝日新聞に連載された『彼岸過迄』に登場する

森本が「新橋駅」の鉄道員を務めるプロットは、漱石のテキストにおいて包括的で象徴的意味を持つ設定である。（以下傍線・省略記号は筆者、以下同）

敬太郎はこの瘠せながら大した病気にも罹らないで、毎日新橋の停車場へ行く男について、平生から一種の好奇心を有つてゐた。彼はもう三十以上である。それでいまだに一人で下宿住居をして停車場へ通勤してゐる。しかし停車場で何の係りをして、どんな事務を取扱つてゐるのか、ついぞ当人に聞いた事もなければ、また向ふから話した試もないので、敬太郎には一切がXである¹⁾。

森本に関する記述は、主人公敬太郎が森本夫婦の間にできた子供の死んだ話を聞かされた時に、「餓鬼が死んでくれたんで、まあ助かつたようなもんでさあ。山神の祟には実際恐れを作していたんですからね」という森本の言葉を「いまだに覚えている」という、過去を振り返る語り方として表現されている。この敬太郎の過去を時系列に沿って語るテキストにおける、反復的に表現された森本を指向する要素が、物語の展開の中の出来事と関与するインデックスとして読み取れる。

「毎日新橋の停車場へ行く男」に対して、敬太郎にとっては「一切がXである」という見方は、過去を語る今でも変わらぬ敬太郎の森本に対する認識を表わしている。未知数「X」のような森本という人物について、その年齢・家庭状況・職業内容等に対する不確かな情報しか持たない敬太郎の、確実に知っていることは、単なる「毎日新橋の停車場へ行く男」ということに限定されているのである。そして、ある日、突然姿を消した森本から一通の手紙が敬太郎の元に届く。この手紙によって明かされたのは、森本が新橋駅の鉄道員の仕事を辞めた後、彼が満州に渡り、「大連で電気公園の娯楽がかりを勤め」て、また、「活動写真」の買い入れ等で奔走し、満州地方を旅した近況のような内容である。また、彼が愛用したステッキについては、「記念のため是非あなたに進上したい」という内容が書かれている²⁾。森本の語る様々な話に情熱を傾けながら聞いた敬太郎は、森本を様々な冒険談中の主人公のように感じていた。森本からの手紙が届いてから間もなく、敬太郎は文銭占いの婆さんから次のような助言をもらう。

どうすればつて、占なひには陰陽の理で大きな形が現はれるだけだから、実地は各自がその場に臨んだ時、その大きな形に合はして考へる外ありませんが、まあこうです。あなたは自分のようなまた他人のような、長いようなまた短かいような、出るようなまたはいるようなものを持つていらつしゃるから、今度事件が起つたら、第一にそれを忘れないやうになさい。さうすれば旨く行きます。

この助言が予示するものを苦心に考える敬太郎が、ようやく「自分のようなまた他人の

ような、長いようなまた短かいような、出るようなまたはいるようなもの」を森本のステッキと結びつける。

森本の二字はとうから敬太郎の耳に変な響きを伝へる媒介となつてゐたが、この頃ではそれがいっそう高じて全然一種の符徴に変化してしまつた。元からこの男の名前さへ出ると、必ず例のステッキを連想したものだが、ステッキが二人を繋ぐ縁に立つてゐると解釈しても、或は二人の中を割く邪魔に挟まつてゐると見なしても、とにかく森本とこの竹の棒の間にはある距離があつて…森本といえばステッキ、ステッキといえば森本といふ位はげしく敬太郎の頭を刺戟するのである。

「X」のような新橋駅の鉄道員から贈与された蛇の頭のステッキは、その男の身代わりのように、継続的に敬太郎に影響を与える。敬太郎にとって、「森本の二字」は「全然一種の符徴に変化」している。そして、「森本といえばステッキ、ステッキといえば森本」という敬太郎の提出した公式によって、一種の符号と見られる森本の符号の機能が自然とステッキに移されるようになる。この符号は、つまり、「X」である。事実上、敬太郎が「新橋駅」の鉄道員としか知らない男が醸し出す「X」という謎めく雰囲気は、森本が敬太郎の視線から退場すると同時に、文銭占いの婆さんの助言により、円滑に蛇の頭のステッキに移転するようになったのである。テキストにおける連続的な出来事は、「X」という符号が示す意味と深く関与している。その関与性は、「X」という同一のイメージを受け入れる出来事が、「自分が今まで経験したことのない浪漫的な或物にぶつかるかも知れない」というような問題解決（就職問題）に仕向ける、敬太郎の「遺伝的に平凡を忌む浪漫趣味」によって果たされている。「新橋駅」・「森本」・「ステッキ」は、「X」という符号、または、記号の可變的、持続的な表現としてテキストの中に表現されている。

前田愛氏は、森本の人物設定をめぐって、『都市空間のなかの文学』（筑摩書房、1983）の「仮象の街」で、「都市生活の敗北者として満州に出奔し、敬太郎の視野から姿を消してしまうのもごく自然な設定」³⁾と分析する。この分析のもとになる都市空間の構図は、「市電の軌道が描きだす大きなT字形」である。この構図に当てはまろうとする「都市」と「人間」の配置関係の分析として、敬太郎が将来の約束されている地方出身者の代表として、須永が「都市生活からの失格者、ないしは隠遁者」、田口（須永の叔父）が支配者という位置に配置されている。前田氏の都市空間と登場人物の設定、及び、小説の構造との関係の分析について、田口律男氏は『都市テキスト論序説』（松籟社、2011）において、「私たちが継承すべきはそこにはないだろう。テキストは『地図』に還元できないからだ」と評し、人物の形象に投影された時代的イデオロギーに注目し、『市電という新時代の交通網をはりめぐらした都市の表層』（『都市』的なもの）と『江戸のおもかげをのこす都市の古い基層』（『都会』的なもの）との間でせめぎあう身体と言説の内密性について、分析を行っ

た⁴⁾。田口氏は、「敬太郎の視線のランダム・ウォークが描きだす小川町停留所境界の景観」、即ち、「仮象の街」に「負の側面」が存在していると指摘する。それは、森本の行動線が暗示しているものだと主張するのである。

学歴、恒産、家庭、地位を持たない「漂泊者」である森本は、社会の周縁を経めぐり、果ては、大連の「電気公園の娯楽掛り」で「活動写真」の買入に奔走するようになる。彼のたどる足跡は、いわゆる名所旧跡にとどまらず、国境の内外に膨張する帝国の版図と微妙に重なっている。それは同じく、当時の新聞ジャーナリズムや実業系雑誌が盛んにとりあげた「冒険」物語のトレースする地勢図とも相似形をなしている⁵⁾。

上に掲げる森本の行動線に関する田口氏の分析は、「都市生活の敗北者として満州に出奔し、敬太郎の視野から姿を消してしまうのもごく自然な設定」だという、テキストにおける森本の暗示する可能な意味象徴を抹殺する前田氏の推断を覆す論説とも言えよう。田口氏の「いわゆる名所旧跡にとどまらず、国境の内外に膨張する帝国の版図と微妙に重なっている」という森本のたどる足跡⁶⁾に対する言及は、日本の最初の鉄道「新橋・横浜間」(1872年9月12日)⁷⁾が象徴する意味合いと重なっている。新橋駅の鉄道員として働いた森本が海外に渡る移動路線と言え、その最初に利用する交通手段は「新橋・横浜間」の短距離鉄道に違いない。

東京の玄関口と呼ばれた新橋駅は、日本の玄関の横浜港と通ずる鉄道が敷かれたことで、日本と西洋との連絡が強化され、軍事・貿易・経済産業を支える鉄道網の中で重要な機能を果たすようになる。また、新橋駅は明治新政府の積極的に海外へ派遣した視察員、官費と私費による洋行・留学者の東京での出入口として、そして、明治期の産業構造の産業化・工業化による貨物運送、人口移動の利用駅として、そのトポスには近代化または海外を指向する積極的なイメージが定着するようになる。このような世相を反映する作品としては、1911年1月、『白樺』に掲載された有島武郎の『或る女』⁸⁾がある。その冒頭にはヒロインの早月葉子がアメリカ・シアトル滞在中の木村貞一と結婚するため、新橋に向かうシーンが描かれている。『或る女』の翌年に発表された『彼岸過迄』の中の「毎日新橋の停車場へ行く男」の森本の運命も、満州に渡る展開となっている。つまり、新橋駅の鉄道員という設定は、後に海外へ渡る発展に繋げるために設けられた伏線だと考えられるのである。

一通の手紙から知り得た森本の行方は、敬太郎に「たゞ森本の浮世の風にあたる運命が近いうちに終りを告げるとする。(恐らくはのたれ死といふ終りを告げるのだろう)」というような予感を与える。敬太郎の「のたれ死といふ終りを告げる」という予想は、テキストにおける「森本」という記号の「死」として解読できるのである。そこで、「森本」の示す記号機能は、その「死」によって、「怪しい物」(「X」なるもの)の森本の^{かたみ}記念のステッキに移るのである。このステッキは、敬太郎が友人須永の叔父田口に頼まれた「待ち設け

た空想よりもなお浪漫的」な用事に立ち向かう時に、「方角を教える^{フィンガーポスト} 指標」を告げる作用に働く。

要するに、森本を指向する二つの標識の「新橋駅」と「ステッキ」は、『彼岸過迄』のテキストの中で、方角を示すインデックスという機能を発揮していることが明らかになる。『彼岸過迄』に描かれた市電の軌道を参照して還元した前田氏の「仮象の街」は、敬太郎が歩き回るルートを形象化した点で確実性を示している。だが、森本の運命の展開を示唆し、また、「ステッキ」を通して敬太郎の望んだ冒険体験と就職問題とを円満解決する劇的な展開を引き寄せる「新橋駅」というトポスが、テキストにおいて発揮した機能を無視することはできない。そこで、新橋駅が象徴する時代的な位相を、漱石のテキストを通してさらに詳らかに分析してみる必要がある。次章では、同時代の作品として、啄木のテキストに描かれた新橋駅と上野駅とを分析に加えて考察してみる。

Ⅱ. 新橋駅と上野駅

1910年4月7日に起稿して未完で終わった啄木の『故郷に入る』では、上野駅と新橋駅の対照的な描写が次のように記されている。

奥様。十七日に立つやうに申し上げた筈でしたが、例の用事が案外都合よく運んだので、一日繰り上げて、あの翌々日に夕方に上野を、日本中の最も汚い、最も不愉快な停車場だと何時か貴方の仰しやつた、あの上野を立ちました。貴方の所謂「田舎者の吐き出した息の溜つてゐる」二等待合室の片隅で、不図私はそのお言葉を思ひ出したのでした……目に入り、耳に入るものは、疲れた色をしてゐる男の顔、おどおどした女の眼、濁音の多い言語、暗色の勝つた服装、そして、湿りかへつた白いほこり！ 同じ東京の南方の出入口——新橋——に比較して、これは又何たる相違、何たる対照でせう。「東京の裏門」とこの処で私は上野を呼びます……私は、あの日私たちに送られて、欣然として新橋をお立ちになつた先生が羨ましくなります。先生に限らず、すべてその旅の門出を新橋に送らるる人が羨ましくなります。軽快な会話と短い笑声と快い沓音とに満ちた新橋！ 旅を楽しむ人と、汽車に乗ることを坐り慣れた客間の椅子に腰かける程にしか気にしてゐない人との散りかつ集まる新橋！ 私はあの新橋停車場前の広場の、汽車の立つ前、着いた後の目まぐるしい活動を想像する毎に、東京といふ不思議な大きい生物が、思ふさま胸を拡げて、快い、自由な呼吸をしてゐるのを見るやうな気がします⁹⁾。

上の作品は、「私」が奥様宛に帰郷中の思いを綴る手紙として書かれている。帰郷する時に利用する駅は、かつて奥様が「田舎者の吐き出した息の溜つてゐる」と言った上野駅

である。奥様の影響か、「私」は上野駅の建物内の空気が、「暗い、濁った、湿っぽい」ものだと感じて、それを吸い込んだ自分の体が「血の循環を刻一刻重く、鈍くして行くやうに」思っている。「春も、夏も、午前も、午後も、明るい日光を浴びるといふことのない」上野駅に比べて、「同じ東京の南方の出入口——新橋」は「軽快な会話と短い笑声と快い沓音とに満ち」ているように見える。新橋駅前の情景は、主人公に東京という都市空間が「不可思議な大きい生物」と思わせる。「私」は、「出るにも、入るにも、その裏門よりすることに定めてゐる我々東北人の運命」に対して、「嫌悪に近い或感情をもつ」のである。「私」は、東北から東京に流入する外部者として、鉄道の上野駅より東京という都市を認識するようになる。「先生」のような「すべてその旅の門出を新橋に送らるる人」を羨ましく思う。彼らの旅の進む方向は、新橋駅を発着駅とする「新橋 - 神戸間」東海道本線沿線、ないし、神戸から西に向かう「神戸 - 赤間関（下関）間」山陽本線沿線である。または、「新橋・横浜間」の鉄道で横浜に向かい、そして、さらに横浜港より海外に向かう方向である。その旅人は「軽快な精神と潑刺たる機才を恵まれる代わりに」、「私」のような東北人は「重い言語と不透明な思想とを与へられ」ているのである。「永久に幸運の車をひきいられることのない裏門」の運命は、1908年6月4日に脱稿した啄木の小説『天鷲絨』にも描かれている。

岩手県中部にある渋民村に住む二人の少女は、かつて渋民村の床屋で働き、後に東京で開業してハイカラな暮らしをしている源助の誘いに乗って、彼の帰京と共に東京へ出奔したが、二週間も至らずに郷里から来る迎え人の忠太に故郷へ連れ戻される。ヒロインの一人のお定の視点から語られたこの作品は、上京を夢見る人の心理状態をお定の「何故か『東京』の語一つだけで、胸が俄かに動悸がして来る様な気がした」という心理描写を通して表現している。お定らを乗せた上京の汽車が上野に着いたのは、夜の七時過ぎである。その時、お定の目の前に広がる情景は、次のように描かれている。

何百輛とも数知れず列んだ腕車、広場の彼方は昼を欺く満街の灯火、お定はもうこれだけで気を失ふ位おツ魂消てしまった……お定は生れて初めて腕車に乗った。まだ見た事のない夢を見てゐる様な心地で、東京もなければ村もない、自分といふものも何処へ行つたやら、在るものは前の腕車に源助の後姿ばかり、ただぼんやりとしてしまつて、別に街々の賑ひを仔細に見るでもなかつた。燦爛たるあかり、千万の物音を合せた様な轟々たる都の響。その火光がお定を溶かしてしまひさうだ。その響がお定を押しつぶしてしまひさうだ。

『天鷲絨』のヒロインのお定が初めて上京して見た上野駅は、『故郷に入る』の「私」が見た「日本中の最も汚い、最も不愉快な停車場」の風景ではない。お定の目に映るのは、「昼を欺く満街の燈火」、「何百輛とも数知れず列んだ腕車」という繁華なる都市景観で

ある。彼女はその賑やかさに刺激を受け、気を失うほどの戦慄を覚える。

二人の少女は、「月に賄附で四円」を稼ぐ女中奉公をして、「立派な服装をして、絹張の傘を持つて、金を五十円も貯め」る素朴な夢を描きながら、「潮の様な人」と共に、東北本線「上野―青森間」（1891年9月1日より全線開通）に乗り、上野駅より東京の門に入る。しかし、故郷から迎えにくる忠太の上京によって、二人は、再び上野駅を訪れ、上野発の汽車に乗って帰郷の途に就く。

お八重お定の二人が、郷里を出て十二日目の夕、忠太に伴れられて、上野のステーションからの帰郷の途に就いた。

貫通車の三等室、東京以北のあらゆる国々の訛を語る人々を、ぎつしりと詰めた中に、二人は相並んで、布袋の様な腹をした忠太と向合つてゐた。長い／＼プラットフォームに数限りなきあかりが昼の如く輝き初めた時、三人を乗せた列車が緩やかにゆるぎ出して、秋の夜のやみを北に一路、刻一刻東京を遠ざかつて行く。

お八重はいはずもがな、お定さへもこの時は妙に淋しく名残惜しくなつて、こそこそとその事を語り合つてゐた。この日は二人共廂髪に結つてゐたが、お定の頭にはリボンが無かつた。忠太は、棚の上の荷物を気にして、時々其を見上げ／＼しながら、物珍らしそうに乗合の人々を、しげ／＼見比べてゐたが、一時間ばかり経つと、少し身体をかがめて、

『尻ア痛くなつて来た』と呟いた。『うなア痛くねえが？』

『痛くねえす。』とお定は囁いたが、それでも忠太がまだ何か話欲しさうにかがんでるので、

『家の方でヤ玉菜だの何ア大きくなつたべなす。』

『大きくなつたどもせえ。』と言つた忠太の声が大きかつたので、周囲の人は皆こちらを見る。

『うなア共ア逃げでがら、まだ二十日にも成んめえな。』

お定は顔を赤くしてチラと周囲を見たが、そのまま返事もせず俯いてしまつた。お八重は顔を顰めていまいまし気に忠太を横目で見てゐた。

女中奉公をして、三年後に「立派な服装をして、絹張の傘を持つて、金を五十円も貯め」る夢が叶えず、帰途に就く二人の少女は、東京を遠ざかる寂しさを凌ぐために「こそこそとその事を語り合つて」いる。一方、「官費旅行の東京見物」を企てて成功を収めた忠太は、「棚の上の荷物を気にして、時々其を見上げ／＼しながら、物珍らしそうに乗合の人々を、しげ／＼見比べて」いる。上野駅から発車し、渋民村、或いは、東北本線沿線にある地域に向かう「貫通車の三等室」には、「東京以北のあらゆる国々の訛を語る人々」の身体が内包されている。その中には、不本意な帰郷に対する不満と離京に対する名残惜しさ

とを表現する二人の少女の「こそこそと其事を語り合」う身体と、初めて東京見物をして帰郷する忠太の物珍しそうな視線とが含まれている。ところが、このような身体表現が汽車の発車につれ、それぞれの身体のもつ特徴が失われて、まるで貨物の扱いのように「ぎつしりと詰めた中に」閉ざされたまま北の方に運ばれる描写へと転じる。これは、後に書かれた『故郷に入る』に見られる「永久に幸運のくるまをひきいれられることのない裏門」からのみ出入する「東北人の運命」に対する「嫌悪に近い或感情」の芽生えのような表現だと見られる。上野駅より発車する帰郷の汽車は、物語におけるあらゆる展開の可能性が閉ざされる意味でのインデックスである。失敗の運命を象徴する三人に対する身体描写は、『故郷に入る』の新橋駅をめぐる「軽快な会話と短い笑声と快い沓音」という表現と極めて対照的なものである。

このように、漱石のテキストにおける新橋駅と、啄木のテキストにおける新橋・上野駅の位相は、「運命の方角を示す」というところで共通している。そして、新橋駅が海外に指向する経済振興・「立身出世」の道程・「エリートコース」を象徴するトポスとして、啄木の日記と断片となった作品から読み取れるのである¹⁰⁾。本稿では、それに対する言及は省くこととする。

Ⅲ. 市電と汽車

前田愛氏の論文に示した「仮象の街」は、焦点を敬太郎におき、冒険者敬太郎の利用した市電の走る軌道のルートマップである。彼の「日露戦争前後から五年ごとにほぼ五割の人口を増加した郊外（新市域）の急激な発展も、市電の交通網の整備をぬきにしては考えられない」¹¹⁾という論点の根拠として、奥井復太郎氏の「都市郊外論」（『都市の精神』日本放送出版協会、1975）を引いている。「市電の交通網の整備」は言うまでもなく、郊外を含める地域の都市化の発展過程から外してはいけないう重要な要素ではある。だが、前田氏の論点の展開は、当時の人口の増加現象と市電の整備との関係性を強調し、漱石のテキストに描かれた市電の交通網のみピックアップし、そこから登場する人物関係図を分析しているゆえに、それから引き出した「都市と人間との変幻きわまりない対位法を可能にしている」¹²⁾という結論は、都合のよい解釈になりかねない。その論点の展開には、『三四郎』と『門』に言及している。三四郎は敬太郎（『彼岸過迄』）と同じく本郷の下宿に住み、宗助夫婦（『門』）は松本（『彼岸過迄』）のように郊外に住んでいる。前田氏の言うように漱石は「意識的な都市空間のデザイナー」であるが、そのテキストが「市電の開設をきっかけにはじまったこの都市化現象の大きなうねりのただなかで翻弄される」¹³⁾人物たちを描いているとは言い切れないだろう。その根拠として引いた奥井復太郎氏の「都市郊外論」では、人口の増加と交通機関の整備との関連の説明について、『東京市郊外における交通機関の発達と人口の増加』（東京市役所編・1928）の調査（1898～1925）¹⁴⁾した結論を七つの項目に要約している。その（一）～（四）の項目は、鉄道路線の開通及び市電の開通が

人口の増加との関係性を説明する。

- (一) 交通機関の設置ないし発達、人口の増加を招来する。
- (二) 増加した人口は、交通機関の伸長ないし発達をうながす。
- (三) ただし、通例、鉄道、軌道の敷設は、沿線人口の増加にさきだち、乗り合い自動車そのほかの施設は、沿線人口の増加におくれる。
- (四) 当時の交通機関の施設ないし発達は、地方人口を駆って本市に集中せしめた¹⁵⁾。

上記の調査結果が示す如く、「鉄道、軌道の敷設」は、「沿線人口の増加にさきだち」、都市の人口の増加を招くと同時に、交通機関の運転路線の延長を促す。1872 年、日本最初の鉄道「新橋・横浜間」の開通をはじめ、以来全国にわたる鉄道敷設が行われるようになる。それに伴う移動人口が増加し、1899 年、東京市が全国府県別の人口数ランキングの中で長期的に一位を占める新潟県を超えて一位となる。(表 1 の数値は、内閣統計局「日本帝国統計年鑑」による。)

表 1 全国府県別人口数ランキング

地域\人口	明治19(1886) 年12月31日迄	明治30(1897) 年12月31日迄	明治31(1898) 年12月31日迄	明治32(1899) 年12月31日迄
東京	1,075,303	1,488,709	1,507,642	1,910,483
新潟	1,669,877	1,806,388	1,812,272	1,708,687
岩手	648,595	710,459	720,386	712,613
石川	749,858	783,490	781,784	728,955
熊本	1,023,174	1,127,000	1,151,401	1,141,520
北海道	226,236	559,985	610,155	838,907
府県別 1 位	新潟	新潟	新潟	東京
全国	38,507,177	43,228,863	43,760,815	44,260,604

東京で最初の電車鉄道の「新橋・品川間」開業は、東京の人口が全国一位になった四年後の 1903 年 8 月 22 日である。1889 年の東海道本線「新橋・神戸間」と、1891 年の東北本線「上野・青森間」の全線開通は、東京市内への地方出身者を含む移動人口の流入を加速した。ところが、市内交通機関の施設は、人口増加に伴う需要量より遅れている。このような時代風景を映し出したのは、漱石の『三四郎』・『虞美人草』・『それから』・『門』に登場する人物である。彼らの利用する移動路線は、新橋駅を終着駅とする東海道線、及び、九州まで延長された山陽本線である。漱石の作品と対照的に、啄木の『天鷲絨』・『故郷に入る』等の作品に描かれた上京路線は、東海道線と正反対な方向にある東北本線である。

同じく 1907 年以降の東京を舞台にし、同じ地方出身者の上京を描いた『三四郎』と『天鷲絨』とでは、東京という都市空間のイメージを具象的に表現するのに、共通的に市電の描写を行っている。市電は都市部と非都市部とを区別するには代表的な記号となる。小説『三四郎』では、青年三四郎が東京の大学に入るため、九州の熊本より上京する。彼が名古屋から東京に向かう汽車の中で、「これから東京に行く。大学にはいる。有名な学者に接触する。趣味品性のそなはった学生と交際する。図書館で研究をする。著作をやる。世間

が喝采する。母が嬉しい」と描いた未来図のように、彼はエリート階級に進出することを夢見る青年として設定されている。彼の入京する入り口は東京の玄関口―新橋駅となる。

東京で初めてちんちんと鳴りながら走る電車を見る時、三四郎は驚きを感じる。そして、最も驚いたのは、「どこまで行つても東京が無くならないと云ふ事」と、「凡ての物が破壊されつゝある様に見える。さうして凡ての物が又同時に建設されつつある様に見える」ことである。このような都市化現象に、三四郎は、自分だけが置き去りにされたような錯覚に陥る。都市化という社会現象に向ける彼の視線には、東京で出世することを内密する自己内部へ向かう内省的な視線が交じり合っている。彼の「今までの学問はこの驚ろきを預防するうえにおいて、売薬程の効能もなかつた。三四郎の自信はこの驚ろきと共に四割方減却した。不愉快でたまらない」という不安の感情は、彼が新橋駅に着くまでに想像した「東京」に対する主観的認識が、現実世界から与えられた連続でダイナミックな体験から知り得た認識との間に生じた亀裂より発した心の動きである。

同じ時代背景を舞台にした『天鷲絨』にも同様な心理描写が描かれている。お定が東北本線に乗って初めて上野駅に降りた時に見て感じたことは、「何百輛とも数知れず列んだ腕車、広場の彼方は昼を欺く満街の灯火、お定はもう之だけで気を失ふ位おツ魂消てしまつた」という「夢を見てゐる様な心地」であつた。さらに、彼女が三四郎のように初めて市内の道路を走るちんちん電車を見た時、恐ろしい体験をしたような衝撃を受けたのであつた。

お吉が、『電車ほど便利なものはない。』と言つた。然しお定には、電車ほど怖ろしいものはなかつた。線路を横切つた時の心地は、思出しても冷汗が流れる。後先を見回して、一町も向うから電車が来ようものなら、もう足が動かぬ……しつきりなしの人の乗降、よくも間違が起らぬものと不思議に堪へなかつた。電車に一町乗るよりは、山路を三里素足で歩いた方が遙かました。

物語における都市という「異文化」に対する地方出身者の認識の中で、「市電」は代表的な記号として表象されている。近代化・産業化を象徴する「市電」に対する見方は、東京出身者と地方出身者との間にきわめて大きな隔たりが存在する。それは『天鷲絨』に登場するお吉の電車の利便性について語るセリフの「電車ほど便利なものはない」と、お定の「電車ほど怖ろしいものはなかつた」という恐怖心とから認められる。三四郎は知識を以てその隔たりを克服しようとするが、克服しきれずに、時代の変化に置き去りにされそうな不安に陥ってしまう。

作者は異なるが、同じく地方出身者として設定された三四郎とお定の人物像には、市電に対する共通的な認識が植え込まれている。市電は、都市化現象を示す一つのシンボルとしてテキストに織り込まれて、それをめぐる反復的な表現が 1900 年代後半から 1910 年代

前半までの東京の「都市」的イメージを強化したのである。

エドワード・サイデンステッカー氏は『東京 下町山の手 1867-1923』において、1887年頃から東京の人口の増加が江戸の最盛期の水準に回復したと指摘し、「人口増加は、絶対数からいえば下町のほうが大きかったが、率からすると山の手のほうが高かった。もともと山の手は人口密度が低かったからである。新しく流入したのは、貧しい東北の出身者が圧倒的に多かった」¹⁶⁾と述べている。女中奉公をするために東北から上京した二人の少女が、東京で最初に訪れたところは、「本郷四丁目から左に曲って、菊坂町に入った所」に位置する源助が経営する「山田理髪店」である。上野駅より東京の山の手に入流する二人の少女の軌跡は、当時の時代模様の浮き彫りとなる。そして、新橋駅より東京に入り、山の手を中心舞台とし、エリート階級に進出することを夢見る青年と同じく、初めて「市電」を見る時に「不安」「緊張」といった共通的な心理状態を表している。それぞれの作品に描かれる汽車の移動する輪郭線が異なるが、時代の様相を反映する鏡像となるテキストには、新橋・上野駅というトポスが共通的に方角を示すインデックスという機能として働く。ただ、作家によって、その表現の強弱がテキストの中に現われる。

IV. 物語の構造と新橋駅

『彼岸過迄』では、敬太郎の就職問題を解決しようとする日常の背後に、探偵体験という非日常の世界が並行的に描かれている。冒険談に「丁年未満の中学生のやうな熱心」さを持つ敬太郎は、「毎日新橋の停車場へ行」く森本の放浪生活を聞いて、様々な冒険談の主人公の森本を「一切がXである」存在として思い込む。そして、就職問題を解決するために、須永の叔父の田口から探偵仕事が任される。これがきっかけで、敬太郎は自分もついに冒険談の主人公になったと思ったが、結局それが「殆んど冒険とも探検とも名付けやうのない児戯であつた」と自覚するようになる。彼の冒険談にドラマチックなムードを漂わせた道具として登場するのは、森本の「記念」となるステッキである。敬太郎から見れば、それは「不思議な謎の活きて働らく洋杖」である。前述したように、このテキストにおいて「新橋駅」が放浪を意味する「国内」・「海外」への指向性を示し、「森本」という人物とその「ステッキ」と共に、物語の展開の方向性を示すインデックスとなっている。この三つの項目はすべて「X」という未知の不確定な可能性に富む仕掛けとして、物語の展開に影響する変量として作用している。

前掲の作品と同じ時代的背景を描いた『虞美人草』では、新橋駅というトポスを通して登場人物のネットワークと物語の展開とを抽象的かつ集約的に表している。

紫に驕るものは招く、黄に深く情濃きものは追ふ。東西の春は二百里の鉄路に連なるを、願の糸の一筋に、恋こそ誠なれと、髪に掛けたる丈長を顫はせながら、長き夜を縫ふて走る。古き五年は夢である。

京都から新橋駅に向かって走る汽車には、小夜子とその父の孤堂先生が乗っている。「紫に驕るものは招く、黄に深く情濃きものは迫う」と、平行線であった藤尾と小夜子は、一人の男のため、「東西の春は二百里の鉄路」の距離が縮まるにつれ、互いに絡み合う運命に導かれるようになる。小夜子と婚約しながら藤尾に恋心を抱く小野は、義理と愛情の取捨選択に迫られる。孤堂の「小野は新橋まで迎にくるだらうね」という問いかけに、小夜子は「いらつしやるでせうとも」と答える。迫る者の運命の終点は「新橋駅」となり、取捨選択に迫れる者の運命の選択は「新橋駅」にあり、「紫に驕る」者の運命は「新橋駅」によって決められる。「新橋駅」は、主要人物の三人の運命を予示するトポスとなっている。

「新橋駅」に向かう二百里の移動空間には、錯綜する登場人物らの関係を示す複数の「出会い」が仕組まれている。「おい居たぜ」と言った宗近のセリフは、京都にいる頃から小夜子との重なる偶然的な「出会い」を強調する。食堂車での偶然的な「出会い」による劇的な展開は、登場人物らの複雑に絡み合う関係を予示する。宗近の「これで何遍逢ふかな。一遍、二遍、三遍と何でも三遍ばかり逢ふぜ」という不思議がる発言に、甲野の「小説なら、これが縁になつて事件が発展する所だね。これだけでまあ無事らしいから……」というセリフは『虞美人草』の劇的な展開を予示する。

四個の小世界は夫れ／＼に活動して、二たゝび列車のなかに擦れ違つた儘、互の運命を自家の未来に危ぶむが如く、又怪しまざるが如く、測るべからざる明日の世界を擁して新橋の停車場に着く……四個の小世界は、停車場に突き当たつて、しばらく、ばら／＼となる。

小野は定められた運命から逃れず、宗近と甲野のいる新橋駅に姿を現わす。新橋駅は、ここで特権的な空間として、それぞれに活動する「四個の小世界」をぶつかり合わせ、また、小野を中心とするネットワークを顕在化し、小夜子と藤尾の運命を決めつけるトポスとなる。

あとは――雨が降る。誰も何とも云はない。この時一輛の車はクレオパトラの怒を乗せて韋駄天の如く新橋から馳けて来る。

藤尾は小野との婚姻を成就するために、二人で大森に行くことを計画した。ところが、小野は出発する直前、自らの下宿に訪れた宗近の「此所だよ、小野さん、真面目になるのは」、「此機をはづすと、もう駄目だ」という忠告を受け入れ、小夜子との婚約を守ることにする。そこで、藤尾は韋駄天の如く新橋からクライマックスのステージとなる彼女の自宅に戻って来る。宗近は「藤尾さん。小野さんは新橋へ行かなかつたよ」と藤尾に話しか

ける。藤尾は「あなたに用はありません。——小野さん。なぜいらつしやらなかつたんです」と小野に詰問する。そして、小野は「化石した表情の裏で急に血管が破裂した。紫色の血は再度の怒を満面に注ぐ」藤尾に小夜子を妻として紹介する。

「宗近君の云ふ所は一々本当です。これは私の未来の妻に違ありません。——藤尾さん、今日までの私は全く軽薄な人間です。あなたにも済みません。小夜子にも済みません。宗近君にも済みません。今日から改めます。真面目な人間になります。どうか許して下さい。新橋へ行けばあなたの為にも、私の為にも悪いです。だから行かなかつたです。許して下さい」

藤尾の表情は三たび変った。破裂した血管の血は真白に吸収されて、侮蔑の色のみが深刻に残った。仮面の形は急に崩れる。

「ホホホホ」

歇私的里性の笑は窓外の雨を衝いて高く迸った。同時に握る拳を厚板の奥に差し込む途端にぬらぬらと長い鎖を引き出した。深紅の尾は怪しき光を帯びて、右へ左へ揺く。

小野と一緒に大森へ行く汽車に乗るはずの藤尾は、一人だけ新橋駅に取り残される。前掲した「四個の小世界は、停車場に突き当たつて、しばらく、ばら／＼となる」という内容に示されているように、小夜子・小野・甲野・宗近を指す四個の小世界の中には、藤尾が含まれていない。「測るべからざる明日の世界」という叙述のように、物語の前半ではすでにその結末を予示する伏線を敷いている。新橋駅は、物語の「事件」を誘発するトポスとして、登場人物のネットワークの形成を象徴する地理位置となり、また、その中心人物である小野の選択の主導権を示す権力の場となっている。『虞美人草』の小野の選択の方向性を示し、物語に緊張感の漂う急展開を起こすトポスとして仕掛けられた新橋駅は、『彼岸過迄』の「新橋駅→森本→ステッキ」という構造に示された「方角を教える指標」と相通ずるのである。

おわりに

漱石の小説において、ほとんどの移動空間は新橋駅を発着駅とする東海道沿線と西に延長する地域であり、東北地域と繋がる上野駅とその空間に関する描写は見当たらない。さらに、上野駅の周辺に位置する公園・博物館・美術館・大学等、文明開化のパノラマを描いたものは豊富であるが、その表裏のように存在する貧民窟を視野に入れることはない。上野駅周辺の空間は、漱石の日常生活ないし文学作品に登場する都市空間と深く関わるトポスである。しかし、作品の登場人物らは貧民窟の周辺のぎりぎりのところまで巡りながらも、その地域に対する描写だけが彼の描いた都市空間から捨象されている。啄木の新橋・

上野駅の対立構図より、その理由の一端を垣間見ることができる。啄木の都市に対する観察には、漱石の文学に排除されたトポスの上野駅が、故郷を想起するトポスであると同時に、文学における都市像づくりに、新橋駅と対立するトポスとなっている。一方、観察側と観察される側の眼差しを同時に所有する漱石は、その人生が商品流通と輸出とが盛んに行われ、資本所得や富の集中度の高い東京と西に延長する空間と緊密な関係を持つ。その所産は、新橋駅と西に延長する移動空間に関する豊富な文芸表現である。これと共に、漱石が都市像づくりに上野駅の周辺に位置する公園・博物館・美術館・大学等の景観を可視化したのは、これらの地域が都市の近代化を象徴する統一性へと結合されているのである、と考えられる。相対して、下谷・浅草辺りの地域が不可視化とされたのは、都市化の否定の象徴ではなく、都市のカラフルな生活様式や文化を明瞭でこの上ない視覚的体験が得られないトポスのためである。

＊ 引用に際して旧字体は現在通用の字体に改め、ルビは適宜省略した。引用文中の傍線及び省略記号は引用者による。

注

- 1) 『漱石全集』7、岩波書店、1994年6月刊、9頁。以下、『漱石全集』における引用は、すべてこの版を用いた。
- 2) 「手紙」という形は、『彼岸過迄』で四回登場する。牧野陽子氏は「いざないの空間—『心』と『彼岸過迄』—」（『講座 夏目漱石』5、有斐閣、1982年4月、329頁）において、「手紙」というものが「つねに敬太郎を何かに、それも不思議な深い何かに導く力として作用している」と論じている。
- 3) 前田愛『都市空間のなかの文学』筑摩書房、1983年3月、325頁。
- 4) 田口律男『都市テクスト論序説』松籟社、2011年9月、281-282頁。
- 5) 同前、295頁。
- 6) 森本という人物は、作家漱石が自らの足跡に基づいて作り上げた人物像である。新橋駅の鉄道員、海を渡って大連の「電気公園の娯楽掛り」等の仕事に関する設定は、海外渡航が盛行しはじめる世相を反映し、ドラマチックな人生経験を持つ人物像を象徴として表現している。この描写の素材になるのは、1909年、漱石が中村是公の招待で当時の満州と朝鮮を旅行した時の見聞である。同年発表された『満韓ところぐ』には、漱石が当時大連の電気公園を訪れたが、開業直前だったため、公園内の娯楽施設を見物できなかったことが記されている。
- 7) 太陽暦10月14日。
- 8) 有島武郎の『或る女』は、1911年1月『白樺』の創刊と共に「或る女グリンプス」という題で連載し、1913年に現在の書名に改題。
- 9) 『石川啄木全集』6巻、筑摩書房、1978年6月、289-290頁。以下、『石川啄木全集』にお

ける引用は、断りなく同版を指す。

- 10) 照井悦幸氏は「生活感情の形象—啄木と『停車場』—」（「国際啄木学会研究年報」第2号、1999年3月、35頁）において、上野駅は啄木にとって「ケガレ」の空間で、新橋駅は「ハレ」の空間だと解釈し、その最後の上京が「ハレ」を求めるプロセスだと述べる。照井氏の解釈はみごとであるが、上野駅をめぐる反復的な描写に対する言説分析と、「東京の裏門」と名付ける背景に関する原因究明が欠けている。その裏には、啄木の東北地域の経済産業の不振に対する懸念、及び、渡米熱に関わる横浜港に対する思いが存在する。1909年「百回通信」で、彼は、「東北振興策」を持ち出し、「鉄道敷設、港湾修築、産業奨励、教育改善」という案を提出する。ここで提出した「鉄道敷設」と「港湾修築」の案は、地域活性化に有利な「新橋駅」のような鉄道建設、及び、海外と通商を行う貿易港の横浜港をモデルとしている。一方、新橋と結ばれる横浜は、啄木の東北と繋がる上野駅と新橋駅との対立関係を劇化したトポスと考えられる。1902年10月、啄木は二度目の上京の時に日本力行会と接触し、これによって、「幼い頃から抱いていた渡米熱に点火され」て、後に渡米するために積極的に行動したが、失敗で終わる。このような実体験を材料として描いた作品は、小説『鳥影』（1908年）・手稿「坂牛君の手紙」（1909年）・手稿「酒田川丸の船客」（執筆年月不詳）等がある。啄木の文学に表象された新橋・上野駅の意味と関連付けて検討すれば、前四回と異なる最後の上京ルートの「海路→横浜港→新橋駅」は、啄木が自らの東北人とする運命に逆らおうとする、意識的な行為であると考えられる。これは、1908年4月以降、啄木の記した日記より確かめられる。
- 11) 3) に同じ、323 頁。
- 12) 3) に同じ、328 頁。
- 13) 3) に同じ、323 頁。
- 14) 『東京市郊外に於ける交通機関の発達と人口の増加』東京市役所編、1928年5月、253 頁。
- 15) 奥井復太郎氏「都市郊外論」（『都市の精神』日本放送出版協会、1975年11月）214 頁。
- 16) エドワード・サイデンステッカー著、安西徹雄訳『東京 下町山の手：1867-1923』講談社文庫、2013年11月、63 頁。

参考文献

- 東京市役所(1928)、『東京市郊外に於ける交通機関の発達と人口の増加』東京市役所編。
- 奥井復太郎(1975)、『都市の精神』日本放送出版協会。
- 石川啄木(1978)、『石川啄木全集』筑摩書房。
- 前田愛(1983)、『都市空間のなかの文学』筑摩書房。
- 夏目漱石(1994)、『漱石全集』岩波書店。
- 田口律男(2011)、『都市テキスト論序説』松籟社。
- 牧野陽子(1982)、「いざないの空間—『心』と『彼岸過迄』」（三好行雄・平岡敏夫・平川裕弘・江藤淳編

『講座 夏目漱石』五、有斐閣）、329 頁。

照井悦幸(1999)、「生活感情の形象-啄木と『停車場』」『国際啄木学会研究年報』第二号、35 頁。

エドワード・サイデンステッカー(2013)、『東京 下町山の手：1867-1923』（安西徹雄、原著は 1983 年発行）講談社文庫。

An overview of Shinbashi Station in Soseki's literary works: From the viewpoint of the representation of Shimbashi and Ueno Station as seen by Takuboku

CUI, Xuemei

Abstract

An expression concerning transportation, such as trains, streetcars and steamships, etc, in Soseki's literature is expressed in the context of equipment which portrays the character's personality, the period of the story, and the narrator's worldview. Soseki describes civilization by "train" through the painter portrayed in "Kusamakura". moreover, the descriptions of character's entering and leaving Tokyo in many works set in Shimbashi station, called "the front door of Tokyo", and the main characters who relate to the development of stories set in the Tokaido Line area along a railway line which connects Shinbashi and Kobe was completed in 1889 (Meiji 22). Alternative, the development of stories in Takuboku's works is related to Ueno station, the departure and arrival station for the Tohoku-honsen. His Tanka named "the accent of my faraway home town..." is a work which drew the figure of the northeastern people that gathered in Ueno station. Takuboku called Ueno station "back gate of Tokyo" in the novel "He entered home" which was not completed.

The attention paid to the car and the station also can be found in his works for the simultaneous period, but Takuboku is the only person caught the convoluted image of Shinbashi station by Soseki, and these stations were expressed in a contrast way. This article is mainly focused on clarifying the contemporary phase over Shimbashi and Ueno station by comparing the texts of both writers.

Keywords: Natsume Soseki, Ishikawa, Takuboku, train, Train, Shinbashi Station, Ueno Station

植民地台湾における処女会創設と中間指導者としての日本人官吏

宮崎 聖子（福岡女子大学）

要旨

台湾は1895年から半世紀、日本の植民地となった。台湾総督府やその下部組織の州・庁（「内地」の「県」に相当）は台湾の人々を教化する目的で、1920年代から男子青年を対象とする青年会の統制を行い、公学校を終えた漢族系住民（以下「台湾人」と表記）の若者を収容した。一方、女子向けの処女会の創設は青年会より遅れて始まった。台北州は処女会創設に最も早く着手し、それを推進したのが台北州視学、横尾広輔であった。本稿では、日本人官吏 横尾広輔の活動から台湾における処女会の創設を検討する。

横尾は1889年に群馬県に生まれた。台湾の公学校教員を経て、1927年に台北州視学へ着任する。彼は、この時期に台北州の処女会事業を推進した。彼は台湾人女子を指導するために公学校の女性教員を活用し、まず彼女たちに対する講習を行った。その後、台北州各地で巡回指導を行い、処女会の発足を促した。さらに女子会員から幹部を養成するための講習会も実施した。彼が行った台北州処女会の指導方法は、台湾総督府の政策に影響を与えた。横尾は中間指導者として政策と現場を橋渡しする役割を果たした。

キーワード： 横尾広輔、植民地台湾、処女会、中間指導者、視学

はじめに

台湾は1895年から半世紀、日本の植民地となった。台湾総督府やその下部組織の州・庁（「内地」の「県」に相当）は台湾の人々に日本的教化を浸透させる目的で、1920年代後半から青年会設置を統制・管理し、そこに漢族系住民（以下「台湾人」と表記）の公学校（日本文化や日本語の修得を目的とした台湾人向けの初等教育機関）を終えた男子を収容した。一方、男子の青年会より遅れて始まった処女会の創設は、台北州が最も早くから着手し、それを推進したのが「台湾社会教育の父」と呼ばれた台北州視学、横尾広輔らであった。横尾の半生については、宮崎(2012)に詳しい¹⁾。社会教育とは学校以外における教育であり、青年層を取り込んだ青年会や処女会、その後身の青年団や女子青年団はこれに当たる。筆者はこれまで台湾の処女会とその後身である女子青年団について、そこに参加した人々の側から検討を行ってきた²⁾。本稿では、日本人が異民族の台湾人女性をどのように教化に取り込んでいったのかを、文献や筆者によるインタビュー調査により検討する。なお、

筆者は植民地支配を是認するものではない。しかしその細部について解明することは重要であると考ええる。

ここでとりあげるのは台湾の処女会創設の最前線で働いた教育者・官吏の横尾広輔（1889-1953 年）である。植民地期台湾の社会教育を担う人材や施設は、地域と学校を基盤としていた。そのため処女会の女子会員に対して直接的指導を担ったのは、主として女性の公学校教員であった。横尾は公学校の教員であったが、その後台北州の郡視学、台北州視学となってからは、漢族系住民の処女会・青年会政策の実施において台湾総督府（以下、総督府）による政策に影響を与え、一方で現場の公学校教員や会員らを指導する中間指導者としての役割を担った。

大正デモクラシー後の 1920 年代は、日本内地でも台湾でも社会主義や自由主義に対する弾圧が強まった時代であり、台湾においては台湾知識人の言論による抗日民族運動が激化し、総督府はその抑え込みに力を入れていた。台湾人女性で抗日運動に参加する者も存在したが、彼女たちの多くは裕福で学歴の高い女性の中でもごく一部に限られた³⁾。一方、公学校を終え進学しない台湾人女性に対する教化が始まったのは、1920 年代後半からである。1920 年代から 1930 年代初期にかけて社会教育・教化に関わった総督府の官吏の概要を示し、その中で横尾広輔の果たした役割を見てみよう。

I. 台湾における処女会・社会教育をめぐる官吏

内地の処女会は、国民教化の一環として位置づけられていたが、台湾ではそれだけでなく植民地統治上の重要な手段であった。総督府における教育・教化を担当したのは 1926 年に内務局から独立した文教局で、その下部に学校教育を主管する学務課と社会教育を主管する社会課が設置された。社会課では、処女会（後に「女子青年団」と改称）、青年会（後に「青年団」と改称）の他に寺社の監督等も行った。

ところで台湾の教育・教化全般について政策の決定権を有していたのは総督府のいわゆる奏任官以上の高等官である。文教局に社会課が設置された目的は、当時盛んであった台湾人男性による抗日民族運動を抑えることであり、女性の教化はまだそれほど重視されていなかった。1926、7 年頃の総督府文教局社会課の社会教育担当官吏は、彼らの経歴からみて内地における処女会事業の経験や台湾人女子との接触経験はなかったと考えてよい⁴⁾。台湾の地方で当初処女会事業を推進したのは、公学校校長や地方視学の日本人とその協力者である地元の地方指導者層であった。

次に、横尾が歴任した地方視学の機能について検討しよう。小公学校の数が増加したことから、1918 年、教員を指導監督するため新たに台北庁や台中庁といった地方庁に視学（判任官）が置かれることとなった。例えば表 1 は、1920 年時点での台湾における視学の配置状況である。これ以降、細部の変更はあるものの、州・庁、市・郡には視学が置かれた。市・郡に視学が置かれた結果、統制の網の目が細くなり、総督府にとって台湾の人々を

指導・監督することが容易になったと見てよい。地方視学は、抗日民族運動の取り締まりを行っただけでなく、処女会の設置に関与するようになる。それを最も積極的に行い他地方をリードした地方視学が横尾広輔である。次に横尾の略歴をみてみよう。

表 1 1920 年 台湾 5 州 2 庁における地方視学の配置 (人)

	州・庁視学【1920 年台湾総督府訓令 130 号による】	市視学【1920 年台湾 総督府訓令 131 号に よる】	郡視学【1920 年台湾 総督府訓令 131 号に よる】	市郡計
台北市	2	1	9	10
新竹州	2	—	8	8
台中州	2	1	11	12
台南州	2	1	10	11
高雄州	2	—	9	9
台東庁	1	—	—	0
花蓮港庁	1	—	—	0

台湾教育会編(1939)『台湾教育沿革史』、104-105 頁をもとに宮崎作成。

高雄州と新竹州には 1920 年当時「市」は設置されていなかった。

II. 横尾の略歴

横尾広輔(1889-1953)は 1908 年から 1946 年まで台湾に居住し、1920 年代以降の台湾の教育界では比較的名の知られた存在であった。横尾は群馬県多野郡吉井町の養蚕農家の三男に生まれ、富岡中学校を 1907 年に卒業した。彼は 1908 年 4 月に渡台、台湾人に日本語を中心とした初等教育を教授するための教員を養成する国語学校師範部に入学、1909 年 3 月に卒業した。

卒業後、彼は公学校教員や学校長をつとめたが、1916 年から約 4 年間、中国の福州東瀛学校の校長と福州台湾公会顧問に任じられた。福州東瀛学校はその前身を福州東瀛学堂といい、総督府が在福州の台湾籍民や関係の中国人の教育・教化のために、1907(明治 41)年 4 月に設けたものである。台湾公学校のカリキュラムに準拠し、台湾より公学校教員を派遣して日本語や漢文、修身を教えるものであった。

横尾は台湾に戻り、1924 年から台北市の郡視学、1927 年から台北市視学(1928 年から教育課の社会教育係長を兼任)を務める。この台北市視学時代に、州の各地をまわり処女会、女子青年団の事業を推進した。それが一段落すると、手腕を買われて 1932 年 8 月に総督府理蕃課の視学官へ栄転し、台湾の少数民族住民(オーストロネシア語族のいわゆる高砂族。現代中国語では「台湾原住民」という)の教化事業に着手したのであった。

次に、横尾が郡視学、州視学として漢族系住民の処女会、女子青年団に関連して行った活動を 1921～32 年についてみてみよう。

Ⅲ. 処女会創設の推進力章

1. 処女会創設の基盤づくり

横尾は植民地の学校教員として早くから頭角を表していたようで、それは 1916 年、27 歳で福州東瀛学校長として福州に派遣されていることからもうかがえる。横尾は台湾に戻ると、1920 年に塩水公学校(台南州)の校長となり、着任後 4 か月で公学校には珍しい父兄会を設置している。また『台湾日日新報』によると、横尾は 1921 年に郡下の小公学校の女性教員、保姆を対象に学事打合会を開催し、彼女たちからの意見聴取を行った⁵⁾。記事に詳細な記述はないが、この会合が「新しいもの」であるとされていることから、この頃から横尾が女性教員や保姆に着眼していることが分かる。父兄会の会員は地域の指導者層であり、彼らの教化如何が地域の若い世代の教化に大きな影響力を持っていた。この頃の横尾は、管轄郡下の父兄会や女性教員に働きかけ、処女会創設の土台作りに力を入れていたと思われる。

横尾が台湾の人々に対して抱いていた認識は、彼が台北州羅東郡・宜蘭郡視学であった時に書いた論文からうかがい知れる。台北州は 1926 年 10 月に「民心融和を促進する方途を論ず」というテーマで懸賞論文を募集した。それに横尾は応募し、最も優秀な論文(二等賞)として選ばれた⁶⁾。横尾は、「本島民族心理の研究は在台内地人の一大責務と云はなければならない」とし、内地人と本島人(ここでは台湾人を指す)の相互理解のための研究、特に台湾人の生活の研究を提唱する。しかし彼の被植民者に対する眼差しは冷淡なわけではない。彼は「植民地とはいえ内地人の思想や習慣のみが遵奉されるべきではなく、本島人のそれを無視するようなことになれば、それは専制的思想であるといわざるを得ない」と述べる。横尾は被植民者の具体的生活とその構造への目配りを忘れず、そのような姿勢は、当時の在台日本人としては珍しいものだった。彼のこのような姿勢は、次に述べるように処女会指導においても同様であった。

2. 処女会の創設

(1) 横尾の台北州視学就任

横尾が処女会事業に本格的に取り組み始めたのは 1927 年に台北州内務部教育課の視学になってからである。この頃は抗日民族運動が全盛期を迎えており、各地では青年会や青年団をめぐって抗争が起きていた。総督府は文教局を 1926 年 10 月に設置し、その下に学務課と社会教育を担当する社会課を置いた。これにより総督府は学校以外での教育・教化

をこれまでの「社会事業」から「社会教育」として分離・再定義したのである⁷⁾。特に社会教育の中でも重視されたのは、公学校を卒業して総督府の教育・教化から離れてしまう青年層である。文教局設置の布石をしいたのは、前文教課長で後に大日本聯合青年団理事長となる後藤文夫である。総督府の政策を実行に移すのは州庁であり、社会教育を推進する実働組織が総督府の膝元である台北州に社会教育係として設けられ、その初代責任者となったのが横尾であった。この間の経緯について横尾の部下であった宇田菊生(公学校教員を経て1929年より1940年まで台北州社会教育書記)は、次のように述べている。

国語普及に次で先生(横尾 引用者注)が最も力を注いだのは、男女青年団の育成指導であつたが、先生は「女子から先にやろう。女子をやれば男子は自然に蹤いてくる」という信念のもとに、先ずまつさきに指導者の問題を採りあげた。男女青年団の結成育成といつても、都市農山村に至るまで一応設置せられている公立公学校を母胎とすることが、公学校を卒えて家に在る中堅青年を一つの方向に導くものとして重視せられたのであるが、実際問題として、その直接の指導者としては当該公学校教師を措いて他に専任を得ることは殆ど困難なる実情にあつた。それにしても一日の授業を終えた学校教師が、無報酬で、放課後、夜間、日曜祭日等に、身分上強制を伴わない青年団指導その他の社会教育施設へ動員されることは迷惑であつたであろうし、学校教育当局からも蔭では顰蹙されていたに違いなかった。然るにこのことは大乗的な先生の果敢な決断をもつて躊躇逡巡することなく乗り切られた⁸⁾。(下線 引用者)

宇田の回想によれば、女性教員を活用するというアイディアは横尾のもので、組織としてはかなり教員たちに無理を強いるものであつたという。しかし管見の限り、その問題が特に議論されることはなかった。その理由に、植民地における教育という(のっぴきならない)特殊な状況下であつたことが挙げられる。また、教員の心情にもそれをやむを得ないものとして受け入れる下地があつたと考えられる。

(2) 女性教員への着目と講習会

台湾には強い男女隔離の慣習があり、台湾人女性は日本人支配者の手の届かない、日本文化から最も遠い存在と見なされていた。そのため、台湾人女子の教育・教化を担当できる者は女性の公学校教員をおいて他にいなかった。女性教員には、日本人と台湾人の両方が含まれる。女性の公学校教員を処女会指導者として養成したさきがけは台北州であり、横尾が台北州の筆頭視学となつた1929年からであつた。1929～30年における処女会や社会教育をめぐる新たな取組を表2に示したが、ここでは横尾が全てに中心的な役割を果たしている。

表 2 1929～30 年に横尾が関わった州レベル以上における処女会、社会教育をめぐる取組と講習会

	開催期日	講習内容 【主催】	出典
①	1929 年 7 月 12 日	台北州が青年／処女会について意見を徴集するための調査部会を開く。 【台北州】	1929 年 7 月 14 日「台北州徴集青年／処女会意見 特開調査部会」（漢文）『台湾日日新報』
②	1929 年 8 月 23～27 日	台北州連合同風会が主催し、処女会幹部講習会を開催（女性教員が対象）。【台北州】	1929 年 8 月 17 日「処女幹部講習 二十三日から」『台湾日日新報』、「州連合同風会主催 処女会幹事講習会 会場仮第三高女」（漢文）『台湾日日新報』 1929 年 8 月 27 日「処女会幹部指導講習会」『台湾日日新報』 1929 年 8 月 28 日「処女会指導者講習会の情味溢るる閉会式」『台湾日日新報』
③	1929 年 9 月 15 日	基隆第一公学校と同風会主催の第一回台北州処女会大会／研究会（於基隆第一公学校）開催。【台北州】	1929 年 9 月 13 日「台北州下 処女会研究会 十五日開於基隆」『台湾日日新報』 1929 年 9 月 17 日「台北州下処女大会 第一回開於基隆第一公学校 州下関係女幹部多出席」『台湾日日新報』
④	1929 年 9 月下旬	台湾総督府は大日本聯合女子青年団主催の第三回大日本聯合女子青年団大会（10 月 3～4 日）、第 5 回全国女子青年団体指導者講習会（10 月 5～8 日）（於 日本青年館）へ女性 5 名の派遣を決定した。【台湾総督府】	1929 年 9 月 25 日「女子青年団大会出席者決定」『台湾日日新報』 1929 年 10 月 1 日「女子青年団本島代表出発」（漢文）『台湾日日新報』
⑤	1929 年 12 月 19-20 日	全島社会教育講習会で横尾が受講生 70 名を新莊、基隆に案内し視察。（台北州は先進地域であるため）【台湾総督府】	1929 年 12 月 20 日「社会教育視察」（漢文）『台湾日日新報』 1929 年 12 月 21 日「社会教育者 見学教習所」（漢文）『台湾日日新報』
⑥	1930 年 8 月 6～12 日	第一回の処女会員指導講習会を開催（於 台北第三高等女学校）。会員を対象とした初の講習。【台北州】	1930 年 7 月 31 日「処女会講習会 開催」『台湾日日新報』 1930 年 7 月 31 日「処女会指導者 講習題目」（漢文）『台湾日日新報』 1930 年 8 月 4 日「初回処女会員指導講習 六日開会」『台湾日日新報』

まず、台北州施設事項調査会は1929年7月12日、第5回社会教育調査会を台北州庁会議室において開き、青年会、処女会関連事項、成人講座について協議を行った。その際、今後の青年会と併せて処女会のあり方について申し合わせがなされ、公学校教員を社会教育に用いることが方針として決定された(表2の①)。これが台北州、ひいては台湾全体の方針に影響を与えたと思われる。

横尾は1929年8月には処女会指導者、すなわち女性教員らに対し、台北第三高等女学校において5日間の合宿による講習会を実施している(表2の②)。横尾はこの際に自身も泊まり込んで指導を行っている。受講者は43名で、その内容は表3のとおりである。最終日の閉会式では、講師も受講者も全員が手拭をかぶり、円陣を作って民謡踊り(ダンス)を踊って別れを惜しんだ。

表3 処女会幹部指導講習会の内容 1929年8月

講習科目	講師
「女性の使命」	鈴木台北州教育課長
「青年年期に於る女性の特質と指導」	台北第三高等女学 小野校長
「処女会経営の実際」	横尾台北州視学
「唱歌」	赤尾教諭
「舞踊」	台北第三高等女学校 小橋川囑託、古賀囑託、 蓬萊公学校 加藤訓導
「其他行事」	横尾台北州視学、古賀囑託、加藤囑託

1929年8月27日「処女会幹部指導講習会」『台湾日日新報』より

そして翌9月には、基隆第一公学校において、処女会の指導者となる女性教員らを集めて、台北州処女会大会／研究会が開かれた(表2の③)。これは処女会創設のためのキックオフ大会にあたるものである。当日は、台北州鈴木教育課長(横尾の直接の上司にあたる)、総督府文教局社会課佐々木属のほか、基隆市の各界名士を含め100余名が参加した。会場となった基隆第一公学校では、教員の山本寿美が3月に処女会を組織し優秀な成績を収めており、この研究会での視察の対象となった⁹⁾。そのほかに研究会では参加した教員らがそれぞれの処女会の概況を報告した。

同月、総督府は内地の女子青年団大会へ派遣する処女会指導者の女性5名を決定しているが(表2の④)、彼女たちは処女会先進地域であった台北州の成績優秀な指導者(公学校教員)であり、全員横尾の指導と推薦を受けた者であった。1929年12月に行なわれた総督府主催の全島社会教育講習会では横尾が受講生70名(公学校教員)を青年会、処女会の先進地域である台北州の新莊街、基隆市に案内して視察を行っており(表2の⑤)、彼は全島レベルの社会教育で注目される存在になっていた。

横尾たちは公学校を基盤に処女会を設置することを決め、それについて公学校に協力を要請した。そして女性教員を対象にまず講習会を実施し、それを受講した教員に地元の会員を指導させたが、そのやり方は総督府にも採用されたようである¹⁰⁾。台湾教育会が出版する1932年7月の『台湾教育』357号には、総督府が主催した(する)昭和2～7(1927～32)年度の講習会の実施状況が掲載されている。それによれば総督府は1929年から1932年にかけて小公学校女性教員を対象に「女教員講習会」を実施している。他の種類の学事講習会(校員学力向上講習会や、男子体育講習会など)は毎年開催されていないか、または選ばれた人のみが受講するのに対して、この講習会は台北州や高雄州など委託された地方州・庁で「毎年」実施され、その地方の女性教員「全員」が受講した。内容は「小公学校に於ける裁縫手芸家事教授の改善に資せんとす」るもので、横尾のいる台北州はその第一回目を担っている¹¹⁾。公学校では当時台湾人女子生徒に「裁縫及家事科」が実施されていたが、この1929年から連続しての女性教員に対する大規模な講習会は、学校教育のみならず処女会の立ち上げに照準を合わせたものと考えられる¹²⁾。

(3) 地方巡回指導と処女会員に対する講習会

女性教員に対する講習が一段落すると、次に横尾は州下を巡回指導するとともに、処女会員に対する講習も行った。主な対象は幹部会員として養成する者である。台湾新北市にある台湾図書館が所蔵するガリ版刷りの『台北州処女会概覧』(1931年、以下、『概覧』)によれば、横尾は州視学として1929～30年にかけて台北州下の各地を巡回し、処女会の立ち上げを指導した。以下に宜蘭処女会の事例を挙げる。

「処女会設立ノ沿革」(宜蘭処女会) (台北州聯合同風会(1931)『台北州処女会概覧』より)

処女会設立以前ハ公学校卒業生ノ年1、2回ノ短期講習会並ニ同窓会ヲ開催スルニ過ギザリシヲ昭和4年7月ヨリ処女会設立準備ニ着手セリ。即チ先ヅ卒業生同級生会ヲ開催シテ各年度別卒業生状況ヲ調査シ卒業生中処女ニシテ有力ナル者ヲ選抜シテ昭和4年9月18日より同月22日マデ指導会ヲ催シ、指導セリ。特ニ21、22ノ両日ニ州横尾視学ノ指導ヲ受ケタリ。次ニ昭和4年11月26日より同12月6日マデ11日間指導講習会ヲ開催シ処女会員トシテノ修養ヲ計ル。昭和4年12月7日処女会発会式ヲ挙ゲ茲ニ初メテ宜蘭街同風会ノ部会トシテ産声ヲ上ゲタリ。(下線 引用者)

地方においては処女会員となる台湾人女子を横尾らが直接指導し、短期間のうちに会の発足にこぎつけていることが分かる。横尾と部下の宇田は各地での指導のため頻繁に出張し、時には一日に午前、午後、夜間と出張することもあるほどであった¹³⁾。『概覧』には台北州下の50の処女会の記述があるが、いくつかの処女会を除けば、ほとんどは1929～30年の間に発足しており、横尾らの活動の結果と言える。

一方横尾が全島に先駆けて州下の処女会員に対する講習会を開催したのは1930年8月である。処女会指導者(主に公学校の女性教員)を対象とした講習会を8月1～5日に台北第三高等女学校において開催した後、引き続き同じ会場で6～12日に幹部会員向けの講習会を行っている(表2の⑥)。当時の会員は裕福な家の娘がほとんどであった。講師には主に高等女学校の教員が招かれ、講習内容は日本語や修養、家事、唱歌、遊戯が中心である。横尾が直接会員に指導したのは、講義形式による精神涵養などの修養と処女会運営の方法であった。なお1930年以降、台北州においては、内地と足並みを揃え、処女会は名称を女子青年団へと変更していった。

IV. 中間指導者としての横尾

では、横尾はなぜ台湾の社会教育に影響力をもち得たのだろうか。

第一の理由は、彼が台北州においては自ら方針を決め、実際の現場に関与できる州視学という身分を有していたこと、台湾における処女会／社会教育という新たな取り組みを遂行する能力を有していたことがあげられる。州視学という身分は判任官であり、公学校長と同程度の位置づけであった。通常であればこのような中級の官吏は政策策定にはほとんど関与しえないと思われる。しかし横尾の取り組んだ植民地の処女会事業はまだ誰も着手したことがなく、台湾人の女子青年の実態を把握する必要があった。この点で、かつて公学校教員であった横尾は「現場からの叩き上げ」というバックグラウンドを生かすことができた¹⁴⁾。彼の処女会に対する台北州での取り組みが台湾全島で注目されたことは前項で述べた通りであり、社会教育、特に女子社会教育のパイロットケースとして総督府の方針に影響を与えたのである。

その際横尾は異民族に対する教化の観点から多くの文献を渉猟し、教化対象者や教化方法の研究を徹底して行った。例えば彼は、部下の宇田に漢籍やマルクス、レーニンの書籍まで買い与えて台湾人を研究するよう指示している¹⁵⁾。努力をいとわない態度は、横尾が異動先の総督府理蕃課で先住民を対象とした視学官になった際にも表れている。横尾は、ブヌン族の絵暦を調査し、彼らは「文字をもたない」とされていた定説を覆すような考察記事を書いている¹⁶⁾。このような自己研鑽は彼の職務遂行能力を高めたはずである。

第二の理由としては、横尾が事業に対する情熱を持ち、人を適所に配置することに長けていたことが挙げられる。彼は、率先垂範により台湾の人々を導くことが重要であると考え、実践した。処女会指導では会場に自ら泊まりこんで歌い、踊り、共に楽しむ姿が指導を受ける者(公学校教員であれ、処女会員であれ)をひきつけた。彼は毎朝冷水摩擦を励行し、鉄垂鈴を振って体を鍛えており、男子青年の講習などでは横尾が先頭に立ち2里の道のりを走るほどであった¹⁷⁾。

加えて横尾は、台湾の人々の状況を理解した上でその自主性を引き出す方策をとった。例を挙げれば、台北州新莊街出身の女性公学校教員、林彩珠は地元の新莊処女会創設時の

指導者となった。彼女は1929年8月に横尾らによる処女会指導者養成の講習を受けた。同月末に横尾はさっそく隣町の三峡処女会の幹部講習に彼女を帯同し、講習を手伝わせている¹⁸⁾。また林は同年10月に4名の女性教員とともに東京で開催された第5回全国女子青年団体指導者講習会に派遣されたが、彼女を推薦したのは横尾である。これらのできごとが指導者としての林の「やる気」に火をつけたことは想像に難くない。彼女は筆者によるインタビューにおいても、横尾のことを戦後50年以上たっても覚えていた。林彩珠自身も教え子たちに評判のよい優れた教師であり、横尾は林彩珠のような人材を見出すことに長じていた。先にふれた教員、山本寿美も同様である。彼が処女会事業を軌道に乗せられたのは、そのような人々を用いたためであった。

横尾はこのように、総督府の意向を汲んで指導計画を立て、現場でも自ら実践してみせ、それが総督府に影響を与えるという中間指導者の役割を果たした。温かい人柄で、自己鍛錬を怠らず率先垂範で台湾の人々をリードする彼は、ある種のカリスマであった。彼のような中間指導者の存在により、台湾における処女会の創設が軌道に乗ったと言える。

横尾の台湾の人々に対する眼差しは、どうであったろうか。横尾は台北州から総督府理蕃課へ異動した直後に書いた記事の中で、漢族系住民の生徒の特徴を以下のように述べている。それからは、彼(女)らに対する肯定的な認識がうかがえる。

1. 純真にして極めて従順なること。
2. 品行方正にして正直なること
3. 向上心に富むこと
4. 実行力に富むこと
5. 礼議(マ)と恩誼に厚きこと¹⁹⁾

男子の青年会・青年団事業が難航する中、「女子(の教化)を先にやれば男子は後からついてくる」というアイディアは、彼らをよく知る横尾ならではのものであった。横尾は植民地の人々に対する同情心を持つと同時に、彼らがいずれ「真正な日本人」となることに楽観的であり、希望を持っていたと思われる。そのために処女会事業に情熱的に取り組んだのであろう。

おわりに

台湾人女性は家庭においても次世代に台湾の伝統文化を伝承し、日本文化からは遠い存在と見なされていた。本稿では、そのような人々を教化するために処女会がどのように組織され構築されていったかについて、特に地方視学であった横尾広輔に着目して検討し、彼が政策と現場をつなぐ中間指導者としての役割を果たしたことを示した。

横尾は漢族系住民の人々を肯定した上で、彼らの実態を把握することを重視した。その意識は、公学校、すなわち異民族の人々と日常的に接触する現場で教員として働いた経験に根ざしていた。彼は台湾人女性がいったん教育を受けると大きく変貌することを実感し、

教育の力を信じていたと思われる。このような相手に対する深い洞察や教育に対する情熱が、教員だけでなく台湾の若い世代の人々をもひきつけたのである。一方で、彼の「敏腕」は、台湾の人々が日本の教化を受け入れやすい素地を作ったとも言える。官位が高くなかったにもかかわらず、彼が社会教育で一目置かれる存在となったのにはこのような背景があった。

横尾が漢族系住民の処女会指導に従事したのは1932年までである。その後は台湾先住民の人々を管轄する総督府警務局理蕃課の警務局つき視学官となり、先住民の人々を指導することとなる²⁰⁾。警務局つき視学官とは、この時初めて創設されたポストであった。その後の横尾の活動については、今後の課題としたい。

注

- 1) 宮崎聖子(2012)「横尾広輔の思想と実践—植民地台湾における青年指導を中心に」『現代台湾研究』42号 台湾史研究会、27-50頁。
- 2) 宮崎聖子(2003)「植民地期台湾における女性のエイジェンシーに関する一考察——台北州A街の処女会の事例」『ジェンダー研究』6号 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター、85-108頁、宮崎聖子(2011)「台湾における女子の青年団と諸個人の経験(1939-45年)」『現代台湾研究』39号 台湾史研究会、62-83頁、宮崎聖子(2013)「植民地女性と「国民化」の問題——1940年代前半植民地台湾における女性と青年団」(松田利彦他編『地域社会から見る帝国日本と植民地——朝鮮・台湾・満洲』思文閣出版)、153-188頁。
- 3) これについては、楊翠(1993)『日拠時期台湾婦女解放運動——以<<台湾民報>>為分析場域(1920-1932)』時報出版文化企業(台北)に詳しい。なお男子の青年会に対する総督府の取り締まりについては、以下を参照。宮崎聖子(2001)「台湾における抗日運動の主体形成とく青年」概念——1920-24年を中心に」『現代台湾研究』第21号 台湾史研究会、103-123頁。
- 4) 文教局社会課成立以降の社会課の事務官は、高等教育を受けた事務畑の官吏であることが多く、公学校教員の経験はほとんどなかった。また彼らの在任期間も1~3年と短い。
- 5) 1921年10月5日「女教員達 高雄学事打合」『台湾日日新報』。
- 6) 台北州視学 横尾広輔(1927)「民心融和を促進する方途を論ず」『台北州時報』2巻2号、1-10頁。応募のあった43編のうち、入選したのは二等賞3編、三等賞4編で、一等賞は該当者がなかった。
- 7) 宮崎聖子(2008)『植民地台湾における青年団と地域の変容』御茶の水書房、94頁。
- 8) 宇田菊生(1967)「台湾社会教育の父 故横尾広輔先生」『台湾協会報』151号、5頁。
- 9) 横尾広輔のご子息横尾義輔氏によれば、山本寿美と横尾家は家族ぐるみのつきあいがあったという。
- 10) 内地で処女会の立ち上げにつとめたのは、当時内務省の嘱託であった天野藤男である。天野は内地の処女会の設置区域について、部落単位に処女会を設置し、村で連合処女会を作るこ

とを推奨していた。天野藤男(1916)『農村処女会の組織及指導』洛陽堂、27-29 頁。台湾において公学校を処女会の創設基盤としたのは、内地と異なる点である。

- 11) HK 生(1932)「台北通信」『台湾教育』357 号、139-140 頁。「台北通信」とは、雑誌発行の主体となっていた台湾教育会の彙報であり、毎月台湾島内の教育に関する様々な動向を掲載していた。筆者の HK 生とは、総督府文教局の編修官で『台湾教育』を編集していた加藤春城と思われる。
- 12) 台湾の公学校における裁縫及家事科では、当時第 4 学年以上に裁縫、第 5、6 学年では裁縫と家事を教えていた。滝澤佳奈枝(2016)「日本統治期台湾の公学校における家事教科書と国定教科書の比較」『人間文化創成科学論叢』第 9 巻 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科、195-205 頁。
- 13) 宇田菊生(1967)「台湾社会教育の父 故横尾広輔先生」『台湾協会報』151 号、5 頁。
- 14) 日本の処女会指導においては、山脇房子や吉岡彌生など複数の女性知識人が重要な役割を担っていたが、植民地台湾において日本人女性の知識人といえるような人材はほとんど存在しなかった。宮崎聖子(2012)「横尾広輔の思想と実践—植民地台湾における青年指導を中心に」『現代台湾研究』42 号 台湾史研究会、44 頁。
- 15) 宮崎聖子(2012)「横尾広輔の思想と実践—植民地台湾における青年指導を中心に」『現代台湾研究』42 号 台湾史研究会、34 頁。
- 16) 宮崎聖子(2012)「横尾広輔の思想と実践—植民地台湾における青年指導を中心に」『現代台湾研究』42 号 台湾史研究会、37-39 頁。
- 17) 宮崎聖子(2012)「横尾広輔の思想と実践—植民地台湾における青年指導を中心に」『現代台湾研究』42 号 台湾史研究会、27-50 頁。これは当時、「青年団運動の父」と呼ばれた田沢義鋪のとった行動とも酷似している。横尾は、修養団の修養方法をひきついだ田沢を敬愛しており、東京出張の際は彼を訪問している。横尾もまた田沢の指導方法を踏襲していたと言える。
- 18) 1929 年 9 月 1 日「三峡処女会臨時集会 参観者好感」『台湾日日新報』。
- 19) 警務局理蕃課 横尾広輔(1932)「青年運動の回顧」『台湾教育』363 号、67-69 頁。
- 20) 温席昕は、日本植民地期における台湾先住民に対する日本警察のディスコースを分析した。その著書『日治時期在台日本警察的原住民書写』の第 4 章 1 節で、1932 年以降の理蕃課時代における横尾の著述を紹介し、また著作リストを掲載している。温席昕(2016)『日治時期在台日本警察的原住民書写—以重要個案為分析対象』秀威資訊(台北)。また宮崎(2012)でも、横尾が理蕃課に異動した後の活動について述べている。

参考文献

(日文)

天野藤男(1916)『農村処女会の組織及指導』洛陽堂。

台湾教育会編(1939)『台湾教育沿革史』。

滝澤佳奈枝(2016)「日本統治期台湾の公学校における家事教科書と国定教科書の比較」『人間文化創成科学論叢』第9巻 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科、195-205頁。

宮崎聖子(2001)「台湾における抗日運動の主体形成と＜青年＞概念—1920-24年を中心に」『現代台湾研究』第21号 台湾史研究会、103-123頁。

宮崎聖子(2003)「植民地期台湾における女性のエイジェンシーに関する一考察—台北州A街の処女会の事例」『ジェンダー研究』6号 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター、85-108頁。

宮崎聖子(2008)『植民地台湾における青年団と地域の変容』御茶の水書房。

宮崎聖子(2011)「台湾における女子の青年団と諸個人の経験(1939-45年)」『現代台湾研究』39号 台湾史研究会、62-83頁。

宮崎聖子(2012)「横尾広輔の思想と実践—植民地台湾における青年指導を中心に」『現代台湾研究』42号 台湾史研究会、27-50頁。

宮崎聖子(2013)「植民地女性と「国民化」の問題—1940年代前半植民地台湾における女性と青年団」(松田利彦・陳延媛編『地域社会から見る帝国日本と植民地—朝鮮・台湾・満洲』思文閣出版)、153-188頁。

(中文)

宮崎聖子(2019)『殖民地台湾之青年团与地域变貌 (1910-1945)』(郭婷玉訳、原著は2008年発行)国立台湾大学出版中心(台北)。

温席昕(2016)『日治時期在台日本警察的原住民書写—以重要個案為分析対象』秀威資訊(台北)。

楊翠(1993)『日据時期台湾婦女解放運動—以<<台湾民報>>為分析場域(1920-1932)』時報出版文化企業(台北)。

The establishment of the Maiden's Association and the role of a Japanese official as a middle leader in colonial Taiwan

MIYAZAKI, Seiko

Abstract

From 1895, Taiwan was under Japanese rule for half a century. From the 1920's, the Government-General of Taiwan and its subordinate organizations, Shū and Chō (equivalent to prefectures in Japan), established and managed the Young Men's Association. Here, male Han Chinese (Taiwanese) residents who had graduated from elementary schools assembled for their edification. Subsequently after the formation of the Young Men's Association, a female equivalent "Maiden's Association" was established. Taihoku Shū was the first prefecture to initiate the

program. It was Hirosuke Yokoo, one of the prefecture's inspectors of schools, who promoted the association. This essay will explore the establishment process of the Maiden's Association in Taiwan through the endeavours of the Japanese official, Yokoo.

Yokoo was born in 1889 in Gunma prefecture, Japan. After teaching in multiple elementary schools in Taiwan, he was assigned as one of the prefectural inspectors of schools in Taihoku Shū in 1927. He strived to promote the Maiden's Association project during this period. His first point of action was to further train female teachers through seminars. These teachers would then mentor female pupils of their own. To stimulate the establishment of the Maiden's Association, Yokoo gave guidance to the female teachers in various regions of Taihoku Shū. He conducted seminars together with other female teachers in the area for the members of the association in order to train its future leaders. Yokoo's methods for fostering the Maiden's Association influenced the Government-General of Taiwan's policy. Ultimately he fulfilled a role as the bridge between government policy and classrooms in colonial Taiwan.

Keywords : Yokoo Hirosuke, Colonial Taiwan, Maiden's Association, Middle Leader, Inspector of Schools

流通アンバンドリング現象の考察 —中国食品スーパー「盒馬鮮生」の事例—

王 慧娟（法政大学大学院生）

要旨

ここ数年でのインターネットとスマートフォンの普及に伴い、消費者はいつでもどこでも買物することが可能になった。この背後には、流通アンバンドリング（元来店舗が取りまとめていた「流通機能の束」の分解）があることも見逃せない。現在の中国では、アリババをはじめとして、ニューリテール戦略が展開されており、商流・物流・資金流・情報流におけるイノベーションが起きている。このような流れは、中国の小売業全体に大きな影響を及ぼしている。

本研究では、アリババ傘下のO2O食品スーパーである「盒馬鮮生」を対象にした事例研究を行う。そして、ニューリテール戦略が、実店舗の流通機能をどのように解体して、どのように再構築したかを明らかにする。すなわち、買物価値と小売ブランドという視点を用い、実店舗の流通機能の分解と再構築を考察していく。一連の考察を通じて、オンラインとオフラインを融合させる今後の小売業の方向性を検討する。

キーワード： ニューリテール戦略、流通アンバンドリング、買物価値、小売ブランド

はじめに

中国国家统计局によると、2019年の中国の電子商取引（EC）市場規模は約106,324億元に達し、EC化率は20.7%である¹⁾。ECの急成長を支えた理由の1つはスマートフォンの普及である。スマートフォンは、中国人の生活の中で不可欠なものとなっており、いかなる支払いでも、決済アプリで簡単に済ませることができるキャッシュレス社会になっている。

このような社会的背景の下で、2016年にアリババグループのジャック・マー氏が提唱して以来、ニューリテール戦略はきわめて注目を集めている。ニューリテール戦略とは、オンラインとオフラインを深く融合させ、スマート物流、ビッグデータ、クラウドコンピューティングなどの新技術を活用した新しい小売モデルを意味する。ニューリテール戦略が展開される中で、流通機能（商流・物流・資金流・情報流）においてイノベーションが起きている。

流通機能のイノベーションが生じる現象について、小売業の先行研究で理論的に説明さ

れることはほとんどなく、流通機能の解体と再構築という視点から捉えられることは少なかった（矢作，2018）。このような事態を考察するために、食品スーパーの機能を解体し、再構築している典型的な事例として、アリババ傘下の「盒馬鮮生（フーマーシェンシャン）」を取り上げる。盒馬鮮生はどのような仕組みによって、ニューリテールの代表として優位性を作り上げてきたのであろうか。本研究の目的は、流通機能が解体されていくなかで、食品スーパー「盒馬鮮生」が消費者ニーズに合わせて、どのように流通機能を再構築したのかを明らかにすることである。

I. 先行研究

本研究では、流通機能のアンバンドリングとリバンドリングにより小売イノベーションが起こると考えている。そして、アンバンドリングとリバンドリングが、消費者ニーズへの適合のために行われることから、その成果は買物価値や小売ブランドの向上といった形で表れると思われる。そこで、以下の先行研究に関するレビューにおいては、流通アンバンドリング及びリバンドリングのみならず、買物価値や小売ブランドについても取り上げるものとする。

1. 流通アンバンドリング（流通機能の「束」の解体）/リバンドリング（「束」の再構築）

矢作（2018）は、「流通機能には大きく所有権の移転を促す商流、モノそのものを動かす物流、代金決済に欠かせない資金流、それらの動きを追跡すると同時に統制する情報流の4つのフローから成り立っている。」と説明している。

スマートフォンの普及により、消費者はいつでもどこでも買物ができるようになり、従来からの店舗依存型の購買行動は大きく変化した（Verhoef, Kannan, & Inman, 2015）。矢作（2016, 2018）によると、デジタル化により元々集約されていた流通機能の束はバラバラに分解され、従来の購買行動プロセスにおける問題認知、情報探索、選択肢の評価、購買決定、代金決済、引き渡しという各段階には新しい選択肢が増加し、消費者は自らのニーズに合わせて、自ら購買行動のパターンを決められるようになってきた。矢作は、これを流通アンバンドリング（流通機能の「束」の解体）/リバンドリング（「束」の再構築）と定義している。例えば、スマートフォンでの情報検索、キャッシュレスの代金決済、商品受け渡し方法の多様化などがあげられる。

先行研究では、従来のシングルチャネルやマルチチャネルの時代では、流通機能の遂行は、主に小売業者を軸に行われてきたこと、デジタル化により流通機能の「束」が分解され、消費者が徐々に主導権を握るようになってきたことが明らかになっている。即ち、従来の売り手市場は買い手市場にシフトしつつある状況にあるわけだ。

2. 買物価値

先行研究においては、消費者視点での小売の価値についての研究が数多く見られる。ここでは、Ström, Vendel, and Bredican (2014)によるモバイル・デバイス利用から得られる価値の整理や、Huré *et al.* (2017)の買物価値を整理していく。買物価値には、功利的価値、快楽的価値、社会的価値の3つが含まれている(Ström *et al.*, 2014; Huré *et al.*, 2017)。功利的価値とは、欲しいものがすぐには買える、必要なものが揃っているといった買物という目標を達成する価値である。快楽的価値とは、興奮さ、ワクワク感など、買物体験を通じて得られる快楽性である。社会的価値とは、消費者が買物で感じる帰属意識や自尊心などの社会的意義である。買物価値に関する先行研究からは、消費者の買物による体験を通じて、商品やサービスを購入することで功利的価値が達成されるだけでなく、快楽的価値や社会的価値も追求していることが理解できる。

3. 小売ブランド

ここ数年、小売業における厳しい競争を勝ち抜くために、小売ブランドに関する研究が注目されてきた(Ailawadi & Keller, 2004; 木下, 2016; 寺本, 2019)。小売ブランドは、小売企業のPBブランドに限定して捉えられてきたが、木下(2016)は、製品・ストア・小売事業・小売企業に関する小売ブランディングの概念的整理し、小売ブランディングの意義を考察している。寺本(2019)は、スーパーマーケット業態を対象にして、話題になる商品、店舗、売り場に注目し、小売ブランドの重要性を主張している。

これまでの研究成果からは、小売業は、小売業者の企業視点から研究されてきたことが分かるが、小売ブランドに焦点を当てると、小売ブランドが消費者にどのように認識されているかが重要となり、そこまで踏み込んだ十分な研究蓄積は管見の限り見当たらないようである。

4. 先行事例研究

日本での研究を見ると、中川・守口(2010)は、小売業におけるサービス・マーケティング視点から、「成城石井」のサービス・デリバリー・システムの構築、特にフロント・システムの強化について述べている。片野(2014)は、高級スーパーの「クイーンズ伊勢丹」の漸進的イノベーション・プロセスを、小売形態ライフサイクル理論仮説で検証し、競争優位性の獲得パターンと「上質スーパーマーケット」という新たな小売フォーマットの可能性を考察している。中見(2015)は、消費者視点で漸進的なイノベーションを追求している企業として「ヤオコー」を取り上げ、付加価値創造型食品スーパーのフォーマット革新の方向性を提示している。高橋(2018)は、消費者の買物行動をパターンとして認識する「スクリプト」の概念を使い、「北野エース」を対象に、売り場スクリプトのパターン革新性に挑戦する事例を示している。一方、中国においては、ここ数年ニューリテール戦略に関する事例研究が盛んに行われている。劉(2018)は、ニューリテール戦略の下で、情報・金・モノの革

命により効率をあげる事例を説明している。李・荊（2018）は、大手スーパー「永輝超市」の歩みを紹介し、その傘下の「超級物種」と「盒馬鮮生」を比較しながら、中国小売業の方向性を検討している。

食品スーパー業態ないしフォーマットに関わる具体的な事例研究では、オンラインとオフラインを融和させた研究はまだ事例が少ないためか見当たらない状況である。そこで、本研究では最近の中国における高級食品スーパーの事例を取り上げ、消費者視点から、食品スーパー業態の新しいフォーマットのあり方を探っていく。

5. 事例分析に向けて

ここで、これまでの議論を整理する。本研究では、流通機能のアンバンドリングや流通機能のリバンドリングを検討するにあたり、それらの成果との関連をみるために消費者の買物価値と小売ブランドの概念に焦点を当てた。すなわち、購買行動プロセスにおける問題認識・情報探索、選択肢の評価・購買決定、代金決済、引き渡し、消費・評価という各段階において、消費者ニーズに基づいて、店舗に集約された流通機能の束をばらばらに解体して、消費者の購買目的や状況に応じて流通機能の再構築を行うことで、企業は消費者の買物価値を高め、小売ブランド力を向上させることができると考えられる。表1は、矢作（2018）の流通アンバンドリング現象の構図を参考に、流通機能のアンバンドリングと流通機能のリバンドリングを細かく展開し、筆者が買物価値の次元と小売ブランドの代表例を加えてまとめたものである。

表1 消費者視点による流通機能の束と流通アンバンドリング・リバンドリング

顧客行動	消費者ニーズ	流通機能の束	流通アンバンドリング	流通リバンドリング	買物価値次元	小売ブランドの代表例
問題認識 情報探索	情報の一貫性	チラシ マス媒体 評判	ショールー ミング ウェブルー ミング	カスタマイ ズ情報	功利的	盒馬鮮生
評価 購買決定	シームレスな消費体験	来店 選択 集荷	PC スマホ	オムニチャ ネル	功利的	盒馬鮮生
代金決済	省時間	レジで集合 清算	セルフレジ	レジレス	功利的	盒馬鮮生
	利便性	現金決済	代引き	スマホ決済	功利的	盒馬鮮生

	省手間	袋詰め	袋詰めサー ビス	袋詰めサー ビス	功利的	成城石井
受け渡し	利便性	現物主義	商物分離	商物分離	功利的	オイシッ クス
	利便性	持ち帰り	宅配	持ち帰り 宅配 ロッカー	功利的	盒馬鮮生
消費評価	省手間	調理加工	店内調理	店内調理	快楽的	クイーン ズ伊勢丹
	コミュニケーション	個人、家族 等	レビュー SNS 等	アプリ	社交的	盒馬鮮生

(出所)矢作 (2018) を参考に筆者作成。

表 1 から流通アンバンドリング、リバンドリングを捉えることで、消費者ニーズに応じた買物価値の提供と小売ブランドの展開を捉えることができる。矢作(2016)によると、長年に渡って前提となっていた「店舗と消費者の間の流通機能の分担関係」を変化させ、コストと利便性のバランスを変えることこそ、イノベーションの源泉となるのである。本研究の目的は、食品スーパーにおいて、流通機能のアンバンドリングとリバンドリングの具体的なプロセスについて事例研究を行い、先行研究の枠組みをもとに流通機能の再構築プロセスを整理することである。繰り返しになるが、矢作 (2018) では、流通アンバンドリングとリバンドリング現象が登場することを提示しているが、それをどのように評価するかについては議論されていなかった。そこで本研究では、流通機能イノベーションの成果を買物価値と小売ブランド力の向上という視点から評価できると考えた。

それでは、店舗と消費者の分担関係を捉えるとき、流通機能のアンバンドリングやリバンドリングにどのような動きがあるといえるのだろうか。次章では、こうした視点で具体的な事例を考察し、小売業の新たな方向性を検討していきたい。

Ⅱ. 盒馬の事例分析

1. 盒馬の概要

「盒馬鮮生 (以下、盒馬と記す)」は、2015 年に創立し、創業初期にアリババより 1.5 億ドルを調達した、アリババ傘下の食品スーパーマーケットである。2016 年 1 月、第一号店である上海金橋広場店が開店した。その後出店が加速し、2019 年 10 月時点では 21 都市 154 店舗まで拡大している。その特徴は、グローサリant型の実店舗と、オンライン注文による高スピードの宅配サービスにある。またモバイル決済によるキャッシュレス化などを取り込み、中国ニューリテールのあり方を実現している。2018 年 9 月 17 日、アリババグル

ープの投資家向けイベントで盒馬の実績が公表された。単店あたりの平均日販額は 80 万元（約 1300 万円）であり、そのうちの約 6 割がオンラインの売上であった。さらに、オンラインやオフラインのいずれかの利用客よりも、両者を利用している利用客の方が購買額を上回っていた。これは、オンラインとオフラインの融合による相乗効果が現れていることを示している²⁾。

2. 盒馬にみる流通機能のアンバンドリングとリバンドリング

（1）商流のアンバンドリングとリバンドリング

盒馬は、アリババの莫大な商流機能を反映したデータを活用している。アリババは、膨大な顧客の可処分所得、購買履歴、住所などの情報を握っていることから、エリア別にさらなる精度の高い需要予測が可能となる。盒馬は、商流データを活用し、自動発注により現場作業の軽減を図っている。このことから、サプライチェーン・マネジメントによる在庫管理・廃棄・欠品率などの削減が可能となる。

（2）物流のアンバンドリングとリバンドリング

盒馬は、物流機能を更に細分化している。盒馬は、日本の多くのネットスーパー同様、店内でピックアップして配送する。しかし、盒馬は、従来の流れを更に細分化して、注文してから 3 km 圏内を最短 30 分で無料配送する。具体的には、配送までの全過程を更に細分化して、ピックアップ・梱包・配送という 3 つの段階に分けた作業が遂行される。その結果、利便性の体験によるヘビーユーザーが育成されていく。消費者は、商品を購入してそのまま持ち帰ることも、購入した商品をカウンターで調理してもらってから持ち帰ることも、店内で食べることも、配送することもできるのである。

（3）資金流のアンバンドリングとリバンドリング

日本では商品の代金決済は現金が主流であるが、中国ではキャッシュレス化が進んでいる。盒馬は、開店当初から支払いにおいて、セルフレジとアリペイ決済のみ利用可能であり、現金、クレジットカード、ウィチャット・ペイなどは一切利用不可能であった。都市部では現金を利用する人はほとんどいないが、ここまで徹底されている店舗は他にはない。その狙いは、アリペイの利用を通じたアリペイユーザーの囲い込みと、これにより蓄積されるデータにより、売上の拡大とコストの改善に貢献することにある。

（4）情報流のアンバンドリングとリバンドリング

盒馬は、専用アプリを用いて、オンラインとオフラインの融合を追求している。即ち、会員の統合、在庫の統合、価格の統合、販促の統合、決済の統合である。専用アプリをダウンロードして、アリババのアリペイやタオバオ ID でログインする。店舗内にはプライス

カードの代わりに電子値札が付けられており、オンラインとオフラインの価格を同時に調整できる。電子値札の QR コードをスマートフォンで読み込めば、商品の価格、特徴、動画レシピなどのより詳細な情報や、産地から店舗までの全輸送履歴が確認できる。そして、盒馬の商品を使用した感想や使用シーンなどをアプリに投稿でき、消費者間で情報共有することができる。

3. 盒馬にみる買物価値と小売ブランド

盒馬は、消費者の過去の利用履歴や個人情報などに基づくカスタマイズ化情報を専用アプリで提供することにより、購買にかかる時間や労力というコストをできるだけ減らしつつ、消費者のニーズに合う商品を選び、より良い功利的買物価値を提供する。同時に、実店舗には、全世界から届く海鮮品が泳でいる生簀が並んでおり、消費者にワクワク感を抱かせる。店内の調理カウンターに商品を持ち込み、好みの味付けでその場で調理することや、イートインコーナーでできたての海鮮料理を楽しむことは、消費者の快楽的買物価値を高める。さらに、使用感や評価をアプリで口コミをすることにより快適な購買体験を他人と共有でき、社会的買物価値を向上させる。

盒馬は、小売ブランドを構築するため、従来中国のスーパーでは力を入れてこなかった海鮮品の品揃えに力を入れている。独自の仕入れルートで他のスーパーでは購入できない商品を品揃えた上に、魅力的な価格設定で消費者の支持を得て、消費者の間に「盒馬鮮生は海鮮品揃え豊富」というブランド・イメージを作り上げている。さらに、盒馬が打ち出した 3 km 圏内を最短 30 分で配送するサービスは、中国の小売業界に衝撃を与え、消費者から強い支持を集めており、新たな小売ブランドを確立しつつある。

盒馬の仕組みを整理すると、主に 4 点がある。1 点目は、実店舗を体験の場所として位置づけられている点である。従来の小売業にとって店舗は核であり、接客と POS データの分析が店舗を支えている。しかしながら、盒馬は、実店舗からオンラインへの集客に重点を置く。2 点目は、「スーパー＋生鮮 EC＋倉庫＋イートイン」の特徴を持っている。3 点目に、購買プロセスをアプリで一元的に管理している。盒馬は、専用アプリを用いて、オンラインとオンラインの融合を果たしている。そして 4 点目は、流通機能の再構築により消費者の利便性を高めている。「盒馬アプリ」を利用すればスピーディーな配送サービスが可能となり実店舗に行かずに盒馬を利用することができるのである。

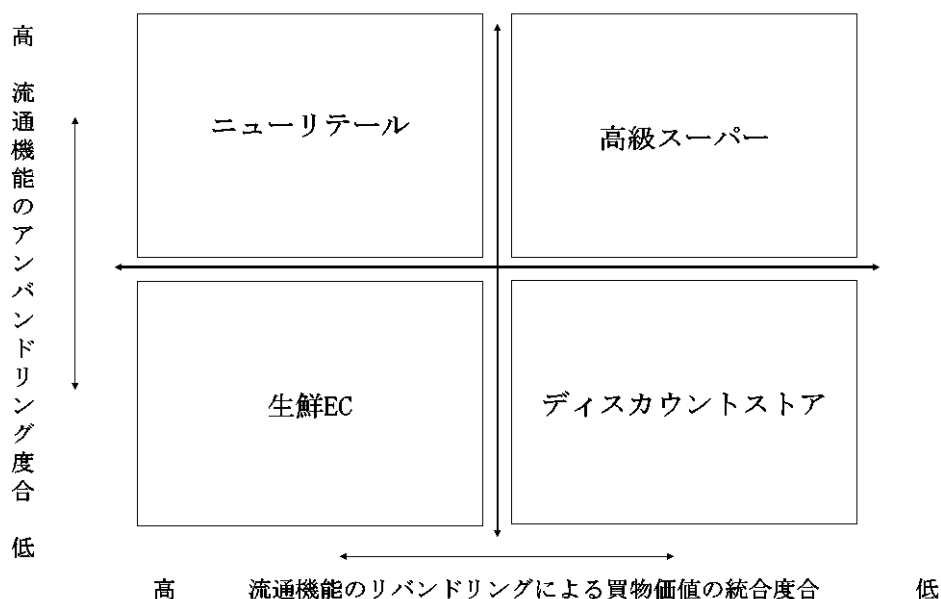
Ⅲ. 考察

第Ⅱ節では、盒馬の流通機能のアンバンドリングとリバンドリングの仕組みについて記述した。本節では、こうした仕組みを踏まえながら、買物価値と小売ブランドの視点から考察してみる。

1. 流通アンバンドリングと買物価値

盒馬は、モバイルアプリを通じて、店員による説明、レジ、袋詰め、集荷、配送などの従来の店舗流通機能を消費者ニーズに基づいて分解し、再び消費者ニーズに合わせて「流通に期待される機能」の再構築を図っている。本研究では、ニューリテール戦略を取る盒馬と従来の小売業態との違いを「流通機能のアンバンドリング度合」と「流通機能のリバンドリングによる買物価値の統合度合」を軸にした4象限のマトリクスをもとにみていく。

図1 小売業態における類型化



(出所)筆者作成。

図1は、小売業態の類型化を流通機能のアンバンドリング度合と流通機能のリバンドリングによる買物価値の統合度合に説明する分析フレームワークである。縦軸の流通機能のアンバンドリング度合とは、消費者のニーズに基づき従来の流通機能の束を解体する程度である。一方、横軸の流通機能のリバンドリングによる買物価値の統合度合とは、流通機能のリバンドリングによって、功利的・快楽的・社会的買物価値のそれぞれが結集される統合度である。ニューリテールは生鮮ECに比べると、実店舗を保有しているため、消費者にとって魅力的な来店体験ができるし、なおかつ店員とのインタラクションができることにより、流通機能アンバンドリングの高さの違いは明確である。一方、ニューリテールは高級スーパーに比べると、実店舗とネットを融合させるという点で流通機能のリバンドリングにより、買物価値の統合度合を高めていることが理解できる。

図1において、まず、この左上象限には、ニューリテールが位置する。企業は、購買行動の各段階において、流通機能の選択肢を増やすことができ、消費者が購買目的や状況に

応じて購買行動を選ぶことが可能となる（矢作, 2018）。ニューリテールは、消費者ニーズに基づいて流通機能の束を徹底的に解体して、徹底的に再構築を行いながら、買物価値を統合的に高める努力をしており、「盒馬」はその代表例である。次に、この左下の象限には、生鮮 EC が位置する。消費者はどこからでもアクセスできるが、食品宅配サービスによっては、配送料（手数料）・入会費・年会費が必要であり、しかも配送までにタイムラグがある。一例として従来から宅配事業に注力してきた「オイシックス」があげられる。また、右上象限においては、消費者の高品質への対応を重視する企業が位置する。高級スーパーの「クイーンズ伊勢丹」がその例としてあげられる。最後に、右下象限の場合は、購入した商品代金を現金で支払い、自分で持ち帰り、安さを強調する企業が位置する。ディスカウントストアの「玉出」はその典型例である。

ここで取り上げた盒馬の事例からは、オンラインとオフラインのさらなる融合が行われ、実店舗とアプリを取り込む独自のポジショニングが形成されつつあることがわかった。ニューリテールに依拠するイトイン、物流、マーチャンダイジング、ビッグデータに関わる技術はいずれも斬新なものではない。しかしながら、こうした「技術の組み合わせ」と「モバイルアプリの利用」により、オンラインとオフラインの垣根を超えた「流通機能のリバンドリング（束の再構築）」を図ることによって、新しいビジネスモデルを構築した点にイノベーションを見出すことができる。

2. 消費者ニーズ、買物価値と流通機能の関係

ここでは、流通アンバンドリングに視点を変えて、消費者ニーズと、買物価値と流通機能の関係を考察する。矢作（2019）は、昔から商業の社会的役割には経済的・時間的効率性と人間的・文化的有効性があり、デジタル社会においても店舗の有用性は厳然と存在していることを指摘している。また、矢作（2018）は、デジタル社会では、消費者は企業による流通・マーケティング活動を受動的に受けとるのではなく、能動的な主体として購買プロセスと購買後の消費・使用・評価の段階において積極的に企業とブランドのあり方に影響を与えていると主張している。まず、専用アプリは、功利的価値が求められ、消費者の即時性・利便性・個別性のニーズを提供する役割を果たす。そして、快楽的価値については、盒馬の実店舗では買物が楽しくなる雰囲気、売り場の展示、料理カウンターでの店員と消費者との接点構築、イトインスペースの併設などを通じて、スーパー内での消費者体験を高めて消費者の満足度を向上させている。さらに、社会的価値については、盒馬は食文化の伝承を狙い、積極的に地域のイベントに協力している。例えば、中国の伝統行事に合わせてご当地メニューを提供している。盒馬のイトインスペースが友人との食事会や家族利用など様々なシーンで活用されることや、商品を購入した後に、評価や SNS でシェアすることにより社会化価値を高めることにもつながっている。

3. 小売ブランド

矢作（2019）は、デジタル化により、業種業態概念が後退し、個別企業・商品のブランド力が鍵となると主張している。盒馬は、店舗から半径 3km までは 30 分以内に届けるとしており、アプリによる消費者からの注文を受けて商品は自動的に最寄りの店舗から出荷される。各店舗で配送エリアが重ならないように広範囲に対応できる立地が選定されている。そして、盒馬店内には、市場の臨場感が演出され、専用アプリを通じて、価格や販促などを統合し、オンラインとオフラインを融合させている。グローサリント型の店づくりをしている。消費者は食品を選び、カウンターで自らの好みの調理を注文できる。その調理代は数百円程度である。盒馬が特に力を入れているのは商品鮮度で、特にユーザーから支持されている。売り場には、野菜、果物、日配、冷凍食品が充実しており、葉物野菜は当日の「売り切り」を行い、徹底的な新鮮さというイメージを消費者にアピールしている。盒馬は、消費者ニーズを満たすために、さらに品揃え、価格帯、利便性を追求している。そのために、盒馬は、テクノロジーを駆使し、より戦略的に消費者の好みやライフスタイルを分析し、商品やサービスを見直して提供することによって、盒馬ブランドを進化させている。

中国のニューリテールの事例として盒馬の事例を取り上げ、商流・物流・資金流・情報流のニューリテール戦略の現地調査を行った結果、オンラインとオフラインの融合を目標として、それに沿った店舗施設、マーチャンダイジング、モバイルアプリ、サービスを組み合わせることで、従来の食品スーパーとは異なる価値を創造している点にイノベーティブなビジネスモデルを見出すことができる。盒馬は、このモデルを使って中国の大都市に進出し、成功を収めてきた。このモデルが地方都市に適応できるかどうかについては更に調査・検討する必要がある。

おわりに

以上、中国のニューリテールである盒馬の事例を通じて、商流・物流・資金流・情報流におけるイノベーションを考察し、流通機能のアンバンドリングの検証を試みてきた。

本研究のインプリケーションとしては、第一に、消費者視点から、流通機能のアンバンドリングに焦点を当て、買物価値と小売ブランドの視点から、流通機能のバンドリングとリバンドリングの比較を試みた点にある。企業は、消費者ニーズに合わせて、買物価値を提供し、流通機能をさらに細分化し再構築することによって、小売ブランドを構築しつつある。この点についてもさらに研究を深めていく必要がある。第二に、オンラインとオフラインを融合させる小売業の新たな方向性を考察した点にある。時代の変化とともに、既存の流通業者以外の参加者は業態の垣根を越え、消費者ニーズを満たそうとしている。このような革新的な流通機能を提供できるか否かが成功のポイントになる。今後は中国だけではなく、世界中の小売業についても研究対象とする必要があると思われる。

最後に、本研究の限界と課題について述べておきたい。まず、単一事例では限界があるということである。他のタイプの小売フォーマットの萌芽もある。また、実店舗の優位性を生かして、オンラインとの連携を強化し、便利で快適な買物環境を消費者に提供する小売企業もある。例えば、中国大手スーパー永輝超市の「超級物種」など、盒馬鮮生と極めて近い店舗コンセプトのニューリテールブランドなどもある。そして、無印良品もオンラインとオフライン融合の先駆者である。本研究では、それらのタイプを取り上げなかったが、それらの動きは無視できない。また、盒馬はまだ成長期にある企業であるから、市場の変化や消費者ニーズに合わせて企業戦略、イノベーションを調整する可能性があろう。さらに、本研究の知見を他の小売業態に適応させ、理論の拡張を試みることなどが今後の課題として残っている。

注

- 1) 中国国家统计局 2020 年 1 月 17 日発行「2019 年社会消費品零售総額増長 8%」は下記の URL を参照のこと。http://www.stats.gov.cn/tjsj/zxfb/202001/t20200117_1723391.html (2020 年 3 月 18 日参照)。
- 2) 盒馬の詳細は以下の URL を参照のこと。<https://www.freshhema.com>
また、盒馬の実績に関しては以下 URL にある 2018 年 9 月 7 日に行われたアリババグループの投資者向け説明会資料を参照のこと。
https://www.alibabagroup.com/en/ir/presentations/Investor_Day_2018_Hema.pdf (2020 年 3 月 18 日参照)。

参考文献

- 片野浩一(2014)、「小売業態フォーマットの漸進的イノベーションと持続的競争優位-クイーンズ伊勢丹の事例研究に基づいて」『流通研究』17(1), 75-96 頁。
- 木下明浩(2016)、「小売ブランド研究に関する一考察」『立命館経営学』54(4), 89-111 頁。
- 高橋広行(2018)、『消費者視点の小売イノベーション-オムニ・チャンネル時代の食品スーパー』有斐閣。
- 寺本高(2019)、『スーパーマーケットのブランド論』千倉書房。
- 中川広道・守口剛(2010)、「リテイル・マーチャンダイジングからリテイル・マーケティングへ-成城石井のサービス・デリバリー・システム」『マーケティングジャーナル』30(1), 95-109 頁。
- 中見真也(2015)、「付加価値創造型食品スーパーにおけるフォーマット革新プロセスの方向性-株式会社ヤオコー」『マーケティングジャーナル』34(4), 153-171 頁。
- 李夢軍・荊兵(2018)、「永輝超市：从“生鲜超市”向科技转型」『Tsinghua Business Review』9, 94-104 頁。
- 劉潤(2018)、『新零售：低價高効的数据赋能之路』中信出版集团股份有限公司。
- 矢作敏行(2016)、「商業界次世代 成長エンジン構築 オムニチャンネル時代に備える！流通機能 脱構築

を進めよ」『販売革新』4月号, 26-29頁。

矢作敏行 (2018)、「新・商業社会論(1)3つの分水嶺」『経営志林』24(2), 125-149頁。

矢作敏行(2019)、「『販売』の歴史に学び、未来を語る Q&A で学ぶ小売イノベーション」『販売革新』(9), 82-87頁。

Ailawadi, K. L. and K. L. Keller (2004), "Understanding Retail Branding: Conceptual Insights and Research Priorities," *Journal of Retailing*, 80(4), pp. 331-342.

Hur . E., K. Picot-Coupey, and C. L. Ackermann (2017), "Understanding Omni-Channel Shopping Value: A Mixed-Method Study. *Journal of Retailing and Consumer Services*, 39, pp. 314-330.

Str m, R., M. Vendel, and J. Bredican (2014), "Mobile Marketing: A literature Review on its Value for Consumers and Retailers. *Journal of Retailing and Consumer Services*, 21, pp. 1001-1012.

Verhoef, Peter C., P. K. Kannan, and J. J. Inman (2015), "From Multi-Channel Retailing to Omni-Channel Retailing: Introduction to the Special Issue on Multi-Channel Retailing. *Journal of Retailing*, 91(2), pp. 174-181.

A Study of Distribution Function Unbundling: A Case of Fresh Hema Supermarket in China

WANG, Huijuan

Abstract

With the spread of the Internet and smartphones over the last few years, consumers have become able to shop anytime, anywhere, in more ways. The distribution function unbundling has happened (bundle of distribution functions initially organized by stores has been disassembled). A new retail strategy is developing, starting with Alibaba in China. Innovation is occurring in commercial flow, logistics flow, financial flow, and information flow. Such trends are having a significant impact on the Chinese retail industry.

This paper aims to discuss how the new retail strategy is disassembling and restructuring the physical store's distribution function by a case study on an O2O food supermarket of Alibaba named "Hema Fresh." As a result, it has found that disassembling and restructuring the physical store's distribution function from the perspective of shopping value and retail brand. Finally, it has examined the retail industry's future direction that merges online and offline through a series of discussions.

Keywords : new retail strategy, distribution function unbundling, shopping value, retail brand

日本語専攻者のビリーフと自律的学習能力の関係について ーブレンディッド学習の実践を通してー

施 敏潔（浙江万里学院）

要旨

ブレンディッド学習の実践を3名の教師によって、3つのクラスで1学期行ったが、2回のアンケートでデータを集計し、SPSS19によって因子分析、t検定、相関分析と重回帰分析を行い、ビリーフが自律的学習能力に与える影響と諸因子が成績に及ぼす影響について検討した。新学習方式に参加度の高い学生は、初めからストラテジーを重視するビリーフを持っている上、実践の中で目標と計画を作って、学習を意識的に運営していく能力が高くなり、学習効果もよかった。学習の目標と計画を作る習慣や力がある学生が、ブレンディッド学習の実践に多く参加し、学習効果もよかったことも明らかになった。学習ストラテジーを重視するビリーフを有する学生は学習ストラテジーを適宜に調整する能力、学習目標と計画を設定する能力、教師に積極的に対応する能力及び講義外の日本語学習を開拓する能力という四つの能力も優れている。

キーワード： ブレンディッド学習、ビリーフ、自律的学習能力

I. 背景と研究目的

近年、学習を自己管理する自律的学習者をいかに育てるかが学校教育の重要な課題として意識されるようになった。学習行動を支える心的態度はビリーフと称されるが、教師には、学生のビリーフが自律的学習能力を促す方向に変容するための介助者となることが求められつつある。対面講義と講義外でのイーラーニングを組み合わせたブレンディッド学習は、学習者の自律的学習能力を開発するといわれ、さまざまな実践が試みられている。

先行研究として、岡崎博紀（2009）、河内山（2017）、徐錦芬、喻秀文（2012）、徐錦芬、李斑斑（2014）などが挙げられる。岡崎博紀（2009）は言語学習観について調査したが、ほかの学習者要因との関連については言及していない。英語教育における研究成果はかなりのあるが、例えば英語学習者を対象にしたものには河内山（2017）、徐錦芬・喻秀文（2012）、徐錦芬・李斑斑（2014）などがある。日本語教育における自律的学習能力については、実証研究が少なく、中国人の日本語学習ビリーフと自律的学習能力の関係はまだはっきりされていないのではないかとと思われる。本実践は、ブレンディッド学習の実践を通して、中

国語母語話者日本語専攻者のビリーフと自律的学習能力の変化傾向や学習効果との関係を示すことを目的とする。さらに、学習者のビリーフが自律的学習能力に与える影響についても考察する。

II. 研究対象

筆者が所属する大学で、日本語を専攻する2年生の85人を研究の対象とする。3クラスをそれぞれ担当する教師の3名が、協働でブレンディッド学習を実践した。

III. ブレンディッド学習の実践

2018年9月から2019年1月までの1学期いっばいで、『日本語精読（三）』という講義でブレンディッド学習を実践した。それは主に、学習方式の混合に重点を置いて講義実践をすることであった。具体的に言えば、講義前、講義中、講義後という三段階で講義内容を設計することである。

講義前：教師はこの課の一週間の予習課題をMoodle¹⁾にアップロードする。内容には学習目標、主な文法の説明の映像、本文と関連のある作文課題などがある。学生はそれに基づいて予習し、質問がある場合はMoodleにアップロードするか、ウィーチャットなどを通して質問する。

講義中：導入の部分は教師が簡単に説明するが、テキストの本文の理解や、会話文の把握は反転授業²⁾の形で、グループ単位で学習させる。単語や文型は教師が文脈を考えさせながら、学生同士で理解し、例文を作って、学習させる。その後、教師による補充とコメントを行う。

講義後：学生はグループ内作業の自己評価、他者評価シートに記入してアップロードし、課題の作文をアップロードする。教師はMoodleでグループごとに評価し、作文を評価する。添付資料には1週間の講義具体例があり、1日90分、週5回の講義時間である。

IV. 採取方法

日本語学習における自律的学習に関するビリーフを測定する尺度として、Horwitz (1987) の提案したBALLI (Belief About Language Learning Inventory) を基本にし、かつ斎藤ひろみ (1998) を参考にして、30項目からなる中国語版のBALLIを作成した。自律的学習能力を測定するために、徐錦芬 (2014) の調査紙³⁾を、中国人日本語学習者の状況に合わせて、修正した。回答は、〈1. 強く反対する〉、〈2. 反対する〉、〈3. どちらでもない〉、〈4. 賛成する〉、〈5. 強く賛成する〉の5段階尺度で答えてもらった。

アンケートは質問紙という伝統的な方式を取らないで、「問巻星」というネットソフトウェアを利用して取った。ブレンディッド学習の参加度を調べるには、Moodle というシステムを利用して測ることができるので、1学期のMoodle学習の総合利用時間を1人ずつ記録

しておいた。学習効果は中間試験と期末試験の2つによって測る。

事前アンケート：新学期の最初の2週間、日本語専攻の2年生の85人に対して、言語学習のビリーフと自律的学習能力について、事前アンケート調査を実施した。事後アンケート：講義終了時に、同じ内容の2度目のアンケートを実施した。

V. 結果分析と考察

データを集計し、SPSS19によってビリーフと自律的学習能力のそれぞれの因子分析を行い、潜在因子を抽出した。その抽出した因子及び日本語学習効果に対して、t検定、相関分析と重回帰分析を行い、因子間の関係と、ビリーフが自律的学習能力に与える影響と、諸因子が成績に及ぼす影響について検討した。

1. 因子分析

SPSS19を用いてビリーフの因子分析を行った。主因子法とプロマックス法による回転後、5因子が抽出された。因子を構成する項目間の信頼性を確認するため、クロンバック（Cronbach）のアルファ係数により内的整合性を求め、0.5以上の数値を示した2因子を分析の対象にした。自律的学習能力尺度をビリーフと同じ方法で因子分析を行い、7因子が抽出され、一項目の残余が出た。抽出された因子に高い負荷を示している項目の内容を参考にし、命名と解釈をした。具体的な内容は表1の通りである。

表1 因子分析の結果

番号	因子名	α 係数	項目数	
因子1	「学習ストラテジー重視」	0.583	15項目	ビリーフ
因子2	「教師への依存」	0.559	3項目	
因子1	「学習ストラテジーの有効使用」	0.871	7項目	自律的学習 能力
因子2	「学習ストラテジーの適宜調整」	0.902	5項目	
因子3	「学習目標と計画の設定」	0.875	8項目	
因子4	「教師に積極的な対応」	0.769	3項目	
因子5	「講義外の日本語学習開拓」	0.730	4項目	
因子6	「間違い訂正」	0.768	2項目	
因子7	「学習成果の確認と運用」	0.750	2項目	

2. t検定

表1の9因子にそれぞれ事前と事後の平均値を計算すると、18の数値が算出できる。それらをビリーフ（前）因子とビリーフ（後）因子及び能力（前）因子、能力（後）因子と略称することにする。それぞれの平均値と中間試験、期末試験の成績やMoodle学習の総合

利用時間の平均値を整理した。因子の 18 個の平均値をみると、ビリーフ（後）因子 1「学習ストラテジー重視」が 3.9584 に至り、もっとも高い因子になったので、学習ストラテジーはすでに学生に熟知されているとみることができる。

平均値を分割点として、中間成績高位群と低位群、期末成績高位群と低位群、Moodle 利用時間高位群と低位群に分けることができる。日本語学習の効果やブレンディッド学習の参加度の高低によって、ビリーフと自律的学習能力の差異を明瞭化するため、諸因子の t 検定を行う。

(1) 成績高位群と低位群

表 2 成績高位群と低位群による t 検定有意差項目

	中間成績高位群と低			Sig. (両側)
	位群	N	平均値	
能力（後）因子 4	1	36	4.0741	.007
「教師に積極的な対応」	2	49	3.7551	.005
能力（後）因子 6	1	36	3.7083	.038
「間違い訂正」	2	49	3.3878	.037
ビリーフ（後）因子 1	1	36	4.0963	.025
「学習ストラテジー重視」	2	49	3.8367	.017

仮説として期末成績の高位群と低位群による t 検定に有意差項目が出ることを期待していたが、それが実現できなかったため、中間成績を日本語学習効果として、その高低によるビリーフと自律的学習能力の区別を表 2 にまとめた。まず、有意差項目は 3 つとも事後アンケートの能力因子とビリーフ因子なので、中間成績の良い学生はブレンディッド学習が 1 学期終わったところに「教師に積極的な対応」、「間違い訂正」という 2 つの自律的学習能力と「学習ストラテジー重視」というビリーフが他の学生より優れるようになったことが言えるだろう。つまり、講義が終了になる時、それらの学生たちは教師の教育理念を理解し、自身の学習法に沿って学ぶ姿が目立つようになった。次に、自分の間違いについて意識的にその原因を探し、積極的に訂正する能力が高くなった。また言い忘れてはいけないことは、学習ストラテジーを重視するビリーフは全員に高いことはすでに前文に触れたが、中間成績の高い学生の重視程度がより一層高いことは事実である。期末成績の高低による有意差項目が出なかったことについて考察すると、学生によって、中間試験まででも Moodle が使いこなせていないため、成績が高い学生と有意差項目が出ただけという偶然な結果であると考えられる。したがって、Moodle の使用に不慣れな学生にとって、むしろブレンディッド学習が有効どころか、悪い影響をもたらしたと言え、Moodle を使ったブレ

ンディッド学習についてより指導する必要があると考えられる。

(2) Moodle 利用時間高位群と低位群

表 3 Moodle 利用時間高位群と低位群による T 検定有意差項目

	Moodle 利用時間高位群 と低位群			
		N	均值	Sig. (双側)
ビリーフ (後) 因子 1	1	37	4.0973	.021
「学習ストラテジー重視」	2	48	3.8306	.014

ブレンディッド学習を実践する際には、Moodle 利用は欠かせないこととなっているので、学生の参加度は Moodle 利用時間と結びついている。表 3 によると、Moodle を多用する学生の方が事後アンケートで「学習ストラテジー重視」というビリーフが明らかに強いということがわかる。事後アンケートにおける「学習ストラテジー重視」というビリーフは全体的に見ても平均値が高いということは前文にすでに表明したが、Moodle 利用時間の多少によって高低区別が明白になった。多種多様な学習ストラテジーを重視するというビリーフと日本語のブレンディッド学習に積極的に参加する行動と相互促進する効果があることも考えられる。

3. 相関分析

ビリーフと自律的学習能力の諸因子との間に有意な相関関係があるかどうかを測った結果、表 4 と 5 が得られた。

表 4 事前アンケートにおける諸因子相関関係 (有意)

	能力 (前) 因子 3	能力 (前) 因子 5
ビリーフ (前) 因子 1	.243*	.285**
ビリーフ (前) 因子 4	.214*	.250*

**, $p < 0.01$, * $p < 0.05$

表 5 事後アンケートにおける諸因子相関関係 (有意)

	能力 (後) 因子 2	能力 (後) 因子 3	能力 (後) 因子 4	能力 (後) 因子 5	能力 (後) 因子 6	能力 (後) 因子 7
ビリーフ (後) 因子 1	.439**	.570**	.566**	.425**	.238*	.279**

**, $p < 0.01$, * $p < 0.05$

2 つの表をあわせてみると、有意な正の相関関係が増えたことは明らかである。ビリーフ因子 1、つまり、ストラテジー重視という理念が自律的学習能力を一層促していることは明白であろう。事前アンケートでは、ストラテジー重視というビリーフと、学習の目標と計画を設定したり、講義外にも日本語学習を多方面に開拓したりする自律的学習能力との有意相関が目立っていた。事後アンケートになると、前の 2 能力は相変わらず有意な相関関係を有しているだけでなく、学習ストラテジーを適宜に調整したり、教師の要求や教育理念に積極的に対応したり、間違ったところを見逃さずに整理したり、学んだ日本語を運用したりする能力もストラテジー重視というビリーフと緊密に相関している。ビリーフ因子 4「教師への依存」と自律的学習能力諸因子の相関関係は有から無に転換することを本実践によって分かった。ブレンディッド学習を始めたばかりの時は、教師が方法説明や学習要領などを指示する回数が多かったためか、学生が無意識のうちに教師への依頼が強いほうであったが、実践が徐々に軌道に乗り、学生も慣れるようになるにつれ、教師の指示なしでも自発的にブレンディッド学習をするようになった。それは真の自律的学習ができるようになることを意味しているのではないか。

上の表 4 にも表 5 にも有意な相関関係ではない能力（後）因子 1「学習ストラテジーの有効使用」との間に、教師の指導が欠かせないということも本実践から示唆されている。能力（後）因子 1 の「有効使用」がなかったからこそ、能力（後）因子 2 の「適宜調整」が頻繁に行われるのではないかと考えられる。自律的学習能力のアンケートに聴解、作文、会話、翻訳など多方面からのストラテジーが設置されているから、各科目担当の教師から指導されたほうが有効だろう。

次に、ブレンディッド学習実践の参加度と学習効果の間の相関係数も求めた。

表 6 相関分析の有意相関項目

	中間成績	期末成績	Moodle 利用時間
中間成績	1	.666**	.282**
期末成績	.666**	1	.353**
Moodle 利用時間	.282**	.353**	1

**、 $p < 0.01$ 、*、 $p < 0.05$

表 6 によると、中間成績と期末成績の間には高い有意相関関係があり、学習効果の一貫性があることを示している。Moodle 利用時間は 2 つの成績と正の相関関係を持つことは、ブレンディッド学習に参加することで、成績が上がったことが証明された。

本実践を通して、学生のビリーフと自律的学習能力の間に因果関係があるようになったかどうかを重回帰分析によって考察した。表 7 がその結果である。

表 7 事後自律的学習能力とビリーフ因子の重回帰分析結果

	ビリーフ（後）因子 1 「学習ストラテジー重視」	
	β	
能力（後）因子 2「学習ストラテジーの適宜調整」	0.375*	
能力（後）因子 3「学習目標と計画の設定」	0.563**	
能力（後）因子 4「教師に積極的な対応」	0.655**	
能力（後）因子 5「講義外の日本語学習開拓」	0.523**	

*, $p < 0.05$ **、 $p < 0.01$, β : 標準偏回帰係数

学習ストラテジーを重視するビリーフは確実に事後アンケートにおける4つの能力を促した。それは学習ストラテジーを適宜に調整する能力、学習目標と計画を設定する能力、教師に積極的に対応する能力、及び講義外の日本語学習を開拓する能力である。表5に学習ストラテジーを重視するビリーフと有意な相関関係を持つ6能力のうち、因子6と7は相関係数が十分に強くないので、排除された。今後の教授法設計では、間違いに対する反省機会や、学習成果が運用できる場をより多く設ける必要がある。

相関関係に因果関係が存在するかどうかを確かめるために、重回帰分析を行ったが、結果は表8の通りである。

表 8 諸因子、Moodle 利用時間と二回の成績の重回帰分析結果

	Moodle 利用時 間	能力（後）因子 6 「間違い訂正」	能力（後）因子 3 「学習目標と計画の 設定」
	β	β	β
期末成績	.046**		
中間成績	.050*	4.672*	
Moodle 利用時間			34.765*

*, $p < 0.05$ **, $p < 0.01$, β : 標準偏回帰係数

表8からみると、Moodleを多量に利用してブレンディッド学習に投入したことが中間成績にも期末成績にも高いプラス効果があった。また、中間成績の優劣は学習における間違い訂正能力（事後アンケート）に強く影響された。第三に、どの学生がブレンディッド学習に多く参加していたかという、それはきちんと学習の目標と計画を作る人たちであった。第四に、ビリーフや自律的学習能力の諸因子はいずれも期末成績と直接に因果関係を持っていないが、事後アンケートにおける学習目標と計画を設定する能力がMoodle利用時

間を通して、中間成績や期末成績を促しているといえる。

VI. まとめと今後の課題

ブレンディッド学習の実践を3名の教師によって、3つのクラスで1学期行ったが、新学習方式に参加度の高い学生は、初めからストラテジーを重視するビリーフを持っている上、実践の中で目標と計画を作って、学習を意識的に運営していく能力が高くなり、学習効果もよかった。間違いを自力で訂正する能力の有無は中間成績に直接作用した。学習の目標と計画を作る習慣や力がある学生が、ブレンディッド学習の実践に多く参加し、学習効果もよかったことも明らかになった。そして、ブレンディッド学習の効果があることで、事後アンケートの因子間に図1のような連続因果関係が存在していることも分かった。

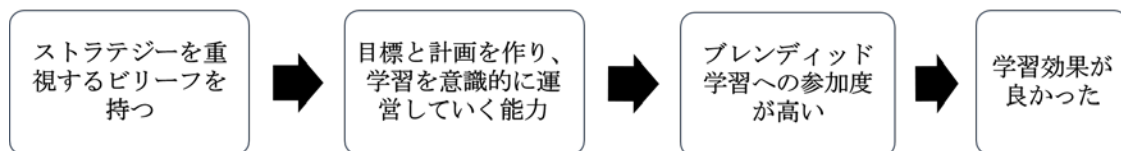


図1 連続因果関係

ビリーフが自律的学習能力に与える影響も解明できた。学習ストラテジーを重視するビリーフを有する学生は学習ストラテジーを適宜に調整する能力、学習目標と計画を設定する能力、教師に積極的に対応する能力及び講義外の日本語学習を開拓する能力という4つの能力も優れている。今後教師の研究としては、Moodleを使ったブレンディッド学習についてより指導することや、科目間の連携を図り、各ストラテジーの訓練を行うことによってストラテジーの有効使用を目指す以外に、能動的に間違いの原因を見つける上で訂正する能力や、学習成果の確認と運用という3つの面において力を入れなければならない。

注

- 1) 自由に設計できる教学システムで、本学ではMoodleを導入してから5年以上経った。
- 2) グループ分けして、学生同士で勉強し、教師はグループを廻ってその進行を補助する。
- 3) 徐錦芬（2014）の調査紙は、英語自律的学習能力を測定するものである。

参考文献

- 岡崎博紀（2009）、「中国人日本語学習者の言語学習観の調査—中央民族大学外国語学院日本語専業の場合—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第24号、37-50頁。
- 河内山明子（2017）、「英語学習者における自律の研究—学習モデル構築に向けた動機づけ、情意、メタ認知、方略要因の測定および因子分析—」『明星大学研究紀要—教育学部』第7号、37-61頁。
- 徐錦芬・李斑斑（2014）、「学習者可控因素对大学生英語自主学习能力的影響」『現代外語』第5期、647-656

頁。

徐錦芬・喻秀文（2012）「基于學習者反思周記的大學英語自主學習影响因素研究」『外語教育』第3期、1-8頁。

添付資料1： 講義の流れ【第2課『日本人の配慮』（新經典日本語基礎教程 第三冊）を例として】

日 本 人 の 配 慮	講 義 段 階	教 学 内 容	第 2 課教学過程	
	講 義 前	予習	学習目標の明確化： 1. 日本人の文化を知り、日本について文化的に関心を持つ。 2. 日本人の配慮を知る。 3. 日本人の文化に対する興味を持つ。 4. カルチャーショックを述べることにより、自分の悩みを述べる能力を向上させる。 5. 「相手の言葉を否定し、なぐさめる」「申し出る」ための表現を完全に習得させる。 教師がアップロードしてあった文法の説明資料や、ビデオを前もって自学し、自己理解を形成していく。単語や会話文を朗読する。	
		練習	グループで討論： 1. 日本や日本人について、どんなイメージをもっていますか。 2. 日本人の習慣について知っていることを話し合しましょう。 3. 「郷に入れば、郷に従え」とはどんな意味か、調べてみましょう。	
		Moodle 交流	教師：本課のポイントを提示：日本語の肯定と否定の特別表現、カルチャーショック。学生：グループ内で協働学習：『カルチャーショック』という作文を完成、アップロードし、また、日本電車内という寸劇を準備する。	
	講 義 中	説 明	プロセス	時 間
			前テスト：前の課の会話文や正文の暗唱をチェック、ppt を見せながら、本課の新しい単語の予習効果を確認する。	10
			導入： 教師が 1. 「～を通して」2. 「～について」3. 「～ながら」4. 「ものです」 5. 「～をもって」6. 「～とか…とか」を簡単に説明する	45
			活動：場面設定してから、文を作ったり、質問応答したりする。	25
			まとめ：日本語の肯定と否定の特別表現。	10
		反 転 授	前テスト：翻訳式、応答式などを通して、文型を運用する。	15

日 本 人 の 配 慮	講 義 中	業 1	導入：ウォーミングアップ話題の討論から入り、本課のテーマに近づいてから、本文の理解に導く。グループずつ一段落を説明する。	45
			活動：本文の内容について翻訳や、質問応答などによって、全員の理解程度を図る。	20
			まとめ：カルチャーショックの特徴と典型例。	10
		反 転 授 業 2	前テスト：キーワードを挙げながらの本文まとめ。	15
			導入：会話文の理解。	45
			活動：会話文のロールプレイ。	20
		練 習 問 題	語彙や文法の練習。	50
			読解や作文の宿題。	40
		発 表	《カルチャーショック》という作文の共有、日本電車内という寸劇の発表。	50
			各グループの代表により自己評価と反省。	10
			教師により、作文と寸劇へのコメント。	10
			グループ間の相互評価：コメントと改善案。	20
	講 義 後	Moodle 交流	教師：Moodle を利用して前テストをする。	
			学生：Moodle を利用して作文と寸劇脚本を共有する。	
		宿 題	グループで、本課の類似語を整理、作文を完成と修正する。	
		Moodle 交流	学生が出した新しい疑問にたいして、教師の個別指導ができるし、作文改善稿と反省文をアップロードし、グループ間の相互評価を提出する。	
		自 律 的 学 習 能 力	1. 教師が行うクラス活動の目的、意味が分かる 2. 教師の教学目標と要求を自分に合う学習目的に転ずることができる 3. 学習過程で、自分の学習法を評価し、問題を探し出して解決法を考える 4. 自分の学習法が実情に合わなかったら、変更する 5. 新しく学習した知識を実践する 6. すでにある学習資源を利用する 7. 自分の言語ミスが分かったら、原因を見つけたうえで直す 8. 日本語学習法が自分に合うかどうかははっきりわかる 9. 学習が一段落終わったら、前に習った知識への理解をチェックして更新する 10. 学習を完成させると同時に、すでに立てた計画に合っているかどうかを確認する 11. クラスメートや友達と共同学習する 12. 講義以外に日本語を学び、使うチャンスを自主的に探す 13. 有効な学習法を選び、より良い日本語学習者になる	

添付資料2 ビリーフ各因子の項目と因子負荷

質問項目	因子負荷係数□				
因子 1（ $\alpha=0.583$ ） 学習ストラテジー重視					
6. 間違いから学ぶ人は、日本語が上達する。	0.701	-0.147	-0.3	0.021	0.147
8. 自分に合った学習方法を自分で見つけるべきだ。	0.625	-0.141	-0.262	-0.047	0.295
9. 日本語の間違いは、教師が直すべきだ。	0.612	-0.188	-0.239	0.191	0.077
11. 日本の文化や社会を理解しても、日本語の学習には役に立たない。	-0.767	0.149	0.01	-0.07	0.146
12. どのくらい上達したいかがはっきりしていれば、日本語の上達が速い。	0.768	-0.062	-0.163	0.06	-0.04
13. 教科書以外のものは、日本語の学習の役に立たない。	-0.719	0.239	0.081	0.092	-0.157
15. 自分の感情をコントロールできないと、学習はうまく行かない。	0.559	-0.163	0.104	0.334	-0.252
17. 学校以外のところでは、日本語の学習は難しい。	-0.517	0.155	-0.072	0.435	-0.207
18. 学習していることを意識することと、日本語の進歩とは関係がない。	-0.627	0.328	0.206	0.081	-0.019
21. 学習する意欲が高ければ、学校で勉強しなくても日本語ができるようになる。	0.623	0.031	0.186	-0.283	-0.1
22. 計画を立てて勉強しないと、日本語の上達は遅い。	0.44	-0.332	-0.308	0.367	-0.086
24. 自分の日本語の進歩について考えても日本語が上達するかどうかとは関係がない。	0.539	0.494	0.109	-0.056	0.08
26. 日本語を使う必要がない人は、日本語の上達が遅い。	0.597	0.3	-0.034	0.266	0.277
27. 学習がうまく行くかどうかについて、学習者は責任を持つべきだ。	0.485	-0.004	-0.069	0.007	0.201
28. 学習している時の気持ちと学習がうまく行くかどうかとは関係がある。	0.667	-0.064	-0.016	0.244	-0.13
因子 2（ $\alpha=0.049$ ）日本語が上達できない理由					
5. 努力しても、日本語が上手になるかどうかはわからない。	-0.057	0.716	0.029	0.127	0.052
10. 学習環境が悪ければ、日本語が上手にならない。	-0.182	0.522	0.323	0.278	-0.105
14. 積極的に話しても、日本語が上手になるとは限らない。	-0.325	0.611	-0.038	0.11	-0.116
25. 日本語を使う活動なら、どんな活動でも日本語の学習の役に立つ。	0.166	-0.623	-0.028	0.306	0.139
因子 3（ $\alpha=0.242$ ）日本語上達の起因					
2. 目的があるかないかと、日本語の上達の間には関係がない。	-0.268	0.128	0.661	-0.026	0.187

4. 自分の日本語の問題点を考えない人は、進歩しない。	0.479	0.152	-0.623	0.032	0.03
20. 間違いは自分ではわからないし、なかなか直せない。	0.2	0.111	0.42	0.372	-0.203
29. 日本にいれば、学校で勉強しなくても日本語ができるようになる。	0.178	-0.056	0.425	0.132	0.24
30. 間違いを直されると、直された人は自信をなくす。	-0.146	0.149	0.611	-0.007	0.082
因子4 ($\alpha=0.559$) 教師への依存					
16. 教師に教えてもらわないと、日本語は上達しない。	0.155	-0.028	0.118	0.755	-0.024
19. 教師の教え方が悪いと、日本語は上手にならない。	-0.387	0.173	0.212	0.567	0.225
23. 教師は学習しなければならないことを、全て教えるべきだ。	0.103	0.137	-0.364	0.496	0.219
因子5 ($\alpha=0.436$) 学習法探索					
1. 学習者は教師の言うとおりに勉強すればいい。	-0.09	0.016	0.114	0.026	0.517
3. いろいろな学習方法を試す人は、日本語が上手になる。	0.2	-0.009	0.025	-0.149	0.66
7. 日本語に接する時間が長ければ、自然に日本語が上手になる。	0.097	-0.282	0.101	0.3	0.621

添付資料3 自律的学習能力各因子の項目と因子負荷

質問項目	因子負荷係数							
因子 1 （α=0.871）学習ストラテジーの有効使用								
15. 意識的に有効な作文ストラテジーをとる。	. 818	. 629	. 414	. 274	. 453	. 216	. 538	-. 121
13. 意識的に有効なコミュニケーションストラテジーをとる。	. 785	. 448	. 419	. 357	. 280	. 075	. 408	-. 121
14. 意識的に有効な読解ストラテジーをとる。	. 772	. 601	. 456	. 414	. 362	. 104	. 438	-. 095
11. 日本語学習ストラテジーが分かる。	. 715	. 334	. 492	. 265	. 417	. 381	. 183	. 126
12. 意識的に有効な聴解ストラテジーをとる。	. 711	. 509	. 496	. 071	. 514	. 235	. 334	-. 260
10. 『日本語教育大綱』に基づいて自分の学習目標を立てる。	. 664	. 156	. 140	. 153	. 308	. 312	. 088	. 250
2. 教師の教学目標と要求を自分に合う学習目的に転ずることができる。	. 664	. 384	. 436	. 560	. 583	. 432	. 253	. 087
因子 2 （α=0.902）学習ストラテジーの適宜調整								
18. 学習過程で、実情に合わない読解ストラテジーだと分か ったら調整する。	. 457	. 898	. 519	. 220	. 397	. 303	. 260	. 130
17. 学習過程で、実情に合わない作文ストラテジーだと分 かったら調整する。	. 422	. 887	. 532	. 257	. 322	. 366	. 317	. 042

[illegible]

31. 学習を完成させると同時に、すでに立てた計画に合っているかどうかを確認する。	.398	.269	.424	.315	.512	.127	.768	-.119
26. 新しく学習した知識を実践する。	.503	.406	.388	.250	.350	.314	.761	.130

添付資料4 日本語学習に関するビリーフ調査項目

1. 学習者は教師の言うとおりに勉強すればいい。
2. 目的があるかないかと、日本語の上達の間には関係がない。
3. いろいろな学習方法を試す人は、日本語が上手になる。
4. 自分の日本語の問題点を考えない人は、進歩しない。
5. 努力しても、日本語が上手になるかどうかはわからない。
6. 間違いから学ぶ人は、日本語が上達する。
7. 日本語に接する時間が長ければ、自然に日本語が上手になる。
8. 自分に合った学習方法を自分で見つけるべきだ。
9. 日本語の間違いは、教師が直すべきだ。
10. 学習環境が悪ければ、日本語が上手にならない。
11. 日本の文化や社会を理解しても、日本語の学習には役に立たない。
12. どのくらい上達したいかがはっきりしていれば、日本語の上達が速い。
13. 教科書以外のものは、日本語の学習の役に立たない。
14. 積極的に話しても、日本語が上手になるとは限らない。
15. 自分の感情をコントロールできないと、学習はうまく行かない。
16. 教師に教えてもらわないと、日本語は上達しない。
17. 学校以外のところでは、日本語の学習は難しい。
18. 学習していることを意識することと、日本語の進歩とは関係がない。
19. 教師の教え方が悪いと、日本語は上手にならない。
20. 間違いは自分ではわからないし、なかなか直せない。
21. 学習する意欲が高ければ、学校で勉強しなくても日本語ができるようになる。
22. 計画を立てて勉強しないと、日本語の上達は遅い。
23. 教師は学習しなければならないことを、全て教えるべきだ。
24. 自分の日本語の進歩について考えても日本語が上達するかどうかとは関係がない。
25. 日本語を使う活動なら、どんな活動でも日本語の学習の役に立つ。
26. 日本語を使う必要がない人は、日本語の上達が遅い。
27. 学習がうまく行くかどうかについて、学習者は責任を持つべきだ。
28. 学習している時の気持ちと学習がうまく行くかどうかとは関係がある。
29. 日本にいれば、学校で勉強しなくても日本語ができるようになる。
30. 間違いを直されると、直された人は自信をなくす。

添付資料5 日本語自律的学習能力調査項目

1. 教師の教学目標と要求が分かる。
2. 教師の教学目標と要求を自分に合う学習目的に転ずることができる。
3. 教師の教学目的と要求を自分に合う学習目的に転じた上で頑張ることが重要だ。
4. 教師が行うクラス活動の目的、意味が分かる。
5. 教師の教授進度についていける。
6. 教師からの学習課題以外に自分なりの学習計画を立てる。
7. 自分の実情に合わせて学習目標を立てる。
8. 必要があれば、学習計画を調整する。
9. 日本語を学習する時間を計画的に考える。
10. 『日本語教育大綱』に基づいて自分の学習目標を立てる。
11. 日本語学習ストラテジーが分かる。
12. 意識的に有効な聴解ストラテジーをとる。
13. 意識的に有効なコミュニケーションストラテジーをとる。
14. 意識的に有効な読解ストラテジーをとる。
15. 意識的に有効な作文ストラテジーをとる。
16. 学習過程で、実情に合わないコミュニケーションストラテジーだと分かったら調整する。
17. 学習過程で、実情に合わない作文ストラテジーだと分かったら調整する。
18. 学習過程で、実情に合わない読解ストラテジーだと分かったら調整する。
19. 学習過程で、実情に合わない聴解ストラテジーだと分かったら調整する。
20. 学習過程で、自分の学習法を評価し、問題を探し出して解決法を考える。
21. 自分の学習法が実情に合わなかったら、変更する。
22. 日本語学習法が自分に合うかどうかははっきりわかる。
23. 講義以外に日本語を学び、使うチャンスを自主的に探す。
24. 日本語学習によくない感情を克服できる。
25. すでにある学習資源を利用する。
26. 新しく学習した知識を実践する。
27. クラスメートや友達と共同学習する。
28. 日本語を学習する時自分の言語ミスが分かる。
29. 自分の言語ミスが分かったら、原因を見つけたうえで直す。
30. 有効な学習法を選び、より良い日本語学習者になる。
31. 学習を完成させると同時に、すでに立てた計画に合っているかどうかを確認する。
32. 学習が一段落終わったら、前に習った知識への理解をチェックして更新する。

本論文は 2020 年浙江省教育规划課題“基于学习者感受的高校在线课程教学质量评价研究”

（编号 GH2020048）の成果の一部であるとともに，寧波市“一带一路”日本言語文化中心経費の助成によるものである。

A Study of Relationship between Learning Concepts and Self-regulated Learning Abilities of Japanese Majors in the Blended Learning Model

SHI, Minjie

Abstract

Students' learning behaviors are subject to their learning concepts and teachers assume responsibility for setting students' learning concepts right so that they can improve their self-regulated learning abilities. Based on the practice in blended learning, this paper examines changing tendencies of Japanese Majors' learning concepts and self-regulated learning abilities in China as well as their relationship with learning results and explores the impact of learning concepts on self-regulated learning abilities. It finds that the more students value learning strategies in their concepts, the higher their four abilities, that is, the ability to adjust their learning strategies, the ability to develop their learning objectives and plans, the ability to actively respond to their teachers and the ability to expand their extracurricular Japanese learning, and the better their learning results. In the future, teachers should carry out further studies in driving students to effectively utilize learning strategies, correct their mistakes and have proper perception of their achievements in learning and apply them appropriately.

Keywords : blended learning model, learning concepts, self-regulated learning abilities

日中文化交流における洛陽

黄 婕（河南科技大学）

要旨

中国の古都洛陽は日本においても特別な存在である。洛陽は日本の社会文化のいろんなところに印を残しているだけではなく、長い間に様々な文学作品にも取り上げられている。近代以降の日本学界は洛陽に焦点を当て、歴史、文化、考古などの領域で数多くの研究成果を挙げることができた。「洛陽学」という概念は2010年に氣賀澤保規をはじめとする学者によって提起され、関連研究も盛んになり、ある意味で一つの考え深い文化現象になった。この現象を分析するために、日中文化交流における洛陽の実態を調べた。考察の結果、古代日本史に関わる節目の動きは、ほとんど何らかの形で洛陽と関わり、日本社会の洛陽に対する注目はこの町の日中交渉史における原点的な地位に帰することができる。洛陽は大陸文明が日本列島に伝わるプロセスにおいて格別な役割を果たし、今日に至るまで日本社会に長い影響を与えた。日本の歴史、特に古代史を研究するのに、洛陽は重要な手掛かりであり、この場所を除いては語れない問題は少なくない。一方、一般庶民生活においても、洛陽はいろんな面で日本との繋りを持ち、漢詩や小説など文学作品を通して悠久で神秘的なイメージを築き上げられた。要するに、洛陽は昔から日中文化交流の鍵の一つとして、全面的に研究される必要がある。

キーワード： 洛陽、日中交流、日本古代史、洛阳学、文化

はじめに

洛陽は中華文明の最も核心的な地域に位置し、「最も古い中国」と言われるほど中国の代表的な古都である。紀元前2000年から、宋までの3000年を超える長い期間に、歴史の枢要かそれに準ずる地位を占めた。『資治通鑑』の著者司馬光は「古今の興廃を問うのに、唯洛陽城をご覧になり」という。しかし、いままで日中交流と言えば遣唐使、遣唐使と言えば常に長安と結びつけて理解されているので、洛陽に関する研究は長安の後塵を拝してきたように思われる。幸い、近年洛陽に焦点を当てて中国史を見直す動きや洛陽の歴史の持つ独自性を喚起する試みが見られてきた。中国国内だけではなく、日本、韓国など東アジア国家における洛陽への関心が現われ、「洛陽学」としてこの都城を多角的に分析することで東アジアの歴史の復元をめざす研究も盛んに行われるようになった。本稿は「洛陽学」

を提起する背景調査として、二千年もわたる日中文化交流という視点から、日中交渉史や日本の社会生活、学問研究における「洛陽像」を考察してみた。

I. 古代日中交渉史における洛陽

「歴史とは万国古今の有様を詮索するもの」という福沢諭吉の主張の通り、文明の発展や日本と中国の国際関係などに関する問題を考える際、日中交渉史を遡る必要がある。今日は地方小都市に過ぎない洛陽は、嘗て中国王朝史の4分の3という長い期間に中心的な位置を占めたことがある。中国史書の記述に洛陽に関する史料や記録が豊であるため、そこから浮かぶ日本列島の姿は文字記録の少ない古代日本のことを知るための大変貴重な手掛かりになる。歴史の重なりを通して、洛陽は日中交流を理解する欠かせないキーワードであることが言えよう。

1. 漢の時代

日本と洛陽の関わりは日中交流の歴史と同じぐらいに長く、紀元始めに遡ることができる。日本列島の住民について記された最古の文献資料は、中国の歴史書『漢書』の「地理誌」にある。『漢書』は後漢時代の洛陽で完成したものであり、作者の班固は史書を書きながら漢代文学の代表作と言われる「兩都賦」も完成し、当時の都洛陽を熱く謳った。

後漢時代、日本列島からの初めての遣使が訪れ、日中の間に国レベルの接触が初めて実現された。このような最も早い「上洛」とも言える日本からの遣使活動を通して、日本列島の原始国家が中華文明の冊封体制とよばれる秩序に入ることができた。

東夷倭奴国遣使奉献。——『後漢書』「光武帝紀」¹⁾

建武中元二年，倭奴国奉貢朝賀，使人自稱大夫，倭国之極南界也。光武賜以印綬。

——『後漢書』「東夷列傳」

即ち、日本で周知の金印は紀元57年、後漢の都洛陽で後漢の初代皇帝光武帝から授けられたものである。1784年博多湾の志賀島で発見された「漢委奴国王」という五つ文字が刻まれている金印を巡っていろいろな研究が行われていた。印の真偽についてまだ議論があるが、二千年近くも前に日本人は万里遥々の距離を乗り越え洛陽にたどり着いた事実は疑う余地がない。

また、「冬十月、倭国遣使奉献（『後漢書』「安帝紀」）、「安帝永初元年，倭国王帥昇等献生口百六十人，愿請見（『後漢書』「東夷列傳」）」の記録から、五十年後日本の使者が洛陽に再び赴いたことが分かる。当時の遣使がどのように異国の都を見ていたかを知ることにはできないが、洛陽は日本と中国の外交関係を結んだ最初の都市として、日中交流の原点になった。

2. 魏の時代

漢末、董卓が洛陽を焼き払ったことが三国分裂の導火線になり、中国大陆の混乱が続いた。同じ時期の日本列島も不安定な状況にあって、日中の往来はしばらく途絶えた。3世紀になると、女王卑弥呼が30あまりの国々をしたがえ、邪馬台国という統一国家をつくった。238年に倭女王の卑弥呼が魏の都洛陽に朝貢の使者を派遣し、日中間の交流が再開になった。

景初二年六月、倭女王遣大夫難昇米等詣郡、求詣于天朝献。

其年十二月、詔詔書報倭女王曰：“制詔親魏倭王卑彌呼：（中略）汝所在逾遠，乃遣使貢獻，是汝之忠孝，我甚哀汝。今以汝為親魏倭王，假金印紫綬。

——『魏志』「倭人伝」

卑弥呼は魏明帝から「親魏倭王」の称号が入った金印と銅鏡100枚などのものを受け、邪馬台国は魏王朝と親しい関係を持ちはじめた。建始元年、校尉を倭国へ派遣したことによって、邪馬台国と頻繁に往来しはじめた。日本列島の紛争にまで深く介入し、魏王朝と当時の国際秩序や日本列島の国構造に大きな影響を与えた。これは初めての中国から日本への遣使であると考えられ、日中交渉史においての意味が大きい。その後、永嘉の乱で洛陽の陥落とともに、日本と中国の交流が再び途絶えた。「日本遣使の中国訪問は一世紀半ばかりから三世紀後期の200年の間にわたり、最初から最後まで洛陽で行った。四世紀は遣使往来の意味においては、日本学界がよく言う日中交流の空白な一世紀だ²⁾」と指摘されている。

この時代の日中交渉の様子は『魏志倭人伝』によって比較的詳しく記され、日本上代史研究に不可欠のものになった。その内容をめぐって、日本の学界において様々な角度から研究が展開された。例えば洛陽の位置と遣使の経路記録をあわせて邪馬台国の位置確定をしようとする研究、3世紀の当時の洛陽音を想定して、音韻学の角度から「倭人伝」に見られた「卑弥呼」や諸地名の漢字表示を分析する研究などが盛んに展開された。後ほど、古墳から出土する銅鏡はさらに考古学者はもとより一般の人々の間でも論争を戦わせる。銅鏡の中の三角縁神獣鏡は魏鏡か否か、洛陽の正式交渉で下賜された「銅鏡百枚」、即ち「卑弥呼の鏡」かどうか、歴史学者や文化学者を巻きこんだ大論争になっている。発見された銅鏡の銘文にある「銅出徐州、師出洛陽」という文句で有名な銅鏡が複数に現れた。これもまた中国で造られた舶載鏡か日本列島で製作したものか、謎が残されている。2015年洛陽付近から出土した中国唯一の三角縁神獣鏡の報道は中日学者の論争を引き起こした。「倭人伝」に関するテーマの研究と論争が百年以上も続いた理由は、邪馬台国の位置や日本国家の起源まで含める重要な課題であるからと考えられる。この大きな課題の中に、洛陽は無論重要なキーワードとして多く研究に絡んでいる。

3. 隋の時代

魏晉以降、異民族の侵入によって権力が不安定で、王朝が割拠していた分裂時代を経て、隋が 589 年に再び中国を統一した。煬帝は直ちに政治拠点を長安から洛陽に移し、新たな洛陽城を造営した。

大業三年、其王多利思北孤遣使朝貢、使者曰：「聞海西菩薩天子重興佛法、故遣朝拜、兼沙門數十人來學佛法」。其国書曰「日出處天子致書日沒處天子無恙」云云。帝覽之不悅、謂鴻臚卿曰：「蠻夷書有無禮者、勿複以聞」。

——『隋書』「倭国伝」

『隋書』と『日本書紀』の記載は相違があるので、遣隋使の回数を巡って議論があるが、607 年に小野妹子は新しくできた東都洛陽で聖徳太子の国書を煬帝に渡したことは既に周知の話になった。遣使は倭の五王から南朝への朝貢以来だったが、遣隋使段階における倭国の自己主張は今までなかった強さだった。隋の皇帝と同じ「天子」の称号を使用し、「倭国王」の冊封を求めなかったことなど、当時の日本は隋に対等関係を図っていることが明らかだった。「古代日本は中国の冊封体制に入ることによって中国の思想や文物を取り入れつつ、中国の混乱に乗じて政治的独立を推し進め、最終的に天皇制に基づく律令制国家を完成した³⁾」と指摘される。

遣隋使の返礼として、隋の使者裴世清は 608 年に日本を訪れた。『日本書紀』によると、筑紫に上陸して都の飛鳥に到着まで、二ヶ月間もかかった記録がある。それは大都會の洛陽からの使者を「辺境にして立派な国だ」と感心させようと、首都インフラ整備を急いだからではないかと推測されている⁴⁾。遣隋使の派遣は当時の国際情勢のみならず、国内の仏教の隆盛や町づくりなど様々な面において大きな外交効果を発揮し、洛陽の影響を日本に持ってきた。

4. 唐の時代

隋の諸制度を受け継いだ唐は光輝を放った中国史上の全盛時代を迎えた。遣隋使の刺激で、この時期の日本は中国の先進文化を摂取する熱意が一層盛り上がり、ピークに達した。遣隋使の継続として、630 年から遣唐使の派遣を始めた。留学生・留学僧も往来して政治的にも文化的にもつながりが強くなった。この時代における交流の中心は都の長安だったが、洛陽は副都としても重要な役割を果たした。例えば日本という国号の成立事情も洛陽と大きく関わっていた。唐の張守節が著した『史記』の注釈書『史記正義』によると、則天武后は大宝 2 年（702）の遣唐使と洛陽で会見し、倭の国号を日本に改めさせた。また、鑑真を招いたことで名高い日本僧の栄叡と普照は洛陽の大福先寺で三年間も修業したことがある。鑑真の前に、まず洛陽大福先寺にいる僧人道璿及び婆羅門僧正菩提遷那が栄叡と普照に招請され、日本に渡った。752 年に東大寺大仏開眼会において、婆羅門僧正菩提遷那が大導師、道璿が願呪師として、日本で最初に行われた開眼供養を行った。

当時の遣使たちは長安と洛陽を遊学し、両都を通して中国の優れた制度や文化を貪欲に吸収した。遣唐使の双壁と言われる阿倍仲麻呂と吉備真備を例とすれば、二人とも洛陽と縁深い。『旧唐書』に阿倍仲麻呂の中国名の由来について「開元初、栗田復朝（中略）其副朝臣仲満慕華不肯去、易姓名曰朝衡」⁵⁾という明確な記録がある。詩人儲光羲は洛陽で日本人の朝衡のために詩文を書き、阿倍仲麻呂の東都洛陽での生活を高く評価していた。

萬国朝天中，東隅道最長。吾生美無度，高駕仕春坊。

出入蓬山裏，逍遙伊水傍。伯鸞游太学，中夜一相望。

——儲光羲「洛中貽朝校書衡，朝即日本人也」

留学生として唐に渡り、帰国後、日本の政権中枢で活躍した吉備真備が筆をとったとみられる墓誌が最近公開され、中日両国の学術界で大きな反響を呼んだ。縦横約 35 センチ、厚さ 9 センチの石に刻まれた鴻臚寺丞李訓の墓誌は洛陽で出土し、「日本国朝臣備書」と署名されているので、古代日本人の直筆による「日本国」の文字としては最古の記録とされる。この墓誌を切っ掛けで、当時の日本人遣使や留学生の生活や中国文化人との交流などの解明が期待できる。このように、洛陽という町は日本遣使のゆかりの地として、日中交流の実態を探るのに研究の余地がまだ沢山ある。

Ⅱ. 社会生活における洛陽

元、明、清以来、洛陽は都の栄光を失い、地方小都市になったにもかかわらず、日中の文化交流において影響を発揮し続けている。漢・魏・隋・唐時代の遣使たちが洛陽から大切に持ち帰った文化の種は日本人の生活で豊かに実っている。

1. 都城としての影響

日本は遣使を派遣して、大陸の最先端の文物を吸収しており、都城はその一つであった。694 年に飛鳥の北西の地に、日本古代史上未曾有の規模をもつ都市が出現した。壬申の乱に勝利した天武天皇が計画し、持統天皇の御世に完成した日本初の中国式都城である藤原京であった。藤原京は 5、6 世紀の中国の北魏の洛陽城を手本にして、人為的計画的に造られた日本最初の人工都市とされている。

その後、平城京（710 年）、長岡京（784 年）、平安京（794 年）と遷都を重ねたが、日本の古代国家の中枢に、都城と呼ばれる都市があり続けた。長安城だけではなく、隋唐洛陽城も日本の都城に大きな影響を与えた。「日本の宮室、都城の源流は中国から来て、意識的に唐代の都城長安城と洛陽城を模倣し、その中の平安京は最も有名⁶⁾」と指摘されるように、京都をはじめとする日本中世都市の成立に、洛陽との関わりが数多く存在している。

「洛京」という言葉が生まれて首都の代名詞となり、古く京都は「京洛」、「洛陽」などと呼ばれたのも、中国王朝の都であった洛陽からきた。「洛陽」は京都の唐名として使われ、その由来について一般的な説は、『帝王編年記』桓武天皇の「東京・左京・唐名洛陽」、「西

京・右京・唐名長安」の記載からという。洛陽、長安を左京、右京に分けて使ったとする説は今のところ鎌倉時代末期に洞院公賢（1291~1360）によって書かれた「拾芥抄」が最も古い⁷⁾。平安京の都市計画や基盤の整備は長安の真似をしたが、命名は洛陽に従うことが多かった。王仲殊の考察によると、左京と右京は合計 13 の坊に中国式の名が付けられ、そのうちの 8 個の坊名（銅駝、教業、宣風、淳風、安衆、陶化、豊財、毓財）は隋唐時代の洛陽の坊名を模倣した。また、城門の名前も意識的に洛陽城の城門名を使い、「応天門」は隋唐洛陽城のものであり、「上東門」、「上西門」などは漢魏洛陽城のものである⁸⁾。

そのほか、聖徳太子によって建立されたと伝えられる難波の四天王寺は、その伽藍配置、南門、中門、塔、金堂、講堂という一列の配置が、北魏の都である洛陽にある永寧時の伽藍配置に似ていると見られる⁹⁾。止利様式の仏像は明らかに竜門仏像の特徴を持ち、東大寺大仏も竜門石窟の盧舎那大仏が原型とされている。要するに、日本の都城は洛陽の様々な文化スタイルを取り込んで、やがて自分の独特な文化環境を構築し、「洛陽」なる名称も最終的に京都を「洛中」、「洛外」とする歴史概念につながり、京都に代表される日本文化の一部として定着するようになった。

2. 文学としての存在

(1) 漢詩において

日本の古典の世界でよく洛陽と邂逅することができる。特に日本漢詩においての洛陽が多い。約千三百年前から漢詩を作り始めた日本人は、漢詩を通して日本人の感情と生活を詠じ、数多くの素晴らしい名作が残されている。

火舶鉄車租税通、魯西以外一家同。

東京自此洛陽似、道里均平天地中。 ——大沼枕山「東京詞」

これは明治の漢詩人が書いた七言絶句の一部で、幕末から江戸が東京へと激変する様を詠んだもの。『史記』などの古文献に、周が洛陽を都として営造する目的は「ここは天下の真ん中であり、四方の国が貢ぐとき、道の距離は均等である」と明確に記載されている。この詩文から、先秦時代に洛陽の「天下の中」というイメージは日本まで影響したことが分かる。

九朝帝闕風霜古、幾処河山光景新。

請看当年金谷路、笙歌今日是何人。 ——石川忠久「禹域遊吟其の十四 洛陽」

今の時代は日本漢詩が衰微しつつある時代とは言え、漢詩を楽しむ教養の高い日本人が少なくない。上記の詩作は現代人石川氏が竜門や杜甫墓など洛陽周辺を訪れた時の作である。しかし、日本漢詩に多く現れた「洛陽」は、気を付けて区別して読まないといけない。例えば、下記の二首とも激動の幕末時代の作品であり、ここの洛陽は明らかに京都のことを言っている。

洛陽知己皆為鬼、南嶼俘囚独窃生。

生死何疑天付与、願留魂魄護皇城。 ——西郷南洲「獄中に感有り」

夢上洛陽謀故人、終衝巨奸氣逾振。

覺來浸汗恨無限、只聽隣鶏報早晨。 ——武市半平太「絶命詩」

しかし、日本漢詩における「洛陽」という言葉は時には中国の洛陽か、それとも日本の京都か、どちらを指すか明確に判断できない時もある。

洛陽一別指天涯、東望浮雲不見家。

合浦飛來千里葉、閩風歸去五更花。 ——新井白石「千里飛梅」

中国古典文化の中では、「合浦葉」と洛陽の組み合わせは、よく懷郷や洛陽を思う意味で使われ、一種の文学的な伝統として踏襲されている。この詩文における洛陽は中国の古都も現実世界にある京都も指すことができる。「洛陽城裏飛如雪，不送行人空送春（室直清（1658-1734）「楊花」）」や「春雁似吾吾似雁，洛陽城裏背花歸（直江兼統（1560-1620）「春雁」）」など日本では有名な歌も同じである。明らかに中国の名作「洛陽城裏花如雪，陸渾山中今始發（宋之問「寒食還陸渾別業」）」、「洛陽城東西，長作經時別。昔去雪如花，今來花似雪（範雲「別詩二首」）」、「洛陽愁絕，楊柳花飄雪（溫庭筠「清平樂」）」を真似る痕跡がある。洛陽という言葉は中国文学では「花」や「郷愁」などイメージが昔から既に定着している。この優雅な詩的なイメージは日本古典の世界にも継がれ、2016年に朝日新聞社がシルクロード紀行の特集を出版する際、洛陽に関する一冊のタイトルは『洛陽—郷愁の都』とされた。

(2) 現代文学

現代においても洛陽は文学作品から遠ざかることがない。日本人にとって、洛陽といえは、「唐王朝の洛陽の都。西門の下に杜子春という若者が一人佇んでいた」という文章が浮かぶほど馴染み深い。芥川龍之介の杜子春が洛陽で金銭を湯水のように使ったことに関する描写は、贅沢で繁華な大都市のイメージが印象に残される。

また、洛陽は『三国志』の舞台としてあまりにも有名なので、『三国志艶義貂蟬伝—洛陽炎上』（Eagle Publishing, 2005）など三国シリーズの作品にたびたび現れる。この町を背景或いは主な舞台とした作品も次々と発表された。例えば、『洛陽の姉妹』（安西篤子、講談社文庫、2002）、『則天武后』（氣賀澤保規、講談社学術文庫、2016）、『洛陽の怪僧』（佐々泉太郎、東洋出版、2017）などが挙げられる。

歴史小説以外に、洛陽に関する志怪小説やフィクション性のある作品が多い。唐の則天武后の時代を舞台に描く連作ミステリー『双子幻綺行 洛陽城推理譚』（森福都、祥伝社、2001）、『沙門空海唐の国にて鬼と宴す』（夢枕獏、徳間書店、2007）など人気作品がある。小説の舞台としての洛陽に注目していた橋英範は、この町の特徴について「大きな洛水が町を分断し、500メートルともいわれる大きな橋が架かっている隋唐洛陽城は、都市の中

心部に異界・境界を持つという、ほかの都市にない条件を備えていたことによって、隋唐洛陽城は非常に豊かな小説世界を作り出した¹⁰⁾と述べた。中国の学者もこのような日本文学作品における洛陽のイメージに対して、「日本の作家は歴史舞台における欲望と野心の衝突や愛と絶望の交じり合うシーンを表現するのは得意である。歴史の真実より、彼らは欲望や殺戮の裏側の人間性の暗黒面に注目し、物語の舞台としての闇の渦中にある洛陽の冷酷で奇妙な一面を描いた¹¹⁾」と指摘した。

おそらくこれらの文学作品を書いた作者は各時代の洛陽の復元図や実際中国の洛陽に行ったことがある人は限られている。彼らは史書と詩文に描かれた洛陽の一面を継承しながら想像を加えて洛陽を表現したに違いない。さらにこの想像力によって作り上げた「洛陽」を読者側に伝え、日本社会の洛陽に対する興味と想像を長く引き出しているだろう。

3. 庶民生活に

一般庶民の生活にも洛陽の印が見つけられる。明治34年（1901年）に発行された「中学唱歌」に初出の唱歌である「箱根八里」に、「箱根の山は天下の險、函谷関も物ならず」という冒頭の一句がある。「函谷関」の名を持つ関所は洛陽の西にあり、もともと靈宝に置かれていたが、漢代に東へ約150km離れた洛陽付近の新安に移転し、2016年世界文化遺産にも認定された。長安と洛陽の両京につながる道の要所として、昔から険しくて堅固で名高い。日本では人気があるようで、箱根の険しさを引き立てるだけではなく、祇園祭の山鉾としても毎年登場している。

日本三名園として有名な兼六園も洛陽と関連を持ち、その名前は北宋詩人李格非が書いた書物『洛陽名園記』に由来した。北宋時代において西京洛陽で築園ブームが起き、『洛陽名園記』は最も優れて魅力のある庭園として十九箇所を記録した。そして、庭園作りの精神や美意識について、下記のように指摘される。

洛人雲：園圃之勝不能相兼者六。務宏大者少幽邃；多水泉者兼眺望；人力勝者少蒼古。——李格非《洛陽名園記》

要するに、当時の洛陽人は庭園の美しさに関わる「宏大」と「幽邃」、「水泉」と「眺望（高い建物）」、「人力」と「蒼古」という六つの対照的な要素を引き上げて庭園の格調を論じ、一つの庭園は六要素をすべてに備え、様々な美を同時に堪能するのは難しいという。しかし、江戸時代に築造されたこの庭園の名づけは、意識的に洛陽庭園の限界に挑戦する意味をした。洛陽の名園は歴史の戦火に焼き払われたが、広大な兼六園内には築山、池、茶屋などが点在しており、それぞれの景観を楽しみながら廻遊する出来ることはその名に恥じない。

このように、知らないうちに洛陽の文化が日本社会に溶け込んで、「洛陽」という言葉が付いている商品や店は少なくないし、「洛陽牡丹吐新蕊（『碧巖録』）」と書いてある禅語の掛け軸や、「春雁似吾吾似雁、洛陽城里背花帰（直江兼統）」と書いてある屏風なども時々

に目にする。

Ⅲ. 日本における洛陽研究

1. 研究の略史

中華文明の核心地域ともいうべき洛陽は、中国史のみならず東アジアを理解する上で最も重要な研究対象の一つである。そのことを最初に明確に指摘したのは内藤湖南だった。内藤は 1894 年に「文化中心移動説」を提起し、「長安の前に洛ある」と主張し、「蓋し武力の強、冀州に在り、唐虞夏商、南面して天下を制するに当たり、食貨の利、豫州に在り、人文乃ち此間醞釀す、而して洛は二州文物の湊合する所の處なればなり¹¹⁾」という。このように洛陽を中国文明の起点に置き、文化は時代と風土によって形成されると同時に、時代と風土と交わって文化の中心も生み出し、歴史の推移とともに移動してゆくという文化中心移動説が内藤文化史観の代表的な考え方になった。

内藤の洛陽に関する位置づけは、戦後日本の洛陽研究につながり、今日なお洛陽に関する研究を展開する際、その本源的な文化的な地位を意識する研究者が少なくない。京都大学の岸俊男氏は「日本において洛陽から伝えられた文化が数多くあるが、研究や交流の不十分のせいかもしれないが、国内外の学界がこれについて十分認識できず、間違っってその根源を直接長安のところに結びつけてしまった¹²⁾」と主張したことがあり、洛陽研究の重要性を強調した。

その後、明治大学の氣賀澤保規氏は「洛陽を共通の軸として様々な形で議論できる学際的な取り組みを可能にする¹³⁾」とし、学問領域の様々な角度から洛陽を取り上げる意義を説いた。2010 年に東京（明治大学）で第一回洛陽学国際シンポジウムを開催し、『洛陽学国際シンポジウム報告論文集 東アジアにおける洛陽の位置』が刊行され、日本洛陽学の確立を意味した。それを契機として洛陽研究への関心が高まり、2017 年 9 月には中国洛陽市で河南省社会科学院と洛陽の大学等関係諸機関が主催する「洛陽学国際学術研討会」が開催され、2018 年の 3 月には京都（京都大学）で「第 2 回日本洛陽学国際シンポジウム 隋唐洛陽と東アジア」など学会が相次ぎ開かれた。

2. 成果及び現状

2007 年に洛陽の姉妹都市岡山市の岡山大学学術成果として、橘英範氏の「洛陽関係邦文文献目録稿」が発表された¹⁴⁾。作者によると、これは自らの文献収集の基礎とするために 2006 年までの洛陽に関する日本語文献を収集して作成したという。社会科学や自然科学分野のものからエッセイや旅行記の類まで収め、洛陽に関する単行本 66 部、論文 145 編が発表年順に配列される。日本における最初の洛陽研究の調査として、比較的に充実し、利用者にとって貴重な情報源になった。

そのような現状を踏まえ、2018 年洛陽市社会科学重大課題「近現代日本洛陽学」をきつ

かけとして、筆者は洛陽市哲学・社会科学重点研究課題の下に、2006 年以降に発表された日本語洛陽研究成果やその他の関係文献を全面的に収集した。課題の成果として、174 編（部）の成果名、作者、出处など情報が収集された「日本洛陽研究成果目録（2006-2018）」を作成し、日本における洛陽研究の近年の成果を一覧で提示することにした。歴史が長く、自発的に形成されたことが日本における洛陽研究の特徴として挙げられる。また、近年、研究テーマを洛陽に関する要素に絞ってアプローチし、長い時間をかけて深く追求していく日本人学者が増えている。その成果は豊かで、数多くの分野に幅広く及ぼしている。この目録において、研究成果以外に合計 17 編（部）が洛陽を述べる総合文化雑誌の記事、旅行記、歴史小説など日本人の洛陽認識を反映するものとして含まれるが、関連漫画、フィクション性の文学作品は含まれていない。

日本洛陽学の実態や全容がまだ対外的に十分知られていないと言わざるを得ない。この二つのリストを合わせれば近代以降百年余りの洛陽研究の成果を大体把握することができる。これによって、日本における洛陽研究は長い伝統と学問的蓄積を有することが分かり、日本洛陽学の全貌を明らかにする第一歩になるかもしれない。

おわりに

中華文明の核心的部分を生み出した洛陽は広く注目され、日本においても国民にとりわけ親しみを抱いている都市である。日本で「洛陽学」という言い方が正式に提出されたのは 2010 年だったが、洛陽に関する研究は百年以上行われている。本稿は日本の歴史、文学、社会生活の三つの面における洛陽を論じた。洛陽に関する歴史記録は古代日本の歴史と重なった部分が多く、古代日本を知る重要な手掛かりとなった。多くの文学作品に描かれ、悠久で神秘的な都というイメージをつけられた一方、庶民の生活に関わることも沢山ある。微力ながら洛陽研究に資する情報提供し、これを機に日中研究者が連携して国際視野の洛陽研究を構築することができれば幸いである。

注

- 1) 史書の原文引用は国学大師二十四史の電子資料を利用。最終チェックは 2020 年 6 月 1 日。
[Http://www.guoxuedashi.com/24shi/](http://www.guoxuedashi.com/24shi/)。
- 2) 王仲殊（2000）、「論洛陽在古代中日関係史上之重要地位」『考古』7、70-80 頁。
- 3) 川本芳昭（2012）、「遣隋使の国書」（氣賀澤保規編『遣隋使が見た風景』八木書店）、168-188 頁。
- 4) 岡本公樹（2012）、「遣隋使」（氣賀澤保規編『遣隋使が見た風景』八木書店）、426-438 頁。
- 5) 欧陽脩等（1975）、『新唐書』12 中華書局、
- 6) 西嶋定生（1983）、『奈良・平安の都と長安』小学館、178 頁。
- 7) 嶋本尚志（2003）、「京都唐名考」『博物館学年報』35、48-63 頁。

- 8) 同 2)。
- 9) 王建民 (2007)、『中日文化交流史』外語教学与研究出版社、26 頁。
- 10) 橘英範 (2010)、「小説の舞台としての隋唐洛陽城」『岡山大学文学部プロジェクト研究報告書』15、43-61 頁。
- 11) 内藤湖南 (1970)、「近世文学史論序論」『内藤湖南全集卷一』筑摩書房、21-22 頁。
- 12) 張亜武 (2008)、「韩昇はより多くの専門家や学者を洛陽学研究に引き付けるべきと指摘」『洛陽日報』2008 年 4 月 23 日の記事。
- 13) 氣賀澤保規 (2011)、「洛陽国際シンポジウムの趣旨説明」、氣賀澤保規『洛陽学国際シンポジウム報告論文集』汲古書院、2 頁。
- 14) 橘英範 (2007)、「洛陽関係邦文文献目録稿」『中国文史論叢』3、169-180 頁。

参考文献

田衛衛 (2020)、「“朝臣備”：「李訓墓誌」から見る遣唐使名前の書写問題」『文献』3、138-150 頁。

Luoyang in the cultural communication between China and Japan

HUANG, Jie

Abstract

Luoyang, the ancient capital of China, is a special presence in Japan. For a long time, Luoyang has not only left many traces in Japanese society and culture, but also been written into many literary works. Since modern times, Japanese academic circles have made great achievements in history, culture, archaeology and other fields with Luoyang as the focus. Since modern times, Japanese academic circles have made great achievements in history, culture, archaeology and other fields with Luoyang as the focus. In 2010, scholars represented by Kegasawa Yasunori put forward the concept of "Luoyang studies", and the research on Luoyang gradually flourished. In a sense, it becomes a cultural phenomenon worth thinking about. In order to analyze this phenomenon, this paper investigates the status of Luoyang in the communication between China and Japan. The survey concluded that Japan's interest in Luoyang can be attributed to the city's position as the starting point in the history of communication between China and Japan. The important turning point in the ancient history of Japan is almost all related to Luoyang. It played an important role in the spread of mainland civilization to the Japanese islands and still has a lasting influence on the Japanese society today. Luoyang is indispensable to the exploration of Japanese history, especially the ancient history. On the other hand, in the life of ordinary people, Luoyang is related to Japan in many aspects, and it has established the image of Luoyang as the ancient and mysterious capital

through poems and novels. Luoyang, as one of the keys to communication between China and Japan since ancient times, has the necessity of comprehensive research.

Keywords : Luoyang, Communication between China and Japan, ancient Japanese history, Luoyang studies, culture

学会役員

<顧問>

山泉進（明治大学・名誉教授）

李漢燮（高麗大学・名誉教授）

<会長・理事>

安達義弘（日韓言語文化交流センター・
副代表）

<副会長・理事>

李東哲（韓国新羅大学校・教授）

権寧俊（新潟県立大学・教授）

崔光准（新羅大学・教授）

海村惟一（福岡国際大学・名誉教授）

杉村泰（名古屋大学・教授）

金龍哲（神奈川県立保健福祉大学・教授）

鄭亨奎（日本大学・教授）

<常任理事>

李東軍（蘇州大学・教授）

岩野卓司（明治大学・教授）

崔肅京（富士大学・教授）

李慶国（追手門学院大学・教授）

<事務局長・理事>

安勇花（延辺大学・副教授）（事務局長）

金珽実（商丘師範学院・講師）（副事務局
長・学会誌関連担当）

<一般理事>

阿莉塔（浙江大学・副教授）

白曉光（西安外国語大学・副教授）

宮脇弘幸（大連外国語大学・客員教授）

金光林（新潟産業大学・教授）

李光赫（大連理工大学・副教授）

娜荷芽（内蒙古大学・副教授）

任星（厦門大学・副教授）

施暉（蘇州大学・教授）

矢野謙一（熊本学園大学・教授）

王宗傑（浙江越秀外国語大学・教授）

徐瑛（浙江越秀外国語学院・副教授）

植田晃次（大阪大学・教授）

朴銀姫（魯東大学・教授）

加藤三保子（豊橋技術科学大学・特任教
授）

中川良雄（京都外国語大学・教授）

堀江薫（新潟県立大学・教授）

飯嶋美知子（北海道情報大学・准教授）

李昌玟（韓国外国語大学校・教授）

学会動向

◆学会第二期新理事会出帆

本学会は2018年9月設立されましたが、会計年度を毎年の3月31日に決めたので、第一期は2020年3月31日に終了となりました。第二期は2020年4月1日よりスタートし、会長は第一期の安達義弘会長の再任と決まり、会長の指名で34名からなる理事会役員が決定されました（新しい理事会の構成員は学会誌第四号の「学会役員」をご参照）。

◆「第三回東アジア日本学研究国際シンポジウム」開催中止（延期）

今年の春、学会第一期理事会の議を経て10月25日、日本大学にて開催予定だった「第三回東アジア日本学研究国際シンポジウム」は、COVID-19のため開催が中止（延期）となりました。その代わりに、中国と日本にそれぞれ学会支部会を設立し、条件が整えば支部ごとにミニシンポジウムを開催することを検討中です。

◆学会誌第五号への投稿

今年10月25日開催を予定していた「第三回東アジア日本学研究国際シンポジウム」開催中止（延期）となったため、理事会の議を経て学会誌第五号への投稿は会員に限定することが決まりました。よって、非会員が投稿を希望する場合は、投稿前か投稿時に会員入会申請をし、2020年度分の所定の会費を納入しなければなりません。

東アジア日本学研究学会副会長

李東哲

会員消息

◆新入会員（2020年1月1日以降）

力丸美和（福岡女子大学）

王雲嬌（名古屋大学）

陳蒙（関西大学）

南明世（名古屋大学）

陳秀茵（東洋大学国際教育センター）

村山慣一（立命館大学）

林澤冰（遼寧大学）

李文哲（煙台大学）

◆会員所属・職位変更（2019年9月30日以降）

菅洋子（International Business Alliance 代表取締役兼CEO）

朴紅蓮（東京外国語大学国際日本研究センター、特任研究員）

山本幹子（秀明大学、准教授）

宋曉凱（局阜師範大学翻訳学院、副学部長）

市川章子（一橋大学大学院言語社会研究科韓国学研究センター、研究員）

◆博士学位取得（2019年1月以降）

橋本恵子（九州大学 芸術工学博士 2019年3月）

◆書籍出版（2019年1月以降）

李東輝 《高齢者生活意識と援助体系の中日比較研究》、新华出版社、2019年10月

朴紅蓮 『中国の育児期女性と「良き母」言説—都市部で働く「80後」の高学歴女性を中心に』、吉林大学出版社、2019年1月

宋曉凱 『中国農村発展の歩み』、農林統計出版、2019年3月

黃婕 『華夏之心：日中文化視野における洛陽』、社会科学文献出版社、2020年7月

東アジア日本学研究学会副会長

李東哲

東アジア日本学研究学会会則

<名称>

第1条 本会は、東アジア日本学研究学会(The Society of Japanese Studies in East Asia)と称する。

<目的>

第2条 本会は、東アジア地域における日本学の学際的研究をととして、また、それぞれの研究者が研究成果を発表し交換し合うことをととして、学問の進歩及び当該地域の平和的發展に寄与することを目的とする。

<事業>

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 東アジア地域における日本学を中心とした学際的研究・調査
2. 学会、研究会、講演会及びシンポジウムの開催
(学会における共通言語は、原則として日本語とする)
3. 機関誌及び図書等の刊行
4. 内外の学術団体、研究者との連絡及び学術上の交流
5. その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業

<会員>

第4条 本会の会員は、個人会員、賛助会員とする。

1. 個人会員は、東アジア地域の研究に関心を持ち、かつ本会の目的に賛同する個人
2. 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会の事業に協力する法人・団体または個人

第5条 本会には、名誉会員および顧問をおくことができる。名誉会員および顧問は、理事会が推薦し、会員総会の承認を受ける。

<入会・退会>

第6条 本会に入会を希望する者は、理事会に申請し、その承認を得るものとする。

ただし、大学院生は、指導教員の推薦を得ることとする。

第7条 本会を退会しようとする者は、退会を事務局に通告すれば退会することができる。
会費を2年間滞納した者は、理事会において承認のうえ、退会とみなす。

<会費>

第8条 会員の会費は、次のように定める。

一般会員	5,000 円
学 生	3,000 円
賛助会員	50,000（1口） 円

<役員>

第9条 本会に次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 若干名
3. 理事 30名以内（理事のうち若干名を常任理事とする）
4. 事務局長 1名
5. 会計監事 2名
6. その他理事会が必要と認めた役員

第10条 役員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

<役員の職務>

第11条 本会の役員の職務は次のとおりとする。

1. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
2. 副会長は、会長を補佐し、会長に不都合が生じた時はこれを代理する。
3. 理事は、理事会を組織し、会務を審議執行する。理事会の議事は、出席者の過半数により決定する。
4. 事務局長は、会長の指示に基づいて、事務を執り行う。
5. 会計監事は、会計を監査する。

<役員の選出>

第12条 役員の選出は次のとおりとする。

1. 会長は、会員総会において選出する。
2. 副会長・理事は会長が任命する。
3. 会計監事は、会員総会において選出する。
4. その他の役員は、理事会が委嘱する。

<学会誌編集委員会>

第13条 本会は、理事会のもとに学会誌編集委員会をおく。

1. 学会誌編集委員会は、学会誌の出版計画を立案し、これを理事会に提案する。
2. 委員は、個人会員の中から理事会が推薦し、会長が任命する。
3. 委員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

4. 学会誌編集委員会に委員長を置き、委員の中から互選する。
5. 委員長は、学会誌編集委員会の事務を掌理する。

<会員総会>

第14条 本会は、毎年1回会員総会を開催する。

第15条 会員総会では、次の事項を審議決定する。

1. 事業報告及び決算
2. 事業計画及び予算
3. 会長及び会計監事の選出
4. 会則の変更
5. その他の必要な事項

第16条 臨時会員総会は、理事会が必要と認めたとき、または会員の2分の1以上の要望があるときに開催する。

第17条 会員総会の議決は、出席会員の過半数をもって決する。

<会計>

第18条 本会の運営は、会費及びその他の収入で賄う。

1. 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、3月31日に終わる。
2. 本会の決算は、会計監事の監査を受けなければならない。

<雑則>

第19条 本会の所在地は、〒818-0125 福岡県太宰府市五条2丁目8-8-205とする。

<付則>

1. 本会の設立は、2018年9月1日とする。
2. 本会則は、2018年9月1日から実施する。
3. 本会の運営に必要な事項は理事会が定める。

『東アジア日本学研究』投稿要領

- 1) 『東アジア日本学研究』は、東アジアにおける日本学研究に関する論文・研究ノート・書評などにより構成される。
- 2) 1年に2号（春季号・秋季号）の刊行を原則とする。
 - ・春季号はシンポジウムの論文集とする。毎号シンポジウム終了後3週間以内を目安にその都度締め切りを設ける。
 - ・秋季号はシンポジウムの発表以外の内容も含む学術論文集とする。投稿期間は毎号3月1日から4月1日までとする。

（例：2020年度分の春季号は翌2021年春、秋季号は翌2021年秋に発行予定）
- 3) 『東アジア日本学研究』に投稿できるのは、東アジア日本学研究学会の会員および編集委員会が依頼した者とする。ただし春季号にはシンポジウムで発表した非会員にも投稿資格を認める。
- 4) 投稿者が会員の場合、投稿する当該年度までの会費を投稿前に全て納入しなければならない。
- 5) 投稿者が大学院に在籍中の場合は、指導教員による承諾書（100～300字程度。様式は任意）を提出しなければならない。ただし、編集委員会が投稿を依頼した者については、これを適用しない。
- 6) 投稿原稿は未発表のものでなければならない。投稿者は投稿原稿の不採用が決定される前に当該原稿を他の場所で公刊してはならない。
- 7) 本誌の春季号と秋季号は両方同時に投稿することができる。ただし、両者の内容は異なるものとする。また、春季号も秋季号も一回の投稿期間に投稿できるのは一篇のみとする。
- 8) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿の著作権は東アジア日本学研究学会に帰属する。
- 9) 原著者が『東アジア日本学研究』に掲載された文章の全部または大部にわたって複製利用しようとする場合には、事前に編集委員長に申請しなければならない。編集委員会は特段の不都合がない限りはこれを受理し、複製利用を許可する。
- 10) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿は、東アジア日本学研究学会のホームページにおいてPDF ファイルにて公開する。（学会ホームページの作成は検討中）
- 11) 投稿者は、東アジア日本学研究学会ホームページに掲載の「執筆要領」の内容を踏まえ、これに準拠した完成原稿と論文要旨（300～600字程度）を提出する。論文要旨は、日本文タイトル・英文タイトル・電話番号・メールアドレスとともに、下記の所定の様式で提出すること。
- 12) 完成原稿と論文要旨は、E-mail の添付ファイルとして送付する。ファイル形式は原則

として MS-Word とする。採用が決定された原稿の提出方法は編集委員会から再度通知する。

- 13) 投稿された原稿は、査読者による審査結果をもとに、編集委員会が採否を決定する。
- 14) 採用された場合、投稿者は英文要旨を提出する。英文要旨は、提出前に必ずネイティブ・チェックを受ける。
- 15) 執筆者は、別刷り（抜刷）の作成を依頼することが出来る。これに必要な費用は執筆者の自己負担とする。
- 16) 原稿の投稿先および問い合わせ先は次のとおりとする。

東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja20172@163.com

（2019年9月20日改定）

投 稿 票		
氏名		
所属・職位		
メールアドレス		
電話番号		
論文タイトル		
英文タイトル		
種類（該当を残す）	春季号 / 秋季号	論文・研究ノート・書評
分野（該当を残す）	1. 語学・言語教育 2. 文学 3. 文化 4. 歴史	
該当番号を記入	5. 哲学・思想 6. 経済 7. 政治 8. その他	
<論文要旨> （300～600字程度）		

『東アジア日本学研究』執筆要領

1) 利用言語

原稿は日本語を使用し、横書きで作成する。

2) 原稿枚数

原稿の枚数は40字×35行を1枚と換算して、春季号論文は5～7枚(注・図表・参考文献を含む)、秋季号論文は10～15枚(注・図表・参考文献を含む)とする。

3) 見出し番号の表記

本文内の各節章の見出しにつける番号はⅠ、Ⅱ、Ⅲ…とし、その下の款項には1.、2.、3. …を用いる。さらにその下の項には(1)、(2)、(3) …を用いる。最初に「はじめに」、最後に「おわりに」を置いてもよい(番号は付けない)。

4) 句読点の表記

句読点は全角の「、」「。」を用いる。

5) 括弧の表記

括弧は原則として全角とする(欧語表記および注記を示す記号に用いる片括弧を除く)。

6) 数字の表記

数字は、熟語など特別な場合を除き半角のアラビア数字を用いる。4桁表記以上となる場合は、コンマ(,)を用いる。また、「兆、億、万」などの漢数字を用いてもよい。

7) 年号の表記

年号は原則として西暦を用いる。必要に応じて、西暦の後に元号などを丸括弧に入れて併用してもよい。

8) 度量衡の単位は、原則として記号(m kg など)を用いる。

9) 図や表には番号とタイトルを記入する。

10) 注は以下のように該当部分の右肩に入れ、論文末にまとめて並べる。

～と考える¹⁾。

11) 参考文献の表記

本文と注記で用いた全ての文献を「参考文献」として本文の最後に一括して表示する。

参考文献の表記は以下のとおりとする。

(日中韓語の書籍) 編著者名(発行年)、『書名—副題』出版社。

(日中韓語の雑誌論文) 著者名(発行年)、「論文名—副題」『雑誌名』巻数(号数)、〇—〇頁。

(日中韓語の書籍中の論文) 著者名(発行年)、「論文名—副題」(編者名『書名—副題』出版社)、〇—〇頁。

(日中韓訳書) 編著者名(発行年)、『書名——副題』(訳者名、原著は〇年発行)出版社。

(欧文の書籍) 編著者名(発行年)、書名: 副題, 発行地: 出版社。

(欧文の雑誌論文) 著者名(発行年)、「論文名: 副題,」雑誌名, 巻数(号数), pp. 〇—〇。

(欧文の書籍中の論文) 著者名(発行年)、「論文名: 副題,」編者名 ed., 書名: 副題, 発行地: 出版社, pp.

〇—〇。

『東アジア日本学研究』査読要領

【査読スケジュール】

・投稿締切日

(春季号) シンポジウム終了後3週間以内とする。

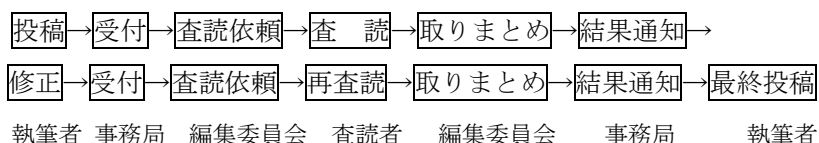
(秋季号) 毎号4月1日(北京時間24:00)とする。

・投稿先: 東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja2017@163.com

・査読の流れ

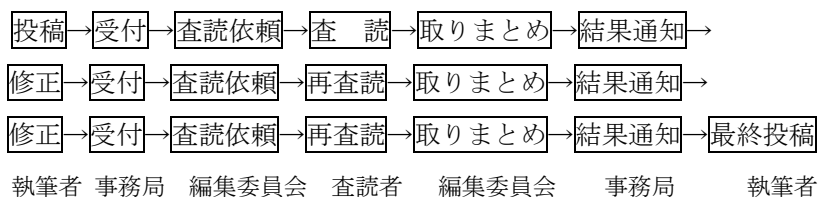
(春季号) 査読は2回までとする。

(2回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。)



(秋季号) 査読は3回までとする。

(3回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。)



【査読者の構成】

- 1) 論文1編について2名の査読者が査読する。
- 2) 査読者は編集委員会によって原則として会員の中から選任する。会員の中に適任者がいない場合は外部審査員を依頼することができる。審査料は全て無料とする。
- 3) 春季号の場合は、自己の投稿論文でなければ査読可能とする。秋季号の場合は、投稿者は当該号の査読は行わないこととする。

【査読】

- 4) 査読は投稿者・査読者間、査読者間ともに匿名で行うこととする。
- 5) 判定は、「採用」「条件採用」「再投稿」「不採用」の4段階とする。
 - ・「採用」は誤植程度の修正しか必要でない場合とする。
 - ・「条件採用」は査読者から指摘された問題が1週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。
 - ・「再投稿」は査読者から指摘された問題が1ヶ月で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。

- ・「不採用」は当該号での採用のレベルに達していない場合とする。
- 6) 査読者は所定の「査読票」に査読結果とコメントを記入する。
- 7) 論文の中に投稿者が特定される情報が書かれていることが査読の過程で明らかになった場合でも、原則として査読を継続する。但し、投稿者と査読者が指導教員と指導生の関係、同じ機関に属する等の場合には、査読者の交代を行う。
- 8) 査読にあたり二重投稿等の疑義等が生じた場合、投稿者宛てコメントには記載せず、編集委員会宛てコメントに記載する。

【査読結果のとりまとめ】

- 9) 査読者は「査読票」を編集委員長に送付する。
- 10) 編集委員会では、以下の総合判定ガイドラインに基づいて採否を決める。基本的にこれを順守するが、このガイドラインに従わない方がよいと判断される場合には、編集委員会で審議する。
＜総合判定ガイドライン＞
(◎採用、○条件採用、△再投稿、×不採用)
採用 : ◎◎ (6点)
条件採用 : ◎○ (5点)、○○、◎△ (4点)
再投稿 : ◎×、○△ (3点)、○×、△△ (2点)、△× (1点)
不採用 : ×× (0点)
- 11) 総合判定の確定後、編集委員長は結果を事務局に送付する。
- 12) 事務局は、総合判定結果と査読者のコメントを投稿稿者に送付する。

【再投稿・最終投稿】

- 13) 「採用」の場合は、微修正の確認を編集委員会で行う。
- 14) 「条件採用」と「再投稿」の場合は、初回の2名の査読者で再度査読する。
- 15) 春季号の査読は2回まで、秋季号の査読は3回までとし、査読結果に基づいて編集委員会で最終判定を行う。
- 16) 編集委員会は最終判定結果を事務局に送付し、それを事務局から投稿者に送付する。

【その他】

- 17) 「不採用」に関する投稿者からの反論には原則として応じない。
- 18) 校正は字句等の修正のみ認める。問題が生じた場合には編集委員長が確認する。

編集後記

編集委員長 杉村泰（名古屋大学教授）

本号には21本の投稿がありました。各論文とも2名の査読者による審査が行われ、採用17本、不採用2本、辞退2本という結果となりました。今回は初回投稿時から完成度の高い論文が多かったのが特徴です。しかし日本語のネイティブチェックが不十分なものもまだありました。

編集委員 加藤三保子（豊橋技術科学大学特任教授）

新型コロナウイルス感染による海外渡航や国内移動の制限は、私たちの研究活動にも多大な影響を与えています。しかし、新たなテーマに気づいたり、活動方法を再考したりする好機にもなりました。今後も研究活動を停滞させることなく前に進みたいと思います。

編集委員 吉川佳英子（愛知工業大学教授）

本号に掲載された論文は、日本語をめぐるもの、歴史的考察、社会的分析、文学など、多岐にわたります。編集委員としてこれらの力作を読ませていただくのは、たいへん興味深く、また刺激的です。精力的な研究、そして積極的な投稿を今後も楽しみにしています。

編集委員 李鋼哲（北陸大学教授）

東アジアは激変期に直面し、グローバル化は後退に直面しています。米中貿易摩擦とコロナウイルスへの対応で世界は亀裂が生じ価値観が混沌する中、東アジアを研究する学者たちにとっては「アジア的価値観」の探究が強く求められるでしょう。

学会誌担当副会長 海村惟一（福岡国際大学名誉教授）

今号の論文を拝読すると、「こつこつと こつを掴むと 秋実る」という句を得ました。ただ、「学問」とは、「学」を問うのか、世を問うのか、それとも己を問うのかを常に研究者の課題となり、わが会員にとって今これらを真剣に考える時期が来たと思います。

【本号の査読者】（50音順・査読時点）

安達義弘（日韓言語文化交流センター副代表）、海村惟一（福岡国際大学名誉教授）、李昌玟（韓国外国語大学校副教授）、加藤恵梨（大手前大学講師）、加藤三保子（豊橋技術科学大学特任教授）、釜田友里江（神田外語大学講師）、関承（大連外国語大学講師）、菅陽子（International Business Alliance 代表取締役兼 CEO）、疏蒲剣（江蘇理工学院講師）、陳秀茵（東洋大学講師）、周堂波（武漢理工大学副教授）中川良雄（京都外国語大学教授）、任星（厦門大学副教授）、白曉光（西安外国語大学副教授）、橋本恵子（福岡工業大学短期大学部准教授）、朴紅蓮（東京外国語大学特任研究員）、吉川佳英子（愛知工業大学教授）、李光赫（大連理工大学副教授）、李鋼哲（北陸大学教授）、李東軍（蘇州大学教授）、李東哲（新羅大学教育専担）、呂雷寧（上海財經大学副教授）

東アジア日本学研究 第4号
Japanese Studies in East Asia No.4

2020年9月20日発行

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

学会事務局 E-mail: ejja2017@163.com（一般）

ejja20172@163.com（学会誌専用）

住所：〒818-0125 福岡県太宰府市五条2-8-8-205

日韓言語文化交流センター

ホームページ <https://www.east-asia.info/>

ISSN 2434-513X
